

# 新・水滸伝「三」（吉川英治）

一 葦は葦の仲間を呼び、揚子江の「三霸」一荘に会  
すること

潯陽江頭 夜 客を送る

楓葉 荻花 秋索々

これは白楽天の詩「琵琶行」のはじめの句だが、いまの宋江の身は、そんな哀婉なる旅情の懐古に浸りうるどころではなかつた。

また時代も白楽天の詩酒三昧をゆるしたような唐朝盛期のいい時世でもない。——明日知れぬおそろしい世音の暗い風が——そのままここ揚子江に近い夜空いちめんな星の色にも不気味な凄涼の感を墨のごとく流している今夜であった。

「おや？ 人声が？」

宋江は目ざとくすぐ枕をもたげた。

そばに寝ている端公（護送の小役人）二人は正体もない。

ここは鄙びた旧家の門番小屋だ。

宵に、端公のひとり李万が、地主屋敷の門を叩いて家の老人なる者に会い「——はるばる山東の役署から、流刑の罪人をつれて、江州へ行く途中のものですが」とわけをはなし、一夜の泊りを頼んで、やれやれと、やっと眠りについたばかりなのだ。

「……はて。なんだか聞いたような声でもある？」

頸の首枷は、端公二人とも、いまは宋江に心服しているの

で寝るときなどは取り外してある。

宋江はそつと門番小屋の竹窓から屋敷内のひろい落葉道を見まわした。——髯の白い老主人が立っている。——それにたいして七、八名の若い者をうしろに連れた背のたかい壮漢が、なにかが言っていた。そして彼らのたずさえている松明のいぶりがその人影を赤く濃くよけい物々しげにしているのだつた。

「なに、兄貴は酒を飲んで寝ちまつたつて」と、壮漢の声はあらあらしいが、駄々をこねているような調子もある。おそろくは老主人の息子であろうか。息子とすれば、兄貴兄貴といっているところから、次男坊にちがいない。「——どこに寝てるんだい兄貴のやつは。起しておくんなさいよ、父っさん。逃がしたと聞いたたら、あとで兄貴のやつもくやしがるにちげえねえんだ」

「また喧嘩かい。よしなさい」

「喧嘩なんてものじゃねえよ。大恥をかかされたんだ。掲陽鎮の人中でき」

「あまり顔をきかせるからじゃよ。さあおまえも奥へ入って寝ろ寝ろ」

「寝られるもんか、この虫がおさまらねえうちは」

「いったいどうしたことだ、人中で大恥をかいたとは」

「どこの馬の骨かしれねえ膏藥売りの素浪人が、無断で辻稼ぎをしていやがるから、そいつを追ッ払おうとしたら、見物の中から妙な野郎がいらざる邪魔をしゃがったんで」

と、壮漢が言っているのを聞くと、どうも昼間のあのことらしい。——宋江は竹窓にかけていた手が冷たくなった。い

や這いのぼる恐怖にそそけ立ってしまった。

「壮漢はなおも「叩ッ殺してもあきたらねえ」と罵ッて。「たしかに、その首枷野郎と端公の三人づれば、こっちの方角へ逃げたと途々聞いたんだ、兄貴にも知らせて、取ッ捕まえずにおくものか」と、わめいてやまない。」

けれどやがて、老父になだめられたものか、あるいは自分で、兄を起しに行ったものか、どやどや母屋の棟の方へかくれてしまった。

宋江は、「すわ、このすきに」とばかり、二人の端公を揺り起し、わけを語って、

「一刻もここにはおられぬ。ぜひもない、夜道をかけて逃げのびよう」

と、せきたてた。

李万も張千も仰天して、宋江の首枷などは手にかかえ、窓を破ってころげ出した。あとはしばらく無我夢中といつていい三つの影。——田舎道、野道、葦の原、そして鉛のような水の光は、いつかもう揚子江の江畔なのか。

うしろからは、みだれ火が迫っていた。十人以上な喊声だ。ピューッ、ピューッと指笛を鳴らしてくる。気づかれたのだ、南無三である。

「天よ！」

宋江は走りつつ祈った。息がきれる。うしろの足音は早い。たまらなくなつて水浸しになるのを覚悟で葦の茂みのなかへ隠れこんだ。ふるえながら葦の根を這った。

「畜生」

「どこへ失せやがったか」

恐怖の一瞬がすぐそばの堤を馳け去った。——端公二人は、泥亀みたいに首をもたげて、

「しめた。宋江さん、すぐその入江に舟がみえる、救いの舟だ」

「えっ、舟がある？」

「たのんでみよう。……おい船頭さん、たすけてくれ。金はいくらでもやる。無事な所まで渡してくれ」

「なんだと。どこのどいつだい」

船頭の声だった。舟底に横たえていた酒くさい体をむっくり起すとともに、ぎよると、三人の影を眼で一ト舐めして、

「乗んな」

と、かろくいった。

「ありがたい」

拜むばかりな、あわてかたで、三人はすぐ飛びのる。李万は旅の荷物をどさりと下ろし、張千は首枷をおいて、手の水火棍（警棒）で船頭の棹と一しよに岸を突いた。

ゆらゆらと、舟はひろい水面に出る。船頭は棹をすてて櫓に持ちかえた。するともう、さっきの鋭い指笛がまた近くで闇をツンざいた。いちど行きすぎた松明やら二十人ぢかい人影は、たちまちそれと知って引っ返してきた。

「おうーい、船頭、その舟をやッちやあいけねえぞ」

「もどつて来いよっ。引っ返せ」

「返さねえと、ただはおかねえぞ。やい船頭、船頭っ」

気が気でない。生死は船頭の返辞一つにかかっている。

舟中の宋江たち三人は手をあわさんばかり、わななき声を

念じ合つた。

「もどるな、船頭さん」

「後生だ、もどっちゃいけない」

「あの悪者につかまったら殺される。お礼はいくらでも出す。逃がしてくれ」

船頭は黙<sup>だ</sup>んまりをつづけ、ただ櫓<sup>ろ</sup>だけを鳴らしていた。しかし岸をたどり歩いて、兇暴な火焰<sup>かえん</sup>と人群れの影はどこまでもくつついて来る。

「やい船頭、おれたちを知らねえのか」

船頭はフンと鼻で笑つた。

「わかつてるよ、おめえさんたちの声柄<sup>こえがら</sup>ぐれえは」

「じゃあ、もどれ」

「ごめんだよ」

「野郎、あとで吠えづら搔くなよ」

「あしたは天気だとさ」

「何ッてやんで。てめえが乗せた江州送りの罪人に用があるんだ。そいつを渡せばかんべんしてやらあ」

「とんでもねえや」と、船頭もまた太々<sup>ふてて</sup>しい。「こち徒<sup>と</sup>にもこち徒<sup>と</sup>の商売があるんだぜ。せつかくお乗せ申したお客さまだ。これからゆっくり、薄刃<sup>うすばぎ</sup>切り”のご馳走でも差上げようつていうのに、ひとに譲<sup>ゆず</sup>つてたまるもんか」

「うぬどうしてもか」

「くどいよ、こつちにとつても飯のたね。おととい来やがれ」

櫓幅<sup>ろはば</sup>いっぱい、舟は水を切つて行く。みるまに葦間<sup>あしま</sup>の火光もわめきも遠くにおいて、辺りは大江<sup>たいこう</sup>の水満々とあるばかりだった。

「かたじけない」

と、宋江がいえば、李万、張千もほっとした顔でつぶやいた。

「ああ、これで厄<sup>やく</sup>のがれした。命の恩人だよ、この船頭さんは」

しかし船頭は、三人の感謝をみても、ふんといった面<sup>おもて</sup>つきだった。そして櫓<sup>ろ</sup>をあやつりながら、酒きげんで、湖州<sup>こしゅう</sup>小唄などを、ちよつと低い美しい声でくちずさんだ。

ほとけ心があるならば

こんな渡世はしていない

どうせ根からの葦ぞだち

風と水とで暮らすのさ

宋江はなぜかぎよツとした。

おちついて、しみじみと今、星影で見たこの男。彼には、ただ者でなく思われてきた。

「船頭さん、もうこの辺でいい。どこかそこらへ寄せてくれないか」

「ふざけちゃいけないよ。おめえたちは、命拾いをしたつもりかい」

「えっ？」

「それとなく引導<sup>いんどう</sup>は先にわたしておいたろう。薄刃<sup>うすばぎ</sup>切り”のご馳走はこれからだ」

「薄刃<sup>うすばぎ</sup>切りとは」

「早く見てえというのかい」船頭はガラと櫓<sup>ろ</sup>づかを投げ出した。そして舟底板<sup>ふねぞら</sup>をめぐり上げ、その下からドキドキ研<sup>と</sup>ぎすましてある板刀<sup>いたば</sup>を取り出すと、

「一匹一颯、三人ならこれで三振り、なんの手間ひまなしに、そのあとは繪料理さ」

と、切ッ先をつきつけて来た。

悲鳴も出なかった。二人の端公は宋江にしがみつく。その宋江も蒼白なおもてを凍らせたまま背を這う顫えをどうしようもない。

まことや諺にいう、倅せはかさならず、わざわいは一つですまずだ。宋江は天を仰いで思うらく「げに不孝の罪はおそろしい。ついにこの身の業ばかりでなく、この氣のいい端公ふたりまで巻きぞえにして、いま死ぬのか」と。

しかし、なお、あきらめきれず、生への必死な執着をしほッて。

「お待ちなさい、船頭さん」

「まだいってやがる。おれはただの船頭じゃねえんだよ」

「わかりました、長江の水賊ですね」

「水賊か何かしらねえが、水を枕にうたた寝のそこへ、てめえらの方から網にかかって来たわけだ。この商売、やめられねえじゃあるめえか」

「かねは上げます、ですから、そんな刃ものざんまいは、ゆるして下さい」

「おいおい、あんまり当り前なことをいうなよ。もとよりこっちは身ぐるみがご常法だ。その上、一匹はおろか半匹も、命は助けちゃおかれねえ」

「な、なぜですか」

「きまッてら。てめえたちは、江州送りの小役人と流刑人だろう。助けてみる、次にはこっちへ御用風が吹いてくら。さ

あ四の五をいわず眼をねむれ。薄刃料理が嫌いなら、一切合財、裸になっててめえで水の中へどんぶり沈んで行くがいいや」

船頭はぬつと立って、まず宋江の襟がみへ、その片手を伸ばしかけた。——するとこのとき、長江の上流から矢のごとく流れてきた一隻の快舟があり、ざ、ざ、ざ、と舷にしぶきを見せながら近づいて来るやいな、

「おうっ。張の舟じゃあねえか」

と、すばやく釣棒をひッかけて呼びかけた。

張と呼ばれたこなたの船頭は、ちよつとあわてたが、さりげなく、振り返って。

「や、李の兄貴か。ひでえなあ、今日は」

「なにがよ、張」

「だってよ、川上の仕事に、おいらを棄てて行きなすッたぜ」  
「見当らなかつたんだよ。だが、なにやら巧い仕事を、独りでたんまりせしめてるらしいから、それもよかつたわけじゃねえか」

「おわらい草だ。じつあ、ここんところ、女にや振られるし博奕にはすッからかん。やけ酒くらつて今夜も葦を屏風にふて寝してるッてえと、この鴨三羽、自分のほうから舞いこんで来やがったのさ」

「そいつアよッほど、どうかしてる鴨だなあ」

「もっとも、陸ではあの穆さんの兄弟に、なにか恨まれて追ッかけられて来たものらしい。……だが、チラと見るつてえと、二人は端公、一人のほうは色の黒い江州送りの流刑人だ。そのくせ囚人のくせに首枷を外していやがる。ははん、こい

つ銀かねを持ってやがるナと、そう睨ねんだので穆ぼくさん兄弟や若いのが、渡せ渡せと、岸でわいわい脅おどしゃあがったが、こっちも渡世と、とうとうお返し申さず仕舞いというわけさ」

「おい、張！ もう一ぺん聞かせてくん。江州送りの色の黒い流刑人だつて。そこにいるのか、その人が」

「うム、こいつだが」

「もしや？」

「ばつと、その快舟はやぶねにいた三人の男たちのうちから、ひとりがかこちの舟へ跳び移って来た。そして上下に躍る足もとも早きぎみに。」

「もしやそちらは、宋押司そうおしさんじゃありません」

「えっ？」と宋江は伸び上がった。そして思わず両手を虚空に振り上げて。「——おおっ、いつぞやの李俊りしゆんか」

「李俊です。お忘れのはずはない。掲陽鎮けいようちんの峠茶屋でお目にかかり、またおとこの夜はてまえの家にお泊りねがってお別れたばかりでした」

「どうして、あなたがここへ」

「今日は家に出て出る気もしなかつたんですが、夕方から妙に心が騒ぎ立ち、こんなときには、いつそ大江たいこうを漕ぎ廻し、闇屋の塩舟でも襲って飲みしろ稼かせぎでもするかと、ほかの兄弟分ふたりを誘いあわせての帰り途。いや、こいつも尽きぬご縁というものでしょう」

驚いたのは、薄刃切りにかかりかけた張とよぶ船頭である。

茫然ぼうぜん、あいた口もふさがらない。

「李りの兄貴、いったい、こいつあどうしたわけです」

「どうもこうもあるものか。てめえも命びろいしたようなも

んだぞ」

「へ。こつちがですかえ」

「そうよ。こちらは山東の及時雨ききうじゆ、宋押司さんだ。もしその薄刃で逸はやまつたことでもしてみやがれ。てめえはたちどころに俺たちの制裁を食うか、この土地にはいらねえはずだ」

「げッ。では、そのお人が」

「がらりと薄刃を投げすてて、張はそこへ這いつくばつた。そして彼ら仲間の最上な礼と謝罪のかたちをとって「……お見それいたしました。このお詫わびにはどんなことをなされてもお恨みには存じません」を繰り返した。

ほどなく二そのの舟はすこし漕いで、一つの洲すの陸おかへみな上がっていた。

枯れ葦あしをあつめて、一人がカチカチと燧ひうちし石を磨する。火をかこんで酒をあため、あり合う器もので飲み交かわす。

混江龍こんじやうりゆうの李俊りしゆんが連れていたほかの二人は、出洞蛟しゅつどうせうの童威どういと、翻江蜃ほんじやうしんの童猛どうもうだ。

これはすでに宋江も顔見しりのこと。あらためての名なのり合あいはいらぬ。

初めてなのは、船頭の張ちやうだ。

そこで李俊は、彼に言った。

「今、天下の義人といつたら、山東の宋公明そうこうめいさん一人だとは、このへんの百姓漁師だつて知つてることだ。それをしかも揚子江ようすいこうに住むてめえが知らねえな。大恥たいちッ掻かきだぞ。焚たき火のあかりでよく拜かんでおくがいいや」

「どうも面目めんもくございませぬ。お名だけならあつしだつて、と

うに存じ上げていたんですよ。だがまさか、そんなお人が眼の前に降って来ようとは思えなかつたんで」

張は、李俊の義兄弟のひとりで、その名は横、異名は船火児——生れは江中の島——小孤山の産だという。

この張横には、もうひとり実の弟がある。

稀代な水泳の達人で、水底十里をよく切っておよぎ、水中を出ぬこと七日七晩という記録をもっている。

そして、その肌の白さ、魚の腹のようなので、人呼んで彼を浪裏白跳の張順といった。

で、元来はこの張横、張順の兄弟は、俗に“私渡”とよばれる非公認の渡船稼業をやっていたのである。

揚子江兩岸の小都市の間には、さかんに税関抜けの密輸や闇屋が往来する。それやら博奕場帰りやらただの旅人などを乗せて、いざ大河のまん中にかかると、張の兄弟は、かねてしめし合せの荒稼ぎにかかるのだった。

まず、いきなり錨をザンプと投げこんで、横が薄刃のだんびらを持ち出す。——凄文句よろしくならべて、約束の駄賃以上な客の懐中物をせびるのだ。

揚子江の上である。たいがいは慄え上がってしまう。だが、客に化けて乗りこんでいた弟の浪裏白跳張順が「ぶざけるな」と啖呵をきって抵抗しかける。そいつを相手に張横が芝居の格闘を演じたうえで揚子江に叩ッ込む。

もういけない。舟中は何れも生きた空のない戦慄だけのものになる。張横はにんやりとし、ぞんぶん一人一人のふところをゆすって、銀や持物を取りあげ、ほどよい岸へ着けて追ッ放してやるのだ。——そして舟で火を焚いていると、やが

て弟の張順がその白魚のごとき体に水を切って川の中から舟へ這いあがってくる。

という寸法で、ずいぶんこれで荒かせぎをしては、酒、ばくち、女などにつかい果たしていたが、近來はこの手ぐちも評判になって、さッぱりになってきた。そこで、弟の張順は足を洗って江州で魚問屋になり、張横は依然この界限で、不景気な板子稼業にばやいて、こそこそ悪さをつづけていたところだった。

「いやどうも」

と、張横はあたまを搔いて。

「あまりお上品な身の上ばなしじゃございませんが、宋押司さんと伺っては、ちつとの嘘も申しあげては相済みません。

正直なところ、そんな外道でございしますが、これでも折があつたら真性な人間になりてえと願ってるんで。へい、江州へおいでなさいましたら、あつしが手紙を付けますから、魚問屋をやっている弟の奴にも、いちど会ってやっておくんなさいまし」

懺悔とともに、張が言った。

すると、李俊をはじめ、みな吹き出して、

「おや、張横がいやに、しおらしいことをいい出したぜ。そんならこれから村の寺小屋へ馳けつけて、寺小屋のお師匠さんに、さっそく一本書いてもらわなくちゃならねえな」と交ぜかえした。

こんな冗談も出るほどすぐうち解けていたのである。ところへ、彼方の岸にまた松明の点々が見え出した。宋江よりは端公ふたりがすぐあわて出した。

「あつ、さっきの奴らだ、まだ頑張ってる！」

「騒ぎなさんな」と、李俊は立って、唇に指を咥え、水盥するどく口笛をふいた。すると岸の松明は遠くへ去った、と見えたのは洲つづきの葦の間を廻ってこれへ来たのであった。

李俊は、それへ来た一群をみるとすぐ叫んだ。

「穆さんのご兄弟、おれたちが日頃よくはなしていた山東の及時雨、宋押司さんがここに来ていらっしやる！ さあみんな、ごあいさつだ、ごあいさつだ」

「なんだって？」

穆とよばれたのは、宵に泊りかけた、地主の旧家、穆家の兄弟か。

「おう」

宋江もいまは微笑で会釈した。

まごうなく、その日の昼、掲陽鎮の辻で、香具師の浪人を脅し、またさんざん自分のあとを追ッていたあの壮漢だ。

「李俊」

と、壮漢はやや気を抜かれた調子でいった。

「ほんとかい？」

「よっくごらんなさいよ、男の眼で男の人物そのものを。」

—— あっしはおとといからお目にかかっている。濟州から江州奉行所への差立て状も拝見している。そして一ト晩は、お身の上からこっちの素姓もかたりあって、ひとつ屋根の下で寝ているんだ」

「しまった」

と、穆の息子はひっさげていた枇杷の木の木剣をなげだし、その兄なる者とともに、地に平伏した。詫びは兄の方が

いった。

「まったく知らぬことでした。どうか、さんざんご無礼は、平にご用捨くださいまし」

兄は、穆弘といい、あだ名は没遮欄。

弟のほうは穆春、小遮欄はその異名とある。

穆家は江畔の大金持ちでつまり二人はその息子だ。

と、李俊が紹介して、またもひとつ言いたした。

「じつは、この地方には『三霸』といいまして、まず掲陽鎮の峠の上と下を縄張りに、あの茶屋の李立とてまえとでそれが一霸。また、街の掲陽鎮では、この穆兄弟がふたりで一霸。次に、揚子江のうえを張横、張順のふたりが持つて一霸をなし、つごう『三霸』がこのへんを抑えているようなかたちなのでございますよ」

「なるほど。霸とは顔役のことか。後漢の三国に似せたのだな」

宋江は笑った。そしてついでに、

「そういうお仲間同士なら、あの膏藥売りの浪人薛永もわしにめんど、ゆるしてやってくれまいか」

「仰っしやるまでもありません」

穆弘は、弟の穆春へ、こういった。

「さっそく、若い者を走らせろ。……そして弟、すぐ宋押司さんを、もういちど屋敷へご案内するんだな。こんなことではお詫びがすまぬ。ゆるして下さると仰っしやっても、このままのお別れじゃあ、こっちの良心がすむまいぜ」

二 根はみな「やくざ」も仏心の子か。  
黒旋風の李逵お目見得のこと

江畔の大地主穆家では、明けがた大勢の客を迎え入れていた。息子二人は手柄顔に、江上から連れ帰った珍客の宋江を、まずわが親にひきあわせる。

「ほう。あの有名な宋公明さまじゃったのか」

老主人は眼をほそめる。

一家の歓待はいうまでもない。全家をあげてその日は盛宴のかぎりをつくす。

宴のなかばに、さきに使いに走った若い者が、膏薬売りの浪人、病大虫の薛永を街中から探して連れて来た。

「……これは？」

と、薛永はただ驚きあきれれる。

彼のために宋江は自分が去ったあとでもよろしくと、穆家の人々へねんごろに頼んだ。穆弘、穆春の兄弟は、

「ええもう、ごしんぱいなさいますな。ひきうけますとも」

と快諾し、また張横は、いつのまにか一通の手紙を用意し、宋江に渡して告げた。

「江州へおいでになりましたら、あっしの弟の張順ッて男を、どうぞお忘れくださいますな」

何やかや、終日は賑やかな親睦の宴に暮れ、また次の日、さらに翌日も、人々は宋江を掲陽鎮の城内へ連れ出して、名所旧蹟、辻々の盛り場、興行物、ありったけな風物を見せてあるいた。

宋江はもう恐縮しぬいて、一同へこう告げた。

「なんとも、おこころざし、生涯忘れえないでしょう。とはいえ、私は流刑の身、こう甘えてはお上にも畏れあり、あしたは是非是非お別れ申さねばなりません」

さて。その前夜には、一同揃って、また惜別の宴だった。席上とくに宋江が心ひかれたのは、穆家の美しい末娘が琵琶をかかえて、この地方の名所、潯陽江のゆかりに因み、かの中唐の詩人白楽天がその司馬に左遷されたときに作ったという「琵琶行」を聴かせてくれたことである。琵琶行の序詩には、その由来が、こう叙べられている。

——中唐の元和十年、私は九江郡の司馬に左遷され、秋の一夜、客を埠頭に見送った。

するとどこかの舟の中で琵琶をひく音がきこえる。その音は、この片田舎に似あわず、京都の声色があった。主はたれぞと問うと、もと長安の歌い妓で、いまはさる商人の妻なるものであるという。

あわれを覚えて、舟に酒を呼び、たつて数曲を弾いてもらった。演奏が終ると、彼女は悲しげにうなだれて、若き日の恋や愉しかった日を思い出すらしく、いまは失意の貧しい生活を、この大河や湖ばかりな蕭々のうち托して、移りあるいている身の上と、ほそぼそ語った。

私（白楽天）は、遠い地方官吏となって都を見ぬこと二年、今夜という今夜ほど、心をうごかされたことはない。人生の哀歓・流離のかなしみ、それをひとりの女に見た気がした。そこで全六百十二字の長詩をつくり、彼女へのなぐさめに贈

り、題してこれを「琵琶ノ行」という」

宋江はこれを暗誦じていた。

乙女の琵琶はすでに絃をかき鳴らし、その紅唇からもれる詩の哀調に一座は水を打ったようにひそまりかえった。

潯陽江頭 夜 客を送れば

楓葉 荻花 秋索々たり

主人は馬より下り 客は船にあり

酒をあげて飲まんとするに管絃なし

酔うて歡をなさず 惨として將に別れんとす

別るるとき 茫茫 江は月を浸せり

忽ち聞く水上琵琶の声

「……ああ」宋江は、ついに涙をたれた。故郷が偲ばれてきたのである。老父は琵琶が好きだった。「もしこれがともに聴ける琵琶であつたら」と悔やまれ、身の不孝にさいなまれていたのらしい。

声を尋ねて 暗かに問う 弾く者はたれぞと

琵琶の声はやみ 語らんとするも遅し

船を移し 相近づき むかえて相見る

酒をそえ 灯をめぐらし 重ねて宴を開く

千呼万喚 始めて出で来たるも

なお 琵琶を抱きて 半ば面を遮ぎる

軸を締め 絃を撥いて 三両声

まだ曲調を成さざるに 先ず情あり

「……………」

宋江はまた不思議な感に打たれた。灯は冴えて座中、声も

ないのは奇異でもないが、その顔ぶれは李俊、張横、穆弘、穆春、薛永、童威、童猛、どれをみても血臭い野性の命知らずだ。その荒くれどもが、かくも生れながらの嬰兒のように純な姿で神妙に首うなだれて聞き入っているのはいったい何の力なのか？

絃々に抑え 声々に想い

平生 志を得ざるを訴うるに似たり

眉を低れ、手にまかせて 続々と弾き

説きつくす 心中 無限の事

「……そうだ、こんなやりばのない想いは、いまの若い者の胸にはいっばいなのだ。それを汲んで生かしてやれない宋朝治下のみだれが今日のような世相をつくり、その反抗が梁山泊などになつていくのか」

耳は絃に打たれながら、宋江は自問自答を独り胸にささやいてる。曲はすすみ、大絃は嘈々、小絃は切々――

撥を収めて 心に当りて画く

四絃の一声 裂帛のごとし

東の舟も 西の舟も、ひそまりて言なく

ただ見る 江心に秋月の白きを

いつか、宋江もすべてを忘れた。恍惚として身は司馬の客

とともに舟中に在る気がしてくる。

――自ら言う もとはこれ京城の女

家は蝦蟇陵下にありて住む

十三にして 琵琶を学びえて成り

名は教坊の第一部に属す

曲罷りては 曾て善才を伏せしめ

粧しょうおい成りては 常に秋しゅう 娘ねたに妬ねたまれ  
五陵ごりょうの年少ねんしょうは 争あつて 纏頭はなを贈る  
詩は、彼女の身の上を、こう歌うたつてゆく。

今年の歎なげ笑わら、復またた明年めいねん

秋月しゅうげつ 春風しゅんぷう いつしかすぐ

弟あには走りて 軍いくさに従したがい 阿姨あおばは死しし

暮去くれり 朝あした来きたたりて 顔色いろ故ふるびぬ

門前かどまへ 冷落れいらくして 鞍馬あんばも稀まれに

老大らうだいにいたり 嫁かして商人しょうじんの婦つまとなる

商人しょうじんは利りを重おもんじ 別離べつりをかるんず

前月ぜんげつ 浮梁ふりやうに茶ちやを買いに去る

去りてより以来このかた 江口かうの空舟くわふねを守れば

舟ふねをめぐる月明げつめい 江水かうすいに寒さむし

夜よふけて忽たちち夢ゆめみるは 少年しょうねんの事こと

夢ゆめに啼なげば 粧しょうお涙なみだは紅あかく 闌干らんかんたり

宋江は、はつとした。満座のうちからすすり泣なきが聞きえる。

鬼おにをもひしぐようなのがみな顔を濡ぬらしていたのである。そうだった。彼かれらにも本来ほんらいの情じやう涙なみだはあったのだ。また親おやがあり情じやう婦ふがあり子こがありいろんなきずなもあったのだ。それへの何なにかに触ふれる絃いんと詩うたとについ真情しんじやうが流れ出てしまったものだろう。

——いや、ひとごとではない、宋江もまたそつと眼まなじりを指さで拭ぬいでいた。

朝あさ。——掲陽鎮けいようちんの埠頭ふとうには、ゆうべの顔かほがのこらず、宋江のために、送別そうべつの惜おししみをわかちあっていた。

「どうか、おからだをご大切に」

ことばは世のつねのものだが、万感ばんかんの真情しんじやうと尊敬そんけいがこもっている。思い思おもいな饑別物せんべつものも、両手りやうてに余あるほどだった。

やがて船ふねが出る。かなり巨おおきな船ふねだ。蓆帆むしろほに風かぜが鳴なり、揚あ子江あしやうの黄わういろい水みづが、瑤々ようようとその舷ふなべりを洗あらい、見るまに、手てをうち振ある江岸かうの人々ひとらも街まちも小さくうすれ去いった。

その日のうちに、舟ふねは江州かうしゅうに着つく。護送ごそうの端公たんこうも、ここへ着つくと急に、護送ごそう小役人せうやくじんの顔かほつきになった。もちろん宋江そうかうの首力くびぢからセは嚴重じゆうじゆうに饒はめられ、公文くもんの手つづき、身柄みんがらの引渡ひきわたし、奉行所へいぎやうじよや牢城らうじやうなどの認にんちしやう知証ちしやうもうけとつて、これはすぐさま済州さいしゅうへ帰かへって行いった。

ときにこの江州かうしゅう一円いつげんの奉行閣下へいぎやうかくかは、蔡得章さいとくしやうなる人で、当代たんだい宋朝そうてうの権臣けんしん、蔡京さいけいの九番目くわばんめの息子むすこにあたることから、諸人しよじんは彼かれを、

蔡九さいきゅうさま

と、よんでいた。

その蔡九さいきゅうの奉行所へいぎやうじよから、宋江そうかうの身柄みんがらは、ただちに牢城らうじやうの方かたへ引き渡わたされる。宋江そうかうはかねがね聞いていたことなので、所持しじの金銀きんぎんは惜おししみなく係けいの諸官吏しよくわんしにわけ与あたえた。この頃ころ、とくにこの世界せかいでは、賄賂わいろはちつとも悪徳あくとくでない。相互さうごの常識じやうじきなのである。で、管宮かんぐう、差撥さばつ、書記しき、牢番らうばんにいたるまでが、

「いい新入りだ、気前のいいやつだ」

と、宋江そうかうにたいしては、みな愛相あいさうがよかった。例れいの新入りしんにりが食たう殺威棒さつゐぼうの百叩ひやくくわくきも受けずにすんだ。

ところがある時とき、巡回くわんかいの軍卒頭ぐんそつとうが、そつと宋江そうかうへ注意ちゆういした。「おい、君きみは抜ぬかつてるぜ。なぜいちばん大事だいじな牢節級らうせつきき（江

州両院の院長）へお袖の下を差上げておかねえんだ。たいへんお気をわるくしている様子だぞ」

「へえ、そうですか」

「そうですかって、平気でいるが、さっそく何とかしたらどうだい」

「いや、ほっときましょう。かまいません」

「おや。……おいおい、あとでひとを恨むなよ。ここの節級さまときたら、腕ぶしはすぐれているし、気は烈しい。どうなっても知らねえぜ」

果たせるかな、それからまもなく、点視庁から呼出しが来た。迎えに来たのも、おなじ軍卒頭なのだ。それ見ろといわんばかりな顔つきで、宋江の腰鎖を曳き、部下大勢とともに、「節級！ 連れて参りました」

と、突き出して、その後ろに整列した。

見ると、銀紋草色の官袍に金唐革の胸当をあて、剣帯の剣を前に立ててそれへ両手を乗せ、ぎよると、椅子からこつちを睨まえている人物がある。ここの高官にしては思いのほか若そうな年齢だ。毛の硬いもみあげが旋風を描き、節級冠の燕尾がこの者の俊敏さをあだかも象徴しているようにみえる。

「こいつか、軍卒頭」

「はっ」

「病人ゆえ、規定の殺威棒は、猶予しとるということだが、なんだ、ぴんぴんしておるじゃないか」

「はっ」

「けしからんやつだ。さっそく、おれの面前で、百打の棒を食らわせろ」

「お待ちください——」宋江が口をさしはさんだ。「そう仰っしゃる節級は、じつは、私からのつけとどけが届いてないので、それがあなたの自尊心を傷つけているのでございましょう」

「なにっ」

「つまらんお人だ！」

軍卒頭はじめ、みな冷やとした顔いろである。室中、氷のようにしんとしたところで、宋江はなお言った。

「そんなくだらん手輩とは思わなかった。これは興ざめな節級は、かあつとなつて、いきなり剣の鑑で床をとんと突き鳴らした。」

「こやつ。よく面罵したな。ようしっ」

「どうなさる？」

「きつと、ひいひいわせてやるぞ」

「これは、いよいよ、あいそがつきる。呉用学人ほどな人の知人にも、中にはこんなくだらぬ人もいたのか」

語尾は低い呟きだったが、節級の耳には、聞えていたにちがいない。彼は俄かに何かあわてだして、

「軍卒頭以下、よろしい。みんな室外へ立ち去れ」

と、追っ払った。そして急に、辞色をかえて、訊ねだしたものである。

「もしやあなたは、山東の宋公明さんではないのか」

「そうです」

「なあんだ、それなら……」と、彼は豪快な顔を笑みくずして。「はやく言ってくださればいいのに」

「じつは、呉用学人の添え手紙を持来しています。けれど

梁山泊の軍師呉用と、官の節級がお知り合いとあっては、ちと、外聞がありません。で、わざと申しあげずにいたので「す」

「じつは、こちらへも密書が来ていた。そして心待ちにしていたのだが、宋という姓も多い、ただ済州罪人、宋とあっただけなので、つい粗暴な失礼をしちまった。しかし会えてよかった」

「私こそ、しあわせでした」

即日、彼の命令で、宋江はしごく身ままな独房へ移され、鍵まで彼の手に持たせられた。その上、数日たつと、節級は彼をつれて、町へ出かけ、酒樓の階上で、さらに飲をつくした。呉学究との旧交を打明け、また宋江の身の上話もいろいろ求め、十年の交じわりのような想いをあたためた。

そもそも、この節級は、凡人でない。

戴宗という名は、すでに宋江がもらってきた紹介状でわかっていたが、江州では両院の押牢使という上位にあり、称えて、「戴院長」と敬せられているだけでなく、おどろくべき道術をもっていた。

その道術を、彼自身は「神行法」といつている。

たとえば、急な軍使となつて長途を飛ぶさいには、仏神の像を鞍皮に画いた甲馬に踏みまたがつて、脚に咒符を結びつけ、一日によく五百里(支那里)を飛ぶという神技なのだ。で、戴院長のまたの名を、神行太保の戴宗とも人々はいつた。

それはともあれ、酒中、階下からとんとんと早足で馳け上つて来た者がある。

見ると、酒樓のお帳場さんだ。下でお客とお客の喧嘩だと

いう。それも途方もない暴れ方、どうしても院長さんでもなければおさまりはつかない。仲裁して止めてください、というのである。

「またか。しようのない奴」

戴院長が降りてゆくと、階下の物音はすぐやんだ。そして彼はまもなく黒ン奴のようななかちかちに肉の緊まった凄い男を一人つれて階上へもどつて来た。

「宋君。暴れ者はこれです。沂水県百丈村の生れで、黒旋風の李達といひましてね」

「ほ」

「職は牢城の牢番人です。ところが酒くせが悪い。また、一挺の斧を両手につかう達人だし、拳や棒も心得ているので、だれの手にもおえやしません。またの名、鉄牛の李なんていわれて、恐がられているほどですから」

李達は、宋江を見ても、すぐ吠えた。

「院長さん、そこにいる棗の腐ったような色の黒い野郎は誰です？」

「これですからな」

「なるほど。はははは、いや申しおくれました。私は山東の宋公明です」

「へっ？」と、李達はたまげた声を発して「まさか、院長さんのそばだ。院長さんのお客とあれば、ほんとだろうが。：こいつはしまった」はたと、自分の頬ツペたを打つて、さつそく最敬礼の仁義を切るなどは、どう見てもどこか憎めない男であった。

この者を交えて、むしろその李逵を肴として、さらに杯を交わしているまに。宋江が彼にむかつて、なんで階下で暴れていたのかと訊ねると、金を貸せ、貸さない争いだつたと飾りもなくいう。——で、宋江がなんの気なしに銀十両をとり出して、

「これで足りるんですか。よかつたらおつかい下さい」

と喋ってやると、李逵は雀踊りして、

「てへッ、ほんとに貸してくださるか。ありがてえ、これで見が出たら、倍にして返すぜ。おごってやるよ」

ふところに入れるやいな、あつというまに、もうそこにいなくなっていた。

「宋君」と、戴宗はあとで眉をひそめ「あれには、お貸し下さらんほうがよかつたですな」

「なぜですか」

「無類に気のいい正直な奴ですが、なにしてもかねを見たらすぐ博奕場です。いずれ返すには返しましょうがね」

「ま、いいじゃありませんか」

「役には立つ男だが、牢城の困り者です。弱い囚人は可愛がつてやるが、上役に毒づくし、仲間の牢番なども、威張る奴へは、こっぴどくたてをつく。なんともはや文字どおりな黒旋風なので」

「そろそろ、戻りましょうか。……城外の川景色でも見ながら」

「む、では江州風物など、ご案内しようか」

ここはさておき、一方の李逵は、もう賭場の益ごさで眼のいろをかえていた。

「おツと、こっちへ、張り駒をよこせ。だれだ相手は？」

「李逵、すごい鼻息だな」

「べら棒め。このとおりだ、さあこい」

銀十両を、前において。

「快だ」

「よしっ、又とゆく」

「張乙、いいな。——あ、いけねえ」

こんどは、張乙の方から先張りで挑みかけた。

「又！」

「受けた、みんなかかって来い。快だ！」

それも負け、李逵の貼り目は、つづいて四、五たびも取られてしまった。それで一瞬、しよぼツとしたが、

「張乙、もちど駒を振れ。五両貼る」

「貼るたツて、ねえじゃあねえか。どこにかねがあるんだよ」

「あと払いだ」

「ふざけるな」

「一ぺんだけ貸せよ」

「いけないよ」

「なにを——」と、とたんに、張乙の前にあつた銀をジャラジャラと掻き廻し「借りなかつたらいいんだらう」と、その中の十両をふところに入れて突つ立った。

「あつ、無茶するな。賭場荒しをやらかす気か」

「これでも今日は大人しいんだぞ。もすこし何かしてもらいてえのか」

「ア痛つ。やったな。客人つ、手をかしてくれっ」

「蹴ちらすぞ」

場中の総立ちを見ると、李逵はほんとに暴れ出した。鼻血を出す者、手を折る者、一瞬、さんたんたる光景を現じ出した。

「泥棒つ。盗つ人つ」

張乙はあきらめきれず、逃げる李逵を執念ぶかく追っかけた。李逵はけらけら嘲笑いながら逃げては振り返ってみてしたが、そのうちに、誰かにどんとぶつかった。

「こらっ、李逵じゃないか」

「あ、いけねえ。また会ツちまった、院長さんでしたか」

「なぜ人の物を盗む」

「ごめんなさい。じつは今日ばかりは、勝ったことにして、そしてさっきの宋公明さんに、ひとつ大きな顔で、おごつてやると試みてみたかったんで」

後ろで、宋江は笑い出した。

「かねが欲しいなら、私が上げるものを」

「いや、かねはここへ持っている」

「それはそれ、そこに追っかけて来た人のかねでしょう。返しておやり」

「ケチな野郎だ」と李逵は張乙の手へくれてやるようにそれを返す。宋江は、張乙にいった。

「だれか怪我した者はいないのか」

「ないどころか、賭場中のやつが、荒れ熊の爪に引ッ掻き廻されたようなもんで、目も当てられたありさまじゃありません。茶汲み婆まで、肘を折られてしまいましたよ」

「それはすまん。じゃあこれを薬代にでもして慰めてやって下さい」

宋江はべつに銀子を与えて、李逵の代りにあやまった。

戴宗はつくづくと見ていたが、こんどは何も忠告しなかった。李逵に叱言もいわない。いずれおちついてからいうつもりだろうか、先に立って、江州の水辺へ道をたどり、

「宋君、白楽天の古跡を見えますか。なんならご案内いたすが」

「琵琶行のゆかりの地ですな。それはなつかしい」

「彼方の川ぞいに、その琵琶行にちなんだ琵琶亭という茶屋がある。いまは秋ではないが晩春もまたなかなかです。ひとつ、そこで一ぱいやりましょう」

はやくも宋江の旅情に似た胸には、淪落の女が夜舟に奏でる絃々哀々の声が思い出されている。が、さて、その夜彼が味わったものは何か。もちろん、過去にはあったそんな風雅ではない。琵琶亭そのものも人間も、すべては現実の腐爛と濁流中のものだった。

三 雑魚と怪魚の騒動の事。また開く琵琶亭の美酒のこと

名所旧蹟地には茶店や料亭は付きもので、またそれが点景の風物にもなっている。琵琶亭などもまさにそんな画中の水亭だった。画中の客となった心地である。

「宋君。ご存知でしょうが、ここで飲ませるのが、純粹な江州産の銘酒ですよ。つまりこの芳醇ですな。天下の酒徒なら「玉壺春」の名を知らぬものではありません。江州は米所であるうえ、水も佳い地方のせいでしょうか」

戴宗のお国自慢は何かとつきない。宋江もすでに微酔気分である。ひとりまだまだ飲み足りないようなのは、黒旋風の李達だった。

「どうもお二人さんともお行儀がいい。こっちは手酌とゆきませうぜ」

「李達」

「へ？」

「まるできさまがお客のようだな。おれのも宋君のお肴も、料理はみんなきさまひとりですら平らげてしまったじゃないか」

「いや、塩ッ辛い今し方の吸物なんぞは、宋江さまのお口に合やあしませんよ。もっと美味いのをいいつけます」と、李達は手をたたいて。

「おういつ、料理場の若いの、ちょっと来い」

「お呼びですか。お客さん」

「おう、てめえが板前か。よくもおれたちを名所見物のおのぼりさん扱いにしゃがったな」

「と、とんでもない。何かお気に入りませんでしたか」

「あたりめえだ、中華の米の郷、鮮魚の郷といわれるこの江州でいながら、死んだ魚の飴煮や吸物なんぞ食わせやがって」

「どうも相すみません。じつは昨日の材料なんで、活きた魚は今日はまだ」

「不漁だっていうのかい」

「いえ。その鼻ッ先まで舟は着いてるんですが、問屋の親方が来ないため、まだ市場の水揚げが始まっていませんので」

「そうならそうと、なぜ断わらねえんだ。このおたんちんめ」

李達は杯の酒を、板前の顔へぶっかけると、もう突っ立ち

あがって、

「おれが行って二、三尾もらって来ら！」

と、出て行ってしまった。戴宗がうしろから、こらっ李達李達っ、と呼び返したが振向きもする彼ではなかった。

「いやどうも、困った奴です。せっかくの酒も、あんながさつ者と同座では、美味くも何ともないでしょう」

戴宗は詫びぬぐが、しかし宋江は、ただ笑っていた。

「いや、天性無飾というものだ。赤裸、あのまんまな人ですよ。私は好きだな」

こちらはその黒旋風、はやくも江の岸の、水揚げ場へ来ていた。

楊柳の陰には、小博奕に群れているのやら、寝ている者、欠伸している者、さまざまだった。漁船の舟かずは百隻をこえよるか、それがみんな岸に繋いである。

揚子江は赤く大きな一輪の太陽が、西へ沈みかけていた。

「こう、漁師たち。鱸でも鯉でもいいや、見事な魚を、二、三尾選ってよこしねえ」

「やいやい、なんだてめえは！」と、たちまち漁師のすべてから、買出し人、ぼてふりの小商人まで寄りたかッて来て。

「ぶざけるな、このもぐりめ。問屋の親方さんが来ねえうちは、小魚一尾、揚げるこたあ出来ねえんだよ」

「百も合点だ、問屋のおやじが来たら、黒旋風の李達さまのお買上げだといっておけ。もらって行くぜ」

「あつ、この野郎」

五、六人は一せいに組みついたが、ほとんど彼の一跳躍に別ねとばされ、彼はすでに無数の群舟のなかを、あっちこっち覗

き歩いていた。

「おやおや、どの舟にも魚はねえぞ？」

そのはずだった。魚の貯えてある舟底の魚槽は、船尾を竹網仕切りにして、江の水が自由に浸すようになっていた。

——それを取り外しては覗き込んでいたのだから、魚はよるこんでみな一瞬に逃げてしまったはずだった。

それを見つつ黒山になっていた岸の人影は、

「ああ、見ちゃいらねえ」

「もう、おしめえだ！」

と、嘆息を放った。そしてついに衆のいきどおりをこめた声が「わあッ」となって、櫂、水棹、水揚げ鉤、思い思いな得物を押つとり、李達へむかってかかって来た。

しかし李達にとつては、一杯機嫌の景物だった。まるで雑魚の踊りを掻い潜っているようなものでしかない。——ところへ、事の次第を聞いて彼方から飛んで来た六尺ゆたかな色白な壮漢があった。これやこの漁師仲間、問屋さんと敬われている旦那であろうか。

袖口だけに刺繍のある裾短かな繻の上着、洒落者とみえて、黒紗の疋頭巾には、紅紐で結った鬚が紅花みたいに透いてみえる。商売柄、足は八ツ乳の麻わらじに、黄と黒との縞脚絆といういでたちだ。

「？」

男は、ゆっくりと李達をにらんで腰にさげていた商売用の秤を、ぼてふりの一人にあずけた。

「おいつ眼が見えんのか、血迷い野郎、こっちへおいでよ！」

李達は振返るやいな、水牛が怒ったような勢いで突ツかか

って来た。待っていた男の拳がその横面をかんと撲る。袂が腕に巻きついたほどそれは確かな打力だった。だが、しかし李達にはこたえもせず、逆に相手の腰の辺へ猛烈な足蹴をくれた。男がよろめく。体当りに、諸倒れとなる。李達が上だった。こんどは李達の鉄拳が二つ三つ男のひたいや鼻ばしらを打ちつづけた。すると後ろで。

「やめろっ、やめないか李達」

「あっ？ ——」振り仰いで「誰かとおもったらお二人さんか。放ツといっておくんさい。殺したって、罪はあっしが一人でかぶりやいいんでしょ」

「ばかっ。こっちへ来い」

戴宗と宋江とは、騒ぎをきいてここへ馳けつけ、ほこる李達をむりやりに撈ぎ離して、なだめつすかしつ、やっと元の琵琶亭の方へ連れて戻って行った。

ところが道がまだ琵琶亭まで行きつかないうちに、早くもさっきの紅紐鬚の男が、こんどは雪白な大肌脱ぎとなって追ッかけて来た。それも陸上でなく、小舟に、水棹さし、江の岸を先廻りしていたのであった。

「やいつ、黒旋風とかいった奴、逃げるのか、ざまはねえな！」

「何ッ」

あつと思つた瞬間だった。宋江にしろ戴宗にせよ、止める間などにはありはしない。李達は小舟の方へすつ飛んで行き、なにか二た言三言、悪罵を戦わせていたかとみるまに、

「うぬっ」

と、相手の舟のうちへ跳びこんでいた。

「よしきたつ」

待っていたとばかり、舟の中の男は両手をひろげた。

李達の方でも、勝負腰を挑んでみせたが、何しろ一步も近づけなかった。なぜなら艦の男はその両脚で巧妙に、

「それ。……どんぶりこ、どんぶりこ」

と口拍子に合せて、小舟を左右に大きく揺りうごかし、舟はまるで風濤に弄ばれる一葉の枯れ葉に似ていた。しかもぐんぐんとそのまに岸から揚子江のただ中へと離れて行くのである。

たまらなくなつて、李達は、

「やい魚屋。おれを恐れたな。男らしくもねえやつだ」

「ふん。言ッたね。さあ来い」

「そんな足拍子はやめて、てめえからかかって来い」

「こころえた。かたづけてやる」

言下に、男は片足立ちとなつて、その体を、舟の外へ斜に描いて見せた。すると小舟は苦もなくひっくりかえってしまった。同時に李達の姿も男の影もほとんど、一波の白いしぶきも揚げず、ただもっこりと江中に沈んでいった。

驚いたのは、宋江と戴宗である。——慌てて近い岸のなぎさまで駆けよつて来たときは、江上の舟はすでに裏返しとなつてただよい、漁師、ぼてぶりの輩は、さも心地よげな眼を沖へやつて、

「うまくやんなすつたね、親方さんは」

「何んたつて、浪裏白跳さ！」

「揚子江のぬしみてえなものだ。あの水牛野郎も、たつぷり水を飲むことだろうよ」

と、がやがや快を叫びあつていた。

宋江は、またさらに仰天した。大勢の顔へむかつてことば忙しく。

「あの肌の白い魚問屋の主人。あの人のあだ名が、いま誰かの言った『浪裏白跳』というのですか？」

「そうですね、そうですね。張順さんと仰っしゃいますぜ」

「それは大変だ。——戴宗どの、こいつは、しまった」

「えっ。しまったとは」

「彼が魚問屋の張順なら、その実兄の張横から私は手紙をもらっている！ 江州へ行つたらぜひ会つてやってくださいと」

「や、や、や。それはさて、なんとしたものか？」

困惑と手をにぎる汗、ただ、彼方の水面へ、その眼をこらし合うしかない。

夕陽は赤い半輪をしずめかけ、江の波は青く透いていた。白きは浪裏白跳の張順の四肢か。黒きはさすが弱りぬいた李達のもがきか。瑤々たる波騒いのかすかに立つところ、見ゆるが如くまた見えぬようでもある。

すると一瞬、からみ合つた両者の肉体が、ぼかと波上に浮き出した。それは白龍に巻きつかれた水牛の吠えに似ていた。陸の黒旋風も水中では手も足も出さず、張順の思うままに溺らされて、七顛八倒の飛沫をたてたが、またたちまち、もくもくもく……と水中深くに引きずり込まれた様子だった。

戴宗思わず両手をあげて辺りへ叫んだ。

「漁師どもつ。早く行け。わしは江州牢城の戴院長だ。ふたりを引き分けて連れて来い」

戴院長と聞いては驚かぬ者はない。すぐ一舟が矢のごとく

岸を離れ、ほどなく双方をもぎ離して連れ帰った。——といつても、浪裏白跳の張順は、颯々と水中を馳けるが如く一人泳いで先に岸へ着き。

「どうも相済みません。院長さんとは少しも存じませんでした」と、すました顔。

李逵もやっと舟から這い上がって来て、

「てへッ、ひでえ目に会わせやがった」

と、鼻や口から三斗の水をゲツゲツと吐いた。

「ともかく、話は彼方の琵琶亭で」

と、すぐ四人は、元の琵琶亭へひきあげ、からくもこの大騒動は一トまず無事におさまった。

そこで李逵、張順、各々ズブ濡れの衣服を着かえ、髪をたばね直し、そのまに水欄の灯と酒のしたくなど皆、新たな宵をととのえていた。

「さ、みな杯を持ってくれ」

戴宗も、挙げて、和解の音頭をとった。

「雨降って地固まるだ。二人ともこれからは、兄弟分の誼みをもってつきあうがいい。あれほど派手な喧嘩をすりゃあ思ひ残しはないだろう」

「意趣は何ものこしません。じゃあ、黒旋風の兄貴」

「おやおや、おれが年上かい。張順、よろしく」

次に宋江が、控え目に名のつた。

「山東の黒宋江です。張順さん、あなたのご実兄の張横さんとは、掲陽鎮でお目にかかつて、いろいろお世話になっています。どうか以後はお見知りおきを」

「えっ、では山東鄆城県の押司、宋公明さんだったんで。ど

うも、こいつあ驚き入った。じつは掲陽鎮の兄からも、とつくに手紙が来ていました。ぜひお目にかかれといつて」

「そうでしたか。まことに奇遇だ」

「いやこの張順も、はからずお三名の豪傑に、一夕一堂のうちでお目にかかり、こんなうれしいことはございません。どうぞこれからは兄弟分の端と思ってお叱りを」

と、ここに好漢同士の刎頸の交わりがまた新たに結ばれ、銘酒「玉壺春」の泥封をさらに二た瓶も開いて談笑飽くなき景色だった。

「ほい。すっかり忘れちまったぜ」

「李逵、何を思い出したのか」

「魚ですよ。事の起りは、魚だったじゃありませんか。張順、二、三尾くれないか」

「ケチなことを言いなさんな。何十尾でもよろこんでこの席に進呈したい」

「じゃあ一ト走り、俺が行って貰って来よう」

「おっと待ちな」

「なぜだ、張順」

「おめえはまだ江の水が呑み足らねえのかい」

「わははは。そう何度も、からかいッこなしさ。じゃあ張順、おめえも一しよに行ってくれ」

「いいとも。ではお二人さん、ちよつと中座いたします」

張順と李逵とは、手をつないで野に歌う牧童のように、仲よく纏れ合つて出て行つた。まことやこれ、虚心の自然児、草沢の英雄ともいふべき類か。

まもなく、宿の板前や男衆に桶をかつがせ、見ごとな金鱗

の金鯉きんぎょ十数尾じゅうすうびをすくい入れて二人は帰ってきた。すぐそれをなます鱈たら、から揚げ、汁じゆ、蕃椒煮とうがらしにといういろいろ料理させたが、ものの二尾ふたびとは食べきれたものではない。あと四、五尾は笹に通して、

「どうか、おみやげにお持ち帰りを」

と、あくまで心入れな張順のはからいだった。

これですぐ立てばよかったが、折ふし水亭の別座敷で琵琶びわの音がした。訊いてみると、客の求めに応じてあるく琵琶芸人びわげいじんということであり、宋江はふと、かつての一夜、穆家ぼくけの宴うたげで聞いた「潯陽江頭しんやうかうとう……」の忘れがたい一曲など思い出して、ついそれを呼ばせてみた。

ところが、それは見るからに哀れな親子の舟芸人で、歌曲も四絃しじゆんも、穆家ぼくけの乙女おとめの比ひではない。——しかし素姓すじやうをきいてみると、京師みやこ生れで、苗字みやぶじも同姓の「宋」といい、娘の名は玉蓮ぎよくれんということのこと。宋江には、そぞろ哀ればかり催もよおされて、酒さえ苦くなってきたので、

「もう、いいよ。ありがとう。もうよろしい。……さあ、娘さんに、何ぞそこの物を喰くべさせておやり」

と、なにがしかの鳥目ちやうもくをやつて、逆に慰めてやるような始末はつまつだった。

けれど李達りだつにはそんな斟酌しんしやくもない。娘に酌しやくさせて、悪ふざけをしているうちに、何が気に入らなかつたのか、娘をキヤツと昏倒こんたうさせてしまった。娘のひたいに小さな血が滲にじみ、耳環みみわも簪かんざしも飛び乱れていた。

「これっ、何ということをするのだ」

それを機しりに、張順と戴宗は彼を外へ連れ出し、宋江はあと

に残って、娘の親へ、

「ま。かんべんしてやってくれ。わしは牢城らうじやう堂どうにいる者だが薬代やくだいでも上げるから、わしと一しよについておいで」

と、李達りだつに代つて深くあやまり、たつて芸人の男親おとこかんひとりひとりを連れて帰った。それやこれやで、せつかな琵琶亭びわていの飲かんも、帰りは味気ない夜道よみちになった。——けれど、琵琶弾ひわひき娘むすめの宋そうという男親は宋江から思いがけない慰藉料いしやりりやうの銀子ぎんすをもらい、涙をながして、その晩、彼の部屋べつからもどつて行つた。

四 壁かべは宋江そうかうの筆禍ひつがを呼び、飛馬ひばは「神行法しんぎやうぽう」の宙そらを行くこと

元来、宋江も酒はつよい。ただ拳止きんしやことばが静かなだけで、酒量しゆりやうは誰にも負ひけはとらない。

玉壺ぎよこしゆん春はる、やら金鱗きんりんの鯉こいやらで、ゆうべもあれで、したたかに飲み、そして食べてもいたのだらう。……そのせいか明け方から彼はシクシク腹痛ふくうを覚えていた。朝陽あさひを見てからはいいよいよ烈はげしく、廁かわへ通うこと何十回なにじゆかいであった。

土産みやげの金鯉きんぎょは、すべて牢城らうじやうの差撥さばつや仲間ななへ分けてやった。囚徒けいとはみな交かわり番ばんこに彼の部屋べつへ来て親切しんせつに世話せわしてくれる。下痢げり止どめの六和湯りくわとうを煎せんじるやら粥かゆを煮かるやらで、同囚どうけいのたれ一人、宋江そうかうの日頃ひごとの徳とくを、ここで報むかわらない者ものはない。

李達りだつ、張順ちやうじゆんも見舞みまひに來た。とかくして宋江は、十日余りも寝こんでしまった。ひとつには濟州さいしゅうから江州かうしゅう送りとなつたときの、長途ちやうとの疲労ひらうが、今にして一度に出たのかも知れなかつた。

こうしてやっと、散歩を思うようになったのも、二十日ぶりだ。もうすっかり体はいい。季節さえ初夏の風に変っている。

「……さて、意外にご無沙汰したものだ」

友恋しさに、彼はその日、城隍廟の地内の観音庵に住む戴院長を訪ねてみた。

が戴宗は留守だった。

「張順の家は」

と考えてみたが、魚問屋の忙しい身だし、おそらくこんな上日和では江の上か城外の市場だろう。また李達ときては、賭場やら牢番溜りやら、いつも居る所さえわからぬ男だ。

しかし独りも淋しくはない。それに病後の快は、おのずから微吟の口笛を唇に誘ってくる。うッすらと快く肌は汗ばみ、眼は郊外の新翠に洗われ、ちか頃のない空腹感もうれしかった。

「おや……酒旗が見える。……おう小酒屋ではない。すばらしい酒楼ではないか」

近づいてみれば、酒旗には「潯陽江正庫」とみえ、また墻門の簷には、蘇東坡の書の板額に、  
潯陽楼

の三文字が白彫りにされていた。

「ああ、これが江州に名高い潯陽楼か。あいにくと一人だが、まま、見晴らしだけでも楽しもうか」

ずっと入ってゆくと、かどぐちの左右には、朱塗り金箔の聯牌がみえ、一方の華表には「世間無比酒」。片方には「天下有名楼」と読まれる。

階上は五楼にわかれ、江を望む風光は、どの欄に立ってもただ恍惚たるばかりであった。万畳の雲なす遠山は、対岸の空に藍か紫かの襞を曳き、四川くだりの蓆帆や近くの白帆は、悠々、世外の物のようである。

ほかの粋客であろう。箏や胡弓の奏でがどこかに聞え、楼畔の柳はふかく、門前の槐のかげには、客の乗馬がつないであつた。すべてこれ、一幅の唐山水の絵であつた。

「お客さま。ほかのお連れさまは？」

みせの女中の声に、

「いや、ほんの気散じで、ふらと一人で上がったのだが、一人客はご迷惑かね」

「いいえ、そんなことはございません。どうぞごゆるりと」  
「ではお酒をたのみ。菜、肉、汁、料理はおまかせしておくから」

欄を前に、一室の卓で、宋江は独り暢びやかに病後の心を養った。酒はよし、包丁もよし、器なども、さすが「天下有名楼」であつた。

「……わが故郷にも、名山古跡はないでもないが、やはり江州は違ったものだな」

心は、雲の遠くにまで遊び、ふと故郷にある老父や弟までを想いおこした。

独り酌む酒は、沈酔になりやすい。かつは二十日以上も乾いていた腸だった。彼はどうしたのかはらはらと涙を垂れた。

「自分も三十はとうにこえたのに、一個の名も成さず、家の業をたすけるでもなく、親からいただいたこの体には刺青さ

れて遠流おんりゅうの身だ。ああ、残念な。ああ、腑ぶがないことだ。

……すみません、父上」

惨さんとして独り注ついでは飲み、注ついでは飲み、やがてその大醉じちようを自嘲じちように交ませて、思わずも一詩を胸むねに醸かもしていた。

また、ふと見ればかたわらの白壁には、あまたの遊子醉客が、それぞれここに興を書きのこした題詠だいえいが見える。彼もまたつい、備え付けの筆をとって、次の章句を書きとどめた。——もし他日、歳月としつきたつて、再びここに遊ぶ日の想い出にもなろうかと。

少年、はやくに、経史を学び

長じて、心に謀たくみをえがくも

爪牙そうが、むなしく

迷いの虎に似る

現し身は、罪のいれずみ

いま江州の囚地しうちにあり

もし年ありて、再び来らば

このうらみ、この嘆たん

潯陽しんようの水も紅くれなゐとなって泣かん

こう一氣いっけいに書いて来て、宋江はその澆墨はつぼくの匂いとともに、心気すこぶる爽快そうかいになった。無性に、何かうれしくなり、つづいてその後のちに。

心は山東に、身は呉ごにあり

憂心は熱く 涙は冷ひややか

こころざし成るの日は笑うべし

黄巢こうせうも丈夫ますらおのかずにあらずと

「鄆城うんじやうけん人宋江しんかう作」

「むむ、久しぶりでものを書いた」

筆をおくと、彼は椅子いすに返って、片手に杯を持ち、片手の指で木琴もくしんを叩くように卓を弾はき、小声でそれを吟ぎんじてみた。そこですっかり気分をもち直し、やがて勘定を払うと、跟々ろつろつ躡せう々、元の道をもどって行った。——その孤愁の影、多情多感なその日の彼は、あとで思えば、げにも宋江として珍しいことだった。牢宮内のわが部屋へ帰りつくやいな、前後不覚、翌朝までぶっ通しに眠って、前日の墨戯ぼくぎのことなど、ほとんど記憶にもなくなっていた。

ここに無為軍むいぐんとよぶ田舎町いなかがある。

江州かうしゅうのすぐ対岸で、江州府の大街たいがいとは絶えず通船つうせんが通っており、また黄文炳こうぶんへいのような物持ちとなると、これは洒落しやれた自家用船で、いつも江州大城へ出向しゆういていた。

黄は、非役の閑職かんしやくだった。

そこで無為軍に美邸みていをかまえ、ずいぶん贅沢ぜいたくな生活ぶりをやっているが、どうして、なおまだ内には野心おんしん勃勃ぼつぼつたるものがあるらしい。その証拠には、彼が四時しじの珍しい土産物を積んで行くさきといえ、つねにきまって、江州奉行閣下さいぎやう蔡九の私邸しきていであった。

蔡九は、宋朝の権臣、蔡大臣さいだいじんの息子なのである。そこへのご機嫌伺いを、せつせとやっている魂胆こんたんをみても、彼の腹はわかるというもの。

しかしこの黄文炳こうぶんへいの評判はすこぶるよくない。多少の学はなにか、下の者にはふんぞり返り、上には媚態びたいおくめんなしという型の男である。それが今日もまた、奉行官邸しんぎやうへ伺候

していたが、折ふし蔡九から、

「今日は大城の宴会で、ちと忙しい。晩にでも来い」

といわれ、黄は、いちど船へ引返していた。そして午すぎ頃、何の気なしに、江畔の潯陽楼へ上がって、

「おいおい、ほんの一杯だ。こつてりした肴はいらんぞ。あとは茶漬でな」

と、横柄にいいつけていた。

金づかいは吝な客だが馴染みは古い。またそれを腹勘定に入れてこのお客さまだ。やたら小女にまで威張り散らしていたが、ふと白壁の書に目をとめて。

「おお、何だと。……少年、はやくに経史を学び、長じて、心に謀をえがくも? ……」

黄は、太い鼻息でうめいた。

「何、何。……このうらみ、この嘆、もし年ありて再び来らば、潯陽の水を紅に。……だれだろう。こんなものを恐れもなく書いたやつは、これは謀反の詩ではないか。しかも流罪人の筆だ! 奇っ怪しごく」

彼は手を鳴らして、女中、帳場を呼びつけ、これを壁書きした客の年齢人相などを問いただし、そして「鄆城県人宋江作」の署名も写しとって、晩を待った。いや船に寝て、翌朝を待った。

ここらが彼の奸佞なところである。果たして、奉行の蔡九は、ご機嫌すこぶる斜めであった。

「これ黄文、昨夜見えよと申したのに、なぜ儂を待ちほけさせおったぞ」

「は。申しわけございませぬが、天下の大事にふと心を悩ま

し、また万一の間違いでもあらぬよう、その下調べに、奔命いたしておりましたので」

「はて。今朝はよく、天下の大事という声を耳にする日だな」

「ほ。何ぞお手許へも」

「いやじつは、父の蔡大臣からご飛脚があつて、ちかごろ都の太史院天文監が、こう申しているとあるのだ。……北斗の星、吳と楚の地を照らし、その色赤し、おそらく謀反の徒のおこる兆しならんかと」

「なるほど」

「また、開封東京のみやこ童の間にも、

山はひがしよ

三十と六つ

家木はみだすよ

水と工と

そんな意味もわからん謎めいた童歌が、近来しきりに流行っていると申す」

「いや、恐ろしいものです」

黄は、膝をたたいて言った。

「天に口なし人をもって言わしむ、とか。その童歌も、北斗の妖しき光芒も、偶然ではございませんぞ」

「なにか、証があるか」

「この一紙をごらんください。てまえが昨日、潯陽楼の壁書きから写しとってまいった詩でございますが」

「うウむ……。みずから江州の流人といつてあるようだな。

囚人の詩か」

「いえいえ、そこはともかく、詩句すべてに流れている不逞

な反逆の血と、その恨みかたの凄まじさをご覧ください」

「いかさま、これは革命者の心胆の進しりだ。世を呪うやつ  
の声だ。郟城県の人、宋江とは一体だれだろう」

「ですからご管下の牢営にいる済州の流人でしょう。すぐ牢  
営の蔵帳官に、簿を検せよと、お命じなされませ」

蔡九は、役人をよんで、すぐ簿を調べて来いといいつけ、  
その間にまた言った。

「都で流行っている妙な童謡の意味は何と解いたらいいのだ  
ろう。こいつは何とも分らん」

「いえいえ、それもよく符合します。……山はひがしよ、と  
あるのは山東のこと。家木はみだすよ、とは『宋』の文字を、  
分解したものでございましょう」

「では、水と工というのは」

「江の文字になります」

「なるほど。して三十と六つというその数字は」

「それだけでは、てまえにも判じかねます。おそらく何か星  
の天數六六をいったのではないかと思われませんが」

「そこへ、蔵帳官が牢城の簿を持って来て。」

「これではございませんか」

と、点簿の名に、朱紙を貼って差出した。  
見ると「五月新入り囚徒、郟城県産、宋江」とある。折も  
折、宋朝廷の天文太史院は、都下の謠言や北斗を占案って、  
諸州へ乱のきざしを警報してきたところではあり、この事実

なので、奉行蔡九は、たちどころに決断をくだし、

「潯陽楼の壁に、不敵な叛詩をしるした犯人、宋江を即刻か  
らめ捕れ、一ときたりとも時をうつすな」

と、すなわち江州牢城の両院長、戴宗へその命をくだした。

宋江は何も知らずに、その朝、籠の小鳥に餌をやっていた。

病中らしい、窓辺の友としていた鳥籠の黄鳥だった。

「宋君！ 小鳥どころじゃないぞ」

後ろの扉ぐちに、こう息せわしい声を聞き、ふと振向いて。

「おっ。戴院長ではありませんか。そのお顔いろは、どうし  
たことだ？」

「いやあなたこそ、とんだことをしてくれた。どうにもなら  
ん」

「何がです」

「潯陽楼の壁に、あなたは叛詩を書いたではありませんか。

自分もいま、見とどけて来た。明々白々、あれまで、書いて  
しまつては消しようもない」

「……?」

宋江はいつまで、じいんと差し俯向いていたが、はっと酒  
中の記憶をよみがえらせた容子である。さすがに蒼白になっ  
た。しかし悪びれる風もない。椅子に腰をくずし、首を垂れ  
て「——一生の不覚」と詫びた。

だが、詫びられた戴宗のほうこそ、今は極度につきつめて  
いた。進退きわまった立場なのだ。すでに、蔡九の命で彼は  
牢城の軍卒頭以下一隊の兵を、城隍廟の廟前に勢ぞろいさ  
せ、しばらく待てと待たせてあるのだ。

そして、ちよんのま、ここへ姿を現わしたのは、彼の道術

「神行法」の秘を使って、風のごとくさつと忍んで来たので  
ある。といって何をはなしている隙もない。ただ戴宗が持つ

て来た一計は、

「宋君、ぜひもない。君を縄目にはかけるが、君は偽狂人になってくれ。蔡九の前へ出たら、あらぬ口走りと狂態をつくして、ひとまず吟味の手を焼かすのだ。あとの思案はあととして」

「いや、やめましょう。戴宗どの、覚悟しました。縛ってください」

「いや縛れん。あなたをここで見殺しにしたら、友人の呉用を初め、梁山泊の面々にも一生末生うらまれる。のみならず、江州界限で義をむすんだ男どもにも顔がたたん」

「でも、こんなおろかな因を作ったのは誰でもないこの宋江自身です。たれがあなたを不義としましょうか。たとえ偽狂人など装ってみても、しよせん、宋江にはよく出来る芸ではなし、醜態をかさねるだけです」

「ま。そうあっさり、あきらめないで」

「いや天命に従います。それしかない。もしあなたが、いさぎよしとしないなら、私自身で自首して出る」

もう説きようはない。また策もない。

戴宗は長大息した。まもなく、一軍の中に宋江を押しつつみ、蔡九奉行のいる大城の一閣へ入って行った。

あらゆるむごい拷問道具や獄具が白洲に用意されてあった。ここでは血の焔が燃えるのである。だが覚悟のていであつた彼には、さまざまな苛責もくだしようがない。口述書をとられ、死刑囚用の重さ二十五斤の首かせが締められ、その夕、大牢の闇へほうり込まれた。

わずかに、一つの倅せは、命を奉じて、戴宗がさつそくに

宋江をこれへつき出していたので、蔡九もその戴宗にたいしては、なんの疑惑も挟まなかつた。で、大牢の監視から食事なども、一切彼に委されたことだつた。

その夕、一方では奉行蔡九がその自邸で、黄文炳を相手に、「やれやれ、これで一トかたづき。まずは大事に至らなくて、めでたかつたな」と晩餐をかこんでいた。

「いや閣下。これからですぞ」

「まだ何か、急があるか」

「第一には、さつそく、事の仔細を、都のお父君へ急報し、蔡大臣さまから、陛下へも奏上して、江州大城ご支配の実績として、その功を、朝に聞え上げておくべきでしょう」

「なるほど、そのとおりだ」

「次には、これは国事の大犯人ですから、その処断は、当所において首となすか、あるいは生身を鉄鎖につなぎ、開封の都まで差立てましょうや、この一事も至急お使いをつかわし、お父君の大臣府へ伺いを立てれば、お父君も大そう面目をほどこし、かつまた、お手柄の名間に相成ろうかと存じますか」

「むむ、なかなかよく気がつく。その献言は用いよう。わしが陞任したら、きさまもこんどは栄職につけてやるぞ。……ではすぐさま、戴宗をよんで、その使いを命じよう」

「戴宗を？」と、黄は小首をかしげ「彼は両院の長ですが、間違いはありませんか」

「たしかな男だ。それに這奴は、神行法とやらいって、一日よく五百里（支那里）を飛ぶ迅足をもっておる」

「では都へでも旬日のまに行つてまた、すぐ還つて来られま

すな。それは奇妙な重宝者」

黄も異議なく同意した。けれどその夜は何か、蔡九に支度があるとかで、戴宗への申しつけは翌朝に行なわれた。

「戴宗、そちの神行法にものをいわせて、至急、都へ使いに行ってもらいたい」

こう前提して、蔡九は、二つの見事な進物籠と、秘封の書を、そこにおいた。籠には金銀珠玉の祝い物が入っていた。

「じつはな戴宗。儂の父親の大臣には、この七月十五日がご誕生の日にあたる。どうしてもこの祝文と品々は、同日までにお届けせねば意味をなさん。ついては夜を日について、間に合うように行ってくれい」

「御命、こころえました」

心中では、はたと当惑をおぼえたものの、いやとはいえない。早々、彼は大牢の前へ来て内なる蒼白い顔の人影へ、小声でささやいた。

「すぐ還ってきます。くれぐれ、ご短気なくお体をお大事に」  
それからまた、李逵をよんで、云々で都へ行くが、宋江の身を、くれぐれ頼むとかたくいいつけ、もう一つ釘をさして言った。

「おれの留守中、酒だけはつつしめよ」

「ご心配なさいませぬ。李逵も男だ。お還りを見る日までは、決して酒の匂いも嗅ぐことじゃございません」

「よしっ、行ってくるぜ」

城隍廟のそば、観音庵の家にもどると、彼はすぐさま身支度にかかった。胸に銀甲を当て、琥珀色の袍に、兜巾をつけ髪をしぼる。

足ごしらえは八ツ緒のわらじ、膝ぶしに咒符を結いつけ、仏神の像を鞍皮に画いた馬に乗り、進物籠を載せて、即日、江州を立って行った。その迅きこと、霧に駕し、雲を排い、飛鳥にことならず、といわれていた通りである。

また神行の法は、ときにより馬も用いず、その健脚にまかしても、常人の十倍も走ると信じられていた。つまり道教の道術の一つか。先々の旅籠でも、金紙銀紙を焼いて祭りをなし、身は精進潔斎、呪文修法、種々あって、ほとんど道中では寝るまもすくない。

はや、ここは山東の一角。

芦と平沙と、渺として、ただ水である。

戴宗は、馬を降りて、とある水辺の一旗亭を覗いた。そして一ト息入れ、

「おやじさん、酒も飯もいらん。葛湯でもくれないか」

「なに、葛湯をくれと。冗談じゃねえ。そんな病人の飲むよなものねえよ。ここは居酒屋だ」

「それは分っておるが、ここ何十里一軒の人家も見ない。では野菜汁でも煮ておくれ」

なおまだ、酒屋の下男は、ぶつぶついていたが、その間に、外から戻って来たのがじつはほんとの亭主とみえる。ぎよると、内の客を見たが、軒につないである駒のそばへ戻って行き、その不思議な鞍皮の神仏像の絵やら、また戴宗のふうていなどを、しきりに眺めくらべていた。

「もし、お客さんえ」

「おう、ご亭主か」

「どちらから来なすったのかね。道者でもなし、武者でもな

し、どうも変ったお身なりだが」

「江州から来たのさ。これから開封東京へ行く途中だ」

「へえ、江州のお方ですか。……じゃあ、もしやあなたは、

神行法の道術をつかう戴院長さんじゃありませんか」

「えっ、どうしてわかった？」

「いつも、あつし達の仲間の呉用先生から、天下にただ一人のこんな男が江州にいるとあって、神行法の不思議をいつも伺っておりましたんで」

「ふうむ、では貴公は、居酒屋の亭主にあらずして、そも何者だ」

「あなたが呉用先生のお友達の戴宗さんなら、何もおかくしする必要はありません。じつを申し上げます。ここは梁山泊と一水をへだてた江の茶店で、てまえはここに変装して、いつも江の口を見張っている梁山泊の男の一人、早地忽律の朱貴という者でございます」

「や、や。では梁山泊とは、このあたりか。そして呉用学人は、いまもおいでか」

「おりますとも、大寨の軍師さまで、まいど江州の噂のたびには、きまつて、あなたのお名が出る。そしてまた、そこへ流されておいでになる宋公明さまの身を案じなすつて、どうしているかと、ほかの一同まで、話のつど胸をいためないことはございません」

と聞いて、戴宗も断腸の感に打たれた。かくまでの男同士の情誼を聞くにつけ、今はつつみ隠しもしていられず、じつはその宋江その人が、かくかくの大難にあつて、いまや命旦夕の牢中の間にあると、事の次第をつぶさに話した。

聞くや否、朱貴は仰天して、俄に息まいた。

「そして何ですかえ、そんなさいを、おまえさんは一体これから都へ何しに行くのだ？」

「だから、今も申したように、蔡九の命でよんどころなく都の蔡大臣邸まで、あれなる誕生祝いを持って急いで来た途中だ」

「冗談いっちゃいけないよ。宋江さまのお命はどうなるんだ。祝い物なんぞは打っちゃつておしまいなせえ」

「だって、そのまに宋江さまが、ばっさり打首となるかもしれないじゃありませんか。……何、黒旋風李逵という牢番が付いているつて。そいつは甘すぎる。一人二人でどうなるものか。さあたいへんだ。まつておくんなさい、戴院長」

朱貴は軒の内へ馳けこんで、例の強弓と鏑矢を取り出し、江の岸からキリキリと引きしぼった。放つやいな、鏑矢は澄みきつた大気を裂いて、はるか江の彼方へ唸つて消えた。

戴宗は、先へ気が急がれてきたので、「帰りに寄ろう、呉用によろしく」とばかり、軒さきを出て、馬の手綱を解きかけた。

「とんでもねえ、やるもんか」

朱貴は、その手綱を奪いとつて。

「くそ、友達がいもねえ人だ。宋江さまを、見ごろしにしていいつもりか」

「だからこそ、急ぐのだ、一刻も早くと、気が気でない」

「こつちも、こうしてはいられねえのだ。さつ、梁山泊へ行つてくれ。おれと一しよに、山の聚議庁へ行つて、仲間一同

へ話してくんなせえ」

「そんな道くさはしておられん」

「何が道くさだ。来ねえといつても連れてゆく」

「えいつ、ききわけのない奴」

戴宗は神速の甲馬の上に跳び乗った。そして鞭で、朱貴をシッぱたいたが、離せばこそその朱貴だった。遮二無二、馬のしりへよじ登り、うしろから戴宗に組みついて、ふたたび大地へ諸仆れにころげ落ちた。

こんな間に、はやくも江上には、かぶら矢の合図にこたえ、緑旗紅旗の速舟の影が十二、三ぞう白波を切つてこなたの岸へ近づいていた。

## 五 軍師呉用にも千慮の一失。

探し出す偽筆の名人と印刻師のこと

水は渺々、芦は蕭々——。梁山泊の金沙灘には、ちょっと見では分らないが、常時、水鳥の浮巢のように「隠し船」がひそめてある。そして居酒屋の朱貴が射るかぶら矢を合図に、事あれば、わっと陸へ上がってくる仕掛けになっている。

戴宗といえど、これを見ては、争いも無用と知った。道を曲げて、梁山泊へ立ち寄り、事のわけを自身語るしかないと腹をきめ、

「かたきでも敵でもないのに、おまえさん方と喧嘩はつまらん。さあ案内してくれ」

と、朱貴に身をまかせて船へ移った。もちろん彼がここま

で乗って来た「神行法」の神馬、都へとどける金銀の進物籠も、あわせて鄭重に船へ積まれる。

「ひと足、お先に」

と朱貴は先頭の Wasser 内舟で急いだ。それが対岸へつくや否、彼は聚議庁（山寨の本丸）まですっ飛んで行き、軍師呉用にわけをはなした。呉用はまたすぐ、首領の晁蓋にこれをつたえ、全山の賊将をよびあつめた。

だから戴宗がそこへ臨んだときは、あらまし、戴宗の開封行きの使命、また、江州牢城の獄にあって、いまや死を待つばかりな運命に落ちている宋公明の危機なども、すでに一同知っていた様子であった。

とはいえ、呉用と戴宗とは、じつに久しぶりな邂逅でもある。二人は手をとりあって、

「やあ、おめずらしい。ただ、恨むらくは、こんな時でなければだが！」

「まったく、こうしているまも、気が気でない。一刻一刻が、宋江先生の寿命が縮まってゆく今だ。事情がおわかりだったら、拙者はすぐ蔡九の使いで、朝廷の蔡大臣の許まで急がねばならん。——そのうえ江州へ立ち帰り、何とか、先生の救助法に肝胆をくだいてみるつもりですが」

「まあ、おちつき給え」と、呉用は彼の焦燥をなだめて——「ここには、晁蓋統領以下、寨のおもなる者、ずらりという。もいちど、ことこまかに、宋先生の大難とかをよう説明してくださらんか」

「心はせくが、ま、お聞きください。じつは」

と、戴宗は縷々一同へ急を語る。また聞くうちにも、満座

の面々は、やるかたない悲憤と、宋江の救出に気が逸つて、戴宗のことばが終るやいな、

「それっ江州へ行け。江州牢城の獄をぶち破つて、宋先生を奪い取つて来ようぜ」

と、総立ちの氣勢を見せる有様だった。

「いや待った！」と呉用は仲間の一同を制して。「このさい妄動は禁物だ。へたな藪蛇は、逆に宋子（宋江）の落命を早めてしまおう。この計略は入念に入念を要する」

「では、軍師に何ぞ妙計がありますか」

「おう無くもない。……まず第一に、戴院長は都へ行つたことにして、蔡大臣の偽手紙を持ち帰り、蔡九を巧くあざむくことだ」

「そして？」

「蔡大臣への偽手紙にはこう書いておく。——犯人宋江なる者は、世上の童の謠言に照らしてみても、ゆゆしき国罪の張本なれば、軽々しく地方において処刑するな。途中嚴重に、都へ差立てい、という偽命令で江州から外へ誘い出す」

「なるほど、その途中を待ち伏せてか。——けれど軍師、大臣蔡京の筆蹟はどうしますか。息子の蔡九が見れば、おやじの筆蹟だ、すぐ見破つてしまいましようが」

「案じるには及ばん。近ごろ天下に流行っている四家の書体といえは、蘇東坡、黄魯直、米元章、蔡京の四人で、これを宋朝の四大家といっている」

「蔡京は書ではそんなに偉いのかなあ」

「まあ聞け。……ところで、わしが以前、濟州の城内で少しばかり世話してやった書生がある。その蕭讓という者じつ

に偽筆の名人なのだ。どんな碑文だろうが軸物だろうが、ひと目見たら忘れない。四大家の書体などもそっくり書く。人呼んで、**“聖手書生”**とあだ名しているくらいだし、しかも刀槍を持たせれば、これまた相当に使うといったような男だ」

「読めました軍師の計は。……けれど官印が要りませ。蔡大臣の印章のほうは、どうしますか」

「その目算もついておる。おなじ濟州に住む印刻師で、金大堅——異名を**“玉臂匠”**という男がいて、これまたその道の達人。——この二人をつかめばいい」

「つかむとは」

「ここで戴院長が身なりを変えて、泰安州の岳廟に住む山伏と化け、濟州の町へ行って蕭讓と印刻師の二名人を連れ出すのだ。さきは職人氣質、説き次第で造作はあるまい。……天下の泰安州の岳廟に、碑を建てる。ついでには天下一の巨匠であるおふたりに、ぜひ岳廟へのぼってお仕事をしていただきたい。そして些少ながら内金としてと、銀子五十兩ずつも持っていけば」

「おうつ、あとは聞かないでも分つた！」

晁蓋以下、みな手を打つたことだし、当然、戴宗としても、この妙策には異存がない。すぐさま彼は姿を山伏に変え、即日また、船で金沙灘をわたり、濟州の道へ急いでいた。

濟州の町の役所裏。——と途中で聞いて戴宗はたずね当てて来たが、その家ときたら、覗いて見るまでもない貧乏世帯で、聖手書生の蕭讓は、独り者か、泥窠の下を火吹き竹で吹いていた。

「ごめんください。てまえは岳廟の戴法印という者でござい  
ますが」

「なんない午飯どきに。また岳廟のお札売りか。行ってくれ、  
行ってくれ」

「いえ、建碑のお願いで」

と、戴宗はまず銀子五十両をさきに出して、鄭重に、碑文  
の揮毫を依頼した。

「ほ。お急ぎかね」

「じつは建碑の日取りまで予定されておりますので、即日、  
山へお越しねがって、文案、ご執筆、併せて願ひ申したいと  
いうのが、一山の希望でございます」

「じゃあ、さっそく旅立ちというわけじゃねえか。したが法  
印さん、石はあっても、文は間に合っても、彫りはどうしな  
さるんで？」

「ご当所には、金石印刻の上手、金大堅と仰っしゃる人もお  
いでのでよしで、これからそちらへ交渉に廻るつもりでござい  
ますが」

「大堅なら友達だから、仕事もしいいな。おっと、待ちなせ  
え。一しよに行つてやるから」

蕭讓はもう大乗り気なのである。

泥窠の火も、家の留守も、裏の婆さんへ声をかけて頼んで  
おき、すぐ連れ立って表へ出た。

そして町中の孔子さまの社まで来ると、汚い細路次の蔭か  
ら、一見居職とわかる猫背の男がヒョコヒョコ出て来て、出  
会いがしらに、

「おお蕭讓じゃねえか。どこへ行くんだい」

「おめえんどこへさ。この法印さんをご案内してね。……も  
し法印さま、こいつですよ、玉臂匠というあだ名通りな名人  
の金大堅は」

「これはお初に」

「ま、どんな御用かぞんじません、どうぞお寄んなすって」

と、大堅はさっそく、わが家へ連れもどつて、二人から用  
向きを聞いてみた。——聞いてみれば、泰安州の岳廟で五  
岳樓が重修され、それを機に、金持の有志の手で一基の石  
碑が建てられるというはなし。——そして戴宗がここでも銀子  
五十両を即金で前においたから、大堅も眼をまろくし、それ  
に単純な職人氣質、一も二もなく、

「ようござんすとも！ 東岳大帝をおまつりしてある岳廟の碑  
を手がけるなんざ、彫師一代のほまれだ、腕ツこき、やりや  
しよう」

とばかり大機嫌で引きうけた。二人ともそんな調子で、爪  
のあかほども、戴宗を疑つてみようともしない。

その晩は、この路次裏の家で酒となり、明け方には三人連  
れの旅に立った。そして小半日も歩いたころ、戴宗は「先へ  
行つて有志一同を迎えに出させる」という口実のもとに、姿  
を消してしまった。

それは、たそがれ近くのこと、道も七、八十里は歩いて、  
二人ともやや疲れ気味な足を引きずって行くと、突如、夕霧  
のうちで口笛がつんざいた。見れば、模糊とした一団が寄つ  
て来る。これなん梁山泊の一人王矮虎とその手下で、

「かねを出せ。二人とも、身ぐるみ脱げ」

と、立ちふさがった。

「ふざけるな」

と蕭 讓も金大堅も、おぼえの腕前で相手に立った。あげくに、逃げる矮虎を追っかけたが、それは早や相手の術中に落ち入っていたものだった。——たちまち附近の山から銅鑼が鳴りひびき、梁山泊の雄、宋万、杜選、また白面郎の鄭天寿などが襲って来て、難なく二人を林のおくへ引きずりこんでしまったのである。

さりとて、金も蕭も、手荒はちつともされなかった。ただ山駕に抛り込まれて、上から麻繩をかけられ、夜どおし目も眩るような早さで翌日も素ッ飛ばされていただけだった。そしてやがて、船にもせられた心地がする。——奇妙、不思議、いったい何処かと、恐々、繩を解かれて出てみれば、思いがけない、旧知の恩人が笑っている。

「……おやつ？ あなたは」

「覚えておいでか。呉用智多星じゃ。いや驚かせてすまなかつた」

「先生、ここは一体どこなんで？」

「梁山泊の聚議庁じゃよ」

「げッ……」と、二人は泣き出さんばかりな顔を揃えて。「先生、帰しておくんなさい！ 大堅にはおふくろがいる、子供もいます」

「案じなさんな、そのご家族たちも、明日あたりは、寨の者が、濟州からこれへ連れてくる手筈になっている。そしてこの寨の後ろには、ちゃんとおまえ方の住居も用意してあるし、まあ、おちつくがいい」

「じゃ、冗談じゃねえ。どうして、あつしどもを、こんな所

へ」

「もとより悪戯や粹狂ではない。二人の腕を見込んでの頼みごとだ。かねてその名は知ってもいよう。もと鄆城県の押司宋公明さんの一命がおまえらのその技術で助かるのだ。……としたら、ここは職人一代の仕事効いでもなからうかい」

呉用は目的を打明けた。呉用には世話になった旧恩がある。かつは宋江その人を、ふたりとも敬慕していた。蕭 讓はたちどころに義心を燃やし、金大堅もまた言った。

「ようがす、やりましょう！ 蔡京の印でしたら、朱文白文、いろいろと以前に彫ったこともあり、印譜ものみこんでおりますから」

ここでさっそく、蕭讓は密室にこもって、呉用智多星と戴宗が作っておいた偽手紙の案文をもとに、得意の偽筆をふるい、それに金大堅の彫った印を捺して、もう何人の眼にも、それとしか見えない蔡大臣の返信を作り上げた。

「ああ、これで思いがけなく、あのお方には吉運の展開となつた。では一刻も早く」

と、戴宗はそれを携えて、山寨の一同に別れを告げ、また、後日の手筈をもしめし合せて、急遽、例の神行法の甲馬に跨がり、江州の空へ帰って行った。

ところが、その戴宗を金沙灘の埠頭に見送って、寨の一同、元の宴席へもどって酒くみかわしているうちに、軍師呉用が、はっとした色で、なに思い出したか、

「しまった、千慮の一失！ あの偽の返信が、逆に宋子（宋江）の命とりとならねばいいが」

といったので、人々は愕然と、酔を醒ました。わけてその

妙技をかたむけ、偽墨偽印の作製に心血をそそいだ蕭讓と金大堅のふたりは、どこが悪いのかと、自分らの面目にかけて、呉用の痛嘆とその後悔の言へ、食ってかかった。

## 六 一党、江州刑場に大活劇のこと。

次いで、白龍廟に仮の勢揃いのこと

「たれの落度でもない。手ぬかりはこの呉用にある。呉用一代の失策だった」

「軍師、どうして、あの書翰が、宋公明さんの命とりになりましようか」

「印章を過った。……つい心なく『翰林蔡京』という四字の小篆を彫らせたが」

「よろしいじゃござんせんか」と金大堅は責任上、きつぱりいった。「——従来、てまえが見てきた蔡大臣の手紙はすべてあの印だった!」

「いや、いけない」呉用はいつもにたくその顔いろを青くしていた。「思ってもみるがいい、江州の奉行蔡九は、蔡大臣のせがれではあるまいか」

「それは、もちろん」と、異口同音。

「ならば、どうして父が子へ宛てて書いた返信に『蔡京』と諱の印を捺しましょうぞ。すなわち、人の諱は、目上にたいして、みずからを卑下するばあいに名のるもの。まして公な意を持つ書翰、地方の奉行へやる大臣の下文に、諱の印はつかわない!」

さあ大変である、満座、みな不安と焦燥に吹き研がれた。

「すぐ戴宗を追ッかけて」

とは騒いでみたものの、神行法の飛馬に追いつけるはずもない。ほかに策はないか。まったくくない。——ただあるのは、梁山泊の精鋭をすぐって、ただちに江州へ発向することと、そしてこの大過失をいかに償ってみせるか、軍師呉用智多星の神策に待つのみだった。

かかるうちに、一方の戴宗は。

はやくも江州へもどりつき、蔡九奉行閣下へ、都の返信を復命とともに捧呈する。蔡九は大満足でねぎらいの酒、銀子など賜い、

「いかに神行法といえ、疲れたであろう、数日休養するがいい」

と、彼を退出させ、そのあとで父蔡京の返書をひらいてみた。——それには、祝いの籠の品々たしかに受領とみえ、さらに末文には、

——妖人宋江は、国賊のこと、朝廟の大法に照らし、天下ご直裁の例に倣うとの仰せである、すなわち、檻車に乗せ、使軍に護らせ、すみやかに都門へ押送するよう

に。なおまた。そこもとはいってもなく、黄文炳なる者の功も、奏聞に入れば、他日かならず、恩賞ならびに、榮の叙任もあらむ。

と、細々あった。

折ふし取次の者から、黄文炳が見えましたという。ここ連日、黄は日参のかたちなのである。蔡は彼の顔を見るとさっそく言った。

「文炳、よろこんでいいぞ。まもなくそちは栄職につける」  
「ほほう。これはまた、夢のような仰せを」

「嘘と思うのか。戴院長が帰って来て、父ぎみの返書をもたらしたのだ、その結果だ」

「や。もう帰りましたので」

「そちの功も、天子に奏上、不日、恩命あらんとある」

「して、宋江の処刑は」

「いそぎ都へさしのぼせとのご下命だわ、まあ、これを見い。

ほかならぬきさまのこと、きさまだけには見せてつかわす」

「はっ、これはもつたない」

黄は、うやうやしげに押しいただき、蔡大臣の返翰を読み初めていたが、鋭い目が、やがて再三、再四と、その小首をかしげさせ、ついに思いきつた風でいった。

「閣下、これは真つ赤なにせものです」

「ば、ばかなことをいえ！ まぎれもない父の筆蹟を」

「いやいや、この印章は、尊大人がまだ翰林院の学士でいらせられた当時ご使用のもの。法帖には見えまするが、大臣現職の今日では、はやお用いではございますまい」

「……ふうむ？」

「それに父上からご子息へ宛てたご書面に、どうして諱ノ印を捺されましょうか。文辞はよくとのつておりますが、近ごろ当代四大家の書体をよく真似る者ありとも聞き及びますし、油断は相成りません。ともあれ、もいちど戴宗を召して、不審のかどかど、お問いただしあつてご覧なされませ。……私も屏風の陰にひそんで、篤と彼の様を見届けておりますれば」

このとき、当の人戴宗は、ほぼ安心して、宋江の牢をひそかに訪い、大いに宋江を慰めて、久しぶりにわが家の門へ帰りかけていた途中にあつた。

蔡九から追っかけの召をうけて、何事かと、再び彼の前へぬかずき出た。しかし蔡九の口吻もその眉もすでに最初のとまきのご機嫌ではない。

「戴院長。その方は、都で父の大臣に、直々お会い申したのか」

「はっ。すこぶるご健勝のていに拝されました」

「では、何事にも内門の取次をなす、門衛長も出てきたろうな、王と申す門衛長だが」

「はい。見かけたように覚えます」

「髯はあつたか。それと王の年頃は？」

「さよう、さすが大臣邸の忠勤者らしく、年も長け、ゆゆしい髯もありましたようで」

「それっ、戴宗に縄をかける」

勃然たる彼の一声のもとに、武者隠しに潜んでいた家士十数名が、いちどに躍り出で、うむをいわせず、戴宗をからめ伏せた。

戴宗は、仰天して叫んだ。

「こは何事ですッ。閣下、てまえに何の科があつて」

「だまれっ、門衛長の王は、老齢のため、この春、職をやめ、いま勤めておるのはせがれの王だ、髯などもありはしない」  
つづいて、屏風の陰から黄文炳もあらわれて、急所急所をぐいぐいと問いつめる。ついには戴宗も答えにつまり、階から庭へ蹴落されたあげく、仮借なき拷問に責めさいなまれた。

拷問は夜におよび、さすが戴宗も苦しみもだえた。気を失うと水をぶっかけられ、とうとう偽手紙であることは自白のほかなくなつた。途中、梁山泊の賊につかまって、摺り換えられたのだと虚実を取り交せて白状した。

たちまち、彼の身は、首枷をかけられて、獄へわたされ、書翰が偽ものと分明の上はと、蔡九はあくる日、大牢の与力をよんで、こう厳しい果断をくだした。

「獄中の宋江と、戴宗とを併せて、同日同所で、斬刑に処せ。刑場の立て札には、ともに梁山泊に気脈を通じ、不逞な陰謀をいだいた大賊なりと公示するがいい」

与力の役人は、日頃、戴院長に好意をもち、世記にもなつていた下役なので、ただおろおろと、

「して、その……斬刑の日は、いつにいたしましたでしょうか」

「きまつている。即日、あしたのうちに」

「ですが、あいにく、明日は国家の忌日で、なおあさっては、七月十五日の中元節、さらに天子の景命（誕生日）と、盆や祝日がつづきますので、地獄の大牢さえ、牢番から囚徒まで、休ませねばなりません」

「ちつ、ぜひもないわ。では今日より六日の後にしろ」

偶然とはいえ、これや天が宋江に、また戴宗に、幸いしたものと見えようか。

六日後の牢城から江州郊外への刑場の道はたいへんな雑鬧だった。聞きつたえた見物人がわんわんと黄塵の下に波打っている。

この朝、死刑囚二人は、かたのごとく、白い死衣を着し、

油でない膠の水で、尖がり髪に結わせられ、赤い造花が、髪の根元に一本挿された。

また獄神の青面廟の前では、この世の名残に一碗の飯と酒が与えられ、それが終ると、裸馬の背で、沿道の眼にさらされながら、牛頭馬頭の獄卒が手綱持ちで、あまたな兵の警戒のもとに、死の刑場へ曳かれてゆく。

刑場は広い竹矢来だ。ただ二カ所ほど、矢来の口の囲いを切つて、役人口、冥府口と分けてある。死刑囚の口には、一對の白蓮華、白団子が供えてあり、裸馬から下ろされた宋江、戴宗ふたりはただちに、死の庭へひきすえられたが、時刻の午ノ刻にはちと早い。まだ、検視官以下の騎馬列は途中であつた。

「やい、やい、やい、やい。そんな所から入っちゃならん。出ろッ矢来の外へ」

見物の雲集に、矢来は揺れる。警固の兵は声を囁らす。

だが、おさまればこそ。中でも一群れの香具師かと思える風態の者どもが、

「おれじゃあねえよ、後ろが押すんだ」

「兵隊さんよ、しみつたれるな、見物はお構いなしだろ。青天井の下じゃあねえか」

するとまた、役人口の方でも、何か荷をかついだ一群の人夫たちが、どつと中へ入ろうとして来た。

「こらっ、お仕置場へ何をかつき込む!?」

「お奉行所からのお届け物だ」

「嘘をつけ。こらッ、そんな天秤棒など下ろさんか」

「いんごうな兵隊さんだね。ちつたあ粋をきかせなせえよ」

「ふざけるな、ここを何と思う」

するとまたぞろ、三輛の江州車を押ししてきた旅商人の二団が、遮二無二、人渦の中へ割りこんでいた。

「わっしょよ」

「わっしょよ」

「わっしょい！」

「こらッ——」と、兵隊たちは押し戻し「どこへ行く、どこへ。矢来が見えんか」

「中の広ッ原へだよ」

「てめえらも、首をちよん斬っていたきたいのか」

「ひえッ……」と、旅商人らは、笑い合つて「そいつはごめんだ。こちらは見物させていただきますのさ」

と、車の上に登つて、矢来越しに手をかざし合っている。

そこへ妙な蛇使いの男、物もらい、風車売り、風船屋、いろんな雑人たちががやがやと寄つてしまふ。制止しても、手がつけられない。

なにしろ、あっちこちである。その喧騒たるや一ト通りでない。そのまに早くも刑場の中央では、検視以下の諸役人が現われ、罪文を読み上げ、また両者の首力セを取り外させるやいな、ずかずかと首斬り役二名が、だんびら提げて側へ寄り、ただ一語、

「観念！」

という声の下だ。

一閃、キラと動く物が遠目にも見えた。

いやその途端というよりは、一刹那の寸前だった。太刀把り二人が二人とも、飛んで来た二夕筋の矢にあつと顔を伏せ、

また、何処かでは、

ジャン！ ジャン、ジャン、ジャン……  
と銅鑼の早鉦が鳴っていた。

銅鑼を叩いたのは、江州車を踏んまえて高く立っていた旅商人の一人だが、ほかの連中は皆、もうそこには見えない。

飛鳥のごとく刑場の真ん中へと馳けていたのだ。いやもつと早かつたのは、べつな口にいた人夫、香具師の一団である。すべてたちまち、野太刀、棒、短槍、薄刃刀、天秤棒、あらゆる得物の下に刑吏獄卒を血まつりとして荒れ廻つた。と見えたのも一瞬のこと、いつのまにか、宋江と戴宗の姿は消えて失くなっている。修羅の中には二つの薙だけで、あとはさながらただ戦場の凄風にひとしい。

怒濤に乗せられ、怒濤に運ばれて来た心地だった。宋江はわれに返つて、

「や、や、みなさんは」

と、あきれ果て、生きたよろこびも、急にはほんとに思えてこなかった。戴宗とても同様である。

夢にもあらで、彼が目の前に見た面々は、すべて梁山泊の人、晁蓋、花榮、呂方、郭盛のともがら。

また燕順、劉唐、杜選、宋方の雄。

朱貴、矮虎、鄭天寿の豪。

さらには、阮小二、阮小五、阮小七、白勝といったような頭立つたもの十七人に、部下百余人の徒党だった。これらいづれもが、旅商人や人足や物売りなどに化けて、一挙、目的をやつてのけたのであるのはいうまでもない。

「ああ、あくまで私ごときを、忘れないでいて下さる諸兄の義氣、何とことばもありません」

宋江は、悵然と泣いた。戴宗もうれし涙にぬれる。万感のこと、来し方から今後のこと、到底、とつきには語りきれもない。

「ところで、ここはどこです」

「河畔の白龍神廟でしょう」

「追手がやって来ませんか」

「もちろん来ましよう。けれど、二つの板斧を持った体じゅう黒い男が、殿軍はおれにまかせると、縦横無尽、追ッ払ってゆきました」

「え。二つの板斧を持った男？ それは一体誰だろう。そんな者は仲間にいないが」

「ああ分った、黒旋風李逵ですよ。李逵もただ一人ながら、今日のこの機会を窺っていたものとみえる」

ところへ、廟門の外から大童となった李逵が韋駄天と馳けこんで来た。一同へ向い大声で外から告げていう。

「ここには夕方まで居られねえぞ！ 城内では蔡九、黄文炳の指揮で、数千の大軍が集合中だ、はやく江を渡って逃げのびろ」

宋江と戴宗が、廟から呼んだ。

「李逵、これへ来い。——梁山泊の頭領たちにひきあわせてやる」

「おおう、こつちもそのつもりだ」

時もよし、ここへまた、今しがた江岸に着いた三隻の船から上陸して来た一群があった。それぞれ浪裏白跳の張順、

張横であり、穆家の兄弟、浪人の薛永、また顔役の李俊、李立から、童威、童猛など、すべて「揚子江ノ三覇」といわれる者どもが、塩密売の仲間まで狩りあつめて、これも宋江の救出に馳せつけて来たものだった。

しかし、すでに宋江はここに在って、

「やあ、ありがとう。お蔭でこの通りです。しかし各々が来てくれたことも決して徒勞ではありません。まずみんなに会ってください」

と宋江が仲に立って、晁蓋以下一党の同勢へ三覇の連中をひきあわせた。所もよし、白龍廟の神殿だった、その大廻廊のことだった。で、これら初見参の面々に、黒旋風の李逵も加え、後世、この日のことをさして、

「白龍廟の仮の勢揃い」

と、その壮観を称えている。

こんなわけで、いつか夕迫ってしまったため、早くも城内の騎兵歩兵、千余の襲来をつい迎えて、相搏つ叫喚と宵の血戦を余儀なくされたが、やがて遠く官軍を追いしりぞけ、同勢ごとくとく、白龍廟のほとりから船上へ乗り移った。

風を孕む帆ばたきもつかのま、江を下るのは矢の如しである。着いた所は掲陽鎮郊村の穆家、すなわち穆春兄弟のやしきだった。

穆の老父は、手をあげて迎えた。莊丁、女わらべも総がかかりで、炊出しにかかる。黄牛、羊、鶏、豚、あひる、およそ園菜家畜をあげて、調理の鍋、大釜にぶちこまれた。

大酒宴となる。いくら大家でもせませざる。卓はすべて庭園に出され、まさに星夜の盛宴といふべき光景。そして慨歌

たちまちに、

「奸人黄文炳をただおくべきでない……」

と、なった。

もと膏薬売りの浪人薛永は、かねての恩返しはこのときと、「まず、てまえを無為軍の町へ、探りにやっけて下さい。いささか地理人情にくわしくもあり、知人もいる」

と、物見役を買って出たので、即座に一同は、「じゃあ、行ってくれ。すぐにも」

と、彼へ任命の拍手を送った。

二日後である。薛永は一人の小男を連れて帰って来た。彼の紹介によれば、この小男は、洪都の生れで、通臂猿という妙なアダ名があり、本姓名は、侯健ということである。

「なんで、この人を、連れて来たのか」

宋江がたずねると、薛永がニヤリと答えた。

「職は、裁縫師なんですよ。針と糸を持たせれば、神わざみたいな技能があります」

「ほ。裁縫師とはめずらしい。が、なんのために、その裁縫師を？」

「じつは、ついこの春まで、黄文炳の家庭へ、お抱えの裁縫師として住み込んでいました。いまでは職になったのですが」

「では、内部の事情に詳しいな」

「それで連れて参ったのです。どうぞこの侯健から詳しいことはお聞きとりくださるよう」

侯健のはなしには、聞くべき価値が多かった。

黄文炳の悪評はかくれもないが、その兄の黄文燁は、土地の人にも、

黄仏子（ほとけの黄さん）

と別名でよばれているほど、善人の聞えが高いという。

まいど、貧民には情けぶかく、孤児を養い、公共の橋を自分で架け、風害水災のたびに、身をかえりみず、財を注ぎこむなど、なにしろ、弟の悪文炳とは、ひとつ母親の腹から出たものとは思えないほどな違いだがある。

そこで、その黄仏子の弟ながら、悪文炳のことはみな、毒蜂刺と町でも呼び、男女の召使い四、五十人はいるが、一人とて、文炳を心から主人と敬っている者はないともいっているのであった。

「そんなわけなんで……」と、裁縫師の侯健は、おちよぼ口をつぼめて言った。「私と薛永さんとが、ぶらりと、雇人部屋へ遊びに行った振りして、みんなを笑わせ、その晩、野菜園の木戸から同勢を引き入れれば、なあに、見かけは嚴重な構えでも、あんな屋敷へ踏み込むのは、何の造作もありませんよ」

「が、兄の文燁の住居は」

「大路をへだてて、弟の文炳の邸宅とは、すぐの斜向いです」

「文燁は善根を積んでいる。そのような善人に禍いをかけてはなるまい」

宋江は消極的になったが、文炳の奸怨を憎む一党の憤怒は熄まず、江州立退きの置土産に、また、世上への見せしめだとして、ついに黄家征伐がもくろまれた。

大小七隻の船に、梁山泊のかしら分二十九人、乾分百四、五十人が乗りわかれ、江を溯って無為軍の町へ忍んだのは翌晩だった。——すでにその日の昼、裁縫師の侯健と薛永は、

先に黄文炳の屋敷内へ、口実をもうけて巧く入りこんでいる。

深夜。大きな夏の月の下。

町は炎になった。戦火のように。

四更にかけて町じゅう灰燼に帰したような大騒動だったが、全焼したのは、黄文炳のやしきだけで、つい斜向いの兄文燁の邸宅は、無事、そっくり残っている。

いや一時、文燁の住居の方へ、飛び火したかと見えたときは、町の者でもない家人でもない不思議な人数が、一方の襲撃をやめて、その消火に努めたりしていたのだから、町民たちは明け方にいたって、

「いったい、あの降って湧いたような人数は、どこから来てどこへ消えてしまったのか？」

と、怪しみ合ったが、誰ともなく、それこそ四日前に、江州府を修羅の巷とした山東の大賊梁山泊の一勢だとの噂が流れ、さてはと、みな身の毛をよだてたことだった。

しかしその暁早くには、すでに大小七隻の怪船は、霧ふかい江上へ漂い出ている。——事は果たしていたのである。——がただ一つ、最大な目的を逸していた。当の怨敵黄文炳は、その夜、江州奉行所か蔡九の官邸かにいて、無為軍の家にはいず、ついに討ち洩らしていたのであった。

## 七 大江の流れは奸人の血祭りを送り、梁山泊は生還の人にわき返ること

対岸の火災という言葉はあるが、黄文炳にとれば、対岸無為軍の火災は寝耳に水、驚倒して気も失いかけたことだろう。

ひとごとどころか、わが家が焼けたという取沙汰だ。

彼はあたふたと、蔡九へいとまを告げ、自家用の美船で、江を渡って行ったが、そのまも心は空だった。

強欲、残忍、吝嗇、佞奸、あらゆる悪評を冷視して一代に蓄えてきた金銀財宝、倉に充つる財貨は、いったいどうなったことやらと？

すると突如、水を切って鳴った鉄笛の一声が、彼のきもを冷やした。どこからか漕ぎ寄って来た三そうの小舟を見たからである。アッと、文炳は腰を抜かした。近づく舳に戴宗を見たからだ。もひとつの小舟には二つのまさかりを持った黒旋風が見える。

「やつ賊だ、引っ返せっ」

しかし、もうまにあわない。

ほかにも五隻の大船の影が迫っている。文炳は狼狽のあま江の中へ飛び込んだ。とたんに小舟からもしづきが揚った。浪裏白跳の張順が、歩く大魚みたいな影を水中に描いて、苦もなく文炳を引っ捕え、大船の方へ引きあげていた。

「ざまを見さらせ」

「さあ、みんな寄って来い」

「悪文炳の膺斬りだ。悪運の強い野郎とおもったが、悪運はやっぱり当てにはなるめえ。思い知ったか」

船上は沸いた。血まつり騒ぎだ。

一寸試し五分試しのすえ、江へ投げこまれたのはぜびもない。あげくに、その人間が一代爪に火をともし蓄積した財貨金銀は、昨夜、一物余さず彼の倉から、ここの大船三隻に移されていたのであった。

「さあ、引揚げようぜ。足もとの明るいうちに」

この日も、江州の府城を中心に、官軍の旗や馬けむりが江岸一帯に眺められた。おそらくは大規模な手配がおこなわれているのだろう。都へは使者が馳せ、各州には官符が飛び、梁山泊の名はいまや、全土へ震撼しているにちがいない。

「この上は、てまえたちも、この地には残れません。老父もつれてご一同とともに」

と、穆家の兄弟、三覇の面々、例の薛永や裁縫師の小男までも、こう申し出て、すべて梁山泊落ちときまった。

いちど、全員は穆家に引り返した。そして、先に白龍廟で結んだ義の誓いを、さらに杯の上で固め、穆家の資産も、土地を置き残したほかはすべて十数輛の車に移したのである。かくて神出鬼没を極めた一味百七、八十人、日ならずして、風の如く、梁山泊へ帰ったのであった。

寨には、俄にまた、人間が殖え、同時に、財倉も充ちてきた。

そのうえなお、この前後、黄門山の四頭領とよばれた賊が、風を慕って、梁山泊へ降って来たので、それも梁党の盟に加えられるた。

四名の前身、氏素姓は、どんな漢どもかといえは。

一番上が、欧鵬、アダ名は摩雲金翅。

元は、江上警備軍の軍人という士官くずれだ。

二番目は、蔣敬。

湖南は潭州の産で、文官試験の落第者。——智略にとみ、

書算に長じているところから、神算子という異名がある。

三番目は、馬麟といい、またの名は、南京建康、雜刀をよく使い、鉄笛の名人だった。

さらに、どんじりの四番めの男は、光州産の水呑み百姓のせがれで、ばか力があり、鋤の巧みはもとよりだが、案外にこれがまた、刀槍の上手。あだなも妙な——九尾龜だが——しかし陶宗旺という本名もあるからには、まがいなしの人の子には相違ない。

「ところでご一同」

と、或る日、呉用が提案した。

「こう、さまざまな人物、それぞれな技能の持主が、しぜん群星の如く集まったからには、梁山泊をよく保つため、上下の序、礼の順を、厳しく立てねばなりません。……まずは、宋公明その人こそ、われら梁党の上に仰ぐ、主座第一のお人たるべき者ではないか」

ほとんど一人の異議もなく、双手をあげて、

「そうだ、ぜひそう願いたい」

と一同、宋江を繞って言った。

「とんでもない」

宋江はかたく辞退した。

「わたくしは、諸兄のために、からくも一命を助けられ、ただ恩に浴して、そのうえ徒食しているに過ぎぬ者、どうかあるじの座には、晁蓋大人をすえて下さい。わたくし如きは、到底その任ではない」

とばかり、何と一同が推しても、ききいれる色はなかった。

「では」

と統領の座には、結局、晁蓋が坐った。——そして二位に

宋江、三位に軍師呉用、四位公孫勝と、すらすら衆議がすすんだので、宋江もついそこまでは否みかねて、受けてしまつた。

そもそも、宋江はこんなつもりではない。

彼は漢を愛し、世を憂い、輾轉不遇な人間たちに、ふかく同情はしていたが、かりそめにも賊の仲間入りしようなどとは、ゆめにも思っていないかつた。——官に仕えては、善吏といわれ、家においては、よく老父に孝養し、書を読み、身をおさめ、かつ四隣の友や県民たちに、愛情とまことを尽して、おだやかな生涯を愉しまん、としていたのが、彼の人生目的であつたのだ。人生如何に生くべきやも、それしかなかつた人である。

ところが、こんな破目になつた。いまは朝廷から不逞なむほん人と視られ、天地に身をいれるところはない。生きんとすれば、ただこの梁山泊の仲間うちと、一土塊の小天地があるのみだつた。

「では、以下の座順は、晁統領からご指名ください」

呉用のことばに、晁蓋は、

「おまかせねがえれば」

と、人物、年の高下なども、配慮して、名を呼びあげた。

——まず五座に、豹子頭林冲と。

それから順次。

劉唐、阮小二、阮小五、阮小七、杜選、宋万、朱貴、白勝。

——以上を左の席として。

そして右側の列順には。

花榮、秦明、黃信、戴宗、李逵。

また、李俊、穆弘、張横、張順、呂方、郭盛、蕭讓、王矮虎、薛永、金大堅、穆春、李立、歐鵬、蔣敬、童威、童猛、馬麟、石勇、侯健、鄭天寿、陶宗旺——すべてで寨のかしら分はこれで四十人がかぞえられた。

聚議庁の大香炉には香が燻べられ星を祭る壇には供え物が上げられて、鼓楽のうちに、慶祝の酒もりが催された。いつもこうした大祭は三日つづく。あくる日は山寨中の手下から、何十という裏山の家族小屋にも、それぞれな祭り振舞が見られるのだつた。

子供もいる、老翁もいる、孫もいる、媪もみえる。彼らは山畑をたがやして、世情何たるかも知らず、いとも小さな平和の陽なたを楽しんでいる様だつた。

宋江はそうした風景をながめると、また卒然と、あれきり絶えている家郷の老父を思い出して、つい涙をたれた。

で、その夜のこと、一同のいる席で、

「ここへ助けられて来て、早々にまた、わがまを申すようですが、どうしても自分はいちど、世間へ行って来なければなりません。その数日の暇を、諸兄におゆるしいただきたいが」と、申し出た。

「ほ。世間へ行くと仰っしゃるが、どこへ何の御用にですかえ？」

「じつは家にのこしてある老父が甚だ気づかわれますので」

「はははは。また先生が始まつた」

と、大勢の仲間は大いに笑つた。そして宋江の今にも何か熱いものをこぼしそうにしている臉を見ると、同情は同情と

よく分りながらも、笑わざるをえなかつた。

八 玄女廟の天上二夢に、宋江、

下界の使命を宿星の身に悟ること

宋江の親思いは人並みはずれたものである。晁蓋も呉用もそれゆえ止めはしなかつた。ただ、宋江の一人旅は危険きわまるものと見て、

「では先生、行ってらっしゃい。その代り用心棒を十人ほどお連れなすつて。……でないと手前どもも心配でただ安閑とお歸りを待ってもいられませんか」

と、すぐその人選にかかりかけた。

だが宋江は、それも固く辞退した。故郷には弟の宋清もいるので、老父をここへ迎え取る目的の歸り途には三人の旅になる。そのほうがかえって世間に人目立たず、何よりは老父が気楽に來られようというのであつた。

どうも何事につけ、人手をわずらわさず、自分のことは自分で処して行こうという内輪好みが、この人の性情らしい。強つてそれを曲げるもどうかと、梁山泊全山の大眾は、あくろ日、彼の歓送会だけをさかんにやり、

「どうぞ、お氣をつけなすつて」

と、金沙灘の向う地まで、その一人旅を見送つた。

日を経て、宋江は、故郷の鄆城縣宋家村へたどり着いていた。——風の音にも心をおきながら夜を待ってわが家の裏門をコツコツ叩いた。すると弟の宋清がすぐ出て來た。顔のみるや兄弟は抱きあつてしばらくことばも出なかつた。

「兄さん。どうしてこんな危ない中へ、とつぜん歸つて來たんですか」

「じつはな宋清。わしもついに、梁山泊のほかには、この天地に身を置く所もなくなつた。……それで老父とおまえを、山寨へ迎え取ろうと思つて來たわけだ。さ……すぐ支度してくれ。父上にもそう告げて」

「と、とんでもない！……」と、宋清はすぐ手を振つた。そしていうには、「江州での騒ぎから兄さんの身元には、すべて手配が廻つて、県でも網の目を張つています。ましてこの家を放つとくはずはありません。役署の捕手頭、趙能、趙得のふたりが、たえず部下に巡邏の目を光らせているんです」

「えつ。それではどこかに県の巡邏が見ているのか」

「私たちは囷です。親思いな宋江だから、いまにきつと、これへ立廻るにちがいないと、わざと元のままにしているのですから、それに引つかかれば、老父も私も、また兄さんまでも、しよせん無事にはすみません。……いつそ救い出して下さるものなら、梁山泊のお力をかりて下さい。大勢の加勢がなければとても村は出られませぬ」

宋江は大いに後悔した。

晁蓋や呉用があんなにいつてくれたのに、と今さらな悔いを禁じえなかつた。だが早やどうしようもない。ふたたび戻つて頼むしかあるまい。で彼は、老父の顔すら見ず、宋清にだけ後日を約して、すぐ元の道へ走りもどつた。走りながらもわが愚を責めた。なんたる浅慮な我意を押し通して無駄な日数を費やしたことか、と。

汗は衫（上着）のうえにまで滲み出ている。道は暗い。不氣

味な月がぼやっとあった。一体どれほど馳けて来たろうか。しかもそのうちに大勢の足音もして。

「——宋江、待てえっ」

彼は何度ものめった。そして心臓も口から吐いてしまいそうな呼吸だったが、恐怖に突かれ通しだった。喘ぎに喘ぎながら急いでいた。だが後ろでは彼を呼ぶ声が、いよいよ近くなってくる。

「南無三……」

薄雲が払われたのか、こつねんと、おぼろな視界が白く月の下に見えた。なんと、彼が迷いこんだ所は、俚俗「還道村」という幾重もの丘陵にかこまれた樹林の奥であったのだ。

「野郎、もう逃げ道はねえはずだ」

追ッついて来た四、五十人の捕手は、バリバリと木立の中へ踏み込んで捜査に散らかった。——宋江は生ける心地もなく、ふと目の前に見えた古廟の扉へ、双肩をぶつけてころがりこんだ。

蝙蝠か、むささびか、目をかすめた物がある。いや追手の松明もピラピラ廟の外を走り廻っていた。とてもじつと隠れてはいられない。

「ああ。これまでか！」

よろめいた途端である。そこは内庭の出口か、或は壁でも腐っていたのだろうか。彼の体は、玉垣の中へまろび落ちていた。見ると左右二列の渡廊を抱えて、青瓦も草に埋み、あたりは落葉に寂たるままな社殿があった——宋江は夢中で階を這いあがった。饅え朽ちた欄干を越え、異様な黴の匂いやら蜘蛛の巣やらを面で払った。そして最も奥の深いところ

ろの御厨子の内へかくれこんだ。

めりめりツと、どこかを踏み破るひびきがした。つづいて趙能、趙得ふたりの影が、手下に松明を持たせてどやどやと踏み込んで来た。ここの本殿も広くはない。宋江は早や観念の目をとじた。

すると、ごうツとばかりな山風があたりを揺すった。いや、たんなる山嵐しとも思えないそれは懐気をふくんだ家鳴りをなし、とたんに、天井でも落ちてきたような塵埃のかたまりが、墨みたいに捕手たちの松明を吹きつつんだ。——趙能と趙得の二人は、ともに眼をおさえて、  
「うツ……。いけねえ。な、なんだ、この大風は」  
「ひよっとすると？」  
彼らはひとしく、ぞーっと、身の毛をよだてた顔つきだった。

手下の七、八人はもう横ツ跳びに外へ逃げ出していたのである。ここは神殿の奥だ、神威を穢したお怒りだろう、罰があたる、血ヘドを吐く、目がつぶれるぞ——。そんな恐怖を口々に、捕手頭の唎号もきかばこそ、みな飛び出してしまったのだ。しかし、趙能、趙得はまさか逃げも出来ないのだろう、齒がみをして踏みとどまり、

「ばかな奴めら。狐狸はいるだろうが、神や仏なんてものがあるならお目にかかりてえくらいなものだ。おうっ兄弟、その御厨子の簾を引ッ剥いでみる。宋江のやつ、もしやそこかしれねえぞ」

「こころえた！」

だが、どうしたことだろう。一陣の懐風とともに、稻妻の

ような青白い一閃を浴び、同時に耐えきれぬ眩いにあたまを抱えたまま、二人ともぐるぐる独楽みたいに廻って気を失いかけたのである。——つまりはたった今、お目にかかりたいものだと言っていたものにまざと出会ったもののように趙能、趙得二人もまた、魂を消し飛ばして、どこかへ逃げ失せてしまったのだった。

ふしぎはそれのみでない。刹那、宋江もまた身を真二つに斬られたような紫電を感じてうツ伏していた。そして落雷の異臭では決してない、いや、馥郁といってもよい香気が自分に近づいている思いだった。まぎれなくそれは人の気配にちがいになく、

「星主さま。星主さま……」

と、二人の青衣の童子が左右から自分を呼んでいるのであった。

ぼかと、宋江はうつろな眸で、ふたりの童子の姿を見た。

天竺鬚の頭、琅玕の耳環、鳳凰型の沓。

また、その青い綾衣には花鳥のもよう、薄むらさきの、長やかな風持つ紐。

「おっ？ ……どなたでしょう。おふたりは？」

「女神さまの使わし女です。宋星主さまを、お迎えにあがりました」

「星主？ わたくしはそんな者ではありません」

「いいえ、おまちがいはございません。お越し下さればわかります」

「どちらへ」

「お待ちあそばしている女神さまのお座所まで」  
清々しい微風がいつか宋江の身を乗せている。

月があつて、その月が、まるで近くの物のようで、かつて見たこともない耀かしい真珠色をおびていた。

「おや？」

ここはその月の中なのではあるまいか。宋江は疑った。故郷宋家村の近くに、かかる所があつたとは、生れてから老父のはなしにも聞いたことはない。

「星主さま。さあどうぞ」

銀柳、金花、楼を繞る翠靄の苑。

登れと誘うこの玉階は、いったい、たれの館なのか。

ふと、天上の仙館が思われた。

「……そうだ、童女も仙童にちがいない」

心の奥で思いながら、宋江は楼台を上ってさらに深い所の殿前にぬかずいていた。どこやらに聞える仙樂も唳々として世の常ではない。朱の柱に彫られてある龍鳳もともに嘯くかとあやしまれ、やがて珠の簾のうちに、薫々たる神気がうごいて、

「星主、お久しぶりでした。ここへおいでの上は、おへだてには及びませぬ。どうぞこなたへ」

きれいな声が、さも親しげに呼びかけて、そのの簾をさらさらと高くかかげさせた。

宋江は身をすくませて、一そう懼れた。

「これは下界の、はしたなき男にすぎませぬ。なんでかような神界へ、まぎれ参つたものでしょうか。どうぞ、ご憐愍をもつて、お帰し下さいますように」

「ホ、ホ、ホ、ホ」

女神は玉をまろばすようにただ笑った。そして四人の仙童に命じ、たつて宋江に御簾内の席をすすめた。錦練の椅子であつた。

やつと、ややおちついて四壁をみると、龍燈、鳳燭の光は、碧と金色を映え交わし、二列となつてゐる仙童女は、旌、香瓶、笏、供華などをささげていた。

そして七宝の玉座のお方こそ女神のきみか。おん鬘に高々と、飛ぶ鳳凰、九ツの龍、七彩の珠などちりばめた金冠を載せ、天然無双の眉目のおんほほ笑みを、まばゆいばかりに、こぼしておられる。——その雪のおん膚、美妙な薫り。また纏い給う銀紗のおん衣から、藍田の珠の帯やら白玉のかざりにいたるまで、光耀そのものの中にあるおすがただつた。

「星主には、おつつが無うて」

と、女神のきみは、あくまで、宋江を初めてみる者とはしていず、お久しぶりゆえ、と祝いで、すぐ侍女に酒を命じた。宋江は酌がるるままに三献ほどいただいた。女神はまた、

「おさかなに、その棗を」

と、仙界の棗の実などをすすめられる。宋江はそれも食べ、核子は捨てる所がないので、掌のなかに握つていた。

口中は麝香をふくんだようである。ほのぼのと、身のうちはかろく、

「身は、蝶になつて、花のあいだに在るようなこちです。思わず過ぎました。もうただだけませぬ」

と、瑠璃の杯を侍女へ返した。

「あまりおすすめても……」

と、女神は黒曜石のような眸を侍女へやって、

「では、天書の三巻を、これへ」

と、いつつけ、すなわち、宋江への贈り物とした。

それは黄紗にくるまれた三巻の書で、たてよこ五寸、厚さ三寸。——女神はそれを彼へさずけてから告げた。

「星主。どうぞ天に代つて天書の道を人の世に行つてくだされませ。あなたのほかに、その人はありません。青人草にあわれをかけ、国の毒と、世の邪をのぞき、なべて義と情けと、信と誠とを、濁り世にも失わないでください。それを行うところにお、お怯みはいりませぬ。ここに四句の天の言葉がございます……」

宿二遇イテ重ネ重ネ喜ブ

高二逢イテ是、凶ニアラズ

外夷、及ビ、内寇

幾処力、奇功ヲ見ス

きつと後々思いあたる事がございましょう。一生お心にとめて、おわすれないように」

宋江は心耳を凝らし、九拜して、ただただ聞き入るのみだつた。女神はかさねて、

「——天上の玉帝さまは、あなたにはまだある魔心やら、道の未熟を研かさんとの思し召から、わざとあなたを下界へお流しなされましたが、天縁あらば、ふたたび天の紫府へお呼びもどしになりました。とはいえ、下界において、万にも冥府の獄簿に載るような罪科にお落ちなさればもうわたしの力でもお救いはできません。……三巻の天書を以後の友となされて、それをお研究めなされませ。同学のお相手には

天機星（智多星異用をさす）一人とかぎり、ほかの者には一切他見ご無用です。ゆめ、ご懈怠はなりません、……おお、お名残はつきませぬが、天上界と下界のへだたり、そういつまでもお引きとめはなりませんゆえ、はや、すみやかにお帰りくださいませ」

宋江は、はっと、ひれ伏した。その姿へ、もういちど、女神の声が、こう聞えた。

「いつかは、いずれまた、天上の玉帝さまの御園でお会いしましょう。くれぐれも、下界のご宿命を、つつがなくお果たし遊ばしますように」

……とたんに。

宋江は心のどこかで「あっ」といった。あたりは碧黒い波間に見え、二匹の龍が、自分に戯れからんでくる。自分は恐くて、逃げもがき、もがくうちにゴク、ゴク、ゴクと水を呑んだ……。……と思ったせつなに、はっと眼をさましたのである。

すべて、南柯の一夢であったのだ。

「……ああ、夢だったのか」

ぐったりと現し身を見出したが、夢にしても不思議であった。黄紗にくるんだ三巻の天書は膝にのっている。またしかも、掌には三粒の棗の核子を握っていたし、口のうちにも、馥郁たる酒のかがりが残っていた。

「はてな。おう、夢にして夢にあらずだ。これこそ、靈験とか、また、よくいう夢想のお告げとかにちがいない。——すると自分の宿命は？」

彼は、もう何か、怖れるものもないように、その厨子を転

び出て、廟の外に立ってみた。そしてそのとき初めて、廟の額に、金碧あざらかな四文字をはっきり見たのであった。  
玄女之廟

と、それは読まれた。

玄女、九天玄女。彼は口のうちで唱えながら、眼を天にやった。時刻は、はや真夜中らしい。月は中天にかかっていた。小さく、遠く、かかっていた。

宋江は環帯を解いた。そして腰の肌身へじかに、天書の三巻をくくって持つと、すぐ月の小道を馳け出していった。

ところが、玄女廟を去ることまだいくらでもないうちに、早くも彼の影は、人目につけられていたらしい。彼につづき、樹林の間を豹の如く追っかけていた六、七名の男がある。

「おおいうッ。おおいうッ待てえ」

後ろばかりではない。三方でその呼ぶ声は銜し合った。宋江はたちすくんで、

「しまった」

と、叫んだ。前面の断崖に、滝の音がする。ここは行きどまりの滝道であったのだ。

しかるに、天来の援けともいうべきか。わらわらと背後に迫って来た男どもは、意外にも、

「おうっ、宋先生じゃありませんか」

「そうだ、宋江さまだ」

と、口々に言いつつ、茫然とあきれ顔の彼の前に、「ご安心なさいまし。梁山泊から来た赤髮鬼の劉唐でございませ」

「てまえは、石將軍の石勇」

「催命判官の李立」

つづいて歐鵬、つづいて陶宗旺と、各々が口を揃えて名をりつらねた。そして最後に——ややおくれて飛んで来た二挺斧を持った男も、

「やっ、宋先生か。やれやれ！ これでおれたちもほっとした。おいっ劉唐、峠へ出て、早くこのことをみんなに知らせろ」

と、血ぶるいして言った。これなん黒旋風の李達だったのである。二挺斧は生々しく血塗られていた。

宋江はほっと、蘇生の思いにくるまれたものの、まだ夢に夢見る心地を、たゆたわせて、

「どうしたわけです。いったい、どういうわけで、諸子がこのへは？」

と、面々の姿を見まわすばかりだった。

「いや、よくこの李達をお叱りなさるが、先生くらい、人に世話を焼かすお方もありませんぜ」

と、李達は例のごとき打ツつけ調子で、ざっと次のようなわけを話した。

さきに宋江が、ただ一人で梁山泊を立つや、軍師呉用も晁統領も、そのあとからすぐ一隊を組織して、おなじ鄆城県へ潜行していた。

かならず宋江の身に事が起る。悪くすれば官の罠に陥ちる。さすれば、兇変を聞いてから馳けつけたのでは間にあわない——という見通しからである。そしてその観測は外れなかった。

この夜、彼らは宋家村で同勢を三手に分け、一手は宋江の急を救うため還道村の山中へ分け入り、また一方の隊は宋家の屋敷から、宋江の弟宋清と老父の二人を助け出し、これはその場から警固を付けて、まっ先に、梁山泊へ送ってしまったものである。

「ですから先生……」と李達は、まず宋江にとって第一の憂いに、こう安心を与えたうえで、

「——次には、県の追手頭の趙能と趙得ですが、そいつもかくいう黒旋風が、玄女廟の近くでたつた今、この二挺斧でかたづけしてしまいました。ですから、もうご心配はございません。……が、峠の方では、一同が案じ合って、吉左右を待っているにちがいない。さあ先生、そっちの方へ急ぎましょうぜ」

と、もう先に立って馳け出していた。

まもなく宋江は、一団の黒い人影を嶺の上に見いだしていた。すでにその人々も劉唐の知らせで宋江の無事を知り、月下、こぞって歓びの手を振っている。

すなわち統領の晁蓋以下、花榮、秦明、黃信、薛永、蔣敬、馬麟らの寨友たちであった。そこへまた李俊、宋万、穆弘、張黄、張順、穆春、侯健、蕭讓、金大堅らも加わり、李達のひと組をあわせると、約三、四十名の顔合せとなったわけ。

「まことに、よけいなご心配をおかけしました」

と、宋江は一同へ深く詫びて、また特に、

「老父と弟も、はやお手配のもとに、梁山泊へお引取りくだされたよし、ご温情は忘れません」

と晁蓋の手を拝して、しばらくは、うれし涙にくれる風だ

った。晁蓋もまた無事をよろこんで、この上は一刻もはやく引揚げるが得策と、みな騎馬となつて、駒首を東へ回した。

——宋江も一頭の馬を与えられ、その馬の背から、ひそかに玄女廟ひょうの青瓦を山腹の森に見おろしながら、

「いつかはきつと、今日のお礼詣りにうかがうでしょう。また三巻の天書、四句の天言、それもあわせて心に銘じ、終生決して忘れずまい」

と、胸の奥でくり返していた。

時に、有明ありあけの空翔ける夜鳥の声か。あるいは山家の牧童でも歌っていたのか、ふと古調ゆかしい一篇の詩が月魄つきいろのどこからともなく聞えていた。

ぜひなけれ、天地あめつちの巡環めぐり、いましも麻あきのみだれを、世に見する。

見ずや、微賤びせんに起つ、英雄ども

波となつて、山東さんとうの一角いっかくに怒るを。

天罡星てんこうせいはいまし、天に宿さず

地に降りて、それ、百八の業をえがく。

中に瑞氣ずいきあり、鄆城うんじょうの一人

知らざるは無けん、及時雨きときうの宋江そうかう。

こよい、九天玄女くわんてんげんむすめの天書を賜うて

月兔げつと、梁山泊りやうざんぱくへ、その人を送る。

見るべし、以後の仁と義と、礼知れいちの風ふう

また天に代りて、人が天兵を行うところを。

## 九 李逵も人の子、百丈村のおふくろを思い出すこと

呉用智多星は、このたびは留守をして梁山泊りやうざんぱくにいたが、宋江の無事を聞く以前に、宋清と老父が寨城さいじょうへ送られてきたので、さっそく宋家のために、梁山泊中のほどよい所に、小ぢんまりした一邸を建てがって、一同の帰りを待っていた。

日かずも待たず、金沙灘きんさたんを渡って来た舟列は、歓呼の中に、晁統領ちやう以下の姿を見せた。また、つつがなく戻って来た宋江の明るい顔に、山も水も沸き返りそうな迎えをみせた。

わけて人々が眼を熱くしたのは、迎えの中から走り出た老父と、走り寄った宋江とが衆目も忘れて、ひしと相抱いたまま、しばし泣き濡れていた姿だった。この日を期して、弟の鉄扇子てつせんし宋清も、寨城の一員となつたのはいうまでもない。

かくて宋江は、年来望んできた“父子同棲”の願望を達したが、ここにそれからの余波がつづいて生じた。——というのは、それを祝うべく行われた、翌る日の大宴会において突如、起つたものである。

「お願いがあります。統領、また寨友の諸兄。ぜひ、ききとだけ下されい」

声を誰かとみれば、それはかの道術の達人一清道人、すなわち公孫勝こうそんしょうなのだった。

「じつは私にも、長らく不孝のまま、故郷に置き放してある一人の老母がおります。また“道教”のお師にも、以来、便りすらしておりません。併せて、一度ふるさとを訪い、日頃

の詫びをすましたい思いで胸がいっぱいです。どうかこの一清に四、五カ月のお暇をただかせてくれますまいか」

「ほう……。あの人が泣いて言っている！」

一同は感に打たれた。異議なく、彼の願いは、

「それや無理もない。一清先生、行ってらっしゃい」

と、その場で衆議一決となった。

公孫勝は大いによろこび、翌々日はもう以前の雲遊の道士姿となり、腰に戒刀、頭には棕櫚笠、そして白衣、白の脚絆に、笈を負って、わが故郷薊州へさして立って行った。

すると彼を見送った帰り途からのことである。何を考え出したか、黒旋風李逵が、がらにもなく時々拳で目をこすっていた。仲間たちはおかしがって、

「李逵、蜂に刺されたのか」

「ははん、赤辛子を噛みつぶしたな」

などと、からかってはいたが、しかし奇妙なことには、日ごろ腹立ちツぽい李逵が怒りもしない。のみならず、その晩の聚議庁の集いでも、飲まず、笑わず、酔いもせず、ベソベソ泣いてばかりいる。

「どうした？ 李逵」

宋江がそばへ寄って訊いてみると、訊いてくれた人が宋江であったせいにもよるだろう。彼は手放しでわんわん泣き出して、そして吠えるように訴え出した。

「お、おれだつてよ……。木の股から生れたわけじゃねえや。こう見えても、故郷には、年とったおふくろがいらアな。一清が羨ましいや。先生が羨ましいんだ。……。なんとか、おれのおふくろも、梁山泊へ連れて来て、ちったあ、楽をさせてや

りてえもんだと。……。つい、それを考えたら、泣けてきて、泣けてきて」

「じゃあ、おまえも故郷へ帰って、母親をここへ連れて来たというのか」

「先生、何とかしておくんさいよ。後生だ……。こ、このとおりお願いですから」

「さあ？」

宋江は当惑した。同情の念、禁じえぬものはあったが、周囲すべての面は、不賛成の色をたたえている。目と目で顔を振りあっている。

それも無理ではないのだ。何ぶんにも、黒旋風李逵の名は、その暴勇の聞えは、江湖に高い。

ことに「江州大騒擾事件」のあとでもあるから、故郷へも、官の手が廻っているにきまっている。そんな所へ、こんな男を、と誰にしる危ながるのは当然だった。

だが、言いだしたらきかない李逵だ。ついそれを訊いたほうが悪いようなものである。李逵は墨をなすったような涙を顔じゅうにこすって、果ては宋江へ食ってかかった。

「いけねえんですか先生。あっしは人間の子じゃねえんだろうか。べら棒め。先生の親や弟は一つにいるくせによ。なぜ俺だけには……」

「まあ、まあ」と、宋江はその背をたたいて「そう泣くなよ、李逵。その気もちは、他人のわしにもうれいものだ……。だが、統領、軍師以下、みな難色を示しておられるのは、万一のばあいを怖れるからだ。……。もしきさまが、わしのいう三つの条件を、かたく守ると約束するなら、宋江からご一同

へたのんでやるが」

「ど、どういう約束ですえ？ 三つの条件とは」

「第一には、道中一滴の酒も飲まないこと」

「ようがす！ やめよう！」

「第二、きさま一人では、何をやらかすか分らぬゆえ、蔭の者一人をこっそり尾行てやるとする」

「それも合点だ。して第三は」

「君がお得意の得物——あの二つの板斧だが——それは帰泊の日まで、呉用軍師のお手許へ預けておくことだ」

聞いていた一同は、大いに笑った。おそろくそれだけは手放すまい。李逵にすれば、抱いて寝もしたい子みたいなもの。と思っていたが、李逵はそれもまた約束した。こうなっては、宋江の口添えにもなることだし、彼の願いは一同で承知してやるほかはない。

こういういきさつから李逵もまた、やがて大寨の友としはしの別れを告げ、その故郷、沂州沂水県へと、野太刀一本の身軽な姿で、旅立って行ったのだった。

さて、そのあとではすぐ、

「誰を、奴さんの用心に尾行てやったらいいか」と、なった。

杜選が言った。「——それはこの対岸で、見張り役の酒店をやっている朱貴の兄哥にこした者はありません。朱貴も沂水県の生れで、李逵とは同じ在所の出ですからね」

「いかにも」

と、宋江はうなずいた。

「そうだ、そんなはなしは、いつか潯陽江の白龍廟でも耳にしたことがある。誰か、速舟で朱貴を呼んで来てくれまいか」

朱貴はすぐやって来た。そして命じられた使命にも否やはなく、こう呑みこんで、なお言った。

「現に、てまえの弟の朱富は、いまでも沂水県の西門外で、居酒屋をやってますし、李逵の田舎の百丈村とは、たいして離れてもおりません。……へい、李逵の家ですか。左様、たしかにありましたよ盲の老婆が。よく縁先の日なたで糸を紡ぐ小車を廻していましたが、それが李逵のおふくろでしょう。盲の世話には、一人の息子がおりましてね、ええ、李逵の実際の兄なんです。……なにしろひどい貧乏百姓でしたから、今でもそれに変わりはありますまい」

「なにしろ頼む」と、宋江はくれぐれ朱貴に囁した。「よもやわしとの約束は破るまいが、なにせい、あの奴さん、なにを仕出来すかわからんからな」

「お蔭で手前も久しぶり故郷が覗けます。李逵については、充分、注意いたしますから、ご心配なく」

この役は、朱貴にとっても、都合なものであったから、勇躍して、彼もまた李逵のあとからすぐ沂水へ出発した。

あとの梁山泊は、しばし平穩無事だった。大寨の初秋は、水清く、山麗わしく、また酒が美味かった。宋江はよく晝蓋と時事を語り、また涼夜の灯火を剪っては、書窓の下に三巻の天書をひもどき、呉用とともにその研鑽に耽っていた。

こちらは李逵。

「おれも偉いもんだな。とうとう、約束は破らなかつた。これへ来るまで、まだ一滴の酒も……」

なつかしい故郷沂水県は目の前にある。そしてここは町の

西門だった。人だかりがしているのは、県城のどこにもあるおきまりの高札場だナと、李達も何気なく、立ち交じっていた。

と、物識り顔が、声を出して読んでいる。

一ツ。正犯ノ極悪ハ鄆城ノ者。

共謀ノ戴宗ハ、モト江州ノ

牢屋預リナリ。

同ジク、牢卒ノ李達ナル者ハ、

当所、沂州沂水県ノ産ニシテ……

「な、なについてやんで……」

李達が鼻で笑っていると、

「おい、こっちへ来な」

ぐいぐいと、突然、腕を引っ張って辻の角まで連れ去った男がある。

「おや？ おめえは金沙灘の見張り茶店の亭主、旱地忽律の朱貴じゃねえか」

「叱ッ……ば、ばか。人が聞くじゃねえかよ。いま、なにを馬鹿面して見ていたんだ」

「そう馬鹿馬鹿と言いなさんなよ。ここらは何年ぶりか、見るもの聞くもの、なつかしくつてさ」

「ちつ。阿呆もほどにしろ。あの高札には、宋江を捕えた者には錢一万貫、戴宗なら五千貫、李達は三千貫と、てめえの首のお値段までが、触れ書になっているんだぞ」

「へえ、俺のが一番安いのか」

「そういうおめえだから、宋先生も心配なすつて、この朱貴をお目付役に、おめえの後を尾行させたんだ。……ま、立ち

話も物騒だ。その店へ入りねえ」

「冗談じゃねえ」と、李達は自分の鬼門のように尻込みした。

「——そこは居酒屋じゃねえか。うむむ、たまらねえ匂いがしやがる。罪だよ、あにき」

「まあいいから入れッてえに」

朱貴はずっと奥の小部屋へ先に入ってしまった。酒肴の註文も馴々しい。そして独りでチビチビ飲み初めた。李達は汗拭きの布を出して、鼻と口を抑えていた。

まもなく、店の亭主が、あいさつに来了。それが朱貴の弟、朱富だったのである。李達にしても、同郷人なのですぐ打解けた。ただ打解け難いのは、みすみす目の前にある酒、杯だ。

「なあ、あにき……。お目付のあにきが見ている前だけなら、ちつとぐらいは、いいだろうじゃねえか。俺アもう目が眩みそうだ、死んじまいそうだよ。飲ましてくれよ」

朱貴は吹き出してしまった。聞いてはいるが、李達の酒くせも猛勇ぶりも、彼はまだほんとは知っていない。で、つい同情負けして、

「ちくと飲きねえ、こっただけだぜ」

と、杯を与えてしまった。

舌つづみを打って、李達は目を細めた。もう自分でも歯止めがきかない。もう少し、もう少しで、夜も丑満の真夜半ごろまで、ついつい話と酒に興じてしまった。そして亭主の朱富にもせきたてられて、やっとおみこしを上げたのは、五更(夜明けがた)の残月が淡く町の屋根に傾いていた頃だった。

「だいじょうぶか李達。足もとは」

「へん、これっぱかしの酒が何でえ。笑わしちやあいけねえ

よ。おっと、笠を忘れた」

「それ見やがれ。ま、手を出すな。かぶせてやるから」

「おふくろに会ったら何ていやがるだろうな。ああ、あしたの晩は、おふくろのオッパイに頬ツペたをつけて寝るかな。

……ははは、あばよ。あにき」

「おいおい李達。そっちじゃねえぞ。そっちは近いが山越しの裏道だ。本街道を行けよ本街道の方を」

「やだよ」

「知らねえのか。子供の時分から、虎が出るんで、虎の名所といわれてるんだぞ。近頃はまた、追剥おいはぎも出るッてえ噂だ」

「そいつあ、おもしれえ。化け物も故郷のやつならなつかしいや。あにき！ あさっては、おふくろを負おぶッてここの店へ帰ってくるからな。たのむよ」

「……あ。行っちゃまがった」

朱貴と朱富のあきれ顔も、酒の入っている李達には、振向かれもしなかった。ひよろりひよろりそれでもいつか、朝まあだきには、霧深い山路の奥へかかっていた。

ぴ、ぴ、ぴ、と何の鳥か、けたたましく密林のうちに銜くたを呼んだ。新秋の木々は早や紅葉こうようしていてやがてそこから突然躍り出してきた一個の人間も紅葉の精か、鬼かと見えた。赤い角頭つのずまん巾に、おそまつな革胴かわどうを着込み、足は素わらし。

「おやおや、何か出て来やがったな。はアて面妖めんまうな？ ……」

李達りだきはまだ酔っている。酔眼もうろうではあったが、しかし相手の顔が分らないほどではなかった。道をはばめて突っ立った大男は、墨で顔を塗りこくり、手には二本の板斧まきかりを引ッさげていたのである。

「お早う。誰だ？ おめえは」

「やいっ。知らねえのか。このおれさまを」

「むりをいうなよ。知るはずがあるもんか。つらに鍋ズミなべを塗って、赤帽子かっこうつてえ恰好かっこうから見ると、ははん、百丈村の村祭りにござった旅芸人の道化どうけ役者か」

「野郎、酔ってるな。身ぐるみおいてゆけ。これを見たら分るだろう」

「ほう、両手に二挺の板斧まきかりとおいでなすったね。えらい物をお持ちだなあ。して、お名まえは」

「百丈村の鉄牛を知らねえのか。いま名の高え、黒旋風こくせんふう李達

たあおれのこった」

「へエ。おまえさんが？」

「おうさ。そう聞けば、十人が十人腰を抜かすのに、てめえは馬鹿か、よそ者か」

「俺はいつたい誰だろう、さあ分らなくなっちゃった。ひとつ、当ててみないか、偽鉄牛にせ、いやさ偽李達にせ」

「何だと、偽李達だと」

「だって、よくこのつらを見てくれよ。俺の在所も百丈村、あだ名は鉄牛、もひとつの名は、黒旋風の李達りだきっていうんだ」

「ひえっ」

「おもしろい。どっちが真物ほんものか、賭けと行こう。さっ命を賭はつたぜ」

「ご、ごめんなさい。……だ、旦那」

追剥おいはぎはヘタツと露の中に坐ってしまった。そして腹を抱えて笑いやまない李達の姿を仰いで、米ツキ蝗ばったみたにお粗末な手をあわせた。

十 妖氣、草簪の女のこと。怪風、盲母の姿を呑み去ること

「野郎。——よくもおれの名を騙って、しかもおれの故郷で、追剥ぎなどしていやがったな。さあ、偽名代を支払え、真物のおれ様へ」

李達は言いながら男の二挺斧の一挺を取って、あわやその細首を打ち落しそうにした。

男は哀号して命乞いの必死をみせた。泣いていうには、ことし九十になる老母がおり、老母を養うための出来心であったと口説く。そして追剥ぎをするほどな力や度胸がなくても、「黒旋風李達」とさえいって脅かせば、みな金や持ち物をすてて逃げ出すので、つい面白半分にもご高名をつかって、母子二人の露命をつないでいたもので——と平蜘蛛のようにあやまりぬくのであった。

「ふうむ、おふくろがいるのか」

李達はたじろいだ。自分も多年の不孝が詫びられ、故郷の母をひき取るために、梁山泊の仲間からひまをもらって、この故郷へ帰って来た途である。かたがた、自分の名が売られていればこそ、自分の偽者も出るのだったと考え直すと、こいつも一個の愛嬌者と堪忍されて来たことらしい。やがて彼は、銀十両を男の鼻面へ投げやって、

「やい、これをくれてやるから、とツとと失せろ。正業について、おふくろを大事にしろよ。こんど悪さを見つけたら命はねえぞ」

「えっ、これを。オオ大人、ご恩は一生忘れません」

「何ッてやんで。おらあ、大人なんていうお人柄じゃねえ。おう、だが一応名だけ聞いておこうぜ。てめえの名は」

「李鬼と申しますんで。へい」

「ほんとかい。苗字から名まで似ていやがる。ま、それも同郷人なら仕方がねえや」

午後の道もまだ山だった。李達は七月の山路に歩きつかれた。酒はさめ、喉は渴く。考えてみると、前夜、朱富の店でも、酒ばかりで飯はたべていなかった。

「オヤ、小粋な女がいやがるぜ」

山の一軒家だが、酒の旗が立っている。女はざっかけ結びの髪に、草の花を挿し、李達を見ると、その朱い唇が笑った。

「姐さん、酒はあるかい」

「おあいにくさま」

「ひどく素気ねえな。じゃあ飯を炊いてくれ。飯の菜ぐらいあるだろう」

「お客さん、待ってくれるかね」

「よかろう。一ト昼寝、涼んでいる」

小屋の横へ縁台を持ち出して、李達はいつか蝉の声にくるまれてト口としていた。もしこのとき、梢の栗鼠か何かが彼の顔へ胡桃の実を落さなかつたら、彼の命はどうなっていたかわからない。

何しても、彼はふと小用をたしに立って行った。それで気づいたことなのである。すぐ裏の台所口の外で、ひそひそ囁きあっている男女があり、女は草簪の先刻の女であるのはいいが、男の方にハツとしたのだ。今朝、峠で、おっ放して

やったあの李鬼にまちがいなした。

「……そうかえ、まあ、危なかったわねえ！」

と、女は山猫のような眸をくるっとさせて、そして仰山に、あとの声はしばらく唾呑んでいる。

「じゃあ、本物の李逵が帰って来たんだね。あの黒旋風がさ」

「そうだよ、驚いたの何のツて。だけど口から出まかせに、ありもしねえおふくろを称って、哀れッぱく持ちかけたら、馬鹿な野郎さ、何とおれに十両くれて行っちまやがった。あははは」

「しっ……。その李逵に違いないのが、飯を炊いてくれといつて、さっきから店の横で昼寝して待ってるんだよ。静かにしないと」

「えっ、奴がここへ来てたのか。そいつあたひへんだ。ど、どうしよう」

「なにさ、男のくせに、いっそ、ちようどいいじゃないか。飯のおかずへ、しびれ薬をしのばせて眠らせてしまえば、いくら黒旋風だって」

「ア、なるほど。金はまだたんまりふところに持っているふうだった。そいつと、身ぐるみの物を合わせれば、おれたち二人が里へ出て小商いをやる資本にはなるツてもものだ。しめた、こいつア運が向いて来たのかもしれないぞ」

ここまで物蔭で聞いていた李逵は、もすこしいわせておく我慢もできず、ついそこから躍り出してこう呶鳴った。

「やい。なにがそんなにありがたい？」

「あっ」

女は、崖の下へ逃げころんでゆき、飛鳥もおろか、すぐ谷

川のすそへ見えなくなってしまうが、李逵は、あきらめた風である。——といつても、その血刀は、雫をたらし、李鬼の首は、胴体から五尺も先に飛んで、ころがっていた。

「ふざけやがって」

李逵は、大きな魔の息に変わっている。家の中へ入って、二つの行李をひっくり返し、目ぼしい物をふところへねじ込んだあげく、ちようど炊きあがった釜の飯までたいらげて悠々とそこを立ち去って出たのである。そして、その血ぐさい身なりが、西の麓へぶらぶら降りて行った頃、彼の貧しい生れ故郷百丈村にも、はや遠方此方、幾つもの小さい灯が、ぼやっと、霧の宵闇のうちに滲んでいた。

「ああ、昔のまんまだ。貧乏もそのまんまだ」

李逵は、生れた家の前に佇んだ。赤土の泥小屋、石の破れ囲い、屋根を越すひよろ長い松、何一つ変っていない。

「……おっ母あ」

彼の声は、土間の一隅に糸車をすえて、他念なく、糸を紡いでいた老母の耳を怪しませた。

老母は、まったくの盲である。

だから日が暮れたのも知らず、糸箆や糸車の手元に、灯を必要ともしなかった。

「おっ母あ。どこかね、おっ母あ」

「おや。……誰かい？」

「おらだよ」

「そ、そのお声は」

「李逵だわな！ 鉄牛がいま、帰えって来たんだわな！」

「ひえッ、せがれだか」

「あ、あぶねえ」

あわてて李達は抱きとめた。小ッこい老母のからだは、もう彼の体にしがみついて、ただぶるぶるふるえているのである。

「わ、われはまあ、何年も何年も、いつたい、どこに何してただだよ。ええもう、生きたやら死んだやらさえ、日頃には……」

「ま。……ま、おつ母あ、おちついてくれ。ほんとにすまねえ、勘弁してくらっせ。だがの、こんどは、一生一ぺん、おつ母あにも、なんとか、安心して貰おうと思つて、わざわざ、遠くから迎えに来たんだ」

「ほ。遠くから、わたしを連れに？ ……それやいつたい、どこぞいな？」

「梁山泊りやうざんぱくといつて。いや、違つた、そ、その梁山泊のある山東さんとうという地方へ、じつアこんど、おらあ役人になつて行くわけさ」

「ほんとけ？」

「ほんとだとも。そこで、おつ母あにも、こんどこそ、そばにいて一生安楽にしてやれよう。さ、おれの背なかへ負おンぶしなせえ。どこか本街道まで出たら、車を一丁買つておつ母あを載せ、おらが自分で押して行く」

「あれま、そんなに急なのかえ。でも、われの兄がもどつてから、とつくり話し合わざ、悪かろうに」

「兄きか。ま、兄きには途中で手紙を出すからそれでいいやな。何しろこつちは急ぐ体だ」

ところへちやうど、外から、兄の李達りたつが歸つて来た。李達は李達りたつとちがつて、根ツからの正直者。十年このかた、音信不通の弟だが、江州奉行所からはこの原籍地へ、お尋ね者おひもとの手が廻まわっているし、近ごろ梁山泊の仲間へ入つたという風聞もとうに聞いて知つていた。

「なんじゃと？ 野郎がおふくろを連れに歸つてきたつて。とんでもねえこつたわ。何で極道ごくどう野郎にそんな殊勝じゆせうな料簡りょうけんが」  
「まあ兄さん、極道極道と頭ごなしに言いなさるが、おれだつて人間の子だ。親を思い出すことだつてあらあな」  
「いかねえ、いかねえ。餓鬼がきの頃からおふくろ泣かせのわれが、急に生れ變つたような親思いになるものか」

「嘘だと思ふなら兄さん、おめえもいっそ一緒に梁山泊へ行つて、おらやおふくろとともに、山で暮しなすつたらどんなものだね」

「この悪玉め。この兄までを、悪党仲間へ引き込むつもりでいるのか。おお、お尋ね者を届け出なかつたら、後日、村の衆までみんな罪に問われよう。たとえ弟野郎でも、このままにはしておけぬ。おふくろつ、李達を逃がしなさんな」

「いやいな、兄の李達は、外へ走り出して行つた。日頃、雇われている地主屋敷へわけを告げて、莊家そうかの若者大勢を引きつれ、再び、わが家へ引返して来たのであつた。

ところが、すでに老母の姿も李達の影も家には見えない。そして銀子ぎんす五十兩が、詫わびるように、仏壇ぶつだんにおいてあつた。これには李達も心を打たれ、さては弟もほんとに前非を悔いて来たものとみえる。このぶんでは老母を托しても心配あるまい。——そう思い直したとみえて、

「みなさん、せっかくお助太刀を願いましたが、弟野郎は、逸早く風を食らって、ごらんのように、もうここにおりません。なにしろ素早い奴ですから、きつと、他県へ高飛びしてしまったんでしよう。いまましいが、今夜のところは、ひとまずおひき取りなすって」

と、一同へ詫び、一同もまたげひなく、やがてぞろぞろ帰ってしまった。

——げにや、一方の李達は、その跳ぶこと、まさに飛獣のようだった。背に老母を負い、星影青い夜を衝いて、またたくまに、隣県との山ざかい、沂嶺のいただきへかかっていた。

「せがれや。……せがれよ」

「どうした？ おっかあ」

「く、くるしい。もう、そう馳けんでくれい」

「おう、わるかったな。おれでさえへトへトなもの。だが山向うへ越えれば人家もある。人里へ出たら、美味い飯やら汁もたんと食わせて上げるでな」

「水がのみたい。……せがれや、のどが渴いて渴いて。飯よりは、水がほしいだ、水をよ」

「水か」

彼もまた、火みたいに、喉の渴びを覚えていたところである。さっそく大きな平たい青石の上へ、背の老母を下ろして言った。

「おっ母あ、ちよつくら谷へ降りて、竹筒へ水を汲んでくるが、ここから一步も這い出しなさんなよ。目の見えねえおっかあを、独りぼつちでおいとくのは心配だが、いいかね」

「ああいいよ。……李達や、ちよつとおまえの手を握らせて

おくれよ」

「なんだい、あらたまつて」

「どうして、わりやあ、そんな優しい子になったんだか。わしや、うれしゅうて」

「よせやい、おっかあ。人が見てねえからいいけれど、こんな出来ない倅の手を取って拜むやつがあるものか。……泣くなんて、縁起でもねえ。……じゃあここを動かず待つてなせえよ」

星明りをたよりに、彼は谷川の水音を心あてに降りて行った。谷底は地殻の割れ目みたいな乱岩大石の状をなし、走り流れる奔湍の凄さは、たちまち、夏を忘れさせる。

一石につかまって身を逆しまにし、彼はまず、がぼ……と心ゆくまでその谷水を飲んでから、

「ああ、美味え。氷のようだ」

と、腰の竹筒へも汲み入れた。そしてもとの絶壁を、鳶に攀じ、岩にすがり、一步一步登りつめて、以前の青石のところへ戻つて来てみると、はて、どうしたのか？ 老母の破れ沓と杖はあったが、老母の姿はどこにも見えないではないか。またさらに、呼べど叫べど、飢ばかりで母親のこたえはない。

「や、や、や。血がこぼれている？」

李達は総毛立った。泣きそうになった。

「おっかあ。……おっかあ！」

血しおのあとを辿って、くるくる、地面をあるき巡った。どこまでも、その血まなこを、さまよいつづけた。

するうちに、大きな洞穴があった。前に草原をひかえた台

地の蔭である。見ると二匹の虎の子が、人間の片足をしゃぶっていた。猫がまたたびを持ったようにジャレ戯れながら舐り食らっている様子なのだ。——李達は怒りに燃えた。——畜生っ、畜生っ、おれのおふくろをあんな啖ってしまやがった！——。一躍、彼は野太刀の下に、その一匹を叩き斬り、次の一匹を、洞穴の奥まで追いつめて突き刺した。しかし、そこで怨みは癒えもしない。彼は慟哭し、なお、おふくろを呼びつつ、もがき泣いていた。

——と、洞穴の外で異様な唸り声が出た。わが棲家のうちの怪しき気ぶりに鏡のような眼を研ぎすまして帰って来た小虎の親の牝だった。

「うぬ、おらのおつかあを、初めに、餌食の爪にかけたのは、この牝親だな」

李達が息をつめてみると、やがてのこと、牝は要心ぶかく、まずその尻ツ尾で洞壁を一ト払いしてから、徐々と後ろさがりに、奥へ蹙りこんできた。——脇差を抜き、狙いすましていた彼の一閃はとたんに、大虎の肛門をグサと鏑元まで突き刺していた。せつな、ウオオツという吼え声とともに、牝の巨体は、その臍腑の中に短刀を入れたまま、ころげ出て草原をまろび、彼方の林へザツと躍り込んだ。それを逃がさじと、李達は追ッかけ、林の全体も揺りうごくかと思われた。するとその時、

「あつ、べつな虎だ。また一匹出て来たぞ」

李達は身を反らした。こんどこそは、彼もその身構えをかくせざるをえなかったらしい。一陣の風に、牙を剥いて、新たに出て来たのは、額の白い巨大な雄の虎であった。李達

がじぶんの老母を啖い殺された怒りをそのままこの雄虎も、人間の残虐を怒っていた。一吼一震、うらむが如く、カツと赤い口を裂いて、その復讐に挑んでくる。

「くそっ」

一刀、虎のどこかを搏ったが、その虎尾は、李達の体を、はるかへ叩き飛ばしていた。虎は彼の上へ、腹を見せて、すぐ躍ってくる。山が鳴り谷が吼え、黒風、飛葉、つむじとなって、一瞬は何もかも目になど全くとまらない。

しばらくして、李達はわれに返った。雄虎は朱になつてすぐそばに仆れている。自分も五体のどこかを咬み破られたかと思つたが、どうやら立てる。いや歩いてみると歩けもした。……とはいえ、節々の痛さ、綿のような疲れ、野太刀を杖に、それからの彼は、まるで亡霊が歩いている姿に異ならない。そしてどこをどう歩いたやらの覚えもなかったが、夜の白々明け頃、

「ひゃっ？ 旅の者、どうしたぞい、その姿は。そしてどこから来なすつた？」

と、四、五人連れの獵師に驚かれて、彼自身もはつと自分に返った心地であった。

「お……。ここは麓の降り道か。じつアな土地の衆、ゆうべ沂嶺の上で、連れていたおらの大事なおふくろを、虎に啖い殺されてしまつてさ」

「げえっ、沂嶺を越えて来たつて。それじゃあ、啖い殺されねえ方が不思議なくらいだ。沂嶺の虎といたら、泣く子も黙るによ」

「そいつを、牝雄二匹、子を二匹、叩き殺して降りて来た」と

ころだ。おふくろ様のかたきを打って」

「やいやいや、黙って聞いていりゃあ、ほらもいい加減に吹くがいいや。むかしの李存孝や子路だつて、たった一匹の大虎を退治してさえ、一世にその名が売れたんじゃねえかよ。なんで四匹の虎を……。あはははは。この旅人は気が変らしい。気狂いだんべ」

「勝手にしやがれ。嘘だと思ふなら、嶺の上にある泗州大聖の祠からひがしの、林や洞穴の近所をよく見て来てから物をいえ」

李逵は腹が立った。腹立ちっぽくなっていた。老母を亡い、五体に虎の生血を浴び、妙に、虚脱と空腹の中間にあつたのだらう。閑っているのも馬鹿馬鹿しくなり、蹠跟として、なお、麓道を降りつつづけていた。

ところが、麓の村を見た頃である。さっきの獵師たちに、なお里人数名を加えた一団が、

「おうい、旅の人、旅の人」

と、彼を追っかけて来、たちまち、彼を前後から敬い奉つて、なんとしても離れもしない。——のみならず、やがてそのあとからは、李逵が退治した虎四匹を、縄からげにして、村人三十人ほどが、神輿のように肩架に担ぎ、

「さあ、大変だわ大変だわ。沂嶺の虎を四匹、しかも、たった一人でこの通り退治した豪傑が、この村を通らっしゃるぞ。曹の大胆那のおやしきへもすぐ知らせておけ」

と、触れて通った。

村の曹閑人というのは、ひどく因業で欲張り者という評判で有名な小長者だが、これを聞くと、自身、門を開いて、

「豪傑。どうぞまあ、ご休息でも」

と、彼をわが家へ請じ入れ、そして李逵から夜来のいきさを聞くにおよび、いよいよ舌を巻いたことだった。そこで日頃はケチで因業な曹旦那も、これはよッぽど大したお方に相違ないと、庭園に酒食を出して、李逵から獵師たちまでを家人一同でねぎらった。

「ところで、大人、あなたさまのご尊名は？」

「おれかね。おらあ豪傑だの大人なんていわれるような者じやねえよ。……むむ、名はあるさ。姓は張、名は大胆」

「へえ、張大胆と仰っしゃいますか。なるほど名は体を現わすとか」

こんなうちにも、曹の屋敷の外は黒山の人だかりだった。虎見物にと押しかけてきた村々の老幼男女は家人の制止もきかばこそ、内門の牆の辺まで混み入って来て。「あれだあれだ。沂嶺の大虎二匹、子虎二匹」「なるほど凄いいもんだぞ」「いや凄いいのは、ただ一人で四匹の虎を退治なすつた人間の方だよ」「その人間様は、どこにいるだか」「あのお方らしいて。あれあれ、曹旦那のそばでお酒を呑んでいる。あの色の黒い豪傑がそのお人じゃげな」などと、いやもうまるでお祭り以上な弥次馬騒ぎ。

と、その中に交じっていたのが、かの草簪を挿した李鬼の情婦であった。つい昨日、山の居酒屋で見たばかりの顔だし、自分の情夫を殺されたあげく、行李の底の物まで盗まれた恨みも深い。その李逵の姿であったから、

「あっ、あいつだ」

と、一ト目見るやいな、すぐ名主の所へ密告に走った。驚

いたのは村名主で、かねて布令の廻っている江州荒らしの大逆人で首に三千貫の賞金が懸かっている梁山泊の黒旋風が、村に現われたとあっては一刻も捨てておけない。

すぐ使いをやって、曹旦那を呼び、かくかくと耳打ちすると、曹もまた仰天して、

「えっ？ ではあれが、お尋ね者の黒旋風だったのか。そいつはたいへんだ。もし暴れだされたら一大事」

と、ふるえあがったが、しかし官へ突き出せば、三千貫の賞金にありつける。名主と山分けにしてもこれはまた大金儲けと、この因業旦那はたちどころに慾心の炎にもなった。

諺にも「芥子は針の穴にも入る」とか。はしなくも草簪

の女の眼から事は重大になって行った。沂水県の県役署では、その日、村名主の密訴に接して、ただならぬ動きを俄に見せだしている。知事はただちに、捕手頭の李雲を呼び出し、屈強な兵三十人を附して、

「犯人は四匹の虎と戦って、ひどく疲れているそうだが、それにせよ音に聞えた黒旋風であるぞ。衆を恃んで不覚をとるな」

と、すぐさま沂嶺の麓村へ急派を命じた。

「なんの抜かッてよいものでしょう。かく申す青眼虎がまいるからには」

と、李雲は馬にまたがって先頭に立ち、沂嶺の近道を抜けて急ぎに急いだ。——この青眼虎の李雲という人物は、あだ名の如く、碧眼で羅馬鼻の若い西蕃人である。従って、ひげは赤く、四肢長やかで、しかも西蕃流撃剣の達人として沂州では評判な男であった。

## 十一 虎退治の男、トラになること。

ならびに官馬八頭が紛失する事

いまや李逵はすっかり宋江との約束も忘れていた。梁山泊を立つさい、あれほどかたく、道中では一切酒を禁じ、杯を持たぬと誓って出てきたのに、持ったが病か、性来の単純さか、酒を見たがさいご、何ともはや、自分で自分の処理がつかない。

加うるに、曹旦那の胸には一物のあることなので、あれからもなお「豪傑豪傑」と、一家あげての歓待だった。虎の血だらけな衣服もかえられ、席を曹家の客楼に移して、灯を新たに、宵からまた飲みだしたのだから、もう幾箇の酒瓶を空にしたやらわからない。

「どうぞ豪傑、幾日でもご滞在なすって。そのうちに、虎の皮を剥がせ、お土産として呈上いたしたいと存じます。また県役署からも、往來の害を除いたかどで、いずれご褒美のお沙汰もあるうと存じますので」

世辞も過ぎては何とやらだ。曹旦那の口から、うっかり「県役署」の一語が出ると、さすが大酔の李逵もギクとした容子であった。

「な、なんの沙汰だって。県役署。そんなところのご褒美などは要らねえよ。虎の皮も欲しい奴にくれてやらあ。よかつたらお前さんの禪にでもするがいいや」

「ありがたい存じます。ま、今夜はだいたいぶお疲れでもございましょうから、ひとまずどうぞご寢所の方へ」

「ど、どっちだい？ …… いったい、おれの寝るところはいやに、だだッ広い屋敷だな」

「は。ただ今、ご案内させます。おいおい何をウロウロしている。豪傑のお手をとってあげないか。おっとあぶない…。お足もとをよく気をつけて上げなさいよ」

曹旦那も自身、中廊下の角まで、世話を焼き焼きついて来たが、そこから奥は召使いたちの手にまかせ、あとはただ見送っていた。するうちに、李逵の姿は、大勢の影に囲まれて、一室の内へころげ入った。——いや内へ突きとばされたのだ。——そしてその扉が外からすばやく閉められた途端である。どすんっ！ と異様な物音が響き、つづいて、ず、ず、ずしんっ…と不気味な震動が一瞬、床下から家の中を揺すり渡った。

「よしっ。うまくいったな」

曹旦那は、ほくそ笑みをたたえて、自分の部屋へ引っ返した。そこには宵の頃から、村名主と李鬼の情婦が連れ立って、首尾いかにと待ちぬいていたのである。

まもなく門前には、捕手頭の李雲の人数がどやどや到着した気配らしい。三人はさっそく首を揃えて、李雲を出迎え、「これはこれは、ご苦労さまに存じます。お訴え申し上げたお尋ね者の黒旋風は、大酒を食らわせたうえ、寝所へ引き入れ、一室に仕かけておいた床板落しの陥し穴へぶち落しておきましたゆえ、どうぞ、官のお手にてお召捕りをねがいまする」

と、申し出た。

「どこだ？ その部屋は」と、李雲は先に立って、奥へすす

み、兵を指揮して、床下穴へ喚きかからせ、まだ酔の醒め果てていない黒旋風李逵の体を、高手小手にふん縛らせた。そして、生ける大虎を捌めるような大騒動の下に、やっと外まで曳きずり出した。

すでに夜は白みかけており、村中はまたぞろ、昨日にまさる噪ぎである。そんな中を、李雲の捕手隊は、縄付きの李逵と証人の曹旦那、名主、草簪の女などを引立てて、意気揚々、沂嶺越えの向うにある県城の町へひきあげて行った。

一方、この噂は狭い田舎町のことなので、たちまち一般にひろがっていた。わけて西門外で流行っている朱富の飲屋にこれが聞えていないはずはない。前夜もう、客の口からこの事を知った朱富は、奥に隠れている兄の朱貴に諮って「どうしたものか？」と、まったく顔色も失っていた。

「弟、なんとも、おめえには、飛んだ飛ばしツちりを食わせたが」と、朱貴も今となつては慰めることばもなく、

「こうなつちゃ、気のどくだが、ここの店をたたんで、女房子ぐるみ、おめえも梁山泊へ行つて、暮らして貰うほかあるめえ。やがてここへも江州奉行所の差紙が来るにきまつてるし」

「兄き。そいつは覚悟だが、兄きの立場としても、みすみす、李逵がお縄にかかったのを見ちゃ、このまま、山寨へは帰られまいが」

「さ。それで俺もどうしたものかと、まったく思案投げ首だ。こんな弱ったことあねえ。いまさら言っても追いつかねえが、返す返す、あの酒好きの黒ン坊野郎（李逵をさす）を、たった一晩でも、目を離したのが俺の落度だ」

「いつそ兄き、こういう手だではどうでしょう。どっちみち、店をたたんで土地を売るなら五十歩百歩だ。すこし荒ッぽいが、ぜひもねえ」

「というの？」

「さいわい、捕手頭の李雲さんは、日ごろ店のお客だし、それとまた、あたしにとっては、剣術の師匠なんです。その人を騙すッてえのは辛いけれど、平常、青眼虎とあだ名のある李雲さんも、官途の者にはよく思われず、とかくいまの腐れ役人や宋朝の悪政には、鬱勃たる不満を抱いているお人なんです」

「うむ、そいつはすこし、都合がいいな」

「ですから、一時は李雲さんを陥し入れても、後ではかえって、よろこばれるかもしれません。……とまあ、こっちの腹をきめといて、さて、こういう計略に出て、そいつが巧く中ればしめたもんですがね」

朱富は酒店の一亭主だが、稼業柄、日常よく人間に接して、世間や人間の機微本質によく通じているせいとか、どうして、なかなか才気だった。彼が朱貴へささやいた窮余の一策とは、果たしてどんな計略であったかは後として、とにかく、店を閉めたその晩の遅くから人知れぬまに、ここでは俄な夜逃げ支度が始まっている。

すなわち、店の若い者を督して、朱富は、自分の女房や子供らを一台の箱馬車に乗せ、また家財手廻り一切を、その馬車や手押し車に積みこんで、夜の明けぬまに、町端れの森の辻まで送り出していた。

こうして、翌日となるや、飲屋の店はまた、平日通りに店

を開け、入口を掃き清めて、西門外の賑わいの中に、さりげないお愛相ぶりを一ばい明るく、午下がりの陽ざしを待ちすましていたのである。隣り近所、多少、変な物音も明け方に知ってはいたが、まさか、梁山泊への引越しとは、だれも気づいてはいなかった。

「黒旋風が捕まったとよ」

「うそをつけ、沂嶺の虎の間違いだらう」

「うんにゃ、四匹の虎を退治したあげく、こんどは自分が虎になって、あの因業旦那の曹に密告され、たったいま、県役署へ曳かれて行った」

町は七月の猛暑。その乾いた町は一日中、こんな噂で、わんわんと沸いていた。

ところが、たそがれ早めに、当の李達達の証人たちは、再び県城の門から街道へ列をなして曳かれて来た。早くも刑場で処刑になるのかと、早合点な声もあったが、そうではなく、江州府送りの船積みとなるらしく、江岸に繋いである一船の船牢へ移されることになったのだった。

「もし、もし。李雲先生」

いましも列の先頭が、西門外の辻へかかった時である。飲屋の亭主朱富が、飛び出して来て、李雲の馬の前に腰をかがめた。

「どうもこのお暑いのに、ご苦労さまでございますね。沂嶺の往来を悩ました虎族は退治されるし、あげくに、お尋ね者の黒旋風をお召捕りくださって、町のものにとっちゃ、こんなありがたいことはございません。祭りをやって、お祝いし

てもいいほどでございますよ。ま、どうぞ店さきじやござい  
ますが、冷やッこい酒を一杯おやりなすって、ちよっくらご  
休息でもどうぞ」

「いやいや朱富、気もちはありがたいが、明るいうちに大事  
な極悪人を船牢まで移し終ってしまわんことには、何せい肩  
の荷が下りんでな」

「ま、そう仰っしゃらないで。せっかく、町の衆に代って、  
およろこびのため、あれに朝から冷やしておいた酒瓶を、も  
う口まで切って、お待ち申しておりましたので」

「せっかくだが、役儀柄、その志もいまは困る。帰りに寄ろ  
う。さあ、歩け歩け」

李雲は列を振向いたが、意地の汚い兵や獄卒たちは、酒の匂  
いに吹きくるまれて、もうテコでも動きたがらない。のみな  
らず、店の若い者に唆されたか、一端の列をくずして、物  
蔭に隠れ、素早いところをと、酒の碗をあばき合っている一ト  
群れさえある。

「ち……。しようのねえ奴どもだな」

李雲もついに馬を降りた。このまま行き過ぎては一部の兵  
へは不公平になる。飲み食いの恨みでは、あとあと、いつま  
で深刻な根をもって、意趣を上役にふくむなどの例は決して  
少なくない。そのためには、李雲もまた彼らとともに、飲ん  
でやらねばならなかった。

「いかがです、先生、もうお一杯」

特に、彼への杯には、朱富自身が、酌をしていた。――ほ  
か数十人の兵ときては、酌の面倒や愛相はいらぬ。蜜へた  
かった蠅のような黒さである。一杯でもよけいに飲もうと、

仲間喧嘩さえ起りかねない噪ぎであった。

すると、その間、路傍の槐の木に縛りつけられていた李達  
が、悲しげな声で叫んだ。

「やいやい捕手。後生だから、俺にも一杯のませてくれ。こ  
うしているから、この口へ、一杯流し込んでくれ」

それは朱富の方へ言ったのだった。朱貴は見えないが、朱  
富がいる以上、何らかの計で、自分を助けてくれるつもりだ  
ろうと、暗に、反語をわめいてみたのである。

「ふざけるなッ極悪人め。飲みたければ、てめえにはあとで、溝  
の子子でも飲ましてやるから静かにしていろ」

朱富はわざと罵声を投げた。それを聞くと、兵どもはゲラ  
ゲラ笑って、口々の呶罵を着にまた飲んだ。李雲が、列へも  
どれ、と命じてもなかなか酒瓶の周りを離れようとはしない。

するうちに、一人の兵が「あッ、野郎っ」と街路樹の蔭で  
絶叫した。いや、とたんに仆れていた。振り向いた大勢の眼  
もすべて一瞬——あっ?——といっただけで、あとは異様な静寂  
がみなぎり渡っていた。——なぜなら、李達のそばへ寄って  
行った一人の男が、彼の縄目を解き、その手へ野太刀をわた  
していたのである。これは猛虎の檻を開けてやったようなも  
の。さらにはまた、野太刀を抜いた猛虎も、男とともに、の  
っそり、のっそりこっちへ歩き出している。

「朱富。行こうか」

李達の縄を解いた男は、朱貴であった。弟の朱富は、ふふ  
んと、辺りの顔から顔をあざ笑って、尻目にくれながら、

「おお、出かけよう。——が、待ちなよ、李達」

「え。なんです」

「どうだ、まだ酒瓶の酒が余っているぜ。一杯ひっかけて行かねえか」

「とんでもねえ、そんな麻薬の入っているやつは、いくら俺でもまっ平ご免だ」

なるほど、すでにその麻薬の効き目だったのか。店の内や外、満地の兵たちはことごとく、ぶっ坐ったり横になったり、また或る者は、口から泡吹くをふいて、ただすこし手や足ばかりを海鼠のようにもがき合っているだけだった。

「ちッ……畜生。……謀ったな。や、やられたか」

ただ一人、こう叫んでは、起ちつ、また、こけまろびつ、必死に、あとを追おうとしていたのは、捕手頭の李雲一人だけだった。しかしすでに黄昏れそめた町の灯をかすめて、李達、朱貴、朱富、若い者一群の姿ははや遠くのものになっていた。

町もここから先は一望の野原でしかない追分に、一ト叢の暗い夏木立の木蔭がある。そこに今朝から、家財を積んだ数輛の手押し車と、朱富の家族を乗せた箱馬車とが、心ぼそげに、待ち暮れていた。

「さあ、もう大丈夫だ。もう逃げるばかりだぞ」

朱富は飛んで来て、車上の女子らをそう励ましながら、「ところで、手押し車などは、打捨ッて行け。目ぼしい物だけ箱馬車の方へ移して、無二無三、馬の尻をしッぱだき、ここから山東の方へ、車輪が壊れるまで急いで馳ける。おれたちは、追手を要心しながら、すぐ後からつづいて行く」

「合点です」

朱富の店の若い者は、言下に、馭者台や馬車の尻へ飛び乗って、ムチを振鳴らし、またたくまに、野中の街道を、遠くへ没し去ってしまう。

……じっと、見送りすましてから、李達は初めて、頭を掻いてあやまった。

「兄弟、この通りだ、かんべんしてくれ。ついまた酒の上から、とんだ心配をかけちまって」

「覚えていろよ、李達」と、朱貴はわざと、懲らしめのために脅して言った。「山寨へ帰ったら、統領はじめ、宋江先生や呉用軍師にもありのままに言いつけてやるからな」

「後生だ兄き、そいつだけは、ゆるしてくれ。あんなにまで、道中禁酒の誓いを立ててきたのに、男としての面目玉もまるつぶれだ。悪くすると山寨を破門になるかもしれねえ」

「それほど性根には分っていないながら、なんで因業旦那と有名な曹家の酒なぞ食らやがって、いい気になってしまったのか」

「よしてくれ。そんないい気なもんじゃねえよ。じつあ、せっかく連れに来たおふくろを、沂嶺の上で、虎に啖われてしまつてよ、それからのやけのやん八、四匹の虎を叩つ殺した勢いで、ついまた大酒を飲った始末さ。……むむ、それにつけ、いまいまいしいのは因業野郎の曹つて奴だ。兄き、ちよっくら引っ返して、あいつの首を引ん捻じって来るからここで待っていてくれ」

「いや、おれも行く——」と、朱富もまた後ろを振り向いて「おれにとつては、師匠にあたる李雲さんを、あのままには捨ておけねえ。いや、李雲先生の酒だけには、しびれ薬を軽く入れておいたから、今頃はもう麻薬も醒めて、これへ追

っかけて来る途中だろうぜ」

「そうか。もし李逵とぶつかって、間違いを起しては大変だ。それでは俺も」と、朱貴までが、二人とともに元の道へ一目散に引返した。

果たせるかな、途中、彼方の闇から韋馱天の如く走って来た者がある。それなん、青眼虎李雲であった。

「おのれ、曲者。よくも最前は」

と、李雲はたちどころに長剣を抜き払って立ちむかって来たが、

「待った！ お師匠。これには深い事情のあること。まあお腹もたちましようが」

と、朱富は彼の前に身を投げ伏せてまず詫びた。そして縷々と、李逵の帰郷のいきさつを語り、また朱貴が梁山泊の命で彼の付人として付いて来たことから、李逵の孝心もむなしく、老母を亡くしてしまった恨みなど、逐一を物語って。

「師匠、そんなわけで、ここはどうしても、李逵を助けて山寨へ帰らねば、兄の朱貴も一分が相立ちません。そのため、恩人のあなたまで、苦計の毒酒を飲ませたりしましたが、でもあなたのお杯へは、麻薬もほんの少ししか、入れておかなかった次第です。いわば心ならずものこと。どうかひとつお忝えなすって」

「ふふむ……」と、李雲はうめいた。「……そんなわけか」と、いまは逮捕に出る気力も、満面の怒りも、俄にすうっと体から抜けてしまった感を自身どうしようもない態だった。

「したが弱った！ おまえらを見逃してやれば、この李雲も同類とみなされる！ 拙者は皇城へ帰ることもできぬ」

「ごもっともです。ですが師匠、幸いにと申しては勝手ですが、あなたはまだ妻子も何もいらっしやらないお独り身でしょう」

「だから、なんだと申すのか」

「いっそのこと、手前ども三名とともに、このまま梁山泊へおいでくださいますまいか。常日頃から、いまの悪政と官人の腐敗にはあいそがつかたと、よく仰っしゃっていたあなたのこと。梁山泊の漢どもとは、かならずおはなしが合うだろうと存じます」

「しかし、山寨には名だたる晁蓋、呉用、宋江などのほか、ふた癖も三癖もあるのが大勢いるだろうに、おいそれと、この李雲を仲間へ入れてくれるだろうか」

「そりやもう、おいでくださいれば」と、朱貴もそばから助言を加えた。「——梁山泊では、双手を挙げて、一同お迎え申しますよ。まして朱富が多年お世話になった、剣術のお師匠でもあると聞けば」

とっさ、談合いはここで急転直下ときまったが、いざ行くうとなると、いつのまにか李逵の影が見あたらぬ。「はて、あいつがまた、どこへ行ったのか？」と、怪しみ合っている、そこへ疾風のごとく戻って来た李逵が、片手には曹旦那の首を掲げ、また片手には、かの草簪の女の首の黒髪を引っさげて、

「おれを苦しめた奴は、こいつとこいつだ。腹癒せにかたづけてきた。——沂嶺の虎をあわせれば都合これで六匹だ。畜生に身を啖われて、六道の辻で迷っているだろうおふくろも、これで浮かんでくれるにちげえねえ」

と凄烈な笑い顔を見せて、その両手の物を三人に示すと、李逵は切れ草鞋でも捨てるように、それを路傍の藪だたみへ抛り投げてしまった。そして。

「さ。もうこの土地に名残はねえ」

「オオ、おさらばだ。急ごうぜ」

各々、踵を回して、急ぎかけると、

「いや、ちよつと待て」

李雲はなお、辺りを見ていたが、何か耳打して、三名の先に立ち、藪の横道へ走り込んだ。その突当りには、州の牧場管理所がある。李雲は牧夫小屋の牧夫を呼び出し、八頭の駿馬を目の前に揃えさせた。そして、李逵、朱貴、朱富、自分——と四人四頭の背にまたがったうえ、

「拙者は山寨へ初めてのお目見得だ。みんなが乗った馬のほか、べつな一頭ずつを手綱で曳ッ張って行こうじゃねえか。どうだな、この手土産は」

「こいつはまたとねえ土産だが、しかし師匠、四頭もべつなのを曳ッ張って行くのは余計物じゃありませんか。第一急ぐ道中には邪魔くさい」

「いや邪魔にはならん。先に行ったという箱馬車には、朱富の若い者が幾人か付いてるだろう。すぐその若い者たちに乗せればいい」

聞いていた牧夫たちは驚いて叫びあった。

「捕手頭！ 馬は皇城の御用に持って行くんじゃないんですか」

「おおさ、われわれは、こよい万里の外へ馳け去るのだ。追ッつけ皇城の軍隊がやって来るにちがいないが、もしこれへ

来て、李雲は何処へ行ったと訊ねたら、名の如く、雲に乗って消え失せましたと告げておけ」

「だめだっ、捕手頭ッ、それじゃあ、ここの官馬はお渡しできねえ」

前へ廻って大手をひろげ、俄に立ち騒ぐ牧夫の群れを、朱貴、朱富、李逵のそれぞれは、

「なにを言やがる、邪魔だてして、蹴ころされるな」

と、鞭をふるッて、払い退けた。

どうしてこれを、遮ぎられよう。あッというますらありはしない。茫茫たる牧の平原を、東へ、ただ見る四騎、八頭の駒は、もう星の夜の彗星のごとく遠く小さくなっていた。さらにはこの四人が、その夜、またたくうちに先の箱馬車に追いついたことも間違いなからう。かくて万里の外ほどではないが、日ならずして、彼らは、山東梁山泊の江畔に行き着き、その生々たる夏の風に、初めてほッと旅焦けの顔を吹かれていたことだった。

十二 首斬り囃子、街を練る事。並びに、

七夕生れの美女、巧雲のこと

無頼の徒、さすらいの子、いわば天涯無住の集まりでも、なにか心の拠りどころは欲しいものか。

いつとはなく梁山泊の聚議庁の奥所には、星を祠った一字の廟——

天星地契

と額を打った道教まがいの祭壇ができていた。そして一味

の同志を星になぞらえ、その数だけの燈明をつらねて、なお新入り仲間を迎えることには一燈一燈の数を加えてゆくを例とし、その星数もやがてはここに、天罡星、地煞星、百八星の宿業を、地上のまたたきとして見る日も近いかながめられる。

さて、それはともかく。

「やあ李逵か。朱貴も無事に帰ったか」

山寨一同の者は、ふたりの帰泊を迎えて大いによろこび、二人もまた、旅先のいちぶしじゅうを報告したすえ、伴って来た青眼虎の李雲と、笑面虎の朱富とを、  
「どうぞ、よろしく、ご一統のお仲間内へ」と、推挙した。

もちろんこれは即決でみとめられた。いまや梁山泊が大となるにつれ、不遇不平な天下の才と俠骨を、いよいよここへ募ろうとする意志は仲間一同にも熾だったのだ。

「そうか。笑面虎は朱貴の弟。また青眼虎は、西蕃流の擊劍の師だというならなおもって頼もしい。聞けば……沂水県の沂嶺で、黒旋風(李逵)のために、四匹の虎が殺された代りに、ここへ二匹の虎がふえたわけだな」

ここに。地契廟の星燈は、また二ツの新たな灯を加え、例のごとく、新党員の紹介の盛宴もまたその廟前でおこなわれた。

ときにその席上で、軍師呉用が總統の晁蓋と、副統の宋江へ、一案の書類を見せていた。何かといえは、それは山寨の「職令」だった。

こう人材もふえ、ここも宛たる一小国となつてきては、対

官憲の備えからも、もはやただの浮浪山賊の群れ集まりではいられない。秩序も立たず守備も不安だ、ということからのかねがねな懸案だった。

すなわち。

渡口の見張り茶屋は、従来の朱貴の店のほか、三カ所をふやす。

童威、童猛の兄弟とその手下に、西口の道に店をひらかせ、おなじく李立には山の南で。また北山の口には、石勇をして新たな一店を設けさせる。

これで梁山泊四道の見張りはまず充分だろうから、次には、この宛子城そのものの大手、中木戸、内門の三壁を堅固にする案だった。運河をつくり、内濠をめぐらすなど、工事監督一切は、杜選とそして陶宗旺の任とする。

また、もっとも大事な倉庫方——金品出納の事務などは——蔣敬を部長とし、蕭讓には、通牒や文書のほうを司らせ、金大堅に兵符、印形、鑑札などの彫刻係を。さらに侯健は、旗、よろい、かぶと、兵衣、すべて足拵えまでの将士の軍装を調製する。

馬麟は、大小いくさ船の建造係。宋方は金沙灘の一寨に住む。王矮虎と鄭天寿もまた、ずっと下の鴨嘴灘へくだって、おなじく出城の一寨に就く。

錢糧の収入係には、穆春と朱富がえらばれ、呂方、郭盛のふたりは、聚議庁番。——宋江の弟宋清は酒庫の監理をかねた宴会支配人に擬せられていた。

「どうぞでしょう、こんな配置では。あとの水陸は別表にしてあります」

呉用の案に、晁蓋、宋江ともに異議はない。そしてその場で発表された。もちろん、それ以外の細かな職目もかなりあった。

かくて泊内は、いちばん強力な態勢となり、水寨では水軍の訓練、陸地では騎馬、弓、刀槍のはげみはいうもおろか、陣鼓鉄笛の響しない朝夕とては一日もないくらい。

ところが、ここにただ一人、

「はてな？ あれきり消息もないが」

と、不安視され出した仲間があった。

百日の期限をきって暇を乞い、薊州の地へ母をたずね、また老師へ会いに行くといつて去った公孫勝の一清である。

「よもや仲間を裏切ったのでもあるまいが、いまだに帰らないのはいささか不安だ。だれか探りにやってはどうか」

こんな議が持ちあがったその翌日。——遊軍の一星、神行太保の戴宗は、みんなから選ばれて、

「戴君。君ならおそらく十日もあれば、たちまち、薊州中を見てこられよう。一つ調べてくれないか」

と、その探索使にさしむけられた。

「こころえた。行って来ます！」

戴宗はただちに走った。こんな時こそ、**「神行法ノ咒」**がものをいって、梁山泊中、飛走の術ではこの人の右に出る者はない。脚には例の甲馬符を結び付け、精進潔斎、三日目にはもう沂水県の境に入り、一山の嶺を疾駆していた。

すると山坂道のすれちがいに、腰は女みたいに細く、肩は**隼**のような角張った目のするどい男が、

「あっ、神行法の戴宗？」

と、手の管槍を地に突いて振返った。風のごとく、そばをスリ抜けた戴宗だったが、ふと気になつて呼び返した。

「おーいっ、若いの、ちょっと待った。どうしておれが戴宗と分ったかね」

「あっ、ではやはりあなたは戴宗どので」

「そういう、おまえさんは？」

「彰徳府の楊林と申す者で、あだ名は錦豹子。……じつは二月ほど前に、公孫勝先生に行き会い、おまえもいつかは梁山泊へ行けど、お手紙までいただいておりますよなわけ」

「拙者のことなども聞いていたのか」

「そうです。一日八百里を走る戴院長さまも、今では山寨にいらっしやると」

「いい者に出会った。じつは云々な仔細で、その公孫先生のあとを尋ねに来たわけだ。教えてくれんか、今おいでになる処を」

「いや、行きずりの居酒屋で、お別れしてしまつたきり、さっぱり以後の消息は聞いていません。しかし、薊州管下なら隈なく地理は存じていますから、なんならご案内いたしましよ」

「たのむ。そしてまた、望みとあれば、拙者が君を梁山泊へ連れて行ってやる」

「そう願えれば大倅せです。ですが戴院長、かなしいかな、てまえは神行法の術も呪文も存じませんが」

「心配するな。拙者について、こうして行けば、自然に身も

心も軽く、一日八百里の飛走ぐらいいは何でもない」

戴宗は、彼にも呪符を持たせて、大きく腹中の気を空へぶつと吐くやいな、楊林の腕を拱んで飛走しだした。楊林は驚いた。馳けているとも、喘いでいるとも思えないのに、道も草木も急流のごとく、後ろへ後ろへと去って行く。そして肩が切る涼風、面にあたる爽気、なんとも堪らない快感だった。

山上は照り、山下は雨らしい。

そして濛々と白い蒸雲のたち繞る千山万水。大陸の道は、その中を羊腸と果てなくうねっているが、村里人煙は、それを見ぬこと、二日であった。

「戴院長。あれが有名な飲馬川です」

「おお、絶景だな」

「ひとつ訪ねてみましょうか」

「どこを」

「こんな絶景の中ですが、裴宣、鄧飛、孟康といって薊州きつての三賊長が住んでいます。昔、てまえも知っていた仲で、三人三様、みなひとかどの男ですし、それにひよっとしたら、公孫先生の消息もそこで聞けるかもしれません」

「お。どんな山寨か叩いてみよう。ひとしく緑林（盗賊仲間のこと）の者なら、同じ毛色の旅鳥がどこへ来ているかなんてことも、ちゃんと見ているかもしれぬ」

だが、この心あては、むなしく終った。その賊寨で訊いてみても、公孫勝の居処は、杳として誰ひとり知っていない。知れず仕舞いとなったのである。

しかし決して、訪ねたのは、むだではなかった。そもそも、

ここの三賊首も、地契廟の星の数に入るべき宿命であったものに違いない。これが、はからず天のひきあわせとなって、飲馬川の山寨上における一夜の盛宴から、たがいに志をかたり、身素姓を名乗り合い、ついに義を結ぶこととはなった。まず、目玉が血みたいに赤い、鄧飛から順に、こう名乗った。

「ご高名な戴院長にお目にかかり、こんなうれしいことはございませぬ。あつしは囊陽生れのやくざ者、人肉を食らったむくい、火眼の狡狴とアダ名され、分銅鎖の使い手と、自分ではウヌ惚れておりますが、そちらの兄貴二人にくらべたら、けちな野郎でございます。どうぞ兄貴の素姓をおききなすっておくんなさい」

「いや弟分から、そういわれちまうと、晴れがましくてちと後が困る。——が、有態に申します。自分は真定州の生れで、苗字は孟、名は康、あわせて孟康といい、本職は船大工で、それも大江を上下するような大船造りが得意です。……ところが、朝廷の官船奉行と気が合わず、大喧嘩の果て、緑林なかまへ落ちころび、生れつき、こう肌の白いところから、玉幡竿の孟康なんて、人から呼ばれておりますんで」

「いや、ごていねいに」

戴宗は、礼を返して、さてもう一人の頭目へ向い直った。その人たるや、一見、どこか傑出している。年配もまた、三人のうちではいちばんな年かさだった。

裴宣。またの名は、鉄面孔目。

孔目とは、裁判所づきの与力の職名である。もと京兆府の司法部に勤めていたが、公事訴訟には、いつも人民の声を正

しくきいて、少しも、よこしまないところから、逆に上司の奉行や腐敗役人からツマはじきされ、いささかな落度を大きく罪せられ、顔に金印（いれずみ）を打たれて沙門島へ流された。——いや流される途中を、ここにいた鄧飛、孟康などの輩が、義心のもとに、護送役人を斬って助け出し、わが山寨へかつぎ上げてしまったのだった。

「はははは。どうもあまり自慢にもなりませんな」

裴宣は、自嘲をふくんで、多くは語らない。

けれどそれがなおおもしろかった。すでに戴宗は連れの楊林からも聞いていた。——剣を持たせれば双手に二刀を使う達人であり、孔目の職に在った日は、曲事ぎらいの生一本で、どれほどこの人の公事扱いに救われた者があつたかわからない、と。

これは人物だ！

戴宗は惚れこんで、切に、梁山泊への入党をすすめた。周圉八百里、宛子城、蓼兒洼を中央に、それを繞る軍船、充つる兵馬、天下四方の奇材は、いまやそこに集まっていることなどを熱心にはなして誘った。

すると、裴宣は、

「いや、よく知っています。四百余州にかくれもない梁山泊のことですからな。じつをいえば、いつかこんな機縁はないかと待っていたところなんで。……烏澣な言いぶんですが、この山寨にも兵三百、財物十車、そのほか武器馬匹もかなりある。それを土産に、ぜひお仲間入りをえたいものと存じます。よろしく一つおとりなしを」

と、どこまでも謙虚であった。

戴宗はよろこんだ。そしてさて。

「これを聞けば、梁山泊の一統も、錦上さらに花を添えるものと、双手をあげて迎えるでしょう。……がいまは公孫先生をさがす旅の途中、その役目を果たしてから、帰途、もいちどここへ立寄って、ともに山東へお連れしたいと思うが、どうでしょうか」

「けっこうです。お待ちしている。だが、もう一日は」

と、裴宣は切にひきとめ、次の日はまた、飲馬川の眺望をさかなとして、断金亭の楼台で、終日、送別の杯と、また義兄弟の誼など酌み交わされた。——こうして、ここは去り、日ならずして、戴宗、楊林の二人は、薊州城内の街通りをあるいていた。

胸に小太鼓、腕には銅鑼を掛け、手にも喇叭を持って吹き、一人で三人衆の“道嚙子”をドンチャン流して来る男があつた。身装、ひと目で分る獄卒だった。

もうひとりの獄卒は処刑用の大きな“鬼頭刀”をささげている。すこし離れて、柄の長い青羅の傘を、べつな獄卒が、かつぶくのいい堂々たる男の上に翳しかけて行く。

それぞ町中で囁かれていた首斬り楊雄——またの名を病関索の楊雄ともいわれている牢役人だろう。なにしろすばらしい羽振りである。

わけて今日みたいに、人民泣かせな悪党の処刑が行われての帰り途には、町の老幼が、紅絹だの、花束だの、緞子だの、種々な祝いを感謝のしるしに首斬り役人へ投げるのだった。それを拾い拾い、持ちきれないほど肩や胸に抱えて行く獄卒

もべつにあった。

「おっと！ 首斬り役人、ちょっと待たんか」

「誰だ。おれを呼ぶのは」

「軍の張保さ。踢殺羊の張保さまだよ」

「やあ、どなたかと思つたら」

「いやな奴に会つたと言いたいような顔つきだな。この薊州の治安はおれの手で守られていながら、おれをよくいう奴は一人もねえ」

「どういたしまして。今日、処刑してきた悪党もお蔭さまで捕まったようなもんでさ。……ひとつ、そこらで御酒でも一献」  
「うんにや、酒はいらねえ。銭で百貫、用立ててくれまいか」  
「ご冗談を」

「せせら笑つたな、やいっ。てめえは元々土地者でもなく従兄弟にあたる先の奉行にくっ付いて来て、いつか今の奉行にも巧く取入っているだけのもんじゃねえか。軍のわれわれに、時折の挨拶ぐらいは当然だろ」

「てまえは、いくらでも、ご挨拶いたしたいが、なにせい、背中の一文字がいうことをききません」

「背中の？ ……背中の一文字は何だ」

「これですよ」

楊雄がくるりと後ろを見せた。

猩々緋の服の上に、もう一重草色縹子の肩ぎぬを着ていたが、その背には「劊」の一文字が大紋みたいに金糸で刺繍してあるのであった。

「どうです、とっくりお目に入りましたかね」

依然、後ろ向きのまま、楊雄は薄ら黄ばんだ特有な皮膚に

嘲侮の笑みをたたえて見せた。

——根は河南生れの俊敏なつらだましい。その眼、その唇、鬢にもつながらるばかりな長い眉、くそでもくらえといった風貌がある。

「しゃらくせえッ」

いきなり、踢殺羊の張保は、楊のからだを羽ガイ締め締めに締めあげながら、四ツ辻の蔭へ向つて大きく吼えた。

「それっ、おれがこうしているまに、たたんじまえ！」

どっと馳け寄つて来たのは張保の部下だった。初めからの計画か。獄卒たちを蹴仆し撲り仆し、彼らの持つていた祝い物をみな奪り上げ、さらにこんどは、もがいている楊雄一人へかかつて来た。

「あつ。……ひどいことをしやがる」

さっきから辻の一角に立ちどまつて、これを眺めていた戴宗と楊林は、もう見ていられず、ひとつあの悪軍人めを、懲らしてやるかと迅い眼くばせを交わしかけた。

ところが途端に、その二人の足許へ、大きな薪木の束が、どさつと、抛り投げられてきた。——見ると、ついそばにいた若い下郎風の薪木売りが、もう喧嘩の中へ割つて入り、兵隊どもを手玉にとつて投げ飛ばしている。さらには、楊雄に加勢して、ひよろ長い踢殺羊の脛、腰、所きらわず、足攻めに蹴つづけていた。

「やあ愉快なやつ。身なりは粗末だが、たいした若者だぞ」

戴宗は、わざと控えて、形勢をみていた。そして、

「不義、非道、弱い者いじめ。そんな跋扈をゆるさぬ街の鉄火の意気はまだ廃っていないなかつたな。……お悪軍人のかつ

たい棒め、とうとう、不ざまな恰好で逃げ出してしまったぞ。あつ、人斬り楊雄がこんどは追ッかけて行く。薪木売りもしよになつて」

いつかあたりの見物人も散らかつて、あとには薪木売りの薪木の束だけが残っていた。

「楊林、そいつを持って、向うの酒屋で飲んでいよう。そのうちにあの若いのが商売物を取りに返ってくるにちがいない」

案のじよう、やがて薪木売りは戻つて来た。

それを酒屋へ誘い入れて、戴宗は彼の俠氣をたたえたり、その身の上などを聞きほじりながら、心ひそかに、

これもまた頼もしそうな。と、はや一思案を抱いていた。

「そうですかい。……金陵（南京）のお生れで、そんなに諸国を歩きなすつたか。そして、馬買いの叔父御に死なれて、生業を失つたとはいえ、薪木売りとはまた、お若いのに、思いきつたものに成ンなすつたな」

「ええ、資本もありませんし、根ツからの鈍物。死に別れた叔父貴からも、今みたいいな時世に、おまえみたいいな馬鹿正直じゃあ生きてゆけねえぞツて、よくいわれていた私ですから」

「だが子供の頃から騎馬短槍には熟練なすつておいでとか。さいぜんも篤と拝見していたが、あれほどな腕前がおりなら、官途に志願しても」

「いや、そいつがですね、持ち前、いッち嫌いなんですよ」

「どうしてです」

「朝廷はでたらめ。政閣は奸臣の巢。ここら薊州あたりの安

軍人までが、あんなざまじゃございませんか。私みたいな凡くらでさえ、何クソっていう気が底にありますからね」

「同感だ。いや全くそのとおり。しかし、そうばかりでもない天地もある。たとえば山東の梁山泊とやらしい男の集まりもあるしさ」

「失礼ですが、あなた、お名前は」

「ここに連れているのは弟分の楊林。そして拙者は……苗字が戴、名は宗」

「えっ、じゃあもと江州の戴院長、あの有名な神行太保の戴宗さんは、あなたなんですか？」

「叱っ」

と戴宗は振り向いた。そのとき酒屋のかどから二十人余りの人間が、どやどやとここへ混み入りかけて来たからだった。

しかも捕手目明し態の者ばかりである。彼は慌てて銀子十両を取出して、薪木売りの手に握らせた。

「お若い、いつかまた会おう……少ないが当座のしのに」

「と、とんでもない。こんなものを」

しかし、袂をつかむ瞬間もなかった。とたんに、店の中は人間でいっぱいになり、戴宗、楊林の二人は、そのドヤドヤ紛れに、風の如く外へ出て行ってしまった。

「おお、恩人。ここにおいでなすつたか」

一ト足おくれて入つて来たのは、さいぜんの首斬り役人

病関索の楊雄だった。

「どうも思わぬお助太刀を。……お礼のことばもございません。お蔭で野郎は街中で大笑いを曝したので、ここ当分は、大きな面では歩けますまい。けれど、しがな薪木売りのお

前さんが、あの腕前たあおそれ入りました。さしつかえなければ、お名を伺わせてくれませんか」

「苗字は石、名は秀。——金陵は建康府の産で、あだ名を拵命（いのちしらす）三郎とよばれています」

「石秀さんか。これを縁に、不足でしようが、この楊雄と、義の兄弟になっておくんないませんか。……てまえは当年二十九だが」

「わたしは二十八。ではどうぞ、弟同様に」

「おい、酒屋の御亭。別間で杯だ。そして手下のやつらにも、今日はぞんぶん飲ませてやってくれ」

ところへまた、楊雄の岳父、潘の爺さんというのが、これへ馳けつけてきた。娘智の一大事と聞いて、近所合壁の加勢を仰いで飛び出して来たのだが、わけを聞いて、

「やれやれ、ほっとしたわい。ご近所の衆、まアこっちへ入って飲んでください。……いや申しおくれました。おまえ様が娘智を助けておくんないすつた石秀さんで」

「はい、よろしくどうぞ。ただいま、楊雄さんから兄弟の酒杯をいただきました石秀と申すものです」

「豪気な男ぶりだの。わしにも、智の義弟、こんなうれしいことはありませんがな」

「おじいさん。どうぞ一つ、お杯を」

「はい、はい。ところでお前さん、もとのご商売は」

「死んだ叔父貴について、つい去年まで獣いじりをしておりました」

「じゃあ、豚や羊の肉を解くことも上手なわけだの。じつはわしも元は肉屋稼業。ところが一人の智どのが、牢屋勤めの

お役人となったので、いまでは隠居しておりますのさ」

いつか、もう灯ともし頃。——まだこれからと飲んでいる連中は、あと勘定として亭主にあずけ、三人は町端れに近い楊雄の屋敷へひきあげた。酔歩まんさん。楊雄は上機嫌で、「女房、女房。出迎えないか。弟を連れて来たんだよ。弟を見ろ、おれの弟を」

「あら、……あなた」

厨房の珠すだれを掻きわけて、良人の前に、あきれ顔を見せた細腰の美人がある。三日月の眉、星のひとみ、婉然と笑みをふくんだ糸切り歯が石榴の胚子みたいに美しい。

「ホホホ。またわたしをかつぐんでしょ。まあ、たいそうなごきげんですこと」

「嘘なもんか、ほんただ。巧雲。おまえもよく面倒を見てやってくれ」

巧雲とは、この新妻の名であった。七月七日、七夕の生れという珍らしい生れ性。そのせいか天性の肌には何ともいえない潜みがただよい、ものいえば息も香ぐわしい風情がある。で、早くから艶色無双の評判がたかく、十六、前髪を剪るや剪らぬまに、薊州の押司、王に娶われたが、つい二年ほどで先立たれ、やがて楊雄に嫁してからでも、まだ一年にもなっていないかった。

十三 美僧は糸屋の若旦那あがり。法事は色界曼陀羅のこと

一方は、かの戴宗と、錦豹子の楊林。

以後、いくら歩きさがしても、ついに公孫勝の消息は知れなかった。

そこで一おう引っ返そうということになり、約束のある飲馬川へ立ち寄って、裴宣、鄧飛、孟康を誘い、偽官軍の列をなし、蜿蜒、梁山泊へむかっていたいそいだ。

いわば戴宗としては、主目的の使命には失敗したが、代りに、錚々たる新黨員四名と、三百の兵力、十車に余る財などを、みやげに連れて帰ったわけである。

賀筵に歓迎の楽に、また新たな氣勢を加えて梁山泊の山海は沸いた。しかしここにはしばらく語るべき事件もない。

話をもどって、薊州の街、楊雄の屋敷における或る日のこと。

「どうだの、石秀さん。退屈かね」

「や、潘のおじいさんですか。退屈よりも、義兄さんや義姉さんに、余りよくしていただくので、なんともはや相すまなくて」

「そんな遠慮はいらないよ。ただ、お前さんは官途の仕えは大嫌いだそうだから、そっちへはお世話もできないと、智どのがいつている」

「ええ、どうも役署づとめは向きません」

「じゃあひとつ、肉屋を開いてみたらどんなものだろ。——屋敷の裏口は袋小路、そのとっつきに一軒、手ごろな家がある。わしの隠居所とも斜向いだしさ」

「あ、あの空家ですか。そいつはぜひ働かせていただきましょう。ご恩返しに」

「とんでもない。こっちでいうことばだよ。儲けは仲よく歩合

で頒るさ。じゃあ智どのが役署から帰ったら、さっそく相談するとして」

しかし、話はもう出来たも同様。楊雄夫妻も大賛成で、日ならずして「開店大売出し」の爆竹（花火）、ちらし、慶祝の紅挑灯などが、どんちゃん、この街角をにぎわした。

よく売れる。石秀もよく働く。それに潘爺さんが、あきない馴れた肉切り職人をひとり探してきて、石秀にはもっぱら仕入れ経営の方をやらせたので、この方もとんとん拍子。

こうしてまたたく二た月ほどは過ぎ、冬ぢかい秋の頃だった。

「ちと遠い村だが、豚、羊のいい売り物が出た。三日めには帰ってくるから店をたのむぜ」

「へい、行ってらっしゃい。旦那、そのお頭巾も着物も、さすがお屋敷の若奥様のお見立てで、よくお似合いになりますぜ」

「ばか。なにあってやんで。肉切り職人は、暇があったら包丁でもよく磨いていろ。つべこべと、つまらねえ世辞などいな」

出がけに、これが気色にさわった。そんな辻占も悪かったし、仕入れ向きはおもしろくなく、ついでに隣県まで足をのばして四日目に帰ってみると、なんと、店の戸は閉まっている。

「ああやっぱり？ ……古の人はいいことをいつている。」

人に千日のいい顔なし、花に百日の紅あらしと。……無理もねえ。兄貴は欠かさず役署づとめ。家のことはお構いなしの性分だ。そこへもってきて独り身のおれが、とかくあの

きれいな義姉さんから、帯よ、頭巾よ、やれ肌着よと、あまやかされているのを知っちゃあ、近所の蔭口もそらおそろしい。そうだ、こいつを潮に身を退こう」

中へ入って、持ち金残らず精算書にして帳場におき。またべつに、ざっとした遺書一本書きのこすやいな、さつとそとへ飛び出しかけた。だが、その袂は、とたんに物蔭にいた潘の爺さんにつかまれていた。

「あっ、待たっしゃれ。勘違いしないで、ま、もいちど中へ戻って——この一兩日、ぜひなく店を閉めたわけを、とつくりと聞いておくんなされ。どうも石秀さん、あんたもまた、おそろしい短気じゃな」

わけを聞いてみれば、まったく石秀の思い過ぎで、むしろ石秀は赤面して頭を掻くのほかなかつた。

「じゃあ、おじいさん。今日はご法事があるってわけでしたか。まさか、それでとは思わなかつた」

「じつは、うちあげたおはなし。むすめの巧雲は、いちど押司の王さんにかたづいていましたのでな」

「うかがっています。そのことは」

「ちょうど今日が先夫の王さんの一周忌にあたりますのじゃ。そこで娘がたつてご法要を営みたいと言いますのでな、報恩寺のお坊さまもお招き申してありますのさ」

「それじゃあ、肉屋を閉めたのは当然だ。店の者も見えず、肉切り包丁までかたづいていたんで、さてはもう、わたしから身を退いた方が世話なしかと考えましてね」

「めっそうもない。わしはこの年で、夜はカラ意気地がないし、智どのは忙しい体、どうでもおまえさんに、法要の手伝

いやらお接待のさしずなどもして貰わにやららん」

「わかりました。何でもやりましょう」

「もうもう、ここを出るなんてことは、夢々考えないでください。わしもさびしい。智どのもまた嘆きますわい」

楊家の内では忙しい物音である。はや菩提寺からは、法事の諸道具、仏器一切が運び込まれていたから、石秀は寺男とともに、祭壇をくみため、仏像、燈明、御器、鉦、太鼓、磬、香華などをかざりたり、また台所のお齋の支度まで手伝って、頻りに、てんてこ舞っていた。

「やあ、すまんね、石秀」

「オヤ兄貴ですか。お帰んなさいまし」

「いやほんとに帰って来たんじゃない。役署の手すきにちょっと様子を見に来たまでだ」

「じゃあまた、ご出勤ですか」

「こん夜は泊り番さ。いま女房にもいっといたが、万事君にお願いするよ。法要の執事なんてしたこともあるまいがね。

はははは」

「何も経験です、どうかご心配なく」

「よろしく頼む」

主人の楊雄は、女房への義理立てみたいのに、午過ぎ、ちょっと顔を見せたが、またすぐ出かけてしまった。すると、ほとんどそれと入れちがいに、一挺の法師轎が、供僧二人をしたがえて、玄関さきの前裁へしずしずと入って来た。

潘じいさんが、慌てて迎えに立ち。

「これは、方丈さま。ようこそおせわしいなかを」

「おお、ご隠居か。いつもお変りのうて」

轎の内から立ち出でた主僧は、まだ三十そこそこか。ぷーんと、麝香松子の香が立つ剃りたての青い頭から、色の小白い唇もとすこし下がったところの愛嬌黒子など、尼かとも見紛うばかりな美僧であった。

「さ、どうぞ……、どうぞこなたへ」

「ご隠居。珍らしい物でもありませんが志ばかりです。どうぞ王押司のお供え物に」

「おおこれは、貴重な香苞やら京棗やらで……。石秀さん、さっそくご霊前へ」

「はい、はい。お茶もただいま、いいつけます」

石秀がそれを持って、奥の法要の間へ急ぎかけると、二階の階段から、花兎の刺繍の鞋に、淡紫の裳を曳いた足もとが、音もなく降りて来て。

「あら、秀さん。それいただき物なの」

「義姉さんですか。あちらへもう、ご方丈さまがお越しになつておりますよ」

「いま行くのよ」と、巧雲はどこやら容子が浮々している。法事姿なので、強い色彩や濃粧は嫌っているが、一点の臙脂は唇に濃く、ほんのりと薄化粧を刷いた白珠のおもむきが、むしろ日頃の艶姿よりはなまめかしい。

「どれ。ちよつと見せてよ、それ」

「この香苞ですか」

「まあ、いい匂い。ねえ秀さん、これきつと沈香とか梅檀とかつていうものよ。あの方丈さまは、お生れは都で大きな糸屋の若旦那だったんですとさ。だから気がきいてるわね、こ

んなおみやげ一つにしてもさ」

「世間で報恩寺の裴如海……また海閨梨ともいわれているお方ですね」

「そんなむずかしい法名なんて、わたし呼ばないわ。ただ師兄さんと呼ぶのよ。だって、うちのお父さんは、古いご門徒でしょ。だから如海兄さんが方丈さまの位置にすわるときな

んかも、ずいぶんお世話したものだしさ」

こんな立話のまも、彼女はそわそわと髻のおくれ毛や唇紅の褪せを気にして、また、つと鏡の間へ入って、身粧いを見直し、それからやつと如海の前へ出て、婉然と、あいさつしていた。

「これは」

と、裴如海は、生き仏のようにすうと椅子を立ち、いんぎんに、頭をさげる。

福州みどりの法衣、紫印金のケサ、その緋も西域唐草の凝ったもの。

——ことば少なに、あとは流し目で、

「いつも、おすこやかで」

と、ひとみに、えならぬ情気をトロと焚いてみせる。巧雲は、すぐ打解けて言った。

「いやよ師兄さん、そんなおかたいこと」

「ご主人は」

「こん夜は、宿直なので、失礼させていただきますって」

「それはそれは。じつはこんど、山内に施餓鬼堂が建ちましたので、ぜひご主人のおゆるしをえてあなたにも一度ご参詣をねがいたいとおもっていましたが」

「ええ、ぜひ伺いますわ。いまの主人、わたしの出歩きなどは、頼りないほど、ちっともお構いなしですもの。……それ母が亡くなったときも、血盆経を上げていただいたままでしょ。その願ほどこきだつてしなければなりませんしよ」

そのとき、女中が茶を運んできた。巧雲は茶碗を受けて天目台に乗せ、碗の縁を白絹で拭いた。そして、如海へささげ出すと、如海の指と女の白い指とが、碗を媒だちにして触れあった。そのあいだ、とろけるような眼にとらわれた女の眼もとは茶わんの中の茶の揺れみたいは何とも危なツかしい春情気だつた。

「……ははアん。これだな、法事の目あては」

石秀は覗いていた。

客間の窓の掛布が隙いている。ひよいと、如海がそれへ気がついて。

「や。あれは、どなた？」

巧雲もビクとした。

「ま、いやな人ね。石秀さん、おはいり。そんな所に立っていないで」

「ご家人ですか」

「ええ、主人の義弟ですの」

「そうですか。どうぞご遠慮なく。わたくしが報恩寺の住持如海でございます」

「申しおくれました」と、石秀はそれへ来て――

「金陵生れで、またの名、拚命三郎というがさつ者でございます。どうぞよろしく」

「ではお時間もせまりますから、外に待たせてある衆僧をひきつれ、改めて、ご法廷へ参じ直すといたしましょう」

如海はいちどおもてへ立ち去った。門外にはおかれて来た法要坊主が大勢時刻を待っていたのである。――ひとしきりは何の支度か、饒舌の囀りがただガヤガヤとかしましい。また何ともいえずなまぐさい。

古人も言っている。

「暴ナラズバ僧ラシクナイ。僧タラバ益々暴。暴ナラバ愈々僧ラシイ」と。

またこんな洒落た古言もある。

一字でいえば「僧」

二字でいえば「和尚」

三字でいえば「鬼楽官」

四字でいならば「色中餓鬼」だと。

なぜ色事と坊主とが古来こんなに観られているのか。といえば、金持は金持で財貨や内輪事のなやみが多く、妻妾何号の数はあるても、とかく色情海の底までは溺れきれない。また貧者では、労働のつかれ、あしたの米ビツ、また、せまい屋根の下では、病人やら子供やらで、しんそこ女房に春情をゆるし、うつつを抜かすわけにもゆかない。

しかるに坊主はどうか。

その肉体はやはり父情母血によって作られたもの。諸人とちつとも変ってはいない。そのうえ、身にきんらんを着、施主檀家のふところで三度のお齋に飢えは知らず、坐する椅子は高く、人に施すところは至って低い。住む伽藍は殿堂をしのぎ、密房の時間はあり余る。自然、あたまのうちには念々、

門外の娘、参詣の人妻、あれやこれの女、女、女、女ばかりの妄想がその有閑な肉体に住む。しかもほかに消耗のない体なので、その沸るや、女肉へ没するや、さだめし精力絶倫だろうという一般的な見方がなされやすいもせひがない。

というわけで、石秀が男女を見る目もちがっていた。そしてまた、義兄の楊雄の身にもならずにいられない。業腹が煮えてくる。面罵してやりたくなる。

「こいつはあぶねえ。おれの性分がむらむらと出て来そうだ。といって、現場をつかんだわけではなし……」

このとき、はや衆僧は、如海に引率されて、奥の法要の道場へ乗込んでいた。香煙ると磬を合図に礼拝する。そして壇には「王押司靈位」の位牌があかりにまたたいているが、この法要を何と見るやら受けるやら、と石秀は末座で見ているながら滑稽でたまらない。

献斎の礼、茶湯の供養。そして一座首十坊主がいつせいに歌詠讃揚するお経の仰々しさ。それが、おごそかなればなるほど、石秀にはくすぐったかった。——と、そのうちに施主の巧雲が、楚々と、前へすすんで香を拈じる。誠しやかなその合掌の長いこと。それと白襟あしのなまめかしいこと。たちまち、お経はみだれてきた。どの坊主の目もみな巧雲の乳だの小股のあたりを愉楽想像しているらしい。いや香よりも匂いのたかい女脂の薫がふんふんと如海和尚の打振る鈴杵もあやふやにし、法壇はただ意馬心猿の狂いを曼陀羅にしたような図になってしまった。

たそがれ、やっと終つて。

「どうも皆さま。こんにちは、ありがとうございました。さ

だめし、仏もよろこんで、成仏得度したことでございましたう」

巧雲のお礼の辞につづき、石秀、潘じいさん、召使が先に立ち、

「どうぞ、あちらのお席へ」

「ゆっくりお斎など召上がって」

と、別室のほうへみちびいて行く。

如海は、いちばんあとから、上気した青い頭に湯気を見せながら歩いてきた。すると側へ寄り添って行った女が、そつと匂う手帕を袖から渡した。

「師兄さん。お汗が……」

あたかも、舞台を下りてきた俳優と、鬚眉の女客のごとき観がある。汗にぬれた手帕を、巧雲は、さもいとしそうに、それで自分の唇をつつむ。紅蘭に似るその臉にもいっぱいな春心をいわせながらである。

お斎は一刻。やがて般若湯（酒）もすっかり廻ると、また祭壇へ出て宵のお経。また休息、またお経。明け方ちかくまでそれがつづく。

次第にお経は乱調になる。坊主もみんなへべれけなのだ。猥談猥語も出かねない。巧雲はおとりもちを人にまかせて、いつか小部屋の暗がりには如海をひきいれて口説していた。

「ねえ師兄さんてば。……おちつかないのね」

「だって、檀家先へ来て」

「あらいやだ。水くさい。わたしそんなつもりじゃありませんのよ。わからない」

「どう？ ……なにを」

「まあ、憎い。わかってるくせに。血盆経の願ほどきに、きつと行きますわよ。いいこと」

「しかし、昼にちよつとみた、あの義弟さんとかいう若いの。あの眼が気になるね」

「ち、あんなの、何でもありやしない。いわば居候も同様なのよ」

「楊雄さんだって、そう素晴らしい顔ばかりもしていない」

「だいじょうぶ。うちの良人ときたら、お勤め第一の道楽なし。それにわたしのいうことならさ、なんだってもう」

「そんないいご主人があるくせに、どうしてこの身のような者へ」

「いけませんか。あなた、わたしをころす気、死んでもいいというの。いったいこんな心にしたのはだれなんです。ええ、くやしい」

「あ、しずかにおしつてば。ほんとにおまえは」

「こまり者」

「なにさ、もう可愛くって」

「うそつ。ほんとなら、どうかして」

「そんなむりを」

「いや、いや。いや。……くるしい。あたし、どうかしてしまつたのかしら」

甘いすすり泣きに一瞬しいんとなつたかと思うと、あまりにも早いうちに、廊のどこかで衆僧の呼ぶ声がこの男女を驚かせた。

「海閨梨さま、海閨梨さま、紙銭をお焼きください。暁天でございませぬぞ」

有明けの空とともに、祭壇の紙銭を焚き、それで回向一切も終るのだった。

煙とともに、如海の轎と十坊主の列は、山寺へ帰って行った。あとは乱脈、あとかたづけがまた大変である。そんなところへ、楊雄はなにも知らず、役署から帰ってきた。

「やあ、ご苦労ご苦労。石秀、君がいちばん骨折りだったろう」

「お、お帰んなさい。なあに何でもありやしません。まずまず、無事にすみました」

「女房のやつは」

「え。義姉さん、そこらに見えませんでしたか。じゃあ二階の寢室でしょう。ずいぶんおくれたびれなすつたろうから」

「すまんね。あとかたづけまで君にまかせ切りで。何しろあれは余り丈夫な体質でない方だからな。気だてはいい女なんだが、心でわびながら寝たんだろ。かんべんしてくれ」

わが女房である。恋女房でもある。義弟の石秀へも悪くは見せたくないのであらう。楊雄は女房に代って言いながら、二階の階段をのぼって行った。……ああ、何だつてまた、あんな気のいい男が選りに選った女をお持ちなすつたのかと、石秀は階段の下からその後ろ姿を見上げて、ふと義憤の眦を熱くした。

十四 秘戯の壁絵もなお足らず、色坊主が百夜通いの事

路次の角店——一度は閉めた例の肉屋をまた開業して——

石秀はもうくだらないムシヤクシヤなどは、努めて忘れようとするものか、今日は早くから店頭で顔を見せ、客へもお世辞をふり撒いていた。

すると、午すこし前のこと。

路次の奥から美しい女轎がぞろと出て来た。お供は小婢の迎見と、舅の潘爺さんとで、二人とも清々した外出姿、常ではない。

「おや、おじいさん、どちらへ？」

「石秀さん、留守を頼むよ。今日はの、それ……わしの死んだ家内の血盆経の願解きでな」

「へえ。報恩寺へですかい」

「先だつてのご法要の晩、お住持の海閻梨さまと、むすめの巧雲がお約束をしたとやらで、智どのの楊雄も、そんなことなら行って来いと、機嫌よくゆるしてくれたというわけじゃ。帰りは晩になるかもしれないが」

「そうですね。行ってらっしゃい」

石秀は腕を拱み、睨めするような眼で女轎の巧雲を見送った。淫婦め！と口のうちでは言っている。そして、

「……気のどくなもんだなあ。何も知らずにいる気のいい兄貴（楊雄）は！」

と肉切り台へ吐き出すように呟いた。

うちの良人が拾つて来て、店まで持たせてやっている厄介者の石秀——と見、巧雲は彼の眼のいろなど、気にしてもいなかっただろう。心はただイソイソと先にある。むかしは糸屋の若旦那、いまは報恩寺のお住持となりすましている海閻梨の裴如海——その女にしても見ま欲しい姿へと、もうたましい

は飛んでいる。

そこは薊州城外の古刹、さすが寺だけは山巒松声、いかにも苔さびた閑寂な輪奐だった。

「オオようこそ。ようおいでなされました。さ、さ、ずっとすぐ御本堂のほうへ」

山門で待ちかねていた海閻梨の如海は、衆僧とともに、先に立って内へ導く。

巧雲はもうぼウとしていた。彼女も今日は思いきり化粧をこらし、楚々とついでゆく姿は、欄間彫の吉祥天女が地へ降りていたかのようなのである。

だが諸僧のてまえ、お互いは、眼と眼でものをいっているだけでしかない。由来、お寺の「逢曳き」というものは、妙に秘かな春炎と妖情を増すものだった。釈迦の経、華嚴の呪、真言の秘密。それと本能が闘って燃える。かつまた、世間離れた反逆の快いときめきなども手伝うものか。

客堂では、まず蘭を浮かした茗煎（茶）一ぷく。

ほどなく設けの施餓鬼堂に入り、一同、神妙な回向の座につく。看經ニタ刻、巧雲は、御本尊の地藏菩薩までが、いつかしら裴如海の色白な顔に見えてきて、ると乱れる香煙の糸も妖しく、心は故人の願解きどころか、わが生身の願結びで、うつつはなかった。

やっと、やがて終つて——。

「さあ、どうぞ奥院で、ご休息を」

と、一僧にいわれたときのありがたさ。潘の爺さんも、やれやれと腰をのばして、廻廊づたい、奥の小座敷へひき移った。

ここでは、精進料理のお齋がある。轎かきの者、お供の迎児までが、別室でご相伴の振舞いにあずかり、潘の爺さんは、持参の銀子や織物などを差出して、

「ほんの、軽少ですが」と、寄進におよぶ。

「まあまあ、そのようなお堅いことは」と、如海は収めながらも、すぐ一方で「どうぞ、今日はごゆるり遊ばして。さ、いかがです、おじいさん、もう一杯」

「いやもう充分いただきましたよ。海閨梨さま。これはいったい何という御酒で」

「山門自釀の銘酒でございますが」

「……道理で。こんな美味いお酒はついぞ飲んだことがありませんわい」

「ホ、ホ、ホ。いいんですか、そんなに召上つても」

「巧雲。まあおまえも、一ト口いただいてごらんよ」

「いえ」と、如海はべつな銚子を取つて。「奥さまには、こつちのを差上げましょう。お弱いご婦人にはこの方が」

「ま。……酌いでくださいますの。もつたいないこと」

そろそろ巧雲の沸る思いは姿態にもなつて、眼もともとり、肌の凝脂も匂い立つ。

淫僧、裴如海のこのころもそこは同じ焦々だったに違いない。

いつぞやの晩はむなし交唇だけで別れたこと。今日こそはの機会を外すわけはなかった。さればこそ潘爺さんの酒へは微量な眠り薬を混じ、巧雲へすすめたお銚子のもへは媚薬を入れてあったのだ。薬法もまた仏家という「未見真実”なら、色坊主が女体開眼の方便として用いるのもまた、彼らに

は、いわゆる女人済度の慈悲のひとつか。

「ま。嫌アねえ、おじいさんは。……すっかりいただき過ぎたとみえ、よだれを垂らしてしまつて」

「奥さま。そつとしてお置きなさいまし。よろしいじゃありませんか」

「だって、あまり遅くなつても。……あ、わたしも何ですか、こう、少し酔つたみたい」

「ちよつと、こちらへ出て、風にお吹かれなさいませ。ここから先は、めつたに、どんなお人も入れない所でございますが」

「ま。お静かですこと。まだ廊の先にお部屋があるんですの」

「私の部屋です」

「見せて。……いけません？」

「奥さまならば」

「嫌。……奥さまなんて。ねえ師兄さん、こないだの晩は、おまえといつてくれたじゃありませんか」

煩惱の火は鉄も溶かす。ましてや以前は糸屋の若旦那とか。

出家沙門となつたのも、因は女からで、色の道と借金づまりの世間遁れ。——という前身の裴如海であつてみれば、煩惱

などは、今が今のものではない。女の良人楊雄の目を偷む恐ろしさは封じえないが、それにもまさる秘密な悦楽の唆りは熟

れた果実のように巧雲の体から嗅がれる。巧雲もまた、いまは触れなば落ちん風情で、男の手へ。

「ごめんなさい、師兄さん。……わたし」

「おや、どうなすつたえ」

「……なんだか。もう」

「そんなに飲みもしなかったのにね。いやすぐ醒めますよ。ちよつと、そこでお横になつては? ……ね、そうなさいよ」

次の間の帳を引けば、当然、山僧が孤床の寢台は、五戒三歸の菩提の夢、雲冷ややかなはずであるが、どうして、迦陵頻伽の刺繍の襖、紅蓮白蓮の絵障屏も艶かしく、巧雲は顔を袂にくるんだまま、身を捻じ曲げて、

「アア」

と、練絹のようにそれへ横たわると、もう身も世もない姿だった。同時に、彼女の肌の蒸れでもない妖しい香氣、それも薫々と身悶えを感じるような匂いの底に焚きくるまれる。

枕床にある宋青磁の小香炉から、春情香のけむりの糸が目に見えぬ小雨の一ト条ほどな細さに立ち昇っていたのである。それさえあるに、さきの酒には媚薬が混じてあったことゆえ、彼女の体のうちのものは正常な位置と唯のひそかな呼吸にあきたらず、誰かその唇を窒息するほど吸ってくれて、そして体の奥所のものに肉の縛めと血の拷問を加えてくれるような力を望むらしく、ウームとくるしげに呟きさえも吊つて、身もだえして見せるのだった。

「おくるしいんですか。え、お寝れませんか。上の着衣など、お脱ぎになつては」

「ひどいわ。薄情ねえ」

「あれ、泣いていらつしやる」

「だって、泣かすんですもの」

「どうして」

「わたしをこんなにして」

「どうもいたしはしませんのにさ」

「だからよ。もう師兄さんていうひとは」

「ア、いた」

「食いころしてやりたい。わかっているくせに。ええもう、わたしを焦らして。離さない。離さない。もうどんなになつても」

「いいんですか」

「なにが」

「ご主人の楊雄さんにさ」

「そんなこと、なんでいうの」

「それにあの、なんといいましたっけ。そうそう、石秀とかいう眼の恐い男もいるでしょ」

「あんなやつ。……ああわかった。あなたは恐いのね。恐くなったから、逃げ口上を仰しやるのね」

「憎い?」

「そのまあ平気なお顔。悪魔。白い悪魔みたい」

「いま知ったんですか、この如海を。私は色魔なんですよ。ほんとの私という者はね。だから自分が恐ろしいのだ。それでもいい? ……。それでも」

「知らない」

ついと、顔を横にする。翡翠の耳環が充血した頸で小さく揺れ、その呟きものは、喜悦を待ち焦れる感涙に濡れ光り、一種の恐怖と甘い涙の滴りが、グツシヨリと、もみあげの毛まで濡らしている。

如海はおもむろに女の羞恥をとりつけていった。巧雲の肌は、そのまさぐりに絶えきれず、いくたびも白雪の乳房をの

けぞらしては頸椎骨を前へ折り曲げ、そして唇を求めらしい喘ぎをみせた。だが如海の方はあわててその唇にすぐ唇を与えるでもなく、

「ネ……。いつも、楊雄はどんなふうにするの」

と、海棠の花みたいな耳たぶを、噛むでもなく舐ぶるでもなく、歯で弄びながら囁いた。

「酷いわ」

と巧雲は拗ねて少し怒った。

「だから断っておいたじゃないか」

のしかかっていた如海の体は、後半身を揚げて顔を女の腋の下に埋め、そのあたりから徐々に乳部を残して柔軟な肌を舌で探って行った。女は縫切れるように身を縫じる。苦痛の火にちかいうめきを歯の根に cand 熱い息をあらく吐く。それがとつぜん死んだように熄んだ。如海の青い入道頭の頸すじあたりにも女の雪をあざむく太股が挙げられて、男の顔のありかもない。ただ津々と地下泉の湧く渚に舌をねぶる獣のうつつなさといった姿態。そしてそのうちに女の鼻腔が昏絶のせつなさを洩らしたと思うと、彼はやにわに胸をのばして巧雲の唇へ移った。女は夢中で女自身の津液をふくんだ男の口を奪い、刹那、狂奮して顔を烈しくふるわせた。むしろぶり啖らう勢いで如海の舌のその奥の根元までを痛いほど吸った。なおかつ如海は加えるものを与えず、女の蘭眼をむごたらしく上から見すえる。女は眸も気も霞み、怨めしげに重なっている上の眼を見すえた。細めているが艶を超えて生き物の極美を放つような虹が女の眼の中に沸るとみると、如海ははじめて心に誇りきっていたものを悠々と女の望むところへ

充たした。

叫絶一喚、これは唐風な彼国の表情表現法で、わが国の春語のごとく、哭くとはいわれない。

きよきよとして泣く。すすり泣く。などというのは特有な日本的閨房語で、極まるるとき、一叫また一叫、叫ぶというのがあちらの男女の感受性らしい。「阿呀一声、身子已是酥麻了」といったような文字がよく見られる。前技、後技のことも、万国色道哲学における人類の研鑽はどこといっても変りはないが、その執拗度やねばりにおいては、多少、国情や体力の相違もあろうか。一研一擦、三深九浅、緊々縮々、などという表字法にみても、別してこの裴如海ひとりか、そう傑出した色坊主であったわけでもあるまい。むしろ四圍の環境と、姦通の秘味と、またその折の巧雲のからだの条件とにこのさいは問題がある。

なにしても巧雲は、この一ト出会いに頭の芯まで忘れられないものに焦かれてしまった。となると、大胆さは男よりも女にある。彼女は別れ際に、次をせびった。しかし寺である。そう口実をみつけて通って来るわけにはゆかない。そこで次のような一策を案出した。

良人の楊雄は、月のうち半分は宿直で、勤め先の牢役署から家には帰らない。——だから召使の迎児を裏口に出しておき、楊雄が不在の晩は、門口に線香を焚かせておく。

しかし、ひよっとして、逢曳きの寝疲れなどで、鴉の声にも目覚めずにごしたたら大変だから、朝まわりの頭陀(朝勤行に町の軒々を歩く暁の行者)をたのみ、朝々裏口で木魚を叩いて貰うことにしておけば、まず万一の心配もない。

「おいや？　そうするは」

と、巧雲はながし目で言った。

「よいとも」と、如海もまた、この女の湿润な肌の奥行きが忘れえず。「——寺に一人、気のきいた寺男がいる。それにたんまり握らせて、頭陀の役をやらせよう。だが、きっとだね」

「いやよ、あなたこそ、忘れては」

艶笑一顧、女は、もいちどおくれ髪を調べて寺を立ち去った。そして屋敷へ帰ると、次の日は小婢の迎見に珠やら着物やらを買ってやり、これも手のうちにまろめこんだ。わずかな鼻ぐすりですぐ忠犬に変わる「奴才」の婢は、どこの家にもあるものか。——かくて、楊雄が家に帰らない夜といえは、線香の火と、この小婢の手びきで、頭巾を眉深にかぶった色坊主が、不敵にも、ほとんど一晩おきに、人妻の秘室へ忍び通うという不義の甘味を偷んでいた。

十五 友情一片の真言も、紅涙一怨の閨語には勝らず  
して仇なる事

世間、どこかには、眼があるものだ。

まして石秀はかねがね、臭いと見ていたことなので、ここ一と月もたつと、

「……ははん。やってやがるな」  
と、感づいていた。

頃は十一月初め。朝々はもう真つ白な霜なのに、夜明けまぢかというとよく、わざわざ袋路次の奥へ入って来て、ぽかぽか、木魚を叩きぬく頭陀がある。今朝も今朝とて、まだう

す暗い外で、

……普度衆生

救苦救難

諸仏菩薩

「……また、やってやがる。ちッ、気になって、これで目が覚めるともう寝られやしねえ」

肉屋の裏木戸から、路次を覗いて、一喝かれてやろうと思つてみると、なんと、奥の楊雄の家の裏門から、ひらっと、べつな頭巾姿の大男が出て来るなり、頭陀と一しよに、すうっと、表通りへ消えて行った。

「ああ、やっぱり、あいつだ。……お気のどくだなあ。奥の兄貴は」

彼には、もう見て見ぬ振りは出来なかった。第一気がクサクサして店の客へお愛相も見せていられない。ぶらっとその日、州橋の街通りを歩きつ戻りつ、なんとか楊雄を役署から呼び出す法はないものかと考えていた。

「おいっ石秀。どうしたんだい。浮かぬ顔して」

「あ、兄貴か。いや今、思いきって、役署の誰かに頼んど……考えていたとこなんで」

「おれにかい。おれに会いに？」

「へえ、折入ってね」

「いつだって、家で会える仲じゃあねえか。なんだって、わざわざ外で」

「兄貴。ここじゃ何ともおはなしが出来ません。ちよつと、一杯つきあっておくんさい」

「君に奢らせる手はないよ。ここらは縄張り内だ。おお、そ

こへ登楼ろう」

橋畔に見える一亭。顔ききの楊雄である。先に入る。楼中の者、下へもおかない。

「料理も酒もそれだけでいい。呼ばないうちは、誰も来るなよ」

そこで楊雄は、あらたまつて訊ねた。

「石秀。義の杯は、伊達に交わしたわけじゃあない。君の憂いは俺の憂いだ。さ、何でも打明けてくれ」

「いや兄貴。自分のことじゃあないんだ。じつは兄貴の女房

——義姉さんのことにつきましてね」

「なに。巧雲のことで？」

「へ。……言い難いなあしかし……。だが、いわずにもいられまい。兄貴、怒ッちやいけませんぜ」

「ふーむ。何か巧雲に、おもしろくないことでも」

「大有りなんです。じつあ、お耳に入れるのも遅いくらいなんです。報恩寺の色坊主と、とうにお出来になつておりますぜ。……さ、さ。そう目の色をお変えなすっちゃいけません。おちついて、私の眼玉が間違いか真か。あなたはご亭主。冷静にご判断なすつておくんないさ」

と、そもそも海蘭梨の裴如海が、一周忌法要で屋敷へ来た夜のことから、以後の不審や、ちかごろ気づいた頭陀のことまで、またこの眼で、怪しい頭巾男が明け方抜け出る姿を目撃したことまですっかり並べたてて忠告した。

「ねえ兄貴。兄貴にとつても恋女房。せつかくなご夫婦仲を裂くように、なんとも口が硬ばりますが、どうも義姉さんというおひとは、いい心のお方じゃありませんぜ」

「……。ありがとう！」

「やっ、急に。……兄貴、いったい何処へ？」

「知れたこと。離してくれ」

「だから言ったじゃありませんか。ここは胸にたたんでおきなすつて、まあまあ、現場を抑えてからになさいまし。ご身分もある。世間態もある。男のつらいところださね」

なだめているところへ、役署の組下が、楊雄を探しに来た。その夜は非番だったが、奉行の自宅で、祝いに呼ばれていたのである。

石秀と街で別れて、彼はそっちへ出向いたが、鬱々と、腹が煮えてたまらない。またいつにない彼の悪酔に、奉行や朋輩も目をそばだて、もう飲ませるなど警戒したが、止めればこそだ、なおさら意地になつて飲む。

結局、彼は配下の者に昇がれて、ぐでんぐでんになつて帰った。玄関は大騒ぎである。潘爺さんやら迎児やら、妻の巧雲もまた出て来て、さらに二階の寝室までかつぎ上げるといった騒ぎ。

「どうなすつたの、あなたはまあ……」

「なんだと！ この売女め」

「あら恐い目。ま、着物を脱いで、寝床へお横になりなさいよ」

「触るなつ。けがらわしい」

仰に寝たまま、楊雄は足をあげて、どんと彼女を蹴とばした。

「臭いっ、男臭いっ。あつちへ素去れ！」

「酒臭いのはご自分じゃありませんか。どうかしてるわ、こ

の人は」

「よけいなお世話だ。面つらを見るのもムカつくわ。すべた、私じ窩ご子こ、消えて失せろ。この部屋とに寝るのはゆるさん」

「じゃあ、勝手になさい。知りませんよ、風邪をひいても」

巧雲は唇の端をチツと鳴らしながら扉とを排して隣室へ行ってしまった。楊雄は大ノ字なりにふんぞり返っている。しかし眠れない。眠らんとすればするほど心炎しんえんはカッカと冴さえてくるばかり。ついにまた、脚を床にドタバタさせて唶ど鳴なりだした。

「巧雲、巧雲っ。……離縁状をくれてやるからここへ来いっ。やいっ、出て来いッっていうのに、髪の毛を切って梵妻たいこくにしてくれるからここへ出て来いっ」

寝てもいられない。巧雲はまた良人おとこの部屋へ恐々と入って行った。するとすぐ、彼女の悲鳴がヒーツともれた。しかしまたしばらくするとそれは、甘いようすすり泣きに変わり、夫婦らしい密語にしいんと密ひそまつて、なお、しゅくしゅくと、よあけまえ五更あかめの残灯あかめもともにまたたき哭ないでいるふうだった。

「……じゃあ何か、巧雲、おれがいったのはみんな根もない嘘だと言い切きるのか」

「く、くやしい、わたし……。嘘うそッぱちにも何も、まったく身に覚えなんかありませんもの。みんなあの居候ゐこうめの、つくり言ごです、濡ぬれ衣ぎぬです」

「てえと……石秀いしひでの讒ざん訴そだというわけだな」

「そうですね、元々はあなたが、どこの馬の骨やらしれないあんな男を連れて来て、義の弟だの、やれ私を義姉ねえさんだ

なんて、呼ばせるからツケ上がってくるんですよ。もう私だって、我慢はならない。言いつてしままう！……」

「何を」

「今日が今日まで、じつと我慢していたんですけれど。……畜生、わ、わたしにこんな汚名を着せて、あなたとの仲を裂こうとするなら」

「ま、まさか、夫婦仲を裂こうなんて、そんな石秀じゃあるまいに」

「いいえ、あなたのその人の好き。それをあいつは、ちゃんと見抜いて、私までを誑たぶらかそうとしてるんです。女の口からは、つい言いえもしない言いい難にくさから、今まで黙もくっていたのは、私も良よくはありません。けれどそれは、かんにんして下さるでしょ。もう言いつてしままいますから」

「何をおまえにしたというのか」

「はじめのうちは、うるさく艶書つげぶみなぞをそつとよこしてしましたけれど、しまいには図ウ図しくなつて」

「えっ、艶書を」

「それどころじゃあないんですよ。あなたが非番の夜だといつと、裏庭から忍んで来てさ」

「ここへか」

「いちどなぞは、私を手ごめにしようと言いったので、私も覚悟覚悟したほんです。見てください、その化粧台ひまの抽斗ひまを。いつも魔除まよけの短刀を入れておくんです。つい、こないだの晩ばんだつて、私は刃を抜いて見せてやりました。乱暴するなら自分の手で死んでやるつて。そしたら良人が仇を取とってくれらるだろうといつたら、こそこそ消くえて行いきましたけれど……」

「泣くな。……悪かった」

楊雄は、ごくつと、乾いた口に、息を呑んだ。元來が一徹である。真にうけると、急傾斜する。

ど、ど、ど、と足音あらく階段を降りて行った。そして隠居所の潘爺さん呼び起し、ふた言三言、何かいっていたと思うと、まだ空も暗いのに、役署の方へ行ってしまった。

潘爺さんはまごついた。「——今日限り角の肉屋をたたんじまえ、店の諸道具も、豚も羊も物置へ叩ッ込んで店仕舞いの札を出せ」と、いいつけられたのである。またすぐ役署からは牢屋勤めの楊雄の配下の者がやって来て、たちまち外から戸をコジ開け、潘爺さんの手も借らず処理してしまった。そして豚の股を何本も肩にかついでゲラゲラ笑いながら退散した。

事の急変と、その荒ッぽさに驚いたのは、店の一室で寝ていたあだ名、拚命（命知らず）三郎の石秀である。むらむらツとしたが、すぐ否と、胸をなでさすった。

「……兄貴に科はねえことだ。現場を抑えぬうちは決して言いなさんなよと、あれほど堅く断ツといたのに、つい女の顔を見た業腹まぎれ、責めなすったに違いない。そこで淫婦の持ち前、逆手と出やがったものとみえる。ふふん、考えてみりゃあ、世間ありがちな犬も食わねえことかもしれねえ。まずは大人しく引き退がろうかい」

元々、気らかな流浪三界の身、すぐ荷物を取りまとめ、店の現金、出入り帳、きれいに揃えて、潘爺さんの隠居所へ抛り込み、朝飯も食わずにぽいと飛び出した。そしてそのまま薊州の地を去ろうとしたが、

「いや、待てよ」

彼は町端れの木賃宿に泊りをとって、その日一日考えた。性来の淫婦といっても、ひと通りな巧雲ではない。かつは情夫の裴如海がしたたか者。わるくしたら行くすえ邪魔者の楊雄に一服毒を盛らないものでもない。そんなことにいたらないまでも外間がある。楊雄の面目はまるつぶれだ。薊州の男が一匹すたる。

「一宿一飯の恩はさておき、かりにも、いちどは義を結んだ兄弟を」

彼は思い直した。一思案に向ったのだ。楊雄が宿直の日はわかつている。——その晩、丑満ごろに木賃宿を出て、五更の前から以前住んでいた袋路次の角にひそんで期すものを待ちかまえていた。とも知らず、例の乞食頭陀が、やがて木魚を叩きながら、路次口へ入りかけて行く様子。しめたとばかり——いきなり跳びかかって「やいッ、声を出すな」と頭陀の襟元を引っつかんだ。

「いるんだろうナ。ゆうべから」

「な、な、なんでございますか。てまえは、何も」

「しらばツくれるな。密夫の如海坊主が、巧雲の寝間にもぐり込んでいるだろうと、訊いているんだ」

「へ、へい……。よくは存じませんが、その」

「まあいい。着物を脱げ。頭陀袋も、木魚もそこへ置け。裸になれ、裸に」

頭陀はふるえ上がった。いわるるままに、章魚のような物が出来上がり、ガクガク歯の根をならして地に坐りこむ。石秀はすぐ自身の衣類を彼のと着替えて、

「てめえはちよつと眠っている」

と、喉の辺を、ひとつ締めた。頭陀はかんたんに目を白くして仮死してしまう。それを肉屋の裏口へ抛りこんで、彼自身頭陀その者になりすまし、奥の屋敷の扉に添って、裏門の辺をうろつきながら……普度衆生……救苦救難……諸仏菩薩……ポクポク、ポクポク、木魚をたたきぬいていた。

## 十六 薊州流行歌のこと。次いで淫婦の

白裸、翠屏山を紅葉にすること

「お。頭陀の木魚が聞える。もう夜明け近いのか」

前夜からの濡れ事に、ぐっすり寝込んでいた裴如海は、あわてて法衣を着込み、長頭巾をかぶり出した。

白粉の痕もないほど、巧雲も性を失った姿で寝入っていたが、後朝ともなれば、まだ飽かない痴語も出て、男の胸へ纏いつく。

「何さ、またすぐ会えるじゃないか。幾日もの別れじゃなし……」

如海ひとりがスツと出て行くと、階下の廊では小婢の迎児が提洋灯をさげて待っている。——手筈は毎々の順序どおり。カタンと裏門の門を迎児が外すと、とっさに如海がひらと表へ抜けて出る。

ポクポク、ポクポク、頭陀の影は扉の角で、しきりとまだ木魚を叩いているばかり。「——おや、頭陀のやつ。どうしたんだろ、いつになく？」と如海は、自分から馳け寄って行き、

「よせ。木魚はもういい。帰るんだよ、帰るんだよ」

と、一ト声叱った。そして、先にその路次から表へ走りかけたが、とたんに何かはその襟がみをぐんと後ろへ引きもどした。

「和尚っ。ちよつと待て」

「げっ？」

「じたばたするな。こう、ふん捕まえたら逃がすこっちやあねえ。俺の面には覚えがあるう」

「ヤッ。おぬしは」

「この世の見おさめによく見ておけ。楊雄の義弟分、拚命三郎の石秀だ。よくも兄貴の面に泥を塗りやあがったな。うぬっ」

「あっ、た、たすけて」

「してえ三昧な真似しやがって、虫のいいことをぬかすな。この極道坊主」

「わ、わかれる！ いつでも、女と別れますから」

「くそ。もう間に合わねえ！」

石秀は相手のもがきを後ろから抱きしめたまま、右手の短刀で如海のわき腹を深く刺した。挟りまわし、挟り廻して、どんと捨てた。

霜の路次を、さつと鮮血が流れ走る。彼は、如海の頭巾や法衣を剥ぎとって手に抱え、路次から往来へ飛鳥のごとく躍り去った。……と、まもなく夜は白々明け。世間のあちこちでは、戸を開ける音。車の往き来。

「たいへんじゃ。人殺しじゃ。裸のお坊さまが殺されている！」

いちばん先に、路次の死骸を見つけて騒ぎ出したのは、毎朝これもきまってこの辺へ手車の鈴を鳴らしながら廻って来

る、餅粥売りの爺さんだった。さあ騒動である。往來はすぐ人の山。役署からは検死が来る。目明しが近所一帯を洗って聞き廻る。

死体は、報恩寺の如海とすぐ知れた。もう一人の頭陀、これは気絶していただけなので、すぐ息を吹っ返し、裸のまま拉致された。頭陀は報恩寺の納所、胡道人というやつ。彼の白状で事はありました奉行所の調書にのぼった。

ところがまずい。事件は牢役署勤めの官人楊雄の妻の姦通沙汰だ。おそらくは楊雄がそれを知って、他人の手で姦夫如海を殺させたものにちがいなからう。と奉行所では観たのである。

奉行は処置に窮した。巧雲が、楊雄の恋女房とは日頃の私交上でわかつている。彼に同情せずにはいられない。かたがた、頭陀の白状でも、如海の悪行はあきらかなので、これは極小に内輪扱いとしておくに限ると考えた。で、報恩寺内の全坊主の呼び出しや犯人捜査の令は、型どおり行つたが、楊雄には、一片の証言を取つただけで、おかまいなしとなつた。

巧雲は、ぞーっとしたろう。潘の爺さんも、きもを冷やしたにちがいない。だが、娘のことである。爺さんも、ぷつんと、口を閉じて、以後これについては、何も世間へ語らない。

けれど、世間には目がある、口がある。妙な俗謡が、薊州の町では流行りだしてきた。

羅傘 さんさん 銅鑼 どんどん

肩で風切る病関索(楊雄のアダ名)も

惚れた女房は 斬りよもないよ

惚れた弱味じゃぜひもない

和尚又クヌク 頭陀ポカポカ

如法闇夜の 玉門じゃもの

いちど潜れば 忘れられないよ

泳ぐ血の池 ぜひもない

町の酒場の妓も唄う。辻でも子供が唄って囃す。楊雄の耳に入らぬはずはない。楊雄は囃されている自分をあわれむとともに、以来影を消し去つた義の弟石秀を思い詫び、

「どうかして、もいちど彼に会いたいもの」

と、ここ毎日、役署の行き帰りには、彼の居所を探していった。そしてついに、町端れの木賃宿に、彼のいることを突きとめ、会つて、とたんに、はらはらと涙をたらした。

「石秀! ……。すまなかつた。君の忠告をアダにしたこの腑抜け者。わらつてくれ、ゆるしてくれ給え」

「なんの、兄貴が分つてくれさえすればそれでいいんだ。もしかしてまたも女房の口に言いくるめられて、逆にこの石秀をお恨みなすっているんじゃないかと、私もついこの土地を去りえず、もういちど兄貴に会い、そして動かぬ証拠もお見せした上で立ち退こうと思つていたんで……。ま、念のため、ごらんなすつて」

と、石秀は血の乾いた如海の頭巾法衣などを取出して、彼の前に示し、これでもう今は心残りもない。義の杯はお返ししよう。これをもって自分は他国へ退散すると言ひ出した。「いや待つてくれ」と、楊雄は色をなして。「義兄弟の杯とは、

そんな軽薄なものではあるまい。君はそれで気がすんでも、俺の心はすまない。また楊雄の男が立たぬ。もう一日待ってくれ」

「兄貴。待ったら、どうする気なのだ」

「女房の巧雲から、君へむかって、詫びをいわせる。すまないが、明日の午、城門外の翠屏山へ来てくれないか」

「翠屏山？ あの人里離れた山の上か」

「そうだ、きっと待ってるぜ。久しぶりに一杯というところだが、お互い胸のつかえを持っていては、美味くもあるまい。あしたをすませた上でしよう。じゃあ石秀、間違いない」と、楊雄は再度念をおして、帰って行った。

あくる日、石秀は、旅包みを背へ斜めに結び、

「おやじさん。お世話になったね。また旅烏さ。あばよ」

と木賃のはたご代を払って出て行った。いずれともなれ、もう薊州にはいないつもりらしい。

翠屏山は、薊州東門のそと、郊外二十里のところ。全山は墓地であり、丈なす草、樺、白楊の茂み、道は磊々の石コロで、途中には寺も庵もなく、ただ山上に荒れ朽ちた岳廟があると聞くばかり……。

「ほ。轎屋か。そこにいる連中は」

「へえ、轎屋です。楊家の旦那と奥さまをお乗せ申して来たんで……。するつてえと、岳廟のお詣りをすますから、麓で待てと仰っしゃいます。そこでこう、暢気にみんな御酒を頂戴しているという寸法でござんして」

「そいつアいい。めずらしいお日和だから。酒も風流に飲

めるだろう。……じゃあ楊雄さんご夫妻は、もう先にお着きだね」

「とっくに山上でございますよ」

「ちと、遅かったか」石秀は足をはやめた。

谷も、鳥の声も、目の下に沈む。

「おう、兄貴」

「やあ、来てくれたか、石秀」

「待たせたらしいな。すまない、すまない。が、どうなすっただんです。義姉さんは」

「巧雲か」

「どこにも見えないじゃございませんか」

「いや来ている。いま会わせるよ。……が、まず寂かな景だ。」

一杯、息やすめに飲まないか」

「麓で轎昇きたちも飲んでいた。じつあそれを見てから、急に喉がグビついていたところさ。一杯いただきましようか」

岳廟の前に並んで腰をかけ、楊雄がたずさえて来た二箇の瓢酒も、たちまち一人でカラにした。

「どれ……」と、楊雄はさきに腰を上げ、「じゃあ、石秀。巧雲に会ってもらおうか」

「お。どこにいるのか」

「この裏だ」

数歩。——石秀はそこで、ぎょツと立ちすくんでしまった。巨木の幹に、半裸とされた女が縛り付けられている。

巧雲だ。すこし離れて、小婢の迎児も縄目のまま、灌木の中に打ッ抛らかしてある。

「兄貴、いったい、これは？ ……」

「約束どおりさ、巧雲から君へあやまらせるのだ。……ここ  
まで、女房を連れ出すにも、なかなか、なんのかの言い洩  
るので手拵ずったが、俺の夢見に二々晩も岳廟の神があらわ  
れて、きょうまでの魔邪は水に流し、以前の夫婦仲を誓い直  
せと、お告げあったから行こうじゃないか……と、うまく誘  
い出して来たわけさ」

「それはいいが、なんでまた、こいつは余りに酷い仕置じゃ  
ないか」

「酷いって。……うむ、それは君が、この楊雄へ義理立てに  
言ってくれるのだろうか、石秀、君のほんとの腹では、八ツ  
裂きにしても飽き足りない思いに違いあるまい。町の俗謡を  
君だつて聞いているだろう。病閔索の楊雄は、もう薊州では  
男がすたつた。君ももうそんな義理立ては捨ててくれ。……  
やい、巧雲」と、彼は一步、女へ迫つて。

「さ！ 一切を懺悔して、おれの義弟にあやまれ。てめえは、  
二重三重に、亭主を誑らかしたただけでなく、あらぬ罪を石秀  
にも着せ、始終、石秀がうるさく自分に口説き寄つて困るな  
どとぬかしたろうが」

「……すみません！ あれはまったく私の一時のつくり言。  
……石秀さん、うちのひとに詫びてくださいよ。後生だから」

「ふざけるな。女房の不始末は亭主のおれが始末する。石秀  
が何といおうと今はこのおれが堪忍ならぬ。……石秀、証拠  
の品は持つて来てくれたらうな」

「これですかい」

石秀は、背の包みを解いて投げ出した。如海の法衣と頭巾  
である。ひと目それを見ると、さすが巧雲も真白な肌を鳥肌

にし、髪の根もよだてて顔を横にした。

「覚えがあるな。知らぬとはいえないな。巧雲」

「か、かんにんして。あなた……あなたとも、一度はあんな  
にも思い合つた仲。後生、それを、もいちど思い出して」

「思い出すからこそ、ゆるせねえのだ。よくも俺の男を泥ン  
こにしやがったな。また、男と男の義を裂こうとしやがった  
な。もうこんな物は、てめえの髪には不要な物だ」

と、楊雄は、彼女の珠櫛、金釵、簪などごとごとくムシ  
り奪つて地へ投げ、その手で腰の剣を抜き払つた。

白刃を見ると、巧雲はヒーツと悲泣しだした。そして、遁  
れ得べくもない縛めをもがき抜いて、半裸の白い肉体に縄目  
が食い込むばかりムチムチと波打ちもだえた。

「石秀。この刀を君に渡す。ぞんぶんに恨みをはらしてくれ」  
「いやだ！」石秀は首を振つて。「——いくらこの人が悪婦で  
も、兄貴の女房、まして自由のきかない女ずれを」

「まだ憐愍を持つてくれるのか。そこは君のいいところか。  
しかしこんな女を生かしておいたら、後日また、世間で毒を  
なすのは知れたことだ。よしつ、おれの手でする」

白い刃の切っ尖をつきつけられ、巧雲は髪ふりみだして悲  
鳴をあげた。足の指を曲げて爪さき立ち、眉をひそめ、喉を  
伸ばして叫絶する。その狂える様は、淫蕩な女体が、焚きこ  
められた春情香の枕を外して、歓喜の極に、一喚、死息を怪  
しましめ、一叫、凝脂を汗としてうるおす、あのせつなに見  
せる摩那識の全くうつつない貌とそっくり似たような態でも  
あった。——おそらくはふと、良人楊雄の脳裡には、そのと  
き、他人の覗きえない幻影が彼女の姿態に重なって見えてい

たのではあるまいか。

「やかましいっ」

大喝、こういったが、その剣の先は、彼女の悶動する乳くびのへんを、わずかに、ちよつと突いたのみである。血が走った。紅い絹糸のような血の糸だ。でも彼女は仰山なうめきをあげ、

「助けてーッ。死にたくない。人殺しっ。誰か来てえーッ」と、声をからして叫びつづけた。

このさまを見て、小婢の迎児は、縄目のまま灌木の中を跳び出して逃げかけた。一閃、楊雄は躍ッて迎児を斬り伏せ、返すやいな、その血刀で、

「阿女、思いしれ」

と、巧雲の心部を刺しつらぬいた。血を見るや彼自身も、その濛気に酔ってきたのか、女の半裸から裳の下までをズタズタな朱に斬りさいなみ、あとは憑かれたものの如く、茫然、血刀をさげて我に返らぬことしばしであった。

「……兄貴、やんなすったね、とうとう」

「覚悟の前だ。今朝、家を出て来る前から」

「もう薊州にはいられませんぜ。たとえ女房でも小婢でも」

「おお、人を殺したからには、そいつも覚悟さ。いさぎよく自首して出る」

「めっそうもねえ。そんな愚はおよしなさい。あなたほどな男が、こんな淫婦のいたずら事と、自分の一生を取りかえたりして埋まるものか」

「じゃあ、この楊雄はいつたい、どうしたらいいのだ。俺もまだ若い。世間へ何も尽していず、世間の端っこを覗いただ

けだ」

「どうです。梁山泊へ行こうじゃありませんか」

「えっ、梁山泊へ」

「山東の及時雨宋公明をはじめ、義胆の男どもが、雲の如く集まっていると聞くし、かたがた、近ごろ仲間を求めているとも言いますぜ」

「だって、何の手引きもなしでは」

「いいや、いつかあなたと兄弟の約をしたとき、町の居酒屋で、ちよつと行きずりの会釈を交わした二人がいます。ひとり梁山泊の神行太保の戴宗、もひとりは錦豹子の楊林。あの二人を頼んで行きましようや」

「確かか。それは間違いない人か」

「じつはそのとき、戴宗その人から、銀十両もらってました。その十両もまだここにある。ねえ兄貴、こうなったのも、思えば何か不思議な糸が私たちの運命をどこかで引いているような気はしませんか」

「行こう！ 深い話は途々として」

「じゃあすぐここから」

「長居していると、麓に待たせておいた轎舁きが、ひよつと登って来るかもしれぬ。オオ女の櫛、簪も路銀の足し、そいつも拾って」

と、血刀を拭って、鞆におさめ、石秀もまた旅包みを背に結び直して、峰づたい、道をほかへ探ろうと歩き出したときである。

「見たぜ、見たぜ！ こう薊州牢役人の楊のおかしら。——ここに人ありだ、すっかりこの耳で聞いしまいましたぜ！

梁山泊落ちのご相談もネ。へへへへ」

何者だろう、どこかで不敵な笑い方をした者がある。いやに横着な言い廻しでもあった。

十七 祝氏の三傑「時報ノ鶏」を蚤に食われて大いに怒ること

折も折である。誰か？ と楊雄と石秀はぎよっとして、後ろの木蔭を振りむいた——。が、その目の前へ、颯ッと、泳ぐがごとく出て来た男の魔性めいたお辞儀振りを見ると、

「なアんだこの野郎、ひとを脅しやあがつて」  
と、楊雄は怒るにも怒れぬように、かえってゲタゲタ笑い

「だれかと思つたら、てめえは小泥棒の鼓上蚤じゃねえのか」  
「へい、蚤の時遷です。ひよんな所でお目にかかりましたね。牢屋のお頭」

「てめえ。何もかも、物蔭で見っていたんだな」  
「いけませんでしたか。——これから梁山泊へ落ちのびようッていうご相談事も、ついそこで残らず聞いてしまいました

「いまさら、いけねえといってみたって、仕方がねえや。：  
：石秀、どうしたもんだらう。この蚤男を」  
「蚤男とは、巧く言いなすつたな。一体何者です、その男は」  
そこで楊雄が、こう説明した。

——昨日までの職掌柄で、自分も多年いろんな囚人を手にかけて来たが、この時遷アダ名を鼓上蚤という蚤みたいな人間

は、めつたに知らない。

生れは、高唐州というがもとより前身不詳の無宿者で、よく捕まって薊州の牢屋へ入って来るが、すぐにまた牢から出て行く。——なぜなれば、たいがい軽い微罪だからで、ほかの罪人のように、被害者も訴え手もないのである。

じゃあ何で食つてるかという、あちこちの墳墓を掘って、殉葬（死者に副えて埋めた生前の遺愛品）の珠だの金銀を見つけては、市でこかしているものらしい。もちろんそれとて重罪だが、現場を見つかった例しはないので、ほかの微罪で捕まえて来る。ところが牢にいても牢中の愛嬌者だし、また、牢舎に飽きると、いつのまにか、自分の意志でぶいとどこかへ消えてしまう。——という獄屋の境もないようだが、そうではなく、元々この鼓上蚤ときては稀代な「忍び」の達人で、骨はやわらかく、体は海鼠のように、緊縮自在なのだ。——それにまた気が向けば、獄を我が家のように心得、自分から帰って来ることもあるし、世間の生きている人間へは、かつて加害者となったことのない男だけに、牢番と相牢の間も、すべて笑ってこれを見ているという変り者でもあるのであった。

「なるほど、変ってますな」

石秀は、聞き終って、もういちど時遷の風態を見直した。なるほど妙に愛嬌があつて小ツこい顔だ。目は細く、常に、日光をおそれるごとく眩そうであり、顔じゅう、茶色の生ぶ毛を持ち、笑うと不気味な歯並びが刃物のように真白だ。

「兄貴」

と、石秀は楊雄の耳へ口をよせて、

「……これも一能のうのある男。殺すのはもつたいたい。といって、生かしておけば、ここで見られた俺たち二人の所業しわざから落ち行く先まで世間へむかって喋しゃべべられる惧おそれもある。……どうでしょう、いっそのこと、梁山泊へ誘って一しょに連れて行っては？」

すると、聞こえもしないはずなのに、時遷じせんは跳び上がったよろこんだ。

「どうか、お連れなすつておくんない。あつしにとつても、願ねがったり叶かなったりだ。——この山から薊州けいしゅうを通らずに梁山泊へ行ける抜け道だつて知っています。どうかこの時遷に道案内をさせておくんない」

「げっ？ ……」と、二人は驚いて、「時遷。おめえには、二人のこんな小声の耳打ちも、そこにいて聞えるのか」

「へエ、どういふものか、子供の時から耳のいいことといつたら、蟻ありの足音も聞こえるほどなんで」

「気味のわるい。まあいいや、これも何かの縁だろう。ともあれここに長居はできねえ。おい、抜け道というのはどつちだ」

「そうきまつたらこうお出いでなせえ」

と、時遷は間道かんどうへさして、先に立った。——かくてここ翠屏山すいへいざんにおける「潘巧雲殺し」の一場面は、そのあとで、薊州じゅうの大評判となつた以外に話はない。

旅の日をかさねて、先の楊雄、石秀、時遷の三人づれば、はや鄆州うんしゅうざいかいにかかつていた。——その日、香林注こうりんあひという一村をすぎて、春うすく彼方かなたに、一座の高山を仰いだ頃だった。

「おや、ここらにしちやあ洒落しゃれた旅籠はたごがあるぜ」

足もくたびれ加減である。三人が近よつてみると、やはり田舎いなかは田舎で、街道を前に、崩れ築土つじの茅葺かやぶき屋根。しかし、百樹の柳にぐるまれて、それも画えと見えるばかりか、入口の聯れん

(柱懸け)には、

庭にわハ幽こニシテタニハ接ス五湖ノ寶ひん

戸いハ廠ホカラカニ朝アサハ迎ウ三島ノ客トウ

と、左右一行ずつの詩句が読まれる。

「……おい、お客さんよ。そんな顔して、その聯が読めるのかね」

門を掃はいていた宿の若い男が言った。

「読めなくてさ……」と、いまいまいげに、楊雄が逆にたずねた。「なかなかいい書風だが、これは一体誰の字だい？」

「祝朝しゅくちよう奉ほうさまのご直筆だよ」

「書家かね」

「冗談じやないじゃない。このあたり三百里四方きつての、莊しやうのおおるじだアね。つまり地頭じとうの大旦那さまだ。よく挿さんでおきなせえ」

「はははは。こんな宿屋は初めてだ」

三人は笑いながら部屋へ通つた。おおむね当時は自炊じすいときまっていた。米、味噌みそ、肉、菜さい、飲のみたいだけの酒、すべて現金買かいである。

それを旅籠はたごで借りた鍋釜なべで煮炊にたきする。

——楊雄はさてと、巧雲の髪から抜き取つてきた釵かんざしを出して、前払いの物代ものしろとした。そしてさっきの若い男が何か面白おもしろいので、それをも加えた車座の四人でやがて飲みはじめた。

するうちにふと、石秀は、妙な物に目がつきだした。——  
厨房（料理場）へ入るてまえの細土間に、ずらと野太刀が十  
数本ならべてある。気になって仕方がないので、つい若者に  
訊いてみた。

「いい刀がありますね。道中、腰淋しくてならなかったとこ  
ろだ。一本売ってくれませんか」

「とんでもねえ」と、若者は一笑した。「——あれには一本一  
本、みんな番号がついてるからね、失くしたら大変なのさ。

第一売り物じゃありませんよ」

「じゃあ何だつて、飾り立てておくんですえ」

「知らねえのかい、お客さん。ここらはもう名うてな梁山泊  
に近いので、いつなんどき、やつらが襲つて来ないとも限ら  
ないから、その要心に備えてあるのさ」

三人はそつと目顔を見あわせた。

宿の若者はそれとも気づかず、酒の機嫌も手つだつてか、  
喋々と「わしが国さ”のお郷自慢だの、また、自分らの上  
にいただく地頭の”わが殿自慢”を一席ぶつた。

それによると。たそがれ。

ここの軒から彼方に見えた一座の高山を、独龍山といい、  
その中腹に、この地方を統治している祝朝奉という豪族が  
代々住んでいる。

その祝家には、世間で、

祝氏ノ三傑

と、敬称している三人の優れた子があり、麓のあちこちに  
は、百戸、二百戸、また六、七百戸といった按配に、部族部

族の村があった。さらにはまた、百里二百里の外にまで、小  
作百姓の聚落を擁しているの、その勢力と財富とは、宛と  
して、一国の王侯もおよばぬほどのものだといふのであった。

「……ああ、いけねえ。すこし喋り過ぎの飲み過ぎとござ  
った。お客さん、ごめんなさいよ。どうか、ごゆっくりと」

若者は自分の寝間へひっこんだ。これでこつちも大人しく  
眠りについてしまつていたら、後日の騒動はなかつただろう。

——ところが、いつのまにか居なくなつていた蝙蝠男の時遷  
が、ふらと帰つて来たのを見ると、手に一羽の鶏——いや羽  
ネをむしつて赤裸としたのを、どこで焼いたのか丸焼きにし  
て提げてきた。

「オヤ鼓上蚤、どこでそんな物を」

「へへへ。実はさつき廁へ立ったとき、小窓から覗いてみた  
んで。……すると鶏籠かと思つたら、なんと鶏が一羽入れて  
飼つてある。ちようど辺りを見れば人もいず、ちよつくら締  
めて、一ト焙りして来ましたのさ」

「失敬して来たというわけだな。はて、こいつアまた薊州の  
牢屋戻しだぜ」

楊雄が冗談をとばすと、石秀もつづいて笑つた。

「いやムダだよ兄貴。奴にとつては、お家の芸だもの。この  
癖は止みっこない」

さてまた絶好な肴を見ると、新たに興を催してくる。鶏  
の丸焼きをムシリあつて、三人、さらに飲んで飲み更かし、  
やがてグツスリ寝こんでいた。

すると五更の頃。

「おいっ、客人、起きてくれ。起きねえかよ、やいっ」

と、声にどすをきかせて枕元で唼鳴どなっている男があった。

三人、同時に眼をさまして、ひよいと仰ぐと、例の宿の若者で、手に棍棒こんぼうをひっさげ「——大事な鶏を食っちまったのは、てめえらだろう」と、怒っている。

「知るもんか、そんなものを！」と、時遷じせんは下手人なので、慌あわてた色を隠せない。「おい、客へむかって、変な言いがかりをつけるなよ」

「おや、この野郎。居直りやがったな」

「知らねえことは、知らねえというしかねえや」

「ふざけるな。頭かくして尻隠さず、そこに食い散らした鶏の骨が残っているじゃねえか」

「あ。これが」

「これかもねえもんだ。さあ、どうしてくれる」

「じゃあやっぱり、酒の上で食っちゃったのかな。とんとゆべは覚えもなかった。だが、たかが、鶏一羽、代を払ったらいいだろう」

「うんにゃ。この鶏は、ただの鶏とはわけが違う。時報ときノ鶏とろといって、狂いなく五更よあけを告げるんで、この界限かぎりでの共同の物になっているのだ。さあ生かして返せ」

「無理をいうなよ。おれたちは魔法使いじゃねえんだから」

「それじゃあ、梁山泊りやうざんぱくの下ッ端はもとだろう。探りに入って来やがったな」

「なんだと」

「そうだ、そうに違いねえ。こないだうちから胡散うさんな奴が、この祝家莊しゅけさうにうろついているから用心しろと、山莊さんさうからもお触ふれが出ていたところだった。ようし！ 三人ともに引ッ搦からげ

て、独龍岡どくりゅうがうの大旦那の御門へ送りこむからそう思え」

「何を」

と、時遷じせんが平手打ちを食わした弾はずみに、若者はどんと外へよろけた。——しかし部屋の外にも、はや近所の仲間が加勢に来ていたものとみえる。ど、ど、どッと得物えものを持った一群の男どもが、とたんに、躍りこんで来た。

凄まじい格闘となり、楊雄と石秀とは、からくも相手を投げとばしながら、細土間の槍掛けにあった野太刀一本ずつを奪って外へ逃げ出していた。——けれど馳かけても馳かけても、蚤のみの時遷じせんは後から追いついて来そうもない。——捕つかまったらしい？ と心配になってきた。振り返ると、旅籠はたごの一軒は、朝火事を出して炎々と燃えているのだ。しかもそこからなお數十人の喊声かんせいがこつちをさして追跡して来る。

「あきらめよう。蚤のみ一匹ひきに関かからずらって、おれたち二人までが、祝家莊しゅけさうのやつらに、がんじ縛がらめの目に会わされては堪らない」街道かいだうを外はずして、わざと横道へ走りこんだ。それがかえって悪かったともいえない。さんざん方向に迷ったあげく、また一軒の居酒屋にぶつかつた。朝飯前の空き腹すではあり、ままよという気も手つだつていた。「——ごめんよ」とばかり入り込み、そ知らぬ顔をして、腹こころを拵しらえ、道など訊きいていたものだった。

そして。「どれ、出かけようか」と、立ちかけると、あいにく、入れちがいになうつと入って来た、片目〃目ツぱ〃の大男がある。その半顔まがたから瞼まがたまで引ッ吊つりされている恐こわい顔が、「おや？」

と、楊雄の背を振り返ったと思うと、さらに声を大にして

呼びとめた。

「おお！ 薊州奉行所の牢役人。そうだ、そこへおいでなさるのは、たしかあだ名を病関索とおっしゃる牢頭さんじゃございませんか」

彼を呼びとめたのは、中山府の人で、片目の醜いところから、鬼臉児と異名のある、杜興という人間だった。

その杜興は、薊州の地に暴動があったとき捕まって、後日、免囚となつてからも、しばらく楊雄の世話になつていたことがある。

楊雄はすっかり見忘れていたが、何やかや、話のうちに、やっと思ひ出し、

「ああ、あの暴動の時の一人か。こいつア妙な所で会つたもんだな」

「へえ、その鬼臉児の杜興ですよ。こっちは暴動仲間の一人。旦那は薊州の首斬り役人。もう病関索の刀のサビかと、素直にあきらめをつけていたら、なんと、免囚の後々まで、えらいお世話になりました」

「そんなことがあつたかなあ」

「旦那はお忘れでも、こっちは忘れたことはございません。

……が、その病関索の楊雄ともあろうお人が、こんな所で何をそそくさなさつていゝるんで」

「じつあ、おれはもう薊州の役人じゃあない。仔細があつて、女房の巧雲を手につけ、二人の連れと一しよに落ちてきたんだが、その道連れの時遷つてえ奴が、ゆうべ祝家荘の旅籠で“時報ノ鶏”を盗んで食つちまつたという騒ぎさ」

「ははあ。聞いていますよ、朝火事のこと。聞けば、そいつがまた、竈の火を、家じゅうにぶり撒いたんだつていうことじゃありませんか」

「どうなのか、後はよく知らねえが、野郎一人、どうやら大勢に捕まつてしまつたらしい」

「捕まつたのは確かでしょう。ここへ来る途中、毬くりにされた男が一人、独龍山の方へ差立てられて行くのを見ましたからね。……だが、ご安心なさいまし。恩人のお連れの人なら、なんとか、救つてあげる工夫がないではありません」

「ふうむ、そして君はいま、この土地で何をしているのか」

「言ひおくれましたが、お蔭でその後、当地へ流れて来て、今では独龍山の地頭一族の一荘に、まあ浪人の用心棒格といつた名目で、召抱えられておりますんで」

「するとやはり、祝朝奉の一族の家なのか」

「そうです。——詳しくいうと、祝朝奉というのは、土豪の本家で、その西の麓に扈家荘、東に李家荘、三つの部族でこの地方三百里四方をかためているんで」

「えらい勢力なんだな」

「それに、祝朝奉には、祝氏ノ三傑といわれるいい息子が三人も揃つているし、また西の部族の扈家荘にも、飛天虎の扈成というたいした腕前の一子やら、またその妹には、一丈青の扈三娘といつて、日月の二刀を馬上で使うといふ稀代なお嬢さんもおりますしね……」

「そして、おまえさんが抱えられている主人というのは？」

「もう一カ所の、東の麓に居館をもっている同族の当主で、つまりその人が李家荘のおあるじ……。みだれ焼きの槍の上

手で、また、戦場では、五本の「飛閃刀」を背にかくし、百歩離れて人を仆すという神技の持ち主です」

「では、その李家の旦那というのは。……もしや世間でもよく噂にのぼる撲天鵬の李応ではないのか」

「そうです！」と、彼は自慢していった。「大人物です。世にいう俠漢です。ぜひ、いちど会ってごらん下さい。そして、お連れの人のごとも、事情をいって頼めば、呑みこんで下さるにちがいありません」

「でも、こっちは見ず知らずだし、君は一介の食客、どうだろうな」

「いやいや、じつをいえば、主人李応とこの杜興の間は、深く将来の心契で結ばれているんです。古くからいる召抱えのてまえ、表面は用心棒の食客としておりますが、吉凶、どんな相談事でも、私だけには打明けてくださる仲。……ともあれ、李家荘までおいでください。ご思案はまたその上でも」

と、杜興は恩人楊雄と石秀をうながして、そこからわが住む主家の李家荘へ案内して行つた。

「なるほど」

と楊雄も石秀も、ここへ来てみて驚嘆した。

山の根に拠つて、広い濠をめぐらし、千松万柳、門への道は、吊り橋だった。正門の次に内門をひかえ、白壁高く、楼に楼を層ね、武器庫、厩長屋、およそ備わらざるはない。

さらに、李応その人も、噂にたがわぬ風貌の持ちぬしで、「おはなしは、ただいま、杜興からよく聞きました。ほかならぬ杜興の恩人。杜興に代つて、旧恩にお報いいたさずばなりませんまい」

と、客殿にあらわれるやいな、まず言つて、楊雄と石秀を安心させた。

そしてすぐ祐筆を呼び、

「本家へだぞ。ていねいに書け」

と、頼み事を口授して、一通をしたためさせた。終ると、自身署名して封緘をし、べつな家従の者に持たせて、すぐ本家祝朝奉の居館へと、いそがせてやつた。

「ま。……お連れ人は、すぐ貰いうけて帰つて来よう。何もないが、その間、おくつろぎを」

李応のいいつけで、午餐が出る。——李応は、杜興のはなしで、楊雄の義気を愛し、また石秀の人となりを見て、これを好漢と見たものか、しきりに棒術や鎗のことなど持ち出して、感興、飽かない容子だった。

ところが、——やがて帰つて来た使者の報は、ひどく彼の眉を搔きくもらせた。——彼のいんぎんな書簡も、本家の息子たちの手に握りつぶされ、その返答としては「配下の者の旅籠屋で搦め捕つた曲者は、梁山泊の廻し者ゆえ、他人の手にはまかされぬ。わが家から奉行所へ突き出す」と、剣もほろろに突ツ刎ねられ、むなしく帰つて来たのである。

「これはどうした間違いだらう。祝家を中心に、西の扈家荘、東のわが李家荘、三家は一族同体の仲なのに。……そうだ、杜興、使いの口不重宝のせいかもしれん。ひとつ今度はおまえ自身が行つて、朝奉に会い、直接、よくかけあつてみたらどうだ」

「は。おゆるしとあれば」

「待て、念のためだ」

と、李応は花箋紙を取って再度、前より丁重な手紙を直筆でしたため、さらに印章まで捺して、杜興に持たせた。

杜興は馬に乗って、山腹の祝氏の本拠、独龍岡ノ館へいそいで行った。あとでは、浮かぬ顔いろながら、李応はまた、酒茶をかえて、二人を相手に、四方山ばなしをつないでいたが、しかしそれも、

「遅いのう。どうしたことが」

と、やがてはまた、一抹の不安と、時たつほど、重たい焦慮になつていた。

すると。あわただしく、召使の一人がここへまろび込んで来た。——杜興が馬を飛ばして帰って来たというのである。

李応がすぐ、

「二人でか？」

と、訊くと、

「いえ一人で」

と、顫えていう。

「さては」

と一同、座を立って、中門まで行ってみると、なるほど、袋叩きにもなつて戻つて来たのか、杜興は、紫いろに顔を腫らし、歯ぐきからも血をたらして、悄然と、馬のそばで、衣服の泥を払っていた。

十八 窮鳥、梁山泊に入つて、果然、ついに泊軍の

動きとなる事

独龍山は、梁山泊を去ること、さして遠い地方ではない。

自然、対峙のかたちだった。

しかも梁山泊の勢いは、日に日に旺となりつつある。疑心暗鬼、つねに祝家荘一円が、彼から蚕食されはしまいかと、敵に警戒しあつていた。

特に、祝朝奉の総領の祝龍、一男の祝虎、三男の祝彪——この三人兄弟は——梁山泊を眼前の敵とみなし、配下一帯にわたつて、うさんな奴が立ち入つて来たら、容赦なく捕まえて来いと命令していた。

二度目の使い、杜興は、そんな意気込みでいるところへ重ねて行ったものである。もとより祝朝奉は会つてもくれない。出て来たのは「祝氏ノ三傑」と呼ばれる前述の三兄弟だった。——それも李応が自筆の書簡など目にもくれず、

「渡せぬといつたら渡せん！」

の一点張りで、あげくには、

「きさまも梁山泊の仲間か。でなければ、梁山泊から鼻ぐすりでも貰つたのか」という暴言。

杜興は口惜しかったが、祝氏のおん曹司たちが相手では怒りもならず、唯々、わけをはなして、哀願と陳弁とにこれ努めるほかなかつた。

「くだい！」

三男の祝彪は、短気者か。帰れとばかり、いきなり杜興を蹴とばした。杜興もつい、かつとなり、独龍山三家の誼みと、同族の義を知らな過ぎるなどとい理を述べた。それがまた、若気の兄弟たちを、逆に煽つたものとみえ、二男の祝虎が、こんどは李応の手紙を引き裂いて叩き返したものだ

いう。

「……余りな仕打ちに」

と、杜興は今——紫いろに地腫れした顔の火照りを抱えながら、李応、楊雄、石秀の前に、哭いて、そのくやしさを語るのだった。

「……てまえも黙ってはいられません。第一、主人李応さまを侮辱されたも同様な仕儀では、このまま立ち帰れぬと申しますと、ならば馬に帰してもらえと、家来大勢を呼んで袋叩きとなし、遮二無二馬の背へくくし上げられてしまい、せひなく一応恥をしのんで戻ってまいったような次第でございませぬ」

一ぶ一什を聞くと、ついに李応も怒髪を逆立てて言った。

「いまはもう堪忍ならぬ。近ごろの宗家の小件どもは祝氏ノ三傑などといわれていい気になり、われら同族の長上までを軽侮している風がある。——やいつ、馬を曳け！ 者ども」

たちまち、彼は武装して、馬上となった。獅子面の胸当に、鍍金鋼のかぶとをいただき、背には五本の飛閃刀をはさみ、またその手には長鎗をかいこんだ。そして怒れる鳳凰のごとく、独龍岡へむかって馳け出した。

「すわ、おあるじの一大事だぞ」

と、莊兵二、三百も馳けつづいて行き、楊雄、石秀もまたこれをただ眺めてはいられない。ともにあとから追っかけて行った。

山腹の総本家、祝氏の門では、はやくも偵知していたとみえる。三重の城壁と二つの莊門を堅め、銅鑼、鼓笛を鳴らすこと頻りに急であった。——そしてたちまち、城門の吊り橋

をさかいに、同族李応の人数と睨みあいの対峙となった。

「申すことあり！ 祝の小件ども、これへ出て来い」

李応が呼ばわると、

「才なんだ！ 麓の伯父」

と、三男の祝 彪が、これも縷金荷葉のうすがねの兜に、紅梅緘しのクサリ鎧を着し、白馬紅纓の上にまたがって、三叉の大鎗も派手派手しく、部下百人の先頭に立って城門の外へ出てきた。

「彪だな、きさまは。こらっ、いつのまにきさまはそんな生意気口を覚えたか。その口にはまだ、おふくろの乳の香が消えておらんじゃないか。そもそも、きさまのおやじとこの李応とは、切っても切れぬ同族であるのだぞ。家柄として、祝家を宗家と立てているが、血からいえば、きさまらはわが輩の甥ッ子と申すものだ。……しかるに、何ぞや」

「はははは。李家の伯父。無理をしなさんな。セイセイ息を喘っているじゃないか。その先の文句は彪からいってやろう。

——おれたち兄弟の手に落ちた梁山泊の廻し者、時遷という蝙蝠面をした小盗人を、返してよこせというのだろうが。どうしておめおめ返せるものか。梁山泊はわが祝家莊の敵国だ」

「だまれ、ばかもの」

「ばかとは何だ。さては李家の伯父も、欲にかかって、いつのまにか、ぬすつとたちの後ろ楯に廻ったな」

「よく聞け。あの時遷という男は、決してさような者ではない」

「ないといっても、当人が白状している。道づれの楊雄、石秀の二人に誘われ、梁山泊へ行く途中だったと、拷問にたえ

きれず、白状しているんだから疑いはない。——それを戻せというからには、李家も臭い。梁山泊の手先になって、宗家のわが家に乗っ取ろうという腹か」

「青二才。いわしておけば」

「何を、老いばれ」

祝 彪の朱い姿が、飛焰のごとく、李応へせまった。

李応の長鎗、彼の三叉の鎗が、からみあって、音を発し、閃々といわずまのような光を交じえ、とたんに、両勢入りみだれて陣鼓、喊声、一時に鳴りとどろき、いずれも早や、退くに退けないものとなったが、そのうちに、城壁の高檣から、二男の祝虎が狙い放した一すじの矢が、李応の姿を、どうと、馬の背から射落した。

「や、や」

楊雄と石秀とは、仰天して、馳けよってゆき、「こいつは、しまった。おれたちのために、この人を死なせては」

と、馬の背へ抱き上げ、なお何か、気丈な李応は、叫んでいたが「——ひとまず退け」と、麓へさして、総人数、なだれて帰った。

李応の矢傷はかなり深く、ただ、幸いに致命傷は外れていない。石秀、楊雄は夜ッぴて、その人の病室にかしずいた。そして唯々「申しわけない」を繰り返していると、病床の李応もまた、

「……何の。こっちこそ、うんといつて頼まれながら、その義も果たせず、おまけに、同族仲間の醜態をさらすなど、何ともはや面目ない」

と、顔をしかめて、苦吟するばかりであった。

げにも、不測な禍いは、どんな小事から生じるものやら分らない。鼓上蚤の時遷が、ふと、宿屋の「時報ノ鶏」をちよろまかし、それを三人して酒の肴に食ってしまったなどの一些事が、かかる大事におよぼうとは——と、楊雄、石秀も今はただ臍を噛んで悔やむばかり。

しかも事件はこれきりですみそうもない。祝氏と李家との同族の仲には大きなヒビが入ってしまった。そのうえまた梁山泊というものが、相互の感情対立を事難かしくし、祝氏の三兄弟は、その疑念のまま、さらに二段三段の追撃策を取って、徹底的な圧迫を、李家へむかって下さんものと、密々、うごいている風だった。

「ああ、何とも困った。二人がここで身を退けばいいというだけのものではなくなった。どうしよう。石秀。おれたちとしても坐視していられまいが」楊雄が頭をいたためての嘆息に、石秀もついに、自分の考えを持ち出した。

「このうえは、君と俺とで、梁山泊へ行つて、馳け込み願いと出てみようじゃないか。なにしろ、相手が相手だ、おれたち二人の力では齒も立たぬ」

「む。……馳け込み願いか。よかろう。だが一応は、杜興にも相談し、李応大人にも、計ってみた上でなければ」

と、さつそくこれを、杜興から病床の李応にはなしてみた。李応は一日じゅう考えていたが、このままでは、李家の自滅と彼も観念したのか。反対はしなかった。そしてただひたすら、時遷助け出しの一義が果たせなかったことを、深く病床から詫びているだけだった。

ここ梁山泊の聚議庁では、その日、山寨の群星が居ながら、大評議がひらかれていた。

楊雄、石秀、ふたりの「馳けこみ訴え」が議題にとりあげられていたのである。

總統の晁蓋が、まず最初の「決」を取った。

「よろしい、わかった。二人の入党はみとめるとしよう。しかし、楊雄と石秀の身素姓や、その人間の保証は、たれの推挙になっているのか」

「戴宗です。——先ごろ戴宗が薊州へ旅したとき、石秀を知り、その石秀の義の兄として、楊雄もつれて来たわけで」

と、軍師呉用が、そのそばで、説明をあたえていた。

「だが」

と、晁蓋は、議事をもどして、

「そのほかに、もう一人、鼓上蚤の時遷っているのが、連れじゃあないか。その連れの男が、気に食わんな。……「時報ノ鶏」を盗んで食っちゃうような小盗ツ人……公德心のない乞食野郎……そういう人物は梁山泊へ入れたくない」

「ですが、仔細を聞くと、一芸一能はあり、性根もいたって好い奴だそうですが」

「しかし君」と、晁蓋はやや色をただして、呉用のとりなしに反駁した。「——われわれ梁山泊一味の者は、かつて王倫をここで断罪にしていい、義をとうとび、世間へは仁愛をむねとし、かりにも非道の誹りや恨みを民百姓に購わぬよう、仲間の内は、古参新参のへだてなく、和と豪毅の結びで、一家のように生き愉しもうと、天星地契廟の前で、かたく誓いあつてきているのじゃないか。……そんな、鼓上蚤とかいう

蚤虱みたいな奴は、入れるわけにはゆかんよ。……ましてやだ！ そんな人間を助けるために、この人数をくり出すなどはもつてのほかだ。取り上げるわけにはゆくまい」

「いや、おことばですが」

と、それまで黙っていた及時雨の宋江が、ここで初めて口をひらいた。

「あながちには申せません。鼓上蚤といえ、やはり一個の人命ですから。……それに捕まった原因は「時報ノ鶏」をムシリ食ったつまらん悪戯にすぎませんが、これを捕えた祝家荘では、梁山泊の廻し者として、声を大に、われわれを誹謗しているとのことですよ」

「副統——」と、晁蓋はつねに一目おいて敬愛している宋江のことなので唇もとに微笑をみせながら「いつになく、このことでは、さいぜんから、ご熱心なお顔色ですな。どうしてですか、こんな小事件に」

「いや、事は小さきに似ていますが、なかなかこれは将来の大事を孕んでいる問題です。——なぜならば、祝氏ノ三傑をはじめ、かの独龍山三莊の勢力というものは、このことの距離、地勢、その他いろいろな条件からみて、どうしても行くすえ、わが梁山泊と、雌雄を決せねばならぬ運命をもっておりますよ」

「む、む」

と、かたわらに居並んでいる呉用、戴宗、秦明、林冲、みな大きくうなずいた。

「のみならずです。……祝朝奉は、その身、土豪の長として、領下の民百姓の汗をしぼり取り、財を富庫に充たして贅

に倦んでいますが、なおその欲望の底では官職の栄位を求めています。……折あらば、官軍を手引きして、梁山泊を攻めつづし、それを手柄に官へ媚びんとしているもの。——機先を制して、われから彼を挫くとすれば、今は絶好な潮時ですし、また鼓上蚤の出来した些事も、かえって、いい機ツかけと名分に相成りましょう」

「……………」

「かつはこの梁山泊も、爾来、群雄が集まり、兵馬舟船なども膨大になってきたものの、あえて、非道な掠奪はやっていませんから、ここへ来てようやく、庫中の糧秣や予備の財もとほしくなってきました。そこでもし祝家莊を襲って、彼の富をここへ移せば、まず数年はゆたかに兵馬を練っていられます。まさに一石二鳥三鳥です。……さらに私には、もひとつの望みがある。それは李応を味方に招きたいことです。祝氏の一子のため、不覚な傷を負ったようですが、同族の小倅と、つい控え目に、甘くあしらっていたせいでしよう。撲天鵬の李応は一人物です。なかなかそんな者ではありません。辞を低うして迎えるべき人物でさえあるのです。それだけでも大きな意義があるではありませんか」

満座、すっかり耳をすました。統領晁蓋もいまは黙ってきいていた。衆判すでにそれと一致した色である。晁蓋はついに言った。

「わかりました。一切は先生におまかせする」

「ありがとうございます。では、かくまで主張を通したのですから、このたびのことには、率先、自分が陣頭に出て当りましょう。出陣のしたく、隊伍一切の編成は、統領から軍

政司の裴宣へお命じ出してください」

これで大綱はきまった。

あくる日は、出陣祭が催され、そして楊雄、石秀の入党も、同日、披露された。

相手は、一国の王侯にも比せられる勢力の祝氏である。五、六千の兵は持ってゆかねばならない。——で、山寨の留守には統領晁蓋のほか、劉唐、呂方、郭盛など、本宮のかたために残ることとなったが、出陣の方には、名だたる男ども、あらしの豪傑が、宋江の麾下にしたがって征で立った。

すなわち、宋江を総大将に。

そして、呉学究の呉用を軍奉行に。

花榮、李俊、穆弘、李逵、楊雄、石秀、黄信、欧鵬、楊林。

これが三千人一軍。

また、第二軍は。

林冲、秦明、戴宗、張横、張順、馬麟、鄧飛、王矮虎、白勝

などの三千余人。

それと遊軍の騎兵三百ずつが、両軍のあいだを、漠々と、駒の蹄を鳴らして出た。

すべては、糧秣船とともに、金沙灘の岸と、鴨嘴灘の棧橋とから、ぞくぞく船列にのりこんで対岸へ押しわたり、そこでもういちど、戦闘態勢を組んで西へいそいだのだった。

日をへて、早くも祝家莊の領内へ着く。

敵の本拠、独龍山の影も、その日、空の彼方、昼靄のうち

に早や指させた。

「まず、偵察が先だが」

と、宋江は、司令部とする幕舎を張らせて、粗末な椅子に

つくとすぐ、花栄とふたりで、仮に独龍山三莊図と称する、軍用絵図をひらいていた。

「花栄君、どうもこれだけでは、よくわからんしました、信用して、実戦の指針とするわけにはゆかないね」

「もちろんです。何しろ、実測した絵図ではなく、俄か作製の案内図に過ぎませんからな」

「特に、世間では、祝家莊の魔の道とかいわれている。万一日の防ぎに、周到な用意がなされているのだらう。めったに、この線から先へは乗り込めまい」

「まず、物見隊を入れてみましょう」

「いや大勢はいけない。さりげない、探りを放してみるにかざる」

すると、幕舎の幕の間を割って、ぬっと、赭黒い面をつき出して言った者がある。

「こころえた。あっしが行って、悉皆、道をしらべて参りましょう」

「ああ、李達か。きさまではいかん。ひっこんでおれ」

「なぜです、先生」

「おまえの二挺斧がものをいうのはまだ早い。人には人の能がある」

「黒旋風では役に立ちませんか」

「いざ斬り込みとなったら出て来い。——そうだ石秀と、そして錦豹子の楊林をこれへ呼んでくれ」

やがて、二人は呼ばれて、宋江の幕舎へ入って来た。

楊林は、管鎗の使い手とか。先ごろ神行太保の戴宗が、その旅路から裴宣などとともに、梁山泊へつれて来た新入り仲

間の一人である。

その才を試してみようとするものか。宋江はこの男と、拚命三郎の石秀とに、探りの役をいつけた。

「かしこまってござる」と楊林は、選ばれた身を誇り顔に「じやあ、てまえは短刀一本、ふところに呑み、旅の祈禱坊主に化けて行きますから、石秀、貴公は錫杖の音を目あてに、俺のあとから見え隠れについて来給え」

「いや、ただついて行くのも芸がない。この間までは薊州で、薪木売りを生活としていた私だ。薪木売りに身を窶して行きますよ。いざッてえときには、天秤棒も役に立つ」

二人は、その夜、身仕度を拵え、明ける早暁に村道へ入って行った。

ところがである。——山の中へ深く入ってしまった。オヤ？と慌てて取って返し、里へ出たつもりでいたが、さて一軒の家にもぶつからない。

「変だなあ？」

石秀は首をひねった。李応の館のあった所などは、方角の見当もつかないのである。半日以上、それから、足を棒にして歩いたものの、まるで知恵の環か、迷路の藪にでも入りこんでしまったよう……。果ては路傍の大樹の下に、天秤をおろして、へタツと足を撫でていた。

すると後ろの方から、ジャラン、ジャラン、と、錫杖の音がしてくる。石秀はその者の影を見るとおかしくなった。これもまた狐に憑まれたような恰好なのだ。破れ笠のひさしに手をかけ、元気もなく、ただキョロキョロと道ばかり見廻して来る。

「おう、楊林。どうしたね？」

「やあ石秀か。へたばりそうだ……。いくら歩いたって、並んでいるのは並木ばかり。犬の子にも出会わねえ」

「いったい俺たちは、どこを歩いているのだろう。こんないい道があるのだから深山でもあるまいに」

「ひよっとしたら、梁山泊の襲来ときいて、人間から豚や犬  
コロまで、さっと逃げ散ッてしまったものか」

「そんなら部落の跡があるはずだろうに」

「それもそうか……。するってえと、おれたちは魔魅に化か  
されているかな？」

「よしてくれ。何かこう、ゾツとしてきた。……。おや、へん  
だな。いま風に乗って聞えてきたのは人声らしいぜ」

半信半疑、また歩き出して、一叢の森道を抜けてみると、  
なんと、そこには忽然と、かなり賑やかな田舎町の一聚落が  
ガヤガヤと喧騒していた。

それはいいが、二人がぎよッと、目くばせをつい交わした。

往来の人間は、すべて黄色い袖なしの“袍”を着て、袍の背  
なかには、大きく「祝」の字が染め抜いてある。——のみな  
らずみな非常時らしい足拵をかため、町通りの肉屋、酒屋、  
寺子屋、何かの細工屋、髪結い床の軒先にまで、鎗立て、刀  
掛けが、植え並べてある。

いやもつと、物々しいのは、町会所の柵門で、刺叉やら鳶口  
のごとき物まで並べたて、火事櫓には、人間が登って、四方  
へ小手をかざしているふうなのだ。——すべてこれ、町じゅ  
うが戦時態勢で、また、町じゅうの若い男女が、みな民兵と  
化しているすがたであった。

## 十九

不落の城には震いとばされ、迷路  
の闇では魂魄燈の弄りに会うこと

「こいつは、おかしい。うっかり町へは物騒で踏み込めない  
ぞ。気をつけろ、石秀」

「いや楊林。おめえはそこらの物陰で待ってるがいい。おれ  
一人で探つて来るから」

「いいか、一人で大丈夫かよ、おい」

「おれよりは、おめえの方こそ、ちょこまかして、化けの皮  
を剥がれるなよ」

石秀は言い捨てた。楊林に荷担を預け、ひとりカラ身で町  
中へまぎれ込んで行つたのだった。そして人の好きそうな老  
人が町中の軒ばに佇んでいるのを見ると「……すみませんが、  
水を一杯」と、小腰をかがめて近づいた。

「ああ、水かね。おあがり。土間の甕から勝手に汲んで」と、  
老人はともに中へ入って来ながら——「オやおまえさんは、  
旅の者だね。この町じや見たことのない人だ」

「へい、山東から出て来た棗商人でござんすが」

「そうそう、棗漬は山東が本場だったな。だが、荷物はどこ  
へ置きなすつたえ？」

「それがさ、おとしより、途中でどえらい目にあいましたね」  
「ははあ、梁山泊の寨兵にぶつかつたんだろ」

「まるで戦争支度でしたよ。いきなりそいつらに奪されたの  
で、荷物も何も押ッぽり出して一目散ッていうわけです……。  
おとしより、ご存知ですかえ」

「知らないでかい。見さッしやれ。この町でも、町会所から火ノ見櫓にまで、ああして武装した若い衆が詰め合っているところだよ」

「道理で……この軒にも槍や棒が立てならべてあると思ったら」

「ここは祝家荘といってね、うしろの岡が独龍山だ。つまり岡全体が、ご領主の祝朝奉さまのお館さ、梁山泊のやつらは、そこへ攻めよせて来たんだな、恐れも知らずに」

「へエ、じゃあほんとに戦争じゃありませんか。こいつはまあえらいところへ舞い込んじまった。たいへんですね、守る方も」

「なあに、梁山泊の寄手ぐらいに、ビクともするご領主じゃありませんよ。ここらのご城下だけでも一万戸の余もあるし、岡の東西にはまだ二つの村があって、東には撲天鵬の李応さま一族がひかえ、西には扈の大旦那をかしらに、あだ名を一丈青といって、ひとり娘だが、扈三娘というたいした腕前の女將軍もおいでなさる」

「ほ。お嬢さんでいながらね。それにひきかえ、てまえなどは、さっきからもう足のふるえがガクガクとして止まりませんや。いったい、無事な所へ出るにはどう行ったらいいでしょうか」

「道かね」と、老人はすこし口を濁し気味だったが、「……ま、こっちの部屋へ来て、飯でも喰べて行きなさい」

「どうも、とんだお世話にあずかって相すみません。おじいさん、失礼ですが、お名まえは」

「わしかね、わしは二字名の苗字で、鐘離といますのさ。

この地方には、祝という姓が多いんだが」

「祝氏でかためられているわけですか。ところで、その祝家荘からほかの土地へ出るには一本道でしょうか」

「どうして、ここらの道は蜘蛛手になっていて、迷い込んだがさいご、皆目、出道のわからぬ何とかの藪知らずも同然だ」

「へエ、そんな迷路なんですか」

「いざッてえ時の要心に備えてあるのさ。だがの棗屋さんよ。おまえにだけはそつと耳打ちしてあげる。——なんでもいから、道の曲がり角へ来たら白楊樹（ポプラ）を目あてにお曲がり。白楊のない方へうっかり行くと、行けども行けども同じ藪か、ふくろ路次。どうかすると落ち穴だの、針金の茨だの、猪鬣なども仕掛けてあるぞ」

こう聞かされていた時だった。とつぜん往来をガヤガヤと人騒めきが流れてゆく。「密偵だ、いぬだ」「梁山泊の密偵が一匹捕まった」という喚きなのである。

石秀はぎよつとした。さては楊林が捕まったか。「さあ、どうしよう？」彼は老人とともに表へ出てみた。そして民団の槍や棒の中に、裸にされた縄目の楊林が追ッ立てられてゆくのを見ても、さて、どうにも手出しは出来ずにしまった。

ところへまたも、一群の正規兵が、隊伍肅々と、目の前を通りすぎた。総つきの立て槍を持った騎馬隊と鉄弓組の間には、雪白の馬に跨がった眉目するどい一壮士の姿が見えた。老人は敬礼で見送っていたが、あとで石秀にこういつていた。

「ごらんすつたる。いま行ったのが祝朝奉さまのご三男、祝彪さまだよ。そして扈家荘の一人娘、一丈青という女

將軍とは、お許娘になつてゐる。なにしろ祝氏ノ三傑といわれる中でも、兄弟中で一番の偉者だそうな」

かかるうちに、町はいよいよ戦時態勢の沸騰ぶりだ。これでは道も危険だからと、老人は裏の草小屋を石秀のために開けて、この騒ぎがおちつくまで、泊つてゆくがいいといつてくれ、石秀もまた「では、ご親切にあまえて」と、その晩はついにそこへもぐり込んでいた。

すると宵の口だった。領主からの布令だろうか。一軒一軒大きな声で触れ歩いてゆく声が出た。いわく「今夜半には、例の紅い挑灯、魂魄燈に従つて、民団の壮丁すべて行動せよ。梁山泊の賊將宋江以下を、迷路へ引き込み、期して生け擒りにしてくれるのだ。よろしいか！ 魂魄燈を見失うなよ。日ごろ訓練の魂魄燈の合図に従つて動くのだぞ」と。

一方、祝家荘の入口に駐屯していた梁山泊軍七千の上も、暮天ようやくやく晦く、地には刀鎗の林を植えならべ、星は殺気に白く研がれていた。

「ああ、二人とも捕まったか」

宋江はいま、歸つてきた細作(しのび)の報をきいて、楊林、石秀を物見に出して、つい深入りさせたことを、わが罪のように悔いていた。

「こうなつちや、捨ておけますまい。あつしが先陣して斬り込もう。宋大將はおあとから進んで、二人を敵から助け出し、しておくなさい」

大言はいつも黒旋風李逵の専売といつてよい。これが日頃ならその逸りを制すところだが、いまは宋江も「よし！」と

いつて起つた——。すなわち先駆の一陣は李逵と楊雄。——

しんがりには李俊ときまった。そして宋江は、ひだりに穆弘、みぎには黄信、さらに花榮、欧鵬らの兵幾団を、二陣三陣と備え立てて、戦鼓、陣鉦、トウトウと打ち鳴らしながら、独龍岡へじかに攻めのぼつた。——まさか石秀一人は、難をのがれて、その晩、麓町の一軒の草小屋に、息をこらしていようとは想像もされていなかったのだ。

さらにはまた、祝朝奉家の本拠、独龍岡の山館の前へも、何らさえぎるものなく来てしまった。——見れば濠の吊り橋を高く上げ、門扉かたくとぎして、山城一帯は寂として声もない。

「ざまを見やがれ、恐れやがって」

先鋒は、猛夫の李逵だ。なんでただ見ていよう。例の二挺斧を諸手に、濠へ下りて、浅瀬から馳け渡らんとする様子に、楊雄はおどろいて、連れもどした。

「暴勇は笑いぐさだぞ。敵には計があるらしい。とにかく、引つ込め」

「ばかをいえ。ここまで来て思い止まれるものか。臆病風に吹かれたなら、きさまは後ろで見物していろ」

言い争つてゐるところへ、宋江の中軍もぞくぞく着いて来た。宋江は二人の争いを見て言った。

「楊雄のいうのが正しい。これへ来てからわしも思い出した。——敵二臨ミテハ急二暴ナルナカレ、と彼の天書にも載せてあった。こよいの急襲はちと暴だったぞ。すべてみな兵を退げろ」

「えっ、退げるんですって、何もせずに」

「そうだ、命令にそむくやつは、罰するぞ」

言には峻烈なするどさがあった。が、それでさえ間に合わないほど、とたんに、轟然と一発ののろしが天地をゆすった。もちろん彼方の城中からである。それと百千のたいまつが赤々と満城にヒラめき立ち、門楼、やぐら、石垣の上などから、火矢、石砲、弩弓の征矢などが雨とばかり射浴びせてきた。「しまった！」

宋江はこの深入りを転じるべく、声をからして、

「全軍、元へ引り返せ。行く行く伏兵にも気をくばれ！」

しかし、ひとたび崩れた人馬の混乱は容易でない。さらには、意外な方角からも、石火矢の唸りが火を噴いて樹林を震わせ、そこらの巨木の上からも乱箭が降りそそいでくる始末だ。

「伏兵は四面にいる。慌て惑うな、四散するな。ただ一道をさしてつき破れ」

ところが、たちまち全軍の足はバタと止まり、逆に先の方から押し戻されて来る。「なぜ進まん？」と後ろでいえば、前方は行き止まりの袋路次だという。「では、べつな方へ」と転進すれば、そこでもまた行く手にあたって、カラ濠があり針金の柵があり、小道を探ってみてもソギ竹だらけで歩けもしない大藪の闇だとなる。

「ああ、惨たる敗北！これがこの宋江の最期とは」と彼は嘆じた。だがそのとき、天来のような騒めきが殿軍からつたわって来た。「石秀だ」「石秀が来た！」というのである。「はて？」と疑うまもなかった。まぎれもないその石秀が宋江の

馬前へ来ていた。彼は昼からの仔細を早口に告げ、そしてなお、この迷路についてこう呶鳴った。

「ただやみくもに歩いて、迷うばかりで荘の外へは抜け出られませんぞ。白楊樹が正しい道の目じるしです。曲がり角へ出たら、なんでも白楊の立木を目あてに折れ進んで行ってください」

やがて方向はそれによって驟々と支障もなく流れだした。しかしその進路にはまた伏兵のうごきが見え、その動きはいよいよ執拗に、いよいよふえるばかりだった。そこで宋江はかさねて石秀にただしてみた。

「なぜだろう。行けども行けども、伏兵がつきまとうのは。いかに祝朝奉の勢力でも、こう手兵の多いはずはないが」

「そうです。正規の兵ではありません。あれは祝家荘の民兵が、魂魄燈の合図にあやつられて、あっちへ動き、こっちへ廻り、いわゆる変現を見せているので大勢に見えるわけです」

「なに、魂魄燈の操作だと？」

「ごらんなさい。あの高藪の上に、ふらふらと、人魂のような赤い挑灯がしきりに暗号を振っているでしょうが」

「オオあれが。花栄、花栄」

「なんですつ、副統」

「いまの話聞いたろうが。君は空行く雁をさえ射落すほどの達人だ。あの遙かな赤い灯を射消せまいか」

「造作はありません。こころえました」

キ、キ、キ……と引きしぼった花栄の弓弦がぶんと鳴ったと思うまに、遠い所の一点の火光が、とたんにぱつと掻き消された。それから、もとより訓練もない土民兵のこと、闇

はしどろな気配だけだった。いや、するとすぐ一颯に散り去った木の葉のような跡を、一隊のひづめが地を打って近づいていた。遊軍の李俊と秦明の隊が、彼らを駆けちらしつっ合流して来たものだった。

いつか朝となつてゐる。全軍は村はずれの一丘に集合して、からくも死地をのがれえた無事を見合い、さて、人員点検の段になると、

「黄信がいけない！」

「黄信は討死にしたらしい」

と、俄かにみな悲しみだした。

すると、黄信の手についていた手下の兵が言った。

「いや黄將軍は、死んではおりません。ゆうべ葦の中で、伏兵の熊手に馬の足を攫われ、落馬したところを、大勢の敵にのしかかられていたような様子でした」

「きさま、なぜ今まで黙っていたか」

宋江は怒つたものの、最下級の兵ともいえない手下のことだ。怒るよりは、さて、いかにその黄信を取り戻すか。また昨日捕われた楊林の身も——と、朝の野天兵糧をみなしなすますやいな、評議にかかった。

すると、病関索の楊雄がすすみ出てこう献策した。

「独龍岡の強味は、三家鼎足の形をなしているからです。けれどいつかも申しあげた通り、東麓の一族、撲天鵬の李応だけは、本家の祝氏と気まぎらくなつてゐるだけに、こんどは加勢に出していません。……だのに、副統にはなぜ、そこへお目をつけられませぬか」

「なるほど、それはわしの一失だったな」

宋江は彼の策をいれ、さっそく東の李家を訪ねて、李応を味方に抱きこむべきだと思ひ立った。

二十 二刀の女將軍、戦風を薫らして、

猥漢の矮虎を生け捕ること

宋江は自身その使いに立った。

楊雄に道案内させ、花榮、石秀など二百騎を後ろに連れて、李家荘の濠端まで来てみると、はやくも門楼では非常太鼓が聞こえ、吊り橋もひきあげられて、寄せもつけない敵たる警戒ぶりにみえる。

「これは梁山泊の宋江と申す者です。ご当家に敵意はない。ただひとえに、ご主人撲天鵬李応どのへ拝姿をえたく伺つた事、なにとぞお取次ぎを。お疑いなく、お取次ぎをねがいまする」

濠越しに、馬上の宋江は、こう大音声をくりかえした。

——と、まもなく、彼方の石垣から一そうの小舟が渡つて来た。これなん、楊雄とは親しく、また楊雄を恩人ともしてゐる、李家の食客、鬼臉児の杜興だった。

「おう兄弟」——と、楊雄はさっそく、彼を引いて、宋江にひきあわせたが、杜興は何ともすまない顔つきで、こういった。

「せつかくですが、主人李応は、病中でもあり、なんとしても、お目にかかれん、とのみで苦りきつておられます。またの折もございますこと、今日のところはどうぞ一つおひきとりのほどを」

「矢傷をうけて、ご療養とは伺ッておる。だが、会えぬとい  
うのは、それだけの理由でもありませんまい。ご本家、祝朝奉  
にたいするご遠慮か」

「それもありません。それとまた、主人は直情の士です。  
梁山泊の人間は、いわば、無頼の集まりで、しかも天下の  
叛逆人だと、卑しむ風がないでもございませぬ」

「ごもっともだ！」と、宋江はいった。「それでこそ撲天鵬  
その人らしい。さるを、しいてその人に義を曲げさせようと  
したのは心ないわざだった。ご面会はあきらめましょう」

「申しわけございません」

「なんの。……この上は李応どのの援助を待たず、祝家荘の  
敵は、自力で討つ。……もしその以後に、ご縁もあらばお目  
にかかる」

「主人李応も本来ならば三家一体で、独龍岡の守りに立つと  
ころですが、こんどのことでは、本家の仕方をいたく怒ッて  
おりますので、加勢には出向きません。——とはいえ、西の  
扈家荘の女將軍一丈青は、日月の双刀をよく使う稀代な女傑  
ですし、独龍岡そのものも、不落の城、充分お気をつけなさ  
います。わけてその莊門は、前と後ろ、前後同時に攻めなけ  
れば、破れるものではございませぬ」

杜興はなお、知るかぎりの地理やら、攻め口、城中の内状  
などを、宋江に助言した。——宋江はふかく謝して、さて、  
以前のわが陣地へ帰るやいな、云々であったと、むなしく戻  
って来たわけを、帷幕の面々へはなして聞かせた。

「ぶざけやがって——」と、話の途中で、怒り出したのは李逵  
である。「副統も副統だ、なんで唯々諾々とお引っ返しなすっ

たのか。李応とかいう奴、二夕股者にちげえねえ。まずその  
李家荘からさきに蹴ちらそうじやございませんか」

「いや、李応は立派な人間だ。彼を敵にしてはならん。それ  
よりは、囚われの味方二人の生命が心もとない。諸君、もう  
いちどこの宋江の令をきいて、祝朝奉の本家へ向ってはく  
れまいか」

言下に、鎧響きを立てて、帷幕のかしらだった者、ざっと、  
一せいに起立をみせた。

「おことばまでもありません。して先陣は誰としますか」

「もちろん、この俺だ」と李逵が買って出るのを、宋江は、  
一眇の下に叱った。

「ひかえろ。李逵の先鋒はまます事を破る。君はこんどは後陣  
に廻れ」

李逵はむくれる。——しかし宋江は、馬麟、欧鵬、鄧飛、  
王矮虎の四名を指名し、

「わし自身が、先陣に立つ」  
と、言った。

第二隊には、戴宗をかしらに、秦明、楊雄、石秀、李俊、張横、  
張順、白勝。

第三隊は林冲、花榮、その組の中に李逵も入っている。つ  
まりは、総攻撃である。赤地に「帥」の大字を白抜きした大  
旗をさきに、陣鼓鑿々、祝朝奉家の山城へせまった。  
ここ独龍岡の城門の大手には、巨大な青石に、一篇の頌  
が刻んである。

森々の剣  
密々の戟

柳花 水を斬り  
草葉 征矢を成す

濠を繞る垣は是れ壯士

祖殿には在り 三傑の子

当主の朝奉 智謀に富み

事しあらば 満城吠ゆ

独龍山上 独龍岡下

窺う外賊は仮にもゆるさず

一触 霏々の虫と化し飛ばさん

「おや、まだ何か、その杭に？」

宋江が近よって見ると、それには新しい墨気で、こう詩句

めいた文字が読まれた。

水泊ヲ填メ平ゲテ晁蓋ヲ生擒リ”

梁山ヲ踏破シテ宋江ヲ捉エン”

馬麟、王矮虎らは、これを見るなり怒髪をさかだてて。

「うぬ、小癩な唄い文句。ようし、ここを踏みつぶさぬうち

は、梁山泊へはひきあげぬぞ」

しかし、宋江は冷静だった。

三軍のうち、第二隊だけを、この前門にのこして、自身の本隊と第三隊は、道を潜行して、搦手の裏門へかかった。

ところが、はしなくも今、敵側からも搦手の坂を、馳け下りてきた一勢がある。——それぞ大手の寄手の背後を突くべく、兵五百ほどをひきつれて裏門を出た扈家庄の秘蔵むすめ、あだ名を一丈青という女將軍であったのだ。

宋江は、見るやすぐ、左右へ言った。

「才才、あれなん噂の扈三娘にちがいない。誰かあの蝶の如

き戦士を、手捕りにして連れて来ないか！」

すると、言下に。

「おう、まかせておくんなさい」

馳け出したのを誰ぞとみれば、槍を取っては無敵と号する王矮虎その者だった。「矮虎だ、矮虎が行ったわ」と、やんや、やんやの声援である。それに応えて、敵方でもワアアツという鬨の声。はやくも扈三娘はその青毛の駒をのりすすめ、単騎、ござんなれと待ちすましている姿。

しかも、涼 霄の花も恥ずらん色なまめかしい粧いだつた。髪匂やかに、黄金の兜巾簪でくり締め、鬢には一對の翡翠の蝉を止めている。踏まえた宝鏡には、珠をちらし、着たるは紅紗の袍で、下に銀の鎖かたびらを重ね、繡の帯、そしてその織手は、馬上、右と左とに、抜き払った日月の双刀を持っているのであつた。

「……これは、いけない」

はるかに見ていた宋江は、一丈青へおめきかかった王矮虎のいつにない槍のにぶさに、すぐある一事を思いあたっていた。

元々、矮虎ときては色情に目のない性分である。その彼をして、窺窺たる美戦士へあたらせたのは、けだし人をえたものではない。事実、王矮虎は近づいて彼女の二刀に接するやいな、すでに戦意と色欲とは半々だった。でも、隙をみせれば斬られるから必死は必死におめきかかって、丁々閃々、ひたいに汗をかいて、幾十合と接戦のおめきはあげつづけているものの、ともすれば、ああ美しい女だ！ とつい思い、刃

がねの火花にも、何か、べつな精気をふと漏らしてしまいうだった。同時に、一丈青もそこは女の直感で、

「ま、なんていう敵だろう。ふざけた男よ」

と、いちばい、憎さも憎しと柳眉を立てて、綾なす二刀の秘術をきわめ、魔術とも見えるその迅い光の輪のうちに、発止と、相手の槍を見事、巻き取って搦め落していた。

「——あッ、しまった」

鞍の上から矮虎が思わず身を泳がせる。すかさず、一丈青の一刀が、片手なぐりに肩をなぐった。カンと金属的な音がそれにこたえたのをみれば、幸いにも、鎧の金具が、矮虎の一命を救っていたものとはみえる。だが、よほどな衝撃だったのだろう。そのまま矮虎の体は鞍からもんどり打っていた。

「だれか。はやくこの敵を、搦めておしまい！」

一丈青の涼しげな声だった。そう後ろの味方へいうとすぐ、彼女の二刀はもう次の敵を迎えている。矮虎危うしとみて、救いに出て来た欧鵬だった。

だが、間に合わず、矮虎はたちまち、城兵方の縄目にかかり、どつと敵に氣勢をあげさせている。欧鵬はあせつた。挑みかかった彼の鉄鎗もまた、蝶になぶられているようで、いたずらな、空を感じてきたからだった。「いまいしよ」と、猛れば猛るほど、自分の呼吸も馬の息も、ただ荒ぶのをどうしようもない。

宋江は、これ、ただならずと見て、

「鄧飛も出る。馬麟も助太刀に行け」

と、躍起になった。

もう一騎討ちを見物している場合でない。

敵の搦手門からは、祝朝奉の長男、祝龍の一手三百人が

現われて、宋江の側面へ狙い寄っている。——果然、宋江の身辺にも殺気が立つ。ところへ、大手の秦明が一部隊をひッ

さげて応援に来た。宋江はよろこんでそれへもすぐ命じた。「ここはいい！ 馬麟、鄧飛とともに、あれなる扈三娘へ当たてくれ。矮虎は早やあの手の者に生け捕られている」

「こころえた」

秦明の一隊が、猪突をしめすと。

「待った」

とばかり、その途中で、祝龍の手勢が横からぶつかってきた。

だが、秦明の狼牙棍（棘立った鉄棒）にあたりうる敵はない。

もしこのとき、城中から祝家の武芸指南番、欒廷玉が助けに出て来なかったら、祝龍もあぶなかったとさえいえる。

「拙者が代る。あなたは退いて、一ト息入れておいでなさい」

欒廷玉は、その新手をひきいて、秦明の前に立ちふさがった。そしてさんざん戦い疲らせたあげく、偽って、逃げ出した。そこに埋伏の計があるとも知らず、秦明は騎虎の勢いのまま追っかけて行き、草むらの落し穴へ馬もろとも顛落した。伏兵がいたのである。

そればかりか、鄧飛も同じ計にかかった。

鄧飛は、一丈青の部下を蹴ちらしていたのだが、ひよいと振向いたせつな、

「ああ、秦明が？」

と、戦友が陥ち入ったらしい危難の姿に、われを忘れてそこへ飛んで行ったものである。いわばわれからかかった畏の

ようなもので、近づくやいな「馬縛めの縄」と呼ぶ陥穽に引ツかかって、たちまち伏兵の好餌になってしまったのだった。かさねがさねというほかはない。

一方、欧鵬と馬麟とは、

「これはそも、人か天女の怪か」

と、なおまだ、女の一丈青ひとり、男ふたりして、もてあましていた。

ただ強いとただけでは言い足りない。身の迅さは浪をかすめる燕のようである。また、白雪の肩がひらめく風と戦っているようなものだ。そしてうかとすればすぐ織手の二刀が斬りこんでくる。息もできぬほど、みぎ、ひだり、と斬りきざんで来る。それさえ、受け太刀ぎみで喘々いつていると、そこへ、

「お嬢さま、一匹はひきうけましたぞ」

欒廷玉が、加勢に飛んで来たのである。はッと、欧鵬は馬を交わした。けれど、欒廷玉が振り下ろしたくろがねの鈍は、せつな、欧鵬のどこかにぶつかつたらしい。欧鵬は落馬し、ウームとそのまま起ちもえない。

このとき、宋江もまた、全軍のさきに身をさらして、乱軍のなかにいたので、

「それっ、欧鵬の体を、馬の背へ拾い上げろ」

と、とつさの指揮はしたものの、その欧鵬を、助けとるだが、やっとならなかつた。馬麟も一丈青に追われ、すべての敗色はどうしようもなく、味方が味方を押して、坂下遠くの、ま南まで逃げなだれた。

ここには第二隊の楊雄、石秀、花榮らがいた。この惨敗に

歯がみして、

「夜叉ではあるまい。よしっ、小癩な女戦士を」

と、代って進み出たが、すでに一丈青や祝龍の姿はない。敵の新手は、名だたる祝氏の三男坊、祝彪の五百余騎となつている。

こんどの敵は、みだれ矢をあびせてきた。近づきもえない矢ぶすまである。そのうち槍組二百人が突進して来るし、駿馬にまたがって祝彪が、これまた雷光のごとく出沒して、ひとつ所になどとどまっていけない。

陽はたそがれ、夕雲赤く、まったく、乱戦のかたちをおびてきた。——大手のかたの、李俊、張横、張順、穆弘らも、濠水に入つて、敵壘に取りすがろうと企てたが、つぶて、乱箭、石砲などに会つて寄りつけず、陸上の戴宗、白勝も啞然たるばかりで、手のくだしような様子である。

「ああ、過つた。戦の指揮などは、この宋江のがらではなかつた。これ以上の死者を出すのは見ていられぬ」

宋江は急に退軍の銅鑼をうたせた。彼らしいところである。薄暮の下に総勢をまとめて、泣いてくやしがる猛者どもをなだめて、村口の方へひきあげ初めた。といつても無事には退けない。敵の追撃に、返しては戦い、戦つてはまた、退路をさがす、といったようなくなるしみた。

しかも敵は、地理に明るいし、急追、また急追の気負いをゆるめない。宋江の軍は、闇夜彷徨のすがただった。そのうち、行くての道に先廻りしていた一勢の敵が現われた。夜光虫のような燦々たる一騎がその先頭を切つて来る。胆、驚くべし、女將軍の一丈青であつた。

二十一 小張飛の名に柳は撓められ、花の  
美戦士も観念の目をつむる事

一丈青の扈三娘は、あれからいちど、城へ入って、息をやすめていたものか。粧いまでもかえている。

嵌玉のかぶと、磨銀のよよい、花の枝を繚い出した素絹の戦袍すずやかに、

「宋江とやらのおからだを戴きましようか」

と、言い払い、ホホとその白い花顔が闇を占めて笑っているかのよう。……宋江以下、修羅という修羅の場かすをふんできた梁山泊の男どもも、思わず馬列を恟み立てて、

「や？ 一丈青」

と、何とはなくぞくとした。

だが、そんな神経を持たないのもある。黒旋風の李達だ。

「なにを、阿女つちよめが、洒落くせえ」

と、薄刃金の二丁斧をひっさげて、彼女の前へ挑みかかった。しかし、かたわら疎林のうちで、ザツと、風の通るような音がただけで、一丈青の影は、もう李達の目のとどく所にはいかなかった。

かえって、李達は求めもしない敵の雑兵の中に置かれ、二丁の斧は、大いに怒った。そしてそこはたちまち一団の乱戦と化した。

「後ろからも、敵が尾けてくる」

宋江は、敵の詭計を怖れた。周囲も彼へ、ここにかまわず、落ちろとすすめる。

ところが、先へ落ちて行くと、またもや行くての闇のうちから、こう美しい音声が擲揄うように響いてきた。

「逃げようとて逃がしはせぬ。——宋江とやらのお体をいただきましようか」

「あっ？」

と、駒をひるがえすまもなかった。

日月二刀のひらめきが彼の身をかすめ、それを庇おうとした誰か一人は馬上からずんと斬り下げられていた。戛然と、戟の柄がつづいて斬られた。暗さは暗しである。宋江は危なかった。

すると、さらに一陣の突風がこの渦の中に渦を加えた。キラと夜目にもしるき獅子頭の兜巾と、霜花毛の駿馬にまたがった一壮漢の姿を、その一勢のうちに見て、宋江はおもわず地獄で仏のような声を発した。

「豹子頭か。加勢に来たのは豹子頭の林冲か」

「林冲です、林冲ですつ。ここは打ちすててお落ちください」  
聞くとすぐ、宋江ならぬ一丈青のほうか、颯ツと、駒の背に身を沈めて横道へ馳け出した。

林冲といえは、梁山泊以外でも、「当代の小張飛」という勇名がある。それには一丈青も女ごころの奮えにふと吹かれたものか。

「待てつ。女將軍」

林冲は逃がさない。馬の速さがてんで違う。観念したものであった。彼女がふいに馬を向けかえた。林冲の打物は、丈八の蛇矛でありなしに、睫毛へ迫る白い焰のような蛇矛の光を交わしながら

ら、彼女のしなやかな腰から胸はまるで柳の枝を撓めるように何度も反った。

彼女は死を忘れて恍惚とした。林冲到翻弄されるのが甘美でさえあった。気づいたときは、手にさいごの一剣もなく、林冲の猿臂にかかって、鞍の上から糞りとられていた。宙を飛び巨大な男の腕のなかに、彼女はあきらめの目をつぶっていた。窒息の境が甘い夢のようだった。

「副統、生け捕ってまいりました」

投げ出された所は、すでに村口の梁山泊軍の幕舎だった。宋江は無事一ト足先に着いていたし、ほかの幕僚なかまも、続々、たどりついて来つつある最中らしい。

「林冲。まったく貴公のおかげだ。これでいささかは梁山泊の面々へも申しわけが立つ」

しかし宋江は、終夜、浮かない容子だった。明け方までは寝もしていない。——三々伍々、逃げおくれた部下の着くのを、いちいち迎えて人員のまだ不足なのに心を傷めていたのである。

おびただしい損害だった。翌日は帳に入ったが、なお輾転と自責にもだえた。そしてやがて、おもい暇をして帳を出ると、

「女はここにおけぬ。組の頭四人、兵三十人で、一丈青の身を馬の背にくくし付け、即刻、梁山泊の内へ、送りどけて来い」

と、命じた。

また、欒廷玉のために、重傷を負ってうめいている欧鵬の身を案じて、それも同時に、山寨へ送らせるようにした。

「はてね？」

使いに選ばれた小頭たちは、快馬をそろえて村口を離れるとすぐ、顔見合せてクスと笑いあったものである。

「どうも、ただじゃないよ。宋副統も元は女のしくじりで山寨入りしたお方だからな。このみちはまたべつさ。きっと一丈青におぼしがあるにちげえねえ。……ふ、ふ、ふ」

戦には勝ち誇ったが、祝氏一族の側にすれば、独龍岡の花、一丈青の扈三娘を敵の手にゆだねた一事は、

「さんねんだ、千慮の一失」

と、あとの悔やみを、地だんだにしたに違いなからう。ましてや、彼女の許嫁、祝朝奉の三男祝彪の心中はなおさらだろう。——その腹いせには、天に誓って、宋江を生け捕る。そしてさきに捕えてある黄信、鄧飛、秦明、また楊林、そのほか多くの捕虜とを一トまとめにして、開封東京の朝廷へつき出し、それによる恩賞と名誉とをもって、このうらみを晴らさねば——と、期して、矛、鏃を研ぎ直したにちがひなかった。

が、一方の宋江にしる、

「これぞ」

と、案を打って、三たび起つべき策もなかった。

快々と、昨日も今日も、彼は帳をたれて深く考えこんでいた。

ところへ、はからずも、

「山寨の軍師、呉用先生がお見えです」

と、村道の見張りから報らせて来た。

「えっ。呉学究ごがくきゆうどのがお見えだと？」

折も折である。

宋江は丘を下って、そも何事かと、呉用を迎えた。

一行は五百人。呉用をかしらに、阮げんノ三兄弟、呂りよ方、郭かく盛せいなども加わっていた。そして一行中の車には酒、乾ほし肉にくなど多量な物資まで持ってきたので、その夕は、これが全軍にねぎらわれ、久しぶりに陣地には生色がよみがえった。

「総統ちゆうとうの晁ちやう蓋がいどのを初め、山寨やまでは、えらくあなたのお身を案じていますよ」

呉用のことばに。

「いや面目ありません」

宋江は、一そう沈んだ。

「して、ご近況は」

「二度も惨敗をかさねました。のみならず、楊林、黄信、さらに秦明しんめい、鄧飛とうひと四人までも、敵の囚とらわれとさせてしまうほどな始末で」

「それも途中ででききました。一丈青を差立てて行く味方の者から」

「もし、林冲りんちゆうがなくなれば、あの功もなかったところです。何たる愚将でしょう。わらって下さい。晁ちやう総統には、もはや会わせる顔がありません」

「は、は、は。そうご卑下ひげにはおよぶまい。誰が来て指揮をとっても、ここの祝しゆ氏しの独龍山の備えでは、同程度の損害は避けえられん。……しかし、宋副統、機会は来ていますぞ」

「え、機会とは」

「かならず陥おちる」

「独龍岡どくりゆうかうが」

「そうです。仔細をいわねば、そうかと、おうなずきもあるまいが」

「いったい、それはどういうわけで」

「山寨やまに残っている石勇せきゆうをご存知であろう」

「石勇。もちろん、知っています」

「その縁故の者が、ごく近ごろ、山寨やまへたよってやって来た。——なんと、その者がまた、祝家の指南番、欒らん廷玉ていぎよくと仲がよい」

「ほ？」

「かつまた、味方の楊林や鄧飛とも、親交があった間柄とか。……ところで、その者が、ここ祝家莊しゆくかそうにおけるあなたの苦戦を聞いて、自分からすすんで一つの計略を申し出てきたというわけだ。奇縁、また奇計ではありませんか」

「なるほど、奇妙ではあるが、奇計とはまだ何のことか、わかりませんが」

「ごもつともだ！ 順を追って、ひとつ今夜は酒酌さけみながら、その吉報をおはなししよう。……当人どもは、すこし遅れ、追ッつけ五日以内にはここへ参るはずですから」

以下、呉用の物語るところであるが、呉用のことばを仮るにはちと長すぎる。項こうを分けて、しばしその由来ばなしへ舞台を移すことにしよう。

×

×

山東の一角に、地名登州とうしゅうとよぶ海浜の村がある。

海に近いくせに、いやなもの名物だった。州城外の山には、虎、豹ひょう、狼おおかみなどの猛獣が多く、年じゅう人畜の被害が

一ト通りでない。

ところ。近日この地方を諸国巡閱の大官が通るといふ沙汰がある。登州奉行はそのために、令を發して、

「期限付き、虎退治の指令を、村々の百姓獵人へいい渡せ」と、土地の庄屋や村役場へ敵達してきた。

ここに、兄を解珍、弟を解宝という獵師がいた。父もなければ母もない兄弟暮らし。

解珍はあだ名を兩頭蛇といい、解宝は双尾蝮とよばれている。いずれも名のごとき七尺ゆたかな壮漢であり、州中の獵師らは、

「解氏の二雄士」

と、おそれたてまつっているほどだ。わけて弟のほうは、その太股に飛天夜叉の刺青を持ち、嶺を駆ければ、鹿狼は影をひそめ、鳥も恐れ落ちなんばかりな風があった。

「兄貴、行って来たよ、村役場へ」

「日限りの敵達書か」

「しようがねえやな。お上のいいつけじゃあ」

「どうだつていうんだ、一体その文句は」

「日限までに獲物を出せとよ。日限すぎたら受付けねえつてんだ。罰として、しばらく首にするとさ。……だが、いい獲物には、褒美を取らず。……まあおきまり文句さね」

「首はいやだな。褒美といくか」

「かねがね狙っていたあのツボだ。あの嶺のやつを狩り出そうぜ」

「合点だ。弟、今夜のうちに、罨弓、毒矢、それから弩弓、さうだ刺叉も持って行こう。揃えておけよ」

日限は三日とある。

明くるや早くに、二人は薄刃の山刀を腰に、手には必殺道具を抱え、しめたる帯は虎の筋、豹の皮の半袴といういでたちで、雲を踏み、風にうそぶいて、「ここらは出る」と、日ねもす歩き廻っていた。

さがすときには、ぶつからない。虎の糞を見ただけである。あくる日もまた、乾飯、牛骨を舐ぶり舐ぶり、この日もまた駄目。

「兄貴、あしたで日限れだぜ」

「知ツてやがるのかな、虎のやつ」

「意地のわるいもんだ。手ぶらで歩いてる時にや、よく、のそついで来やがるくせによ」

「弱つたなあ。考えると寝つかれねえや」

野宿の夜半もすぎていた。

火の気は禁物。霧が寒い。抱きあって二人は寝ていた。いつかぐうっと深い鼾声をかきこんで――。

「あつ？」

刎ね起きたのは夜明けまちかだった。

「兄貴、まちがいねえ。今のはたしかに、罨弓が弾ぜた音だぜ」

「しめた。行ってみろ」

転び出てみると、暗中でもがいている巨大な物がある。かねがね狙っていた大虎が、見事、罨弓にかかっていたのだ。だが、近よつて、これを刺叉にひっかけようとすると、いわゆる猛吼一声というやつ、ウオオツと背を怒らし、矢を負ったまま大虎の影は、彼方の谷崖の下へ、どどどと雷雲の

ころがるように落ちて行った。

「いけねえ、こいつアしまった」

「なにさ、弟、あわてるこたあねえ。毒矢の毒がまわっているんだ。落ちた所でおだぶつき。それ以上は逃げッこねえよ」

「だって兄貴、この崖下は、たしか因業旦那と伴の毛仲義のやしきのうちだぜ」

「べらぼうめ。毛旦那に借りがあるわけじゃなし、ちよっとお庭うちを踏ませておくんなさいぐらいな頼みに、何の苦情があるもんか」

道を廻って、二人は山腹の豪勢なお大尽やしきの門を叩いた。まだほの暗い早朝だ。莊丁らは渋い目をこすって何かと出て来る。毛旦那もやがてあとから現われた。

「なんだえ、一体お前らは、こんな早くから」

「あいすみません。とんだお騒がせをいたしました。じつあお上の厳命で、三日と日限りの虎を狙っていましたんで」

「ああ、あのお達しだね。そして巧く獲物を仕止めたのかい」

「と思つたら、罠弓を外しやあがつて、お庭つづきの地内へころげ落ちてしまったわけです。おそれいりますが、裏庭を通していただき、ご地内を探させて貰えませんかでしょうか」

「何かとおもつたらおやすいことだよ。いいとも、いいともよ！ だがの解の兄弟、まだ外は暗い、そこでお茶でも飲んで話していなよ」

「でも、ごやかかいの上に、お世話をかけては」

「なんの、わしも一緒に行ってみたいし、朝茶は何を措いてもだ。まあお待ち」

これが案外に悠長だった。やっと毛旦那が莊丁に鍵を持た

せて、裏庭の木戸へ出て来たときは、はや嶺の端に、朝陽が出ていた。

「旦那、めったにここは開けたことがないので、錠前が錆付いていて開きはしませんぜ」

莊丁の声を聞くと、毛旦那は言った。

「なに開かない。開かなかつたら金錠を持ってきて叩きこわして入るがいい」

そうして入って、裏山じゅうを探してみたが、どうしたか、虎はどこにも見あたらなかった。

二十二 牢番役の鉄叫子の楽和、おばさん飲屋を訪ね

てゆく事

おかしい？ と解珍、解宝の兄弟はともに首をかしげ合う。しかし毛旦那が住む屋敷地域の裏山一帯、これ以上は歩き探す余地もなかった。

「おい、解の兄弟——」と毛旦那はくたびれ顔をしづらせて。「どこにも虎の死骸などはこちらがっていないじゃないか。他山だろう。大迷惑だナ、当家にとつては」

「いやそんなはずはございませぬ。この上の高原で罠にかけ、罠を引つ外して逃げる虎を、たしかに一本は狙いたがわず毒矢を射当てていたんですから」

「だって見えまい。見当らんものはどうしようもない」

「旦那。お待ちなすって。……ちよつとここをごらんなすつておくんなさい。滴々と血がこぼれていますぜ。オオ上の方から崖の灌木や草までが折れなびいている。毒矢を負った虎

はここへころげ落ちて来たにちげえねえ」

「ふざけちゃいけないよ。野獣猛禽、何が咬み合った血やら知れたもんじゃない。おまえ方は朝ッぱらからわしの家へ因縁をつけに来たのかよ」

「とんでもない。そんな道楽半分の騒ぎじゃござんせん。こちとは命がけです。今日のうちに登州のお奉行所へ虎をさし出さなければお布令どおりの厳罰ッてことは、旦那もこの村の庄屋ならご存知のはずでございましょうに」

とかく言い争って見たが、前とは打って変って毛旦那は解の兄弟の言いがかりだと言い張って相手にしない。兄弟の方ではまた「これは毛旦那も今日中に役署へ虎を出さなければならぬので、自分の地内へ逃げこんだやつをこれ幸いと横奪りして口を拭いてやがるのだな」と、早くも腹の中ではいらんでいる。

あげくの果ては、喧嘩腰になって「家探しても何でもしてみろ」「オオしてみなくて!」と、行くところまで行ってしまった。けれど村一番の大尽屋敷だ。広さは広し、それに荘丁雇人らが二人のあとに付いて廻って離れない。ついにその家探しても得るところはなく、兄弟はやけのやん八、

「みていやがれ、出る所へ出て白黒をつけてやるから!」

と、捨て科白を吐いて、毛家の門を飛び出してしまった。

そして出るとまもなく途中で毛家のせがれ毛仲義にばったり会った。仲義は一群の見知らぬ男どもを連れていたが、兄弟の訴えを聞くと、

「よしよし、俺と一しよに来い。親父は何か悪い雇人に欺されてるのだろう。おれが帰って家じゅうを調べてやる」

という同情的なことばだった。やれ有難えと二人は仲義に従いてあとへもどった。ところがこれはなお悪かった。なぜなら仲義はこの日の五更(夜明け前)ごろ、わが家の裏山で拾い獲た大虎を、さっそく奉行所へ届け出た上、なお予防線をしいて、こう訴えておいたものである。「この虎に難クセをつけ、村の悪獵師の兄弟が、家へ火を放けるの、毛家の奴らをみなごろしにするなどといっています。ひとつ諸人の迷惑、虎以上な兩名を、お召捕りのうえご処罰ねがいたいもので……」と。——そしてことば巧みに、その場から役人捕手を連れて戻って来た途中だったのだ。

解の兄弟は、これではまるで、われから求めて縄目に陥ちたようなものでしかない。元の門内へ入るやいな、捕手と荘丁らに組伏せられて高手小手に縛られてしまった。毛の大旦那は二人が家探しをした狼藉のあとを役人に示し、なお出まかせな訴状を書いて子の仲義とともに、後刻、登州奉行所へもツともらしい顔をして出頭におよんでいた。

村の小事件とみなされ、奉行自身は白洲には顔もみせない。一切は奉行名代の第一与力、王正という者が係となって処置された。ところがこの王正は毛家の女婿にあたる者。なんでたまるう解兄弟の調べもほんの形ばかり、拷問、爪印の強制、大牢送りの宣告と、わずか二日ほどのうちにかたをつけられ、

「いづれ流刑の地は後日申し渡す」

と、揚屋入りに附されてしまった。

ここの牢屋あざかりは苗字を包、名を吉といい、牢屋中の囚人からは、もちろん閻魔の如く恐れられている。のみなら

ず毛家の鼻グスリは奉行以下、すべてに行きとどいているうえ、与力の王からは「……いづれ一服（毒薬）ものだ」と囁かれていたので、

「やいつ、土下座するんだ。ええいつ、面を上げろ」と、のツけから噛みつきそうな権柄で、身柄、罪状の書類を片手に。

「……ええと、なんだって、両頭蛇の解珍と、双尾蝮の解宝だと。蛇が兄きで、蝮が弟か」

「へい」

「へいだけじゃ分らねえ。どっちなんだ」

「仰っしゃるとおり、兄の解珍が両頭蛇と呼ばれておりますんで」

「てめえが、弟で蝮か。覚えとけ、おれのつらを。ここへ入ったからにや、蝮も蛇も、のさばらしちやおかねえぞ。おい牢番」

「はっ」

「こいつらを一番湿めッぱい奥の大牢へぶち込んでけ」

「こころえました。さッ起て」

引ッ立てて行ったが、人前のきびしさに似ず、その牢番は人なき牢屋まで来ると急に声をひそめて兄弟へいった。

「……わしを知らんか。わしをよ」

「えっ？」

「おまえ方は、提轄（憲兵）の孫さんとは？」

「あっ、あの人なら、いとこです。母かたのいとこですが」

「わしはな、その孫提轄の小舅にあたるもんですよ」

「へええ？ ……」と見すえて。「ではもしや、楽和さんてえ

のは」

「それだ、その鉄叫子の楽和ですわ。もうクヨクヨしなさんな。わしがここにいる！」

天は兄弟を捨てず、だ。悪庄屋の方に毛家の女婿がいたのは運の尽きであったようだが、ここには解兄弟の遠縁のひとりが牢番としていたのである。

楽和はもと茅州の生れで、生れつき惺発で器用なたち、わけて耳の官能がすぐれていた。ひとたび聞いた唄はすぐ覚え、しかも節まわしが巧みで、すこぶる美音だった。

鉄叫子というアダ名は、すなわち、それに由来する。

登州城の東門外、十里牌とよぶ地に、盛っている飲屋があった。この帳場にいつも見えるおかみが、

母大虫の顧

という氣ツぷしのいい年増女で、ただたんに、「おばさん。おばさん」で通っている。しかしこのおばさんはただ女ではない。奥でのべつ開かれています常賭場の連中も一目おいているし、店の者はもちろん、客の呑兵衛も母大虫の白みたいなお尻がでんと帳場にござる日はゴネもきかないし踏み付けもできなかつた。

「ごめんよ。こちらは孫さんのお店で？」

「はい、はい。いらっしやいませ。孫はわたしの亭主ですよ。

飲屋の看板は、おかみのわたしだと思つてたら、変つたお客さまですわね。さあ、どうぞお好きのところへお掛けなさいまして」

「では、ちょっとここを拝借しましょうか」

「ホ、ホ、ホ。お堅いこと。お酒ですか、お肉？ それとも博奕おあそびなら奥の方ですが」

「いいえ、おばさん。てまえはあなたのお連れあい孫新さんの兄、孫提轄そんていかうの妻の弟にあたるもんですよ」

「へエ。それじゃ楽和がくわさんとかいう？ ……」

「はい、その楽和で」

「これはまあ、おめずらしい。ついご城内の奉行所にお勤めとはうかがっていただけれど」

「こちらこそ、ご無沙汰のままですみません。…：じつはその、今日は折入ったことだね」

「なにか急な御用でも」

「急も急、人命二つにかか関わることで出てまいりました。しかもあなたの、お従兄弟いとこさんにあたる者ですから」

「えっ…：。じゃあ、ことによったら登雲山の麓ふもと村で獵師りゆうしをしている解かいの兄弟のことじゃございませんの？ わたしは小さい時にあの人たちの親御さんの手で育てられ、そしていまの孫新かたうに嫁よめいてきたわけなので、ほんとの弟みたいに思っている仲なんです」

「兄弟ふたりのも言っておりました。じつは十里牌はちで居酒屋をやっている姉さん同様な人がいるんだが…：と、牢の中で、涙をたれて」

「げっ。入牢ですって？」

「はあ。じつはこんなわけがらでしてね」と、鉄叫子てつきょうしの楽和がくわは、そのいきさつと、密ひそかに、自分が二人から頼まれて来た仔細を告げ、「…：なにしろ、上は奉行から下は牢預かりにまで、毛家の袖の下がとどいていますからヘタをするとここ数

日中には一服盛られてしまいかもしれません」

「ま！ …：。どうしたらいいんだろ？」

おばさんはサツと顔色まで失った。毛の薄い描き眉、かなつぽ眼。しょせん美人の内ではない。それをご当人は承知か否か。大きな頬の黒子ほくろ一ツ残してそのほかは真ツ白けに塗りたくり、半裸同様なあらわな腕には金無垢きんむくの腕環うでわデカデカ。

髪にも色気狂いのような釵さいし子しやら簪かんざしやら挿して、亭主はおろか、股旅またたびでも、呑み助の暴れン坊でも、まちがえばちよいとつま掴つかんで抛ほうり出すなどお茶の子だといわれているこのおばさんにしてさえ、しんそこは、やはり女であったらしい。大粒の涙をこぼして早やオロオロの容ようす子すだった。

やがて、店のすみにいた若いのへ。

「何さ！ 何でポカンと口を開いて人の顔を見てるんだよ！ はやくどこか探して良うちのひと人を連れておいで。急な話があるんだからといって」

幾人もの若いのがすぐ表へ飛び出して行く。その間におばさんは楽和がくわにむかって礼をのべ、またくれぐれ兄弟のことを頼み、きつと助け出してみせるからと涙を拭き拭き誓って言った。

楽和は牢屋勤めの身、すぐ城内へ戻って行ったが、入れちがいに、おばさんの亭主孫新が、何事かと息せき切って帰って来た。この人、眉目奇秀びちくきしゅう、体軀は長くしなやかで、どこか元まごころい、武士さむらいの風がある。

祖先は瓊州けいしゅうの出で、軍官の裔すえであり、いまでも実兄の孫立そんりゅうは、登州守備隊の提轄隊長の職にある。兄弟ともに、尉遲うぢ恭きょう恭きょう——唐代の勇士——の再来だと称され、この弟孫新の方は

小尉遅とよばれていた。

「……ふうむ。そいつはえらい災難にひっかかったな」

と、孫新は女房から聞く一ぶ一什にただ唸って、深く腕ぐみを結んだままだった。やがてこうぼそつといった。

「なにか。楽和さんには、吝つたれずに、たんまり銀子を預けてやったか」

「そんなことを抜かつてはいませんよ。地獄の沙汰以上、牢屋まわりは金ですからね」

「よし。じゃあこっちから助けに行くまで、何とか工合よく計っておいて下さるだろう。あとは思案ひとつだ」

「思案でいったって、おまえさん、どんな思案をお持ちなのかえ」

「べらぼうめ。そうおいそれといい智慧が出るものかい。毛家はあの財力と勢力だから、しよせん地道な手だての賄賂じや敵いッこはねえ。まず腕すぐだ。その腕すぐには、鄒淵、鄒潤の叔父甥を、こっちの者にしておきてえが」

「あ、あの登雲山から降りて来ては、よくうちの賭場で遊んでゆく山の衆かえ」

「そうよ。なんとかならないかなあ」

「来るよきつと。今夜あたりは」

「あてがあるのか」

「丁よ半よには目のない二人だもの。おとといだったか。一日おいたらまた来るぜ、といって山へ帰ったからね」

え」

はたしてこの夕、異相の大男二人が、のそつと店へ姿をみせた。賭場の常連だから黙ってスウと奥へ通ってしまふ。おばさんは良人の孫新へチラとすぐ目ばたきを見せる。世辞を撒き撒き孫新があとから奥へついていく。——店いッぱいの客あしらいの隙をみて、おばさんもまた、やがてのこと、奥へ消えた。

賭場でない別室では、鄒淵と鄒潤を上座に、そして孫新が取りもち役で、酒酌み交わして飲んでいたが、母大虫の顔を見るなり孫新が、

「才、女房、お二人さんへまずお礼をいえ。解の兄弟の救出しに、腕を貸そうと、ご承知してくんなすつたぞ」

「えっ、では。……ああ、これで」

「おばさんよ……」と、鄒淵がすぐその傍らから。「そんなにうれしいのかい、おれたちの助太刀がよ。こんな可憐いおばさんなんて、ついぞ見たことはねえの。なア鄒潤」

「まったくだ。それだけに俺たちにしろ、うんと張合いがあるッてもんだ。叔父貴、いま孫新へ言ったことを、もう一ぺん話してやりねえ」

「おう、じつはおばさん、おれたちの腹もこうなんだ」と、ここにこの叔父甥二人も、日頃の意中をうちあげた。

というのは、彼らはいま登雲山に、八、九十人の手下を持っているが、元々これが彼らの素志でもない。

山東の梁山泊には、旧友三人がその仲間へ入っている。錦豹子の楊林、火猊の鄧飛、石將軍の石勇、その三人だ。

——かたがた、宋公明以下の漢たちの会盟をきき、羨ましくてたまらない。いつかはケチな街道稼ぎなどすてて一党へ身を投じたいと願っていたものの、さて踏ん切りをつける機会もなかったという述懐なのだった。

さもあろうと、これは信じられる。

叔父と甥だが、年ばえは二人とも大しては違っていない。

叔父の淵には出林龍とアダ名があり、甥の潤は、あたまの後ろに瘤があるので独角龍と世間で異名されている。

ともに萊州の産れだが、武芸はいずれ劣らない。慨世の気があり過ぎてかえって世に容れられぬ狷介の男どもだ。わけて甥の方はムカツ腹立ちの性分で、かつとなると何へでも頭でぶつかって行く癖がある。かつてその瘤頭で松の木をへし折ったなどの話さえ持つ独角龍であった。

しかしこの淵、潤の二龍にも、苦手な者がいないではない。それは城内の守備隊である。「そいつに出て来られたら……」

と、いささか怯む風が見えなくなかった。すると孫新が胸をたたいて請け合った。

「その心配はまず無用だ。じつは守備隊にはてまえの実兄孫提轄という者がいる。その兄も呼んでひとつ事を打明けてみましょう。切るに切れない血肉の仲、敵に廻る気づかいはございませんよ」

その夜。孫新は店の若い者を城内へ使いにやった。——女房の母大虫がとつぜん発病して危篤におちた。一ト目会いたいといっている。夫婦ですぐ見舞に来てくれ。——こう出たら目な迎えをやって兄の孫立と嫂とを驚かしたもののなのである。

二十三 登州大牢破りにつづき。一まき山東落ちの事

病尉遅

それは孫立の綽名だ。

いろ青白く、青粘土みたいに沈んでいるが、まなこは鯉の金瞳のごとく、黒漆のアゴ髯をそよがせ、身のたけすぐれ、よく強弓をひき、つねに持つ緋房かざりの一鎗も伊達ではないと、城内はおろか、守備隊の中でも、こわがられている孫提轄だ。

弟の女房が危篤と聞いて、

「わからないもんだな。鬼のかくらんということはあるが」と、妻を車に乗せ、自身は騎馬で、兵卒十人ばかりを供につれ、急遽、休暇願いを出して、明けがた十里牌へ急いで来た。

だが、弟の店へついて、奥へ迎えられてみると、なんと出て来たのが危篤のはずなその母大虫で、弟の孫新もけろりとしたもの。——孫立夫婦は、呆ッ気にとられるよりはまず腹が立った。

「おい、おばさん。孫新もだ。悪洒落はいい加減にして貰いたいな。こっちは官の勤務が忙しい体なんだ」

「なんともすみません。嘘もよほどな口実でなければ、すぐ来てはくださるまいと思いましたが」

「ひとを驚かすにも程があらあ。いったい何のためにこんなまねして呼んだのだ。俺ばかりか妻までを」

「じつは兄さん。不慮の災難が持ち上がって、この弟夫婦は

よんどころなく店を畳み、不日、梁山泊へ仲間入りいたしました」

「なに？」

と、病尉遅孫立は、きつと、軍人になった。

「おれは州城の提轄を奉職している者だぞ」

「わかっていますよ兄さん。だからこそわざわざお断りしておくわけなんで。……弟のわたしが州城の牢屋をぶち破り、あげくに梁山泊へ落ちのびて行ったとあれば、当然、肉親のあなたへも累がかかり、後日の咎めはのがれぬところでございますからね」

「きさま、いよいよ聞き捨てならんことをいうが、一体どういうわけで、そんな大それた暴挙をせねばならんのか」

「ゆるしてください。じつは女房のやつが幼少に養われた恩人の子二人——獵師渡世の者ですが。——それがいまむじつの罪で牢内にいるばかりか、悪庄屋の毛に買収されて、その女婿の与力から奉行、牢屋あずかりまでみなグルになって、解の兄弟を闇から闇へ殺そうとしているんです」

「ふう……む」と、孫立はうめき出し。「解珍、解宝のふたりなら、おれにとつてもまんざらあかの他人ではない」

「聞いてませんか。いまいった事件は」

「知らなかった。奉行も与力も、よほどこつそりやったんだな」

「そのはずです。みんな毛家の賄賂に買われている仲間ですから」

「ひどいもんだな今の役署は。いやおれも官の禄を食んでいるその中の一人だが、こうまで腐っているとは思わなかった」

「兄さん、天下到る所、今の役署ツてえなあそんなモンですぜ。上は宋朝の宮府から下は与力、岡ツ引の小役人まで」

「孫新！ おまえが梁山泊へ行くうってえ気もちはよく分るよ。だが、あそこへ入るには誰か手づるがなければむずかしい。見込みはあるのか」

「あるんです！ おい女房、鄒淵と鄒潤さんをここへお呼び申して来い」

「あ。待った」

「なんです兄さん」

「その二人は登雲山の草寇じゃないか。登州守備軍に籍をおく俺とは日頃からの仇敵だ」

「ですからさ兄さん。一つ会ってみてお互いの腹をぶち割っておくんなさい。彼らもただの草寇ではありません。私たちが同様、慨世の恨みをもつ者。そして梁山泊の中には、石勇、鄧飛、楊林という三人の知己を持っている。——そこでまずともに落ち行くときは梁山泊と腹を決め、城内から解兄弟を救い出すことにも腕を貸してくれる約束になっているんです。兄さん、この通りだ。お願いします。私たち夫婦が一生のお願いだ。どうかお力をかしておくんない」

「……むむ。一つ考えさせてくれ」

孫立は深く腕をくんだ。大きな運命の岐路に立たされた容である。しかし他人の鄒淵、鄒潤さえも弟に組みしてくれたという。実兄として見ていられようか。かつは奉行所内部の腐敗にもほとほとあいそがつきってくる。彼はついに意を決した。

事。こうまとまると段取はバタバタついた。

彼と、鄒との会見も、心地よくすみ、さっそく大牢襲撃の密議に入り、鄒淵はいちど山へ帰って行った。山寨の人馬財物を一ト括げにし、子分のうちから二十人を選び抜いて、ふたたびここへ戻って来る約束だ。

また孫新は、そっと城内へ行って、楽和に会い、これとも密々な手筈を打ちあわせ、さらに孫立の屋敷へも寄って、目ぼしい貨財を若い者に運ばせる。「兄のいいつけで」という弟の行為なので、屋敷の召使もなんら不審を抱くふうでもない。

かくて勢揃いの朝が来た。

その朝、おばさんは外出着に着かえて、おめかしも念入りに、何か進物籠のような物を若いのに持たせて一ト足さき城内へ立って行く。

残る一同、孫立、孫新。また鄒の叔父甥二龍、その子分の店の若い者、孫提轄の士卒十名。すべて四十名余りは、店を閉じて、夜明けまえから酒をくみ合っていたが、やがて、おばさんが立ったのを見とどけてから二隊に分れ、裏と表の口から風の如くここをすっかり出払っていた。

「さて。……今日は一つやっちまおうか。小面倒だが、毛家の女婿のあの与力が、まだかまだかとまたうるさく言ってくるやがるにちげえねえ」

包吉。

例の、登州牢預りの閻魔面だ。

監視亭の机の小ひきだしから、独りこっそり毒薬袋を取出して、それを二人分の量に薬紙へ小分けしていた。やりつけているに違いない。薬剤師のような手つきである。

「……おや？」

あわてて、毒薬を元の小ひきだしへ仕舞い込むと、窓から外を覗き、何を見たのか、あたふたと早足に出て行った。

いま彼方の牢路次の角を、スウと見つけない大女の派手ッぽい姿が消えて行った。それから奥は解兄弟が入っている大牢があるだけである。そこで包が急いで行ってみると、そこには牢番の楽和が水火棍を持って立っていたので、出合いがしらに、包は呶鳴った。

「ええい、あぶねえ。女はどうした？」

「あ。差入れに来た女ですか」

「差入れに？ ……。差入れならなぜきさまが預かって、一

応監視亭へ届けに来んか」

「いま行こうと思っていたところですよ」

「だって女が見えんじやないか」

「え、見えませんか。待てといっておいたんだが……。はてな、小用にでも行ったのかな？」

そこへほかの牢番人が走って来て。

「おかしら。ただいま孫提轄がお目にかかりたいとかいって、

どんだん表門を叩いていますよが」

「何の用か用だけを聞いておけ。ここは守備隊の管轄じゃねえんだからな」

言い捨てるやいな、大股に大牢の獅子口へ駆け寄って行き、またも後ろの楽和へ、かみなり声を叩きつけた。

「やいっ。錠前があいているじゃねえか。大事な錠前がよ

「へえ、そんなはずはございませんがね」

「ばか野郎。きさまあ、何のためにここへ立っているんだ、

何のために」

「でも、開けた覚えはないんでして」

「ケッ。まだ言ッてやがる。——それっ、見やがれ」

包は癩癩まぎれに獅子口の厚い戸をドンと押し開けた。とたんに何か内部の異様を見たにちがいない。及び腰に上半身を中へ入れるやいな、

「あッ。女？」

と、叫んだ。

いやその叫びは、彼が前のめりにそのまま牢内へ転がり込んだ驚きとも一つであった。後ろの樂和が力まかせに彼の尻を押し飛ばしたによることはいうまでもない。すかさず、樂和もすぐ飛び込んで、

「畜生っ」

と、その巨体へ起たせもやらず組みついたが、猛然、でんとばかり投げ飛ばされた。

しかし刹那、おばさんの母大虫は、包のふところへ深く入って、そのワキ腹へ明晃々のあいくちを一ト突き加えていたし、解宝は後ろから抱きついて動かさず、また解珍は、包の佩剣を抜いて包の胸元を刺しつらぬいた。

「うまくいった！」

「さ、早く外へ」

このときもう牢宮中は蜂の巣をついたような騒ぎとなっていた。孫立と孫新は牢門を破ってあばれこみ、おばさん、樂和、解兄弟とひとつになり、また、べつな一手の鄒淵、鄒潤の二龍は、はやくも奉行所を突いて、毛家の女婿の与力王正の首をひッさげて合流して来た。

「さ。ひきあげろ！」

「目的は遂げたというもの」

「これ以上の殺生は無用無用」

町中はもうたいへんだ。軒並みバタバタ店を閉じている。しかし追って来た奉行所役人も州兵も、馬上、弓をつがえて殿軍していた相手が、

「やや。孫提轄だ？」

と分ってからは、たれひとり近づこうとはして来ない。そのまに、おばさん、解の兄弟、そのほかみな、辻風のように、城門の外へ奔り出していった。

孫立もあとから馬で十里牌へ追っ着いた。店の前には貨財を積んだ馬、車、旅支度をした若い者。すでに立退く準備が待ちかねている。

「わたしは馬車より馬がいいよ」

おばさんは一頭の馬に乗る。孫立の妻は、馬車の上だった。馭者はさっそく鞭を鳴らす。

すると二十里も行かぬうちに、解宝、解珍が言い出した。「すでに一命のないところを、こうして助けていただきながら、なお勝手な妄執を吐きくようですが、毛家のおやじと、せがれの毛仲義、あいつら親子を思い出すと、どうでも腹がおさまりません。てまえどもはあとから山東へ追っつきますから、どうぞ皆さんは一ト足先へ落ちてください」

「いや、解の兄弟。おまえたちがこのまま立ち退けぬというのは無理もねえ。この孫立も一しよに毛家へ乗り込んでやるうぜ」

すると、鄒の二龍も、

「あそこは登雲山の麓村。いわばおれたちの古巣に近い。おれたちも行つてやる」

と、途中で馬を向け変えた。

こんな一隊に寄り道されては堪ったものではない。その晩の毛家の惨状は目もあてられなかった。毛の大旦那も倅の仲義もはずたに斬りさいなまれ、あげくに家屋敷はアツというまに焼き払われた。莊丁雇人も多かつたが身を挺して殉じるほどの者もない。だから蓄えの金銀も鄒の叔父甥が「残して行くのも、もったいない」と、馬の背に付け放題な始末であつた。そして炎の空をあとに、一行は道四、五十里を急ぎに急ぎ、やがて先の仲間に追いついた。

かくて、日ならず道は山東に入り、やがて行きついたのは、梁山泊を彼方に見る江岸の一酒店。すなわち見張り茶屋の石勇がいる孤亭だつた。

鄒と石勇とは旧知の仲。くだいことはここでは略す。――

ただ石勇が一同へ話したことは重大だつた。

「まことに、せっかくでござんしたが、あいにく宋公明さまは、先頃からお留守で、ここんとこ、泊中にはおられません。同様に一味の楊林も鄧飛もいません。……というわけは、ご承知かどうか。祝家莊の祝朝奉をあいてに大戦の最中なんです。……しかもこっちは敗け色です。楊林と鄧飛も、じつは敵のとりこになつて始末。なにしろ先には、祝氏の三傑だの、鉄棒つかいの欒廷玉なんていうのがいて、どうにも手に負えないんだそうで、いやもう梁山泊も、今はただの日じゃあねえんですよ」

二十四 宋江、愁眉をひらき。病尉遲の一味、祝氏の内臓に入りこむ事

この日、軍師呉用は、泊中を立っていた。

呂方、郭盛、阮の三士など、五百人の新手をつれ、祝家莊の苦戦へ、応援に行く首途だつた。

同勢、船から上がつて、隊伍をととのえていると、江岸の酒店から石勇がとびだして来て、

「軍師。ちよつと、お立ち寄りねがわれますまいか」と、兵馬発向のドサクサ中なので、手ツとりばやく、云々の人たちが、梁山泊入りの望みで来ていることを告げ、

「そのうちの一人、病尉遲の孫立と申すものが、もし陣へお連れくださるなら、一策を献じたいといつておりますが」と、つけ加えた。

「なに、病尉遲？ ……ではその弟は、小尉遲孫新じやないのか。よろしい会つてやろう」

かねて彼らの名は聞いている。

やがて山林龍の鄒淵、独角龍の鄒潤、解珍、解宝らすべて呉用の前に姿をならべた。――わけて鉄叫子の樂和、母大虫のおばさん、孫立の妻など、みな呉用の眼には善良に見えた。

「病尉遲は、あなたか」

「は。てまえ孫立です」

「なにかよい策があるとか聞いたが」

「もし陣中へおつれ下さればです」

「もちろん、同気を求めて来た諸君。大いに歓迎する。が、

その計略とは」

「てまえがまだ武芸修行中のころ。樂廷玉とは、師を一つに同門であったことがあります」

「ほ……相弟子だな」

「ですから彼の気性、彼の手のうちはほぼ分っております。

かたがた、ここずいぶん会っていませんが、このたび、登州守備隊から鄆州の駐屯へ移動を命じられた途中、なつかしさに、顔を見に立ち寄ったといつて行けば、這奴、必ず自分をよろこんで迎えるでしょう」

「内へ入って、外のわれわれへ、機脈の便を与えるという計か」

「内臓に入つて、内臓を切り破る策です」

「おもしろい」

呉用は見抜いた。これは使える、と。

しかし孫立たち八人へは、一日おくれて後から来るがよいと命じておき、呉用とその軍勢は、即刻、現地へ向けて先発した。そして祝家村の陣営——宋江の幕舎へつくやすぐ、まづ事情とこの一計とを呉用が参陣の手土産として、彼に語りつたえたものなのだった。

×

×

次の日、孫立たちの男女一行も、この陣所に着いた。すぐ、ひきあわせの小宴。そして、各々身素姓を名のり合う。宋江は眉をひらいた。

ここ不利な戦いをつづけ、面目を失ったのみか、四人の味方の将を、敵の手に捕虜としてゆだねている。

かつは多くの部下も死なせ、日夜、やるかたない悶々を抱

いていたところである。が、いまはまったく心身も冴え返った。呉用が来た。また思わざる味方が加わった。彼らのもたらしてきた奇計なども、まさに天来の救いともいうべきか。宋江は天の星を拝した。

「戴院長」

と、あくる日、呉用は陣中の戴宗をよんで、急使を托した。

「ご足労だが、一ト飛び梁山泊まで行ってもらいたい。——至急、泊中の四名の者をこれへ急派して欲しいのだ」

「こころえました。誰と誰ですか」

「鉄面孔目の裴宣。聖手書生の蕭讓。通臂猿の侯健。玉臂匠の金大堅」

「みな一芸の者ですな」

「む。それと、仮装用のこれこれの服飾をたずさえ、すぐ駆けつけてくれるように頼む。なお、詳しくはこの中に書いてある」

一封を彼にさづけ、踵をめぐらして来るところへ、柵の哨兵がつかえて来た。

「扈家荘の扈成という者が、陣見舞の酒肉を持って、お目にかかりたいといつてまいりましたが」

「扈家荘とは、敵の独龍岡を繞る三家の一つではないか」

「はっ。西の麓にいる祝氏の一族です」と、幕舎の内から宋江が出て来て。

「いやさしつかえございません。伝令、ここへ通せ」

扈成は、司令部の前まで来ると、膝をついて、宋江を再拝した。

「自分の妹は、ご存知の扈三娘こと、一文青というものにござ

ざりますが」

「あ。あの凛々しい女將軍の兄上か」

「女だてらに、乱軍の中を駆けまわり、ついに尊軍のとりことなつてしまいました。めんばくもございません」

「なんの、擒人を出したのはお互いだ。恥じることはない」

「が、じつは……」

「何を言い難そうにしておられるのか」

「妹がとりのぼせて、尊軍へお手抗いいたしたのも、じつは祝氏の一男と縁組みの約があつたからでございまして」

「それで？」

「なにとぞ一つ、若い娘のこととおぼしめし、ご寛大なおなさけの下に、彼女の身柄を、てまえにお返しただけですまいか。どんな償いでもいたします。また向後は決してお手抗いはさせません」

「よろしい」

「えっ。ご承知くださいますか」

「代りに、こちらの取られた捕虜、王矮虎をお返しください」

「さ。その矮虎どのは」

このとき、呉用が口を入れた。

「どこにいます。矮虎は現在」

「独龍岡の本城に、鎖でつながれてますので、さて、われらにはどうすることもできません」

「ははは。ではお話になりませぬ。だが、こういう約束ならばしてもよい。今後一切、扈家荘からは加勢をくり出さないこと。そして祝朝奉から入り込んだ者は、そちらの手で捕えておくこと。——その約条が守れるなら、後日、妹さんの

身はきつと返す。ただし妹さんは早や梁山泊へさしたててあるが、あちらでは絶対安全にさせてある。それだけはご安堵なさい」

扈成は、約を誓い、拝謝してすぐ帰った。——陣中こんな風景もあつたりするまに、一方、孫立の組は、呉用のさしずの下に、着々とそのはかりごとを進めていた。そして一日、

登州守備隊 提轄孫立

と大書した旗じるしを作り、馬卒二十余り、同気七名を伴い、昨夜ひそかにこの陣をはなれ、わざと道を遠く廻つて、やがて独龍山の裏がわ、祝氏の城の搦め手道へかかつて行った。

「御指南」

城兵の一人が駆け込んで来て告げた。

武芸指南役の欒廷玉は、ちよつど城内の弓の広場で、祝氏の三傑——朝奉の息子、祝龍、祝虎、祝彪らと、なにか立ち話していたところだった。

「なんだ、あわただしげに」

「はっ。ただいま登州守備隊の孫立と名乗るお人が、同勢二十七、八名で御指南をたずねてまいりましたが」

「どこへ」

「搦め手門の濠の外へ。中に女人も二人ほど連れております」

「おかしいなあ。ほんとか」

そばで、ふと聞きとがめた祝龍が。

「何者です、先生。それは」

「以前、おなじ師匠の許にいた同門の者ですが」

「ならば会ってみたら分るじゃないですか。女連れだとか。まさか物騒な者じゃあるまい」

「ではおゆるしを得ましようか。兵卒、濠の吊り橋を下ろして通せ」

孫立の一行は、まもなく郭門でみな馬をおりて、これへ来た。相見るや、樂廷玉も才と双手で迎え、孫立もまた手をさしのべ、かたく握り合って、お互い久闊の情を見せた。

「しばらくだったなあ」

「ほんとに」

「君が登州にいることは知っていたが、どうしてこれへ来たのか」

「急に鄆州駐屯の任へ就くと、総管辞令でいやおうなしに廻されてさ」

「鄆州だとすると、梁山泊に近いな」

「それだ。このごろやたら暴徒の数がふえ、おだやかならん風聞もある。移動もそのおかげらしいよ」

「じつはここも今、やつらと一戦の最中なのだ。よく途中で、梁山泊の者に遮られなかったな」

「いや聞いている。だからわざわざ道を变えて搦め手から訪ねて来たんだが……。いまあちらへ行ったお三人は誰なのか」

「祝氏のご息がただろう。見たか」

「いや、先様でチラと俺たちの方を流し目にして行かれたただが、さてはあれが有名なご当家の三傑だったか」

「君っ」

と、樂廷玉は、孫立の肩へ手をのせて。

「どうだ、ここで一ト働きしてみんか。君の受けた移動命令にも添うものだ。寄手の賊のなかには宋公明がいる。彼を生けどって都へ差立て、さらに梁山泊をも突き破れば、一躍大功名、將軍の印綬はかたいぞ」

「む。同門の友が宋朝廷の禁軍に臨み、白馬金鞍を並べるなどの日がもしあったら、そいつあ、どんなに愉快だろうな」

「さ、本丸へ通ってくれ。ご息がたへ、紹介する」

そのあいさつ、儀礼もあって、当夜の晚餐には、めずらしく当主祝朝奉までが席に姿を現わした。

終始、弾んでいた樂廷玉は。

「大殿。これです。昼、お耳に達しておきました旧友の病尉遲孫立というのは」

「孫立です。初めて御意を拝しまする」

「やあ、あんたか。こんど総司令部の命で、近くの鄆州へ移駐して来られたと聞くが」

「さようです。何かと以後は、ご教導のほどを」

「とんでもない。当家こそ、ご支配の区域になる。よろしくおちかづきを願わねばならん。そして、そちらのお方は？」

樂和は、とたんに、まごついたが、すぐ孫立が仲をとって言った。

「これは鄆州の役署の方で」

つづいて鄆淵、鄆潤、孫新、解の兄弟らをさしては、

「いずれも、登州の軍人です。てまえには腹心の部下でもあります」

と、機転をはたらかせたものである。このあざやかな紹介に疑いを抱いたものは誰ひとりもなかったらしい。

祝朝奉しゅくちゆうほうといい、三傑の息子といい、決して凡庸ほんような人物ではなかったが、孫立一行ことうのうちに、孫の妻と、おぼさんのいたことが、なんととっても、女づれと視る油断みの一因を醸かもしていたのは争えない。そして行李こつりを積んだ馬やら馬車やら、どう見たって、これは赴任軍人の引越ひきこしだった。

「女は女同士がよからう」

と、朝奉は彼女らを伴って奥へみちびき、自分の夫人、側室こしむと、そして侍女たちと一しよに遊ばせ、さらに元の席へ返って来て、

「ひとつ、乾杯しましょう」

と、たいしたご機嫌ごきげんぶりだった。その歓談のあいだに、孫立は隣の席の祝龍へ、ちよつと、こんなふうに当って見た。

「さすが、磐石ばんしやくなお城ですな。敵が攻めているのかいないのか、まったく何もわかりません」

「でも梁山泊の寄手は、昼夜、齒がみして、どこかを突ツツいているんですがね」

「及びもつきません。しよせん、やつらの力では」

「しかし勝敗は逆睹ぎやくとできません。また一気に勝負もつけかねますよ。這奴しやつらは逃げるだんになれば、水を渡ってあの蕭々しやうしやうたる芦あしの彼方へ隠れこんでしまうでしょうから」

「いやそのときには、官でも水軍を押し出しますよ。不肖ふしやうが鄆州えんしゅうに駐留ちゆうりゆうしているからは」

「よろしくどうぞ」

かくて、三日目のことだった。城楼や城門でただならぬ動揺どうりよくめきがわき揚がったとおもうと、鉄甲、花やかな味方一騎が、「宋江みずから、一軍をひきいて、近々と攻めよせてまいり

ましたぞ」

と、城庭を駆け巡り駆け巡り、報じていた。

「なに、宋江が」

すぐ立ちかける祝龍しゅくりゆうを抑えて、三男の祝彪しゅくひゆうが、

「いや、おれが行く。まかせてくれ。おれが捕まえて来る」

と、言い争った。いや言うやいな、その床几場しやうぎばを躍り出し、濠ほの吊り橋を下ろさせて、部下百騎ほどの先を切って駆け出して行く彼だった。

二十五 百年の悪財、一日に窮民きゆうみんを賑わし、梁山泊軍、

引揚げの事

城楼、城門、城壁。その中の無数な顔という顔がみな大きな口を開けツ放しに開けていた。鬨とぎの声である。それに合せ銅鑼どらや金鼓きんこも万雷の音を揺すってやまない。

城外へ出た味方への声援なのだ。

——と見るまに、祝彪しゅくひゆうの一隊は、勝ちほこったかの如く、濠ほの吊り橋を渡って、とうとうと莊門の内へひきあげて来た。その車仕掛けの吊り橋は味方を収めるやいなキリキリと高く巻き揚げられる。

「ざまはねえ！ 宋江そうかうの臆病者おくびやうめが」

祝彪は大勢のいる莊の床几場しやうぎばへ来るなり言った。

「宋江と聞いたので、ござんなれと討って出たが、なんのこど、相手に出て来やがったのは、梁山泊りやうざんぱくでは弓の上手とか聞く小季しょうき広の花栄かえいという奴。相手にとって不足だが、そいつもまた、手もなく逃げてしまつてさ……。いや張合いのねえこ

とといったらない」

ここ一郭の陣座には、祝朝奉をはじめ、祝氏の三傑とよばれる息子の祝龍、祝虎、また武芸師範の欒廷玉、そのほか祝一門おもなる者、ぞろツと甲冑をならべていた。

そしてまた一隅には。

これは巧みに、欒廷玉との旧縁をつかつて、荘内の客となり澄ましていた連中がいる。すなわち病尉遅の孫立、孫新、また鄒淵と鄒潤、それに解の兄弟や鉄叫子楽和などの七名で、なるべく目立たぬようにと、さしひかえている姿だったが、「いや、ご三男さま」

と、その中から孫立がめずらしく口を出した。

「敵の宋江が、姿を見せないのも、弓の花栄が尻ツ尾を巻いて逃げたのも、そいつは無理ありません。自然だろうと思えますな」

「なに。それはどういうわけだ、孫立」

「だって、みすみす死を求めに出て来るばかりはありますまい。音にひびいた祝氏の三傑の中でも、わけて勇猛のお聞えあるあなたが、いきなり陣頭に出て行つては、ご自身、木の葉を掃いてしまうようなもので、それでは合戦になりッこともないでしょう」

「わははは、なるほどな」

祝彪が大笑すると、父の朝奉も、満座の面々も、みな手を打って、

「これは考えものだ」

と、しばし笑いに揺れ合った。

酒宴になる。いろんな作戦上の策が話題に出る。

鉄叫子の楽和は、頃あいをみて、

「余興に一つ」

と、得意の歌をうたい、さらにまた、求められて、諸葛孔明の「五丈原ノ賦」を指笛で吹いて聞かせた。

「これはうまい！ 素人芸ではないぞ、おもしろい客人だ」と、楽和はすっかり人気者にされ、やんや、やんやの喝采をあびた。

こんなことから、孫立一味の七人客も、また、朝奉夫人が住む大奥へ入りこんでいた孫の妻と母大虫おばさんの二人も、すっかり信愛をうけて、いつか城内ではなにへだてなく扱われていた。

するとまた、七日ほど後のこと。

「すわ！ 梁山泊の賊軍が、前にもました勢いで、濠の彼方へ襲せかけて来ましたぞ」

と、郭門一帯にどよめきを見せ、朝奉以下の陣座へ、頻々と指令を仰いできた。

再三、敵将の宋江をとり逃がしているので、今度はと、祝氏の三傑は口をそろえて、

「騒ぐな、放ツとけ、しばらく、敵がなすままにして、出方を見ていろ」

と、号令した。

だが、放ツておいたら、たいへんである。城外の寄手は、火箭を撃ちこみ、堤をくずし濠を埋め、また巨木を伐つて筏となし、どうなることかわからない。

かくと聞くや、祝龍、祝虎、祝彪の三兄弟とも、「小癩な」

とばかり癩癩に駆られ、吊り橋を下ろさせて、突風のごとく、莊門から討ッて出た。

敵がたには、  
「豹子頭の林冲！」

と名のる一将がいた。

祝龍、祝虎はそれへむかって、おめいていたが、豹子頭の影は、まるで乱軍の間に明滅する陽炎のごときもので、追い疲れ、戦い疲れ、兄弟がハッと思つたときは、

「あつ、こいつはいかん」

と、余りに城を離れた深入りに気づき、ついに駒を返したことだつた。

三男の祝 彪もまた、ただ敵の怒濤の中を泳ぎ暴れただけで、宋江の姿も見ず、むなく郭の内へひきあげていた。

——翌日も、また次の日も、変りない襲せつ返しつの膠着万遍といつた戦況だつた。

すると三日目のこと。大陸的な夕空いちめんまさに灼爍と真つ赤に燃え映えている頃だつた。——寄手の後ろの方から車輪陣の象をなした一団が近々と濠ばたへ押し進められてきた。一旗高々と夕風にひらめいているのを見て城内の兵は、  
「や、や、あれこそ宋江だ。宋江の本軍が出てきたにちがいないぞ」

と、言い騒いだ。

「ござんなれ宋江。さあ決戦だ」

と、郭門を押し開き、吊り橋を下ろし、手に唾して逸りきる祝氏の三傑三兄弟にむかつて、このとき、

「ま。お待ちなさい」

と止めたのは、莊の客、病尉遲の孫立だつた。

「——率先、あなた方が躍り出たら、またもや折角な大魚を獲り逃がしましょう。まずそれがしと孫新が一隊を拝借して討ッて出ます。お三方は郭門の蔭にひそみ、われわれが、宋江の退路を断つたとみたとところで、いちどに吊り橋を渡って包囲したらどんなものでしょう？」

「む。いい考えだ。では先陣を切ってくれ。おう、この馬をそちに遣る」

長兄の祝龍は、みずからの愛馬を、孫立に与えた。それは「烏騮」と名のある漆黒の馬だつた。

陣鼓、喊声の沸く中を、孫立と孫新の一隊は、敵の前面へ馳け出しざま、

「梁山泊の盗ッ人ども、この祝朝奉家の内には、登州守備隊の提轄、孫立以下の者が、先頃から客となつていたのを知らぬのか。どいつもこいつも引縛けて、御用とするから覚悟をしろ」

と、敵のみか、後ろの城門へも聞えるような大音声でまず呶鳴つた。

たちまち戦塵が煙り立ツた。

無数な人渦のなかに、無数な剣戟がひらめきうごく。

宋江の陣からは、せつな。

「おうッ、捕れるものなら生け捕つてみる、没遮攔の穆弘とおれのこつた！」

つづいて、また。

「いぜんは薊州の刑吏、今は志を変えて梁山泊の一人、病関索

の楊雄もこれにいる！」

さらに、次の一騎も、猛然、突き進んで来ながら名のつた。

「――拚命の三郎石秀！」と。

これは手強い。陣も堅い。

石秀と孫立とはただちに鎗を合せ、両々譲らず、火をちらし、鎗身を絡みあい、激闘数十合におよんだが、勝負、いつ果てるとも見えなかった。

一方の孫新もまた苦戦だ。

穆弘、楊雄の二隊に取りまかれ、かつはそれらの豪の者に迫られ、あわや危ういかとさえ思われた。

その戦況を、郭門から眺めていた祝氏の三傑は、

「もう見てなどいられるものか」

まず祝龍が、先頭を切って、た、たっ！ と濠の吊り橋を馳け渡って行った。

するとそのとき、孫立は馬の鞍わきに、敵の一将石秀を生け捕って来て、

「やあ、ご長男さま。こいつを城内へ縛つといておくんなさい」

と、祝龍の前へその者を抛り投げた。

「なに、生け捕りか。出来したぞ孫立」

と、祝龍はただちに部下へいいつけて、石秀を縄からげにし、郭門の内へ送りこむやいな、ふたたび馬を回して敵の中へ突入して行った。

祝彪、祝虎も、もちろん兄におくれない。突然、

宋江の陣は総退却をおこした。しかし時すでに薄暮。勝つには勝ったが、またもついに、宋江は取り逃がした。

城内は赤々と凱歌にかがやく篝火の晩を迎え、荘の本曲輪

では一同、

「また一人、擒人がふえた」

と、酒壺を開いて、陣宴の歡に沸いていた。

祝朝奉もすこぶる上機嫌で、

「お客人の大手柄だわ」と言い、「――せがれども、合戦いらい、これで梁山泊の捕虜は幾人になったかの？」

と、酒の肴みために訊ねていた。

二男の祝虎が答えて言った。

「今日の捕虜、石秀という者を加えて、ちやうど七人になりますよ。――まず最初に捕まえたのが時遷、次に間諜の楊林、それから黄信、王矮虎、秦明、鄧飛――どいつもこいつも梁山泊では一トかどなやつばかり」

「うむ、いずれみな、檻車に乗せて、開封東京の朝へ差立て、皇帝からお褒めをいただくわけだが、しかしそれまでは、傷物にしてはならん。大事にしておけよ」

「さよう、さよう。捕虜も見ばえをよくしておかなければいけません」と、相槌を打ったのは、客卓にいた孫立だった。

「――ご子息がた。あとは宋江を生け捕ることで。これに宋江が加えられれば、祝氏の三傑の名は都の大評判となりましょう。ところで、押送までの監視は、充分、お抜かりなくしてあるでしょうな」

「大丈夫だとも。郭北の倉庫十八棟のうちの三番蔵に一人一人檻車に入れて押し籠めてある。何しろ戦騒ぎで手が廻らんでな。しかし、なるほど奴らを都へ送るにも、見ばえをよくしておく必要はあった。あしたからは肉もたっぷり食わせて

おこう」

このあと数日は、梁山泊軍の襲来もなかった。

そのあいだに、孫立一味は城郭中の通路、隠し道、奥との連絡、すべての探りを遂げていた。母大虫のおばさん、孫立の妻も、ひそと心得顔である。楽和はまた、人目を忍んで、折々城壁の堤から濠の彼方へむかつて、のん気な指笛を吹いて逍遙していた。が、これが決して暢気な遊びでないというまでもない。

ついに来る日が来た。

宋江はこの日、いつもと攻め手をかえて、全体を四軍にわけ、城の四面から迫って来た。そのうえ四隊個々の上に中軍旗をひるがえし、さかんに陣鼓喊声をあげさせ、どの隊も宋江がいる本陣かの如くに見せかけていた。

しかし、梁山泊方にそんな大兵はあるはずもないから、これは宋江が土地の農民や雑夫を狩り集めて兵鼓を振るわせた擬勢であったに相違ない。けれど城中の驚きは一ト通りでなく、

「すわ。寄手は梁山泊から援軍をよんで、いちかばちかの総攻撃をしかけて来たとみえるぞ。やよ樂廷玉、せがれどもと力を協せ、一挙にこれを屠り去れ」

と、祝朝奉みずから、将台に立って指揮にあたり、城方もまたその全力を四面の防ぎに投入した。——すなわち祝氏の三傑は一人一人にわかれて莊門外に奮戦してゆき——また、いつもは総大将朝奉のそばを離れない樂廷玉まで、一隊をひきいて搦手から討って出たものであった。

必然、いまや郭内はまるで手薄。——と見るや、どこかで、

「おおつ、お待ち遠さま！ お膳立てはととのったぞ。先頃から逗留中のお客衆、それっ、思い思いの膳につけ」と、病尉遲孫立の大音声につれて、とつぜん、鉄叫子楽和のするどい指笛が祝朝奉の耳を驚かせた。

「な、なんじゃあれは？」

朝奉は怪しんだ。いや狼狼のひまもない。彼のいる将台の階を目がけて、だ、だ、だ、だ、と馳け登って行った孫新、楽和、鄒淵、鄒潤の四客は、手に手に剣をひっさげ、

「朝奉、観念しろっ」

と、斬りつけてきた。

左右の兵は仰天して、乱刃の下に防ぎ戦い、朝奉は欄を躍りこえて将台の下に逃げ転んだ。——が、下には孫立が、一鎗を構えて待ちうけていたから、朝奉はいよいよ逃げ戸惑い、ついに女曲輪の境まで走ってその深い石井戸へ身を投げてしまった。

追って来た孫立は、井戸べりに片足かけて、中を覗き込み、

「おあつらえ」

とばかり手の一鎗を逆にかざし、ドボンと投げ突きに井戸底の物を突き殺した。——そして、あとから来た楽和にむかい、「鉄叫子。すぐ奥へ行つて、母大虫やおれの妻に助太刀してくれ。そして祝夫人や侍女などは殺さぬように、どこか一つの女房（女部屋）へ押しこめておくがいいぜ」

と、早口に言い渡し、そして彼自身は、郭北十八倉の一つ三番蔵の方へ宙を飛んで行った。

すでに、蔵番の哨兵一隊は、そこらじゅうに叩きつけられてしまい、三番蔵の鉄の扉は、滅茶苦茶に破壊されてしまっ

ている。

ここを襲ったのは解珍、解宝の二人を先頭に、さきごろ一行の供人に仕立てて一味の中に入れ共に泊りこんでいた仲間の手下たちだったのである。いうまでもなくここに囚われていた時遷、楊林、黄信、矮虎、秦明、鄧飛、石秀の七人の救出のためにだ。

「火を放ける」

「いや倉庫はよせ。あとでは、こっちの頂戴物だ」

「ならば櫓を」

「そうだ、まず莊門からぶツ潰せ」

「馬糧を撒いて、将台も焼き払え」

これだけの屈強が突如、城の心臓部から暴れ出したことである。鼎が沸くなどという形容も充分ではない。同時に奥の方からは母大虫おばさん、孫立の妻、そして、楽和そのほかも馳せ集まる。

驚愕したのは、城外に戦っていた欒廷玉や祝兄弟それぞれの隊と、その戦場であった。

「や、や。あの煙は？」

と吊り橋を引返して来た欒廷玉は、その口を塞いでいた孫立以下の者と、後ろからの追撃に挟まれて、橋上の立往生を遂げてしまい、祝龍、祝虎の兄弟は、おなじく城の火の手に驚いて戻る途中、寄手の呂方、郭盛の埋伏隊につつまれて、これまた最期のは非なきにいたってしまった。

ひとり三男の祝 彪は、

「こいつはてツきり城中の裏切り？」

と見、死地を脱して、扈家莊へ逃げた。

——例の一丈青の兄、扈成が支配している一族の一莊だ。

ところが、扈成はすでに、妹の一丈青の身の保証と交換に、宋江とのあいだに、不戦密約をしていたので、門を閉じて、彼を入れず、為に、戦い疲れた祝彪は、それを執拗に追いまわして来た黒旋風李逵の二丁斧の下に、ついに命を終わってしまった。

ところで李逵は、これだけにしておけば、いい男であったものを、宋江と扈成の密約などは頭におかず、つづいて莊門をぶちやぶり、家族召使いを、みなごろしにしたあげく火をかけてしまったものである。そのため、扈成は、命からがら延安府へと落ちのびてゆき、やがて後にこの人は、宋朝中興の業にひとかどの将として働いた。

だが、それは後のはなし。宋江はこの日、本陣にいて、この伝令を聞くやいな、

「李逵をよんで来い」

と命じ、彼を見るや、いつにない烈しきで怒った。

「この畜夫め、無知め、扈成は先頃、陣見舞のみやげを持って、降を申し入れてきた者ではないか。その肉を食らい酒も飲んだきさまは、這般の約も知っているはずだ。だのになん、降人の家族をみなごろしにいたしたか」

「こいつア恐れ入った。いけませんでしたか。——扈家莊の一丈青という女郎には、あなたからして、ひでえ目にあつた怨みがあるじゃございませんか」

「怨みも捨てるのが降というもの、また和というものだ。祝 彪を討ったきさまの手柄はそれで帳消しだ。後陣へ退がって謹慎しておれ」

「ふへえ！ また謹慎ですかい。どうしてだろ。おれが働く  
と、ご褒美はいつも謹慎だ」

李達は口をとがらした。うそぶきながら引っこんでゆく。  
が、こんな悄然たる姿は彼ひとりだった。

はやくも孫立、孫新をさきに、長らく城中の捕虜となつて  
いた面々も、宋江の前に来て立ちならび、「めでたい」

と、生きての再会をよろこびあい、また、

「ひとえにこれは、病尉遅以下、君たち一同の奇計がもたら  
してくれた大功だ」

と、宋江はひとかたならず、孫立たちの労を謝した。そし  
てただちに、城内の財宝を外へ運び出させることにした。

なにしろ万戸の王侯にひとしい祝朝奉家の蓄えである。武  
具、爆薬、穀物、車輛、また奥の調度品には、絹、糸、油、  
金銀、それと牧場にも、牛、羊、騾馬、家鴨などまであって、  
その集荷には、七日も要したほどである。

「すべてこれは梁山泊へ運び入れよう」

軍師の呉用は言ったが、宋江はそれに反対な色をみせた。

「われらは世から盗ッ人といわれています。だが人は言つて  
も、われらの内では盗は盗でも、ただの悪には終るまい、何  
か一善は、世間にお返ししようぜと、これは鉄則にしてい  
たはず。——いま、多年苛烈な鞭の下に農奴を泣かせて富み栄  
えてきた祝家をここにぶッ潰したのも、天に代つてしたもの  
としなければなりません。さすれば当然、分捕りの財は、そ  
れの大半を窮民へ分け与えてやるべきかと思ひますが」

「よかろう。もとより徳を施すことならこの呉用から梁山泊  
の面々も、異存のあろうはずはない」

「では。……先に石秀が敵地へ探りに入り込んだとき、何の  
利も得もなく、一夜を親切に匿つてくれた鐘離という老人が  
ある。あの老人を窮民布施の奉行役にして、それをやらせて  
はどんなものか」

と、さっそく石秀を使いにより、鐘離をよんで来て、分捕  
り物分配の任にあたらせた。それもしかしなかなか大仕事だ  
った。何しろ穀物糧米だけでも五十万石の余にのぼる量だっ  
た。が、これで独龍岡支配下の何万戸という荘民は、まるで  
夢みたいなお助けに潤され、かれらはまた、

「できることなら何でも」

と、労力をもって、そのよろこびを、宋江らの義軍にこた  
えてきた。

かくて、残余の分捕り品輸送なども難なく進み、宋江らの  
全軍は、ほどなくここを総引きあげに引揚げた。一路、山東  
梁山泊へと、凱歌に沸く蜿蜒の列を作して——。

ところが、ここにまだ不遇なる賢人が残っていた。

かの撲天鵬の李応である。

彼は、亡び去つた祝朝奉家の親戚だ、つまり祝一族の一軒  
だ。

事の始めに。彼は宗家のためを思い、極力、事を穩便にと、  
相互のあいだに立っていた。——が、逆に、それが族長の息  
子どもからは疑われ、以来、門を閉じたきり、今度の騒ぎに  
は全く圏外にいて静かに矢傷の身を療治していたのである。

——しかし今や、本家の朝奉初め、息子の三傑も、旧家の城  
とともに、死に絶えたとなつたえ聞き、

「ああ、ぜひもない。驕る者久しからず。これも輪廻か」

と、惘然と独り嘆じていたところだった。

ところが、はしなくこの李応の家の門へも、禍いの波は、禍いから余さじとするかの如く、或る日、どやどやと七、八十人一隊で押しよせて来た。

二十六 宋江、約を守って花嫁花髻を見立て。

「別芸題」に女優白秀英が登場のこと

「このほうは登州与力の裴鉄面だが、奉行の逮捕状を帯びてこれへ参った。当家のあるじ李応を出せ。有無を申さば、官権をもって召捕るまでだが」

威猛だかである。

屋敷じゅうは慌てふためいた。

李応はまだ片手を繃帯して首に吊っている。かくと聞くや衣服を着かえ、静かに病床を出て、官憲との応対に当った。

「てまえが李応ですが、何かのお間違いではないか。逮捕されるような覚えは身はない」

「だまれ。四散した祝家の夫人や家来から連名の告訴が出ておる。それによれば、汝は祝一族の者でありながら、わざと梁山泊との間に紛争を作り、彼らを手引きして、宗家を亡ぼし、後日、荘の土地や金銀の分け前をとる内約していたということだ。言いわけがあるなら奉行閣下の前で申しのべろ」

「これは奇ッ怪な。察するに何者かの讒言と思われる。ともあれ念のため未亡人の血迷ったその讒訴状とやらまた、お奉行直筆の逮捕状などもお示しいただきたい」

「才才見るがいい。どうだ、返答あるか」

「なるほど……。ううむ、これは紛れもない登州の官印、また、告訴状もそれらしいが」

「はや言いぬけもあるまいがな。それッ縄を打て」

つづいて、与力は、

「当家の食客の杜興とかいう奴。そいつも搦め捕ったか」

と、後ろの人数へ言った。

杜興はすでに縛られている。それを見て、李応も観念した。覚えのない冤罪だ。公の法廷で堂々申し開くに如くはない、と。

馬に乗せられ、与力、捕手、獄役人などの大勢にとりかこまれ、泣いて見送る老人女子供らの家族へは、

「なあに、すぐ帰って来るからな」

さりげない笑顔すら見せて郷門を去って行った。かくて李家荘をあとに、急ぐこと八、九十里、一叢の雑木林の中にかかった。

「待てっ」

一声が静寂を破った。

立ちふさいだのは、豹子頭の林冲だった。つづいては宋江、花榮、楊雄、石秀などである。口ほどもなく、奉行与力以下の者は、

「あッ、梁山泊の奴らだ！」

と白昼の妖怪でも見たように、李応、杜興の護送馬もそこへ捨てて、蜘蛛の子のごとく逃げ散ってしまった。

「とんだご災難でしたな」と、宋江はただちに二人の縄目を解かせ——「じつは、お待ちしていたんです。撲天鵬先生、どうぞてまえどもと一しよに、ひとまず梁山泊へお越しくだ

さい。決して悪くはいたしません」

「お。あなたが、著名な宋公明か」

「そうです。お恥かしい者ですが」

「いかにもな。そのご卑下はよく分る。この李応もまだそんな日蔭者の仲間におちぶれるほど身を持って余してはおりません」

「でも、今日は遁れても、いつかは必ず官憲はあなたを不問にしておきますまい。——梁山泊の軍勢が、みすみす自分らの管轄下に、こんな大騒動を起したのです。いわば彼らの落度になる。その罪はみんなあなた一人に被せようとするにきまっている」

「いやどんな難儀がかかろうとも、だ」

「それはご潔癖もちと強情に過ぎはしませんか。しばらくこの余熱をさまし、周囲のおちつきを見とどけてから、世間へお帰りある方が、諸事、無難でございましょうに」

杜興もそれをすすめ、呉用もまた、呉用一流の弁で、切にすすめる。そこで李応もついに我を折って、一行の中に入つて行をともし、やがて梁山泊の人となった。

といつても、正道の士、撲天鵬李応のことだ。あくまでこは仮の宿と見、毎日の聚議庁における酒宴のもてなしにもついで打ち溶けた風もない。——その日もまた彼は、梁山泊一統の統領晁蓋の姿を見たので、

「総統、おねがいです。はや今日で五日目になる。家族らも気がかり。ひとまず、ここを出して、家へ帰して下さらんか」と、やや哀調をもつて嘆願した。

すると晁蓋は、かたわらの宋江、呉用らの顔を見て、意味

ありげに笑つて諮つた。

「どうぞしようご両所。撲天鵬先生には、頻りにああいっていますか」

「はははは。李大人。そのご心配は、すこぶる変なものですか」

「どうしてです。呉学究どの」

「だって、あなたのご家族は、もはや李家荘にはおりませんぜ」

「えっ、いない。ではどこにいますか」

「ここにです」

「ことは」

「もちろん梁山泊。ついさつき、金沙灘の対岸の茶店から報らせがありました。ほどなくやつて来るでしょう」

何をいうか、人を愚弄するにもほどがある。——李応はそう取つたものの如く不快な色を閉じてしまった。けれどこれは嘘でなかつたのである。ほどなく山寨の下からこれへ登つて来る群れの蟻行列のごとき人影が見えだした。近づくに従い、李応は、アッ！ とばかり驚いた。その中にはわが妻子が見える、舅や年来の召使いまでがいる。いや覚えのある家財道具までが百人余りの人間と数十の驢馬や牛の背に積まれてやつて来るではないか。

「なんとしたことだ？」

彼は走り出して、まず妻にたずねた。妻や老人たちは、口をそろえてこもごもいった。

「旦那さま、ようもまあご無事で。あなたが、州の奉行所へ連れて行かれると、その晩でした。またぞろ百人ほどな者が

来て、否やもいわせず、この通りにしてしまい、なんでも来いというままに、これへ曳かれてまいりました。——もう帰るにも帰る所はございません。荘を出るやいな、屋敷は炎になつてしまいましたから」

聞く李応は、唯々、あきれるばかりだった。すると、後ろから追つて来た宋江が、彼の前に膝をつき、両腕を交叉して、地に伏さんばかり詫びて言った。

「おゆるし下さい。まったくは、あなた方をあざむいたので、それも久しい間、撲天鵬李応というお名を聞き及び、その為人をお慕い申していたからのことで、われらの内に、あなたを引入れたい一心のほかでしかありません。どうかひとつご堪忍を。またわれわれの切な願いをば、ぜひおきき入るのほどを」

「では一体、あの官人どもは、何者であつたのですか」

「州奉行の与力とみせたのは、仲間の鉄面孔目の裴宣という者です」

「あ、あの有名な」

「ふたりの警吏は、偽筆の名人蕭讓と、篆刻の達人金大堅でした。そのほか捕手頭には李俊、馬麟、張順などが付いて行つたもの。——それらすべても、仮装仮面を脱つて、今夜はあらためて酒宴の席でお詫びすることになっていきます。

——夫人やご家族の老幼には、決して、ここではご苦勞をかせません。平和な村作りをしていただくまでのこと。李応先生、なにとぞ、お覚悟をすえてください」

「ああ、それほどまでにこのほうを」

李応はついに、腰をかがめて、宋江の手を取った。その手

を押し頂いて。

「士は己れを知る者のために死す。ぜひありません。死にましよう。死んでここに生れおちたものと思ひましよう」

「いまにわかりませんが、これや天星宿地の宿縁なので、紛れなくあなたも仮に地へ生れ墜ちる約束事による天星の一つに違いありません」

このことばは、李応にはただ奇に聞えただけであらう。いやひとり宋江のみが悟つていた宿命観であつた。かつて見た不思議な夢告と、そのとき授けられた天書を播いてから彼はこの梁山泊中の奇異なる生命のよりあつまりを、不可思議、かくのごときものかと、おぼろに信じだしていた。

山も酔い、波も歌い、馬や羊や家鴨までも踊り出しそうな「遊びの日」が、一日この泊内を世間知らずな楽天地にした。

李応を迎えたよろこびと、十二名の新入りとを、山寨中へご披露におよんだためである。かつは祝家荘から移してきた大量な分捕り物の豊年祝いという意味もなくはない。

新入り十二人とは誰々か。

李応は別格とし。まず孫立、孫新、それから解珍、解宝、鄒潤、杜興、樂和、時遷。また女人では一丈青の扈三娘、おばさん飲屋のおかみ母大虫、樂和の叔母にあたる孫立の妻。以上である。

これらの新顔を入れた大宴の席で、宋江がふと言ひ出した。「どうぞでしよう。この吉日に、私は一組の新郎新婦を立てて、その媒酌人をつとめたいと思うのですが」

「えっ、誰と誰で？」

満座は色めいた。とかく色香のとぼしい泊内では、これは時なら花見にひとしい。

「花嫁は一丈青の扠三娘です。そして花髻は」

しんとなった。どこからともなく、熱い男臭い、溜息の波がつつたわる。

「花嫁にくらべると、武芸人柄、少し品は落ちるが、花嫁には目をつぶってもらい、曲げて一つご亭主に持ってもらいたい男とは、あれにいる王矮虎です。……女好きの矮虎です。……じつは彼の欲望をいましめるため、かつて清風山にいた頃、よく自戒するなら、いつかきつと私がよい女房をとりもってやると約束したことがある。男の一言は金鉄です。けれどもなかなか山寨では良縁もなく、平常心の重荷としておりました。いかがでしょうか、扠三娘さん」

人々は今さらながら宋江の義の堅さに打たれた。わけて扠三娘が生け捕りになって来てからは、宋江にたいして、とかくな蔭口もなくはなかった。——きつと宋先生だッて思し召しがあるにちげえねえ——といったような囁きである。それが今、かくと披露されたので、思わずヤンヤンヤの拍手だった。矮虎はうれし涙を拳にこすり、扠三娘は頬を紅葉にしてただ俯向いているのみ。しかし宋江の真心には深く感じたもののように素直にうなずいた。

折も折。こんな慶事にわいていたその日の午下がりはるか対岸の見張り酒店から、例の朱貴の使いが、一舟を飛ばして告げてきた。

「鄆州の捕手頭、雷横さんてえお方が、旅の途中とかで、統領

や宋江さまに会いてえとっておりやすが」

「なに鄆州の雷横さんだと。それはわたしたちの恩人だ。すぐていねいにお迎えして来い」

晁蓋も宋江もまた呉用も聞いて、大いによるこんだ。——きつと彼の人もまた、官途の腐敗にいびり出され、ついに梁山泊入りを決意して来たものに違いあるまいと。

だがこれは糠よろこびに過ぎなかった。会ってみると、少々、はなしの勝手は違っている。

「じつは県知事の命令で、東昌府へ出張しての帰り途だが、ここへ寄る気もなく、朱貴の茶店で一杯飲つてると、こいつ臭いと思ったか、いきなり子分どもをケシかけて俺を撲りにかかったので、ぜひなく名のツたついでに、各々の消息をちよつと聞いてみたまでのことなのさ」

「それはどうもはや……。あれいらいはお目にもかかれず、常々、お噂もしては、おなつかしく存じておりました。朱貴の無礼が、かえって倅せ。思わぬ日に、ご壮健を拝し、こんなうれしいことはない」

宋江がいえば、呉用、晁蓋も共々に、

「どうぞ、ごゆるりなすってください。こんな時でもなければ、お心のあらわしようもない」

「ありがたいが、何しろ急ぐ公用なのでな」

「ま、そんなことを仰っしゃらずに」

「じゃ、せめて、一ト晩、厄介になるとしようか」

「いや幾日でも」

「そうはゆかない」

「ゆきませんか。残念ですな、どうも」

歓待の間々に、それとなく、仲間入りの水を向けてみるもの、雷横にはいっかそんな気はないらしい。「おふくろの年が年なので、郷里は離れられない」

と、老母思いな方へ話は移ってしまう。——で、結局、中一日ただけで、翌々日には、

「また、縁があったら」

と、雷横はサッサと草鞋をはきだして別れを告げた。いまはぜひなく、三名は舟で金沙灘を送って行き、街道に出て、袂をわかつに際し、

「なんぞ、ご老母さまへの、おみやげにでも」

と、一囊の金銀を彼に贈った。いやこんな物はと、断るのを、三名が強つてのことばに、ついに懐中におさめて去った。

あと見送って、三名は朱貴の店を覗き、

「そうだ、この店へは、もひとり楽和を手伝いによこそう。

こんな間違いでよかったが、何か事件を起しては困る」

と、呟いた。

それにつづいて、三名の主脳は、金沙灘から帰る舟中で、新党員のふえたのを機とし、山寨の配備がえを協議した。東西南北、四つの見張り茶屋の一つには、ぜひ、母大虫おぼさんに孫新を付けてやろうと、これもきままつた。

新夫婦の矮虎と一丈青は、裏山の牧の馬監とする。

杜選、宋方は、宛子城の二の木戸の守備に。

劉唐、穆弘は本丸ざかいの三の木戸。

南山の水寨は、阮の三兄弟にあずける。

その他、造船廠、鍛冶房、錢糧局、織布舎、築造大隊、酪乳加工所、展望台組、倉庫方、邏警部など、あらゆる適所に適

材をおき、水際巍然、少くもこの寨では、遺賢をムダに遊ばせておかない智恵が自然な地と水の如く繞りよく思い巡らされていた。

一方。かの雷横は、

「母上、ただいま帰りました」

と、鄆城県のわが家に入るやいな、まず老母の室をみまい、あくる日はさっそく、県役所へ出て、出張先の要務を復命し、これでやっと、いささか身軽となった夕心地を、町辻の風に吹かれながら戻って来た。

すると、土地の遊び人で李小二という奴さん。出あいがしらに、

「おお旦那あ、お珍しいじゃござんせんか。いつお帰りで」

「いや帰ったばかりなのさ。まだ旅疲れた」

「そいつあ、ちと、さっそく過ぎますが、どうですえ旦那。

ひとつ面白れえ小屋掛け演劇を……いや演劇でもねえナ……水芸の太夫さんですがね、ちよつとご見物になりませんか」

「ふうむ、そんな旅芸人が土地へ来ているのか」

「聞きやあ東京者ですとさ。別嬪ですぜ。いや何よりは、唄、弾奏、軽い茶番、何をやっても田舎廻りにしちやあズバ抜けてるんで」

「たいそうな惚れ込み方だな。そんなにいいなら、ぜひおふくろに観せてやりたいもんだ。そのうち弁当でも拵らえて、おふくろと一しよに観に行こうよ」

「……旦那、旦那。あれ、行っちゃまうんですか。……けッ、よしやあがれ。捕手の先頭に立つと鬼にも見える雷横だが、へんなものだナ。自分のおふくろには、目も鼻もありやし

ねえ。ふん、つまらねえ人間だよ」

おふくろ思いな雷横だが、老母の眼から見ればこの子にも たった一つ心配はある。悪癖がある。ほかでもない、酒癖が よくないのだ。

「ま。そうクヨクヨ言いなさんなよ、おつ母さん。雷横だつ て、いつまで心配をかける年頃でもねえさ。ましてや役署勤 めの身だ、それに新しい知事さんに代ったから、このさいき っぱり禁酒ときめ、旅先から帰ってからも、杯は手にしたこ ともねえんだから」

雷横は母へ言っていた。事実、家では飲んでいない。また 外でも禁酒を公言していたが、友達はまったく違う。てんで 信用してくれないのだ。

その夕も、役署帰りの辻酒屋で、彼はつい悪友どもに飲ま されてしまった。というよりは土根性から好きなのである。 禁欲意識がふと破れると、逆に度を過ぎさせるものでもある。 さあいけない。苦労性なおふくろに、このグ Dengグ Dengは見 せられないと頻りに悔やむ。だが、友達と別れてからも、な かなか酔は醒めないのだった。

すると賑やかな演劇囃子が耳の穴へ流れこんできた。はは あ、いつぞや李小二が噂していた掛小屋だな。木戸の呼び声、 旗幟のはためき。それに釣られてふらふらと雷横は泳ぎ込む ように木戸口を通った。役署の「顔」が無意識な習性にある。 小屋者たちも心得ていて、

「はい、県の旦那だよ」

とばかり、客席の中でも上等な栈敷へご安座を奉る。と

いっても板の腰掛け、丸太の手欄。どっちみち雷横は「酔ざ まし」が目的なのでもうすぐそれに頼杖かけて、居眠ッてい た。

舞台では今し水芸の女太夫白秀英が観客の大喝采をあびて サツと緞帳のうしろに姿をかくしたところらしい。

胡弓、長笛、壘鼓、木琴、鉦などの合奏にあわせて真っ 赤な衣装をした童女三人が炎の乱舞を踊りぬいてしばらくお 客のご機嫌をつないでいる。——それが引つ込む。曲が変る。

——と今度は、孔雀扇を胸に当てた白衣黒帯の老人が尖がり 靴をヒョコヒョコ舞台中央まで運ばせて来て、オホンと一 つまず客を笑わせ、

「あいもかわりませず連日のお運び。てまえ白玉喬も 大御満悦の態とござりまする。ただいまご喝采をいただきま した娘白秀英の水芸はまだほんの序の口。いたらぬ芸にはご ざいまするが開封東京は花の都の教坊で叩きあげた本場仕込 み。いささか、そんじよそこらの大道芸とは事違いまする。

ご当地では初のお目見得。吉祥のご縁結び。当人も大張り切 りで、精を根かぎりに一代の芸を尽してお目にかけたとい っておりますれば、ゆるゆるとひとつご観覧なあって永当永当 ご鼻肩のほどを乞いねがっておきまして——さて」

と、ここで口上の調子をかえ、次の芸当の筋書を述べてい たが、雷横は夢か現で、あぶなく居眠りの脇を外しかけ、は っと、居場所を思い出したように、急に舞台へ、赤い眼をし いて睜りだしていた。

すでに舞台では、花の精か、白鳥の霊か、満場、人なきよ うな焦点に、舞い歌っているものがあつた。これなん人気女

優の秀英であろうか。雪の羅衣に、霞の風帯、髪には珊瑚の簪花いと愛くるしく、桜桃に似る唇、蘭の臉。いや蘭の葉そのものの如き、撓かな手ぶり足ぶり。その手には左右二つのカस्ताネットを秘し持ち、戦う鳥となり、柳の姿態となり、歩々夏々、鈴々抑揚、下座で吹きならす紫竹の笛にあわせ、「開封竹枝」のあかぬけた舞踊の粹を誇りに誇る。

「なるほど。評判だけなものはある」

雷横もふと、目を拭われた心地であった。ひとしく満場の観客も、万雷のような拍手を一せいに送る。するとこのとき、待ってましたというように、尖ンがり靴の白玉喬は、秀英のそばへ来て、お約束の肩を一つぽんと叩いた。

「おっと、太夫。何か忘れてやしないかね」

「あらひどい。わたしの踊りが何か間違ってたというの」

「なにサ。都一の花の太夫。天女が雲から落ちることはあっても、太夫さんの芸にソツがあるものか。お忘れ物というのね」

「あ。あのこと」

「芸に無我夢中なのは結構だがさ、稀にはお客さまの顔いろも見て、お心もちを汲んで上げなければいけないやね。いまのご喝采の中には、祝儀をやれ！祝儀の盆を廻せ！ツてなありがたいお声もあったじゃござんせんか。次の芸題にかかると前に、どうですえ、こちらで一つお志をいただいは」

「ま。うれしいわね」

「では、御意にあまえて！」

と、白玉喬は片手を腰に、また、片方の尖ンがり靴をぴよんと前へ投げ出し、手にしていた薄手な盆を翳すなり見物

席を眺め渡して、

「いやお待ちかねお待ちかね。さすがご当地のお客様は品がちがう。アレもう大様に懐中物を解いていらッしゃる。へイっ、ただいまご順にそちらへ頂戴に伺います。なんと太夫さんよ、カッちけねえご見物衆じゃないか。おまえさんは舞台から精いッぱいその眼でいちいち御礼を申し上げるんですよ。……へいっ、唯今。おやじは唯今お盆を持って順ぐりそちらへ廻ります。ほい。これはお嬢ツちゃん坊ツちゃんまでが。……へえい、おありがとう。おありがとうぞんじます」

盆廻しは旅芸人の常套である。お客の方でも心得たもの。祝儀は見得坊な棧敷の上客がハズむものと知っていた。やがて雷横の前へ盆が廻ってくると白玉喬は、いちだん愛想よく腰をかがめ、残り物には福、お大尽様は総括り、へい一つお弾みをとうながした。

はっと当惑したのは、雷横だった。今日は友達の奢りだが、禁酒いらいは、酒の虫を封じるため、外でも紙入れは持たぬときめていたのである。祝儀はやりたいたいが無一文だ。なんともかとも間が悪い。「あつ、いけねえ」と、その袂さぐりはテレ隠しと誰にも分るような、下手い仕ぐさで「うっかり、紙入れを家に忘れて来てしまった。二、三日うちに、おふくろを連れてまた見物に出直すよ。そのときにはうんと色をつけるからな」

「テへへへ。……ありがとうござんすといいてえが、と、いったお客に二度お目にかかったためしはねえや」

「何てえ笑い方をしやがるんだ。そうムキ出さなくても、て

めえの出ッ歯は見え過ぎらあ」

「大きに悪うござんしたね。笑っているのはお客衆だ。ねえご見物、どうですえ、こんな棧敷の上席に、セセラ楊子で一杯機嫌の旦那がですよ、大きな面をしていながら、祝儀の出し惜しみに事を欠いて、人の顔の棚下ろしでゴマ化そうてえんだから恐れ入っちゃうじゃありませんか、ねえ、この吝つたれなご面相でさ」

「なに、なに、吝つたれだと」

「いいえね、旦那。不粹な文句はよしなせえ。意気で生きてる芸人だよ。気は心だ。一文二文の投げ銭でも、鬣とあつて下さる物ならありがてえが、おまはんみたいな野暮天の袂クソなんざ、くれるといつてもお断りだ。けッ、とんだ物に蹴つまずいて、すっかり場内のお客さんを白けさせてしまつたい。さあ、その脚の先を引ッ込めておくれ。通行の邪魔にならあ」

「だまれ、この野郎」

「おや、大きく出なすつたね」

「な、なんとぬかした」

「二度いうと風邪を引かあ。おまはんみたいな人がよくいう見かけ倒しという代物だ。犬の頭に角が生えても、こんな朴念仁からカビも生えやしねえってことさ」

「いったなッ」

雷横の母親がつねづね心配していたのはつまりこれだったにちがいない。ぐらつと彼のこめかみの辺をいなすまが走つたと感じたときは、もう白玉喬の体などは彼の一拳の下に素ッ飛んでいてそこらには見えもしなかった。そしてただ見

る掛小屋じゅうの見物がわアつと総立ちになつて沸き、舞台上の白秀英とはいえば、演劇ならぬ悲鳴の演舞をクルクルさせて、下座や楽屋裏の者たちをかなきり声で呼び廻つていた。

二十七 木戸の外でも猫の干物と女狐とが掴み合いの

一 一幕の事

いつも朝は機嫌もよく二十日鼠みたいにクルクルと小まめな雷横の母であるのに、今朝はどうしたのか、しいんと南廊の小椅子にふさぎこんでいた。——ゆうべおそく泥酔して帰つた息子の官服を膝にくりひろげて、泥を払い、ほころびを縫い、またふと、血らしい汚染に老いの目をしばだたいて、

「ああ、あの子はまた何をしたんだろ？ ……あんなにまで、かたく、ふツつり禁酒しましたからと、この母へは優しく誓つてくれていた子なのに。……やっぱり男の子というものは幾歳になつても」

と、独り胸を傷めている姿だった。

ところへ、玄関の方でどやどやと大勢の声がした。出てみると、伴の雷横が勤めている役署の朋輩たちである。さあさあどうぞと、老母は色をかくして愛相よく内へ請じた。けれど役署の同心たちと捕手たちは、外に突つ立ったまま気のどくそうに、

「じつは、知事の公命ですが」

と、まず断わつて、やんわり言った。

「雷横君は、どうしていますか」

「なんですか、伴はゆうべ、たいそう晩く帰ったものですか、まだ今朝はぐツすり眠っておりますが」

「すぐ起して下さい。公命です。猶予はなりません」

「はい、はい」

老母はあたふた奥へ馳けもどった。そしてしばらくすると、当の雷横が、衣服を着け、やや腫れぼったい臉をもって、

「やあ」

と、そこへ立ち現われた。いや、挨拶の間もあらばこそである。左右からパツと寄った同僚がすばやく彼の両手へ手錠をかけてしまった。

「おかしら。われわれ下役の者に、こんなまねをされちゃあ、さだめし心外でしょうが、知事の命令なので、どうも仕方がありません。目をつぶって、とにかく、ゆうべの小屋掛けの木戸まで歩いておくんない」

「え。小屋掛けてえと？」

「おかしらがゆうべ、派手なことをなすツちまった旅芸人の女太夫白秀英の演劇小屋でございますよ」

「ああ、あの……」

雷横は、がつんと、しびれた頭を吹き醒まされた。が、さあらぬ顔で老母の姿へ言っていた。

「なあに、おっ母さん、じつはゆうべ、ちょいとした弾みから、その小屋者と、ひよんな喧嘩をしちまったんで。……なにもべつにそうご心配なさるほどのことじゃありませんよ。すぐ帰って来ますからね」と、一方の下役達へも、わざと笑顔を作っって見せながら、

「さあ行こう。こんど来た新任の知事さんも、物わかりのいいお人だ。話せばわかって下さるだろう」

と、すずやかに、我れから先にわが家の門を出た。

しかし例の町端れまで来てみると、事態の空気は容易でない。——ゆうべの騒動で太夫元の白玉喬は片腕を折ッぴしよられ、下座出方の連中も、あたまを繻帯したりビッコを曳いたり、かつはまた、舞台もあれで中止となってしまうので、今朝はそれらの客までが小屋前へ押しかけて、

「木戸銭を返せ！ 銭で返すなり、今夜の木戸札を、もう一度無料で配れ」

などと昼からそこはもうたいへんな騒ぎなのだ。

県役署からは、べつな役人が来て、それらの群集をとりしずめていた。そして手錠の雷横は、大勢の前で、知事の戒告文を読み聞かせられ、木戸口に立っている幟旗の竿の下に曝し物としてすぐ縛しつけられてしまった。その懲罰の文にいわく。

県ノ与力、雷横

身、治安ノ警吏ニテ有リナガラ

大酒乱酔ヲ恣ニシ

劇場ヲ騒ガセ、人ヲ傷ツケ

公安ヲ紊スノミカ

官ノ民望ヲ墜スコト甚シ

依而

十二刻ノ「立チ曝シ」ニ処シ

是ヲ、諸民ノ指弾ニ委ス

立て札の文字が雷横を射すくめている。雷横は恥かしかつ

蕪城県知事

た。文の通りであったと思う。——だがゆうべのことは半分以上覚えがない。——覚えているのは太夫元白玉喬に人中で侮辱された刹那の憤怒だけである。

だが、あれがいけない。性来の自分の悪い酒癖だ。母にも禁酒を誓っていたのに。……要するに不孝の罰か。あまんじて十二刻の恥を民衆の前にうけよう。身の薬だ。と彼は観念の目をふさいで幟竿を背負っていた。

ところが本来なら、群集の弥次馬心理や日ごろの反官意識が当然、彼への唾ともなり悪罵や石つぶてになるべきなのに、「おや、雷横の旦那が？」

「どうしてまた？」

と、気のどくそうに、目をそらす者はあっても、いい気味だと嘲るような副作用はほとんど見られなかった。これというのも常日ごろ、捕手頭としての雷横には、多年の間、なんら諸民の怨みは買ったようなこともなかったのみでなく、官権を振廻したり私腹をこやすなどの不正もなく、親孝行者と知られ、弱い者には親切で男気なということが、ふかくこの町一般の者に根ざしていたからにはかならない。

かつはまた、下役や同僚の間にも、人望があったから、今日の懲罰の番人に当たった者も、じつは、心ならずもとしている風がありありと見えていた。そのうちに、人もまばらな午過ぎになると、番の一人が、そつと幟竿の下へ寄って来て、「おかしら。……我慢しておくんなさいよ。今夜一ト晩だけのことだ。……それにしてもおかしらは、何もご存知なかったんでございますね」

と、思いがけないことをふと雷横に聞かせてしまった。

「えっ？ 俺が何も知らなかったとは一体どういうわけだ」「こんど赴任して来た新知事と、この女とのわけ合いでさあね」

「女」

「ええ。女太夫の白秀英と、こんどの知事とは、もうだいぶお古いレコなんですぜ。何しろ美しい女でさあネ。こんな田舎へ小屋掛けに来る芸人じゃあねえ。それが来たっていうのは、つまり自分の情夫旦那がこの土地の知事さんになって来たからのことなんですよ」

「そうだったのか」

「なんでも、お互いが開封東京にいた頃からの古馴染みですとさ。そいつを知ってたら、おかしらもね」

「遅かった。いやしかし、それなら知事さんもかえって小屋側の者をなだめて、事を内輪におさめてくれるだろう」

「さ、どうでしょう。ゆうべも晩く官邸の裏門をくぐって、白秀英と親父の白玉喬が、何やら訴えていましたし、今朝の知事の様子ツ振りじゃあ、どうやら女に泣きつかれたあんばいで、凄いいんまくでござんしたからね。……あ。いけねえ、白玉喬が来やがった」

太夫元の白玉喬は、繙帯した片腕を首に吊り、足も少しビツコを曳いて、木戸口へかかって来たが、ふと幟竿の下で雷横を見るや、

「ふ、ふん。そこにいたのか。どうしたい、ゆうべの元気は。

……ざまア見やがれ」

と、青啖を吐きかけて、小屋の内へ入ってしまった。――

と、まもなく、やぐらの太鼓がしばらく鳴った。今夜も開場いたしますの町触れだろう。小屋者総出で木戸前の打水や清掃がはじめられる。わざと箒のさきで雷横へ砂をぶっかけた水を浴びせてた奴もある。だが雷横は一切に耐え、唇を噛んでうなだれたままでいた。

いつか夕風がそよめいている。女太夫の白秀英は、小屋前で輿から下りた。それを見ると、さすが人気者の楽屋入り、近所の女子供がわっと周りへたかつて来る。——だが秀英はそんな者に見向きもしない。舞台姿とはまた違う艶な装いに脂粉の香を撒きこぼしながら、ツツウと幟竿の下へ歩いて来て、雷横の顔をさも憎しげに睨めすえていた。そしてとつぜん、ホ、ホ、ホ……と大げさな表情のもとに笑い抜いて、「ま。これが県の町与力とは呆れたもんだこと！ よくもおまえさんゆうべは私の舞台を滅茶滅茶にしてくれたわね。なにさ！ その眼つきは。……そんな顔を人が恐がると思ってるのかい。ばかにおしでないよ。根ツからの田舎廻りなら知らぬこと、開封東京の芸人には、おまえさんみたいな三下さんしたに小屋を荒らされて、縮み上がってしまふようなお人よしはいませんとさ。ふうん、おかわいそうに」

なるほど美人だ。なるほど、開封ツ子の切れのいい啖呵たんかでもある。知事の古い情婦だというのもこれでは嘘ではないだろう。

雷横はついそんな気もちでじっと女を睨め返していたのだが、秀英にすればその眼光も憎悪の挑戦と受けとれたにちがいない。それに人気者の思い上がりやら、背後には知事がひかえている驕り心も手伝って、

「なにをにらむのさ。口惜しいのはゆうべの木戸銭をみんなフイにしたわたしの方だよ。こんな仕置ぐらいではまだまだこっちの腹が癒えるもんかね！ そうだ、そこらにいるご鬮眞の皆さん、さだめしあなた方も、このへボ警吏には日ごろ憎い恨みがあるんでしょ。石でも泥でもみんなしてこいつにぶっつけておやんなさいよ。手を叩いて笑ってやるがいいわよ。こんな生れ損い！」

と、紅唇をひるがえしてケシかけた。

するとふいに、走り出て来たひとりの老婆が、彼女の胸をどんと突いて、泣き声交じりに烈しく叫んだ。

「売女め！ 自分の臭い身をかえりみたがよい。人の子をつかまえて、生れ損いとはよういえたもんじゃ」

「あらっ。……あら、あら、よくやったね。いったいおまえはこの山出し婆さんだえ。いいえさ、どこの馬の骨なのさ」

「わが身はこの雷横の母じゃ。生れ損いを産んだ母じゃ。けれどな女子、わしはまだそなたのような淫な売女風情を子にもったことはないぞえ」

「なんだって。もういちどいつてごらん」

「言わいでか。紅白粉を塗りたくって、さも艶めかしゆうしていやがるが、一ト皮剥けば、その下は貉か狐とも変りはなからう。舞台の夜は前芸で、奥の芸は女の淫を売る女狐じゃわ」

「おだまりッ、くそ婆。よくも人前で、私のことを売女だといつたね。さ、いつ私が淫売したのさ。何を証拠に」

「もっと言うて欲しいのか。おお言うてあげようとも。わしはここへ来るまでに、俵のおゆるしを願うため、方々のお知

り合いを訪ねて来たのじゃ。ところが、誰も取り合うてはくれん。よくよく訊けば、知事さまとおまえとは、昔からの深間な仲で、その知事さまを焚きつけたのは、おまえの親とその紅い唇じゃそうな」

「悪かったわね。知事さんを情夫に持ってはいけないなんて掟は女芸人の仲間にはござんせんのだよ。大きなお世話じゃないか。猫の干物みたいな婆のクセにして、お妬きでないよ」

「ち、ちくしょう」

「なんだって」

「そんな沙汰でここへ来たのではないわ。わが子を返やせ！」  
「目の前にいるじゃあないか。お伶俐さんでござんせよしの曝しもの」

「いいえ、おまえの手で縄目を解いて、この母の許へ返やせ。讒訴したのはおまえら父娘じゃ。そして知事さんの情婦のおまえが解くならば、知事さんも怒れはしまし」

「知ったことかい、そんなお世話焼きを」

「知らぬとはいわさぬぞい」

老母には子に賭けた一筋な盲愛の血相があつたし、女には裏をあばかれた捨てバチと人気稼業の驕慢があつた。われを忘れて老母が先の胸にしがみつくと、白秀英は邪けんに相手の骨ツぱい体を振りどばし、さらにかかつて来るところを、その白髪あたまの毛をつかんで、

「ま、執こいね、この猫の干物は。いかげんにくたばつておしまいよ」

と、地上をぐるぐる引きずり廻した。いや、このせつな事は急転直下していた。きゃッといったのは、なんぞはからん、

白秀英の方だったのだ。ぱつと唇からも鼻腔からも血を噴いて、花顔むなしく、虚空をつかむようにのけ反ってクルと仰向に仆れてしまったのであつた。

「あつ、た、たいへんだっ」

さっきから、手もつけられん、といった顔をしてただ眺めていた番役人も、仰天して雷横のそばへ駆け集まって来、

「お、おかしら、やりましたね、白秀英を蹴殺してしまいましたすつた！」

「さ。お逃げなさい。手錠も外しました。逃げなければ、お命はない」

と、衆情一致、あとの落度もかえりみず、さあさあと、急ぎたてた。

がしかし、雷横はうごかなかつた。蒼白い凄惨な顔のうちにも、はや覚悟をみせ、

「いや、みんなに迷惑はかけられん。これから県役署へ自首して出る。ただ、おふくろだけを……何ぶんとも」

と一顧、老母の姿へ胸中一ぱいな慚愧の眼を伏せて、わんわんと立ち騒いでいる群集の中を同僚の手で曳かれて行った。

折ふし、小屋の木戸は、これから灯も入れ客も入れようとしていた夕時だった。だが今はそれどころか、降つて湧いた椿事である。ただ一人しかない花形の女太夫が横死とあつては、演劇囃子も幕開けのしようもない。太夫元の白玉喬は、裸足でとび出して来たが、娘の死骸を見るや、号泣して、何か、あふ、あふ……とわけのわからぬことを口走りながら県役署の方へ素ッ飛んで行き、町辻という町辻は、すべてこの噂で宵も夜半も持ちきりになってしまった。